奇譚クラス

1958年　7月号

図書雑誌通信　特異な角度から　九雅節夫

懸賞入選原稿作品『お町の最期』　花巻京太郎

昭和三十三年六月三十日印刷　昭和三十三年七月一日発行（第十二巻第八号　七月号　通巻第百九号）（毎月一回一日発行）　昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

7月号

奇譚クラブ　昭和三十三年六月三十日印刷　七月号（第十二巻第八号）　昭和三十三年七月一日発行（毎月一回一日発行）　昭和三十一年四月二十日　第三種郵便物認可

奇譚クラブ　昭和三十三年七月号　7

定価二百円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan

IBM. 2805

〔次目要主号最近クラブ譚奇〕

奇譚クラブ最近号総目次

昭和三十二年

○九月号（復刊第十八号）

【定価二百円】

女体屈伸測定器……四馬孝・画
いけにえの町娘……滝れい子・画
新緑の陽を浴びて……須川令子
「括られちやつたワ」……荻千恵子
緊縛映画名場面集……楓月太郎提供
縛られた女優たち……千葉栄市提供
洋画スチール二題……編集部選定
「征服者」「魂術師の応」
病床徒然草……柳沢吉保
告白「髪の線に悩まれて」……皆川のぶ子
異説八百屋お七「幻想炎の娘」（後篇）……笛地佐渡
壮烈大和撫子……藤山秀緒
ある夢想家の手帖から……沼正三
探偵小説に現れた地獄絵巻……高崎勉
十月号（復刊第十九号）
【定価二百円】
口絵
責画「鼻いじめ」……西馬孝・画
縛られた女優たち（場面集）……阿部秀・楓月太郎・提供
緊縛写真「グラマー・ガールのニュースタイル」
責画「地下倉庫」「いでゆ」……北原純子・画
洋画スチール二題
「古城の剣豪」「指紋なき男」
絵物語「お加代線三郎旅日記」……緑木仙治
告白「女性志願者の夢」（後篇）……真崎伸一
女性の悲鳴について「苦しみを求めて」（2）……南川和子
（編集部への憧憬を持つ女性の手記より）……近藤良二
断想……高木

終戦奴隷（或る勤労動員女学生の手記より）……雪遙
私の好きな女靴……波路俊洋
「吊し責め」の実験（奇談倶楽部会報告）……青柳真一
女性化願望と男性心理……古井真哉
家令人ヤブー（第十回）……沼正三
東京の人よ何を驚く（腰巻とパンティとふんどし）……松原三千代
「艶美なる補物帖」……牧高志文・画
ある夢想家の手帖から……沼正三
大陸暴行列車（内務省印38号の女の手記）……本田由郎
可憐なサド、可憐なマゾ……佐々木ツトム
製糸工女……木口房代
緊縛映画雑感「再映画化作品について」……阿部秀
告白「恋する夫人への手紙」（二）……麻生和夫
アブ・モード・オール・スクラップ……矢桐重八
痛めつけられし桃の実（第二回）……鴎唱吐夫・訳
（マリアンヌの手記より）
「美女達のお尻が鉛筆をつぶすアイスシヨー」……清水恵二
マゾヒズムへのいざない……天野哲夫
女性切腹随想……田谷敬生
和装教室（古典模様矢絣御供の巻）……白金紅次
雑報と雑感……沼正三
読鵬機報通信「アブ・マニア雑談」……赤井茂一
捕縄術入門……嶽
戦争未亡人の告白「ヒツプ受難」……花田育子
美容病院（第一回）……久留木栄
モデル志願の女性より……永井実
架空小説「残虐芸術展覧会」……伊藤晴雨
雑誌通信「緋絵を中心として」……丘明
フランソワの手記……山梨参次
読者通信

○十一月号（復刊第二十号）

【定価二百円】

口絵
責絵「痴東服」……四馬孝・画
滝れい子画集……滝れい子・画
舞妓（まいこ）予後（よご）……須川令子
緊縛写真「猿ぐつわと緋目」……
（伊吹真佐子嬢）
縛られた女優たち（場面集）……楓月太郎提供
東映「朝焼け富士」……三浦光子
宝塚「題不詳」……尾上さくら
サジスチックな洋画スチール二題
伊映画「カルタゴの女奴隷」
米映画「異教徒の旗印」
口責めと幾何学図形……久留木栄
悲しきはマゾヒストの告白……三根耕二
性倒錯の男と女……山下真一
美容病院……久留木栄
体験記「つばきの沼」……檜秋二
一検察官の黒髪」
ある夢想家の手帖から……沼正三
「苦しみを求めて」（完結）……近藤洋一
女性ホルモン服用の実験報告……古井真哉
再映画化作品について（2）……阿部秀
私の本箱から……星光一
ダイアナ夫人……妻杉貴代子
妙齢美人の吊責め……岸本青柳
ジエームス・デインの事……黒岩細一
残虐芸術展覧会……伊藤晴雨
私のサタ・セクシュアリス……山本節夫
創作「東京自殺クラブ」……南方香
告白「アヌス自虐体験記」……保月道夫
あらびやの奴隷市……泉かよ子
不良グループの私刑……本田由郎
アブ・モード・オール・スクラップ……矢桐重八
女はらきりの夢……藤山秀緒

雑報と雑感……沼正三
終戦奴隷（後篇）……雪遙
マゾヒズムへのいざない……天野哲夫
下着通信……山下真一
特別な角度から（3）……九雅
「演出」
家令人ヤブー（第十一回）……沼節夫
通信「最近号の感想と批評」……牧高志
読者通信……近藤正三

○十二月号（復刊第二十一号）

【定価二百円】

口絵
責絵「嬰」（ハリツケ）……四馬孝・画
滝れい子画集……滝れい子・画
「夜の脱衣場」「マダム」……杉原紅児・画
縛絵「ローソク責」……沼正三
映画紹介「縛られた女優たち」……阿部秀・提供
新東宝「修羅八荒」……遠山幸子
大映「女狐屋敷」……近藤美恵子
写真「縛つたな林」……本誌写真部撮影
（くさり）（ボリウム）（縄抜）（光沢）
洋画スチール二題
米映画「キング・コング」
米映画「仕烈カイバー銃隊」
「カラーシャの教典」……西小路穴蔵
マゾヒズムへのいざない（二）……天野哲夫
創作「ゆうべのお客様」……近藤
「麻生保氏の生活と意見」……麻生保一人
「縄への愛慕と踏まれる喜び」……波路洋
黒いペチコート……鴎唱吐夫訳
屠腹乙女桜（前篇）……藤山秀緒
家令人ヤブー（第十二回）……沼正三
ワイド映画の縛りシーン……緒戦美也子
「逆比例」……牧高志・文画
ダイアナ夫人……妻杉貴代子
危難に遭つた美貌の女……岸本青柳
美容病院……久留木栄
「非きもの読本」……白金紅次

本誌百号突破記念

懸賞原稿募集

本誌の通刊第百号を突破したのを機会に左記の通り懸賞原稿を募集いたします故、何卒奮つて御応募下さるようお待ちいたします。尚、募集規定には、従来と違つて大いに幅を持たせましたので、御自由な気持で御執筆下さい。誌上の匿名及び無名の投稿も結構です。（この際は誌上で連絡いたします。）

◎賞金（各篇につき）

優作　壱万円　若干篇
秀作　五千円　若干篇
佳作　三千円　若干篇

種目　小説、創作、告白、手記、体験、等本誌に適当した題材を扱つたもの

枚数　三十枚乃至五十枚程度（四百字詰）但し多少の増減は差支えありません。

締切　当分の間特別に定めません。先に到着の分より漸次銓衡の上、入選作は最近号より掲載いたします。

投稿　「読者原稿」と区別するため、応募原稿の第一頁に「懸賞原稿」と書いて下さい。

発表　入選決定の分は、それぞれ賞金の送付を以つて報告します。誌上では入選作の掲載を以つて発表にかえます。

用紙　二百字詰又は四百字詰原稿用紙を用い第五種開封便（百瓦につき八円）にて御送付願います。

読者原稿募集

（**創作**）異色ある題材を提げて立つ野心ある読者の投稿をお待ちしまた枚迄、未発表の作品に限ります。枚数は三十本誌五カ月以上贈呈します。採用篇は

（**体験告白手記**）読者皆様の偽りなき真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度採用篇には本誌三カ月以上贈呈します。

（**映画、雑誌**）**通信**）映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになつた事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二カ月分贈呈します。

（**私のイメージ**）熱烈奔放なイメージをどしどしぶつ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には、本誌三月分贈呈します。

（**アイデア**）将来本誌にて企画すべき事項につき詳細に。採用の分には本誌四カ月分以上贈呈します。

（**レポート**）新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き或は見聞等、皆様のお持ちの事項につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二月分贈呈します。

（**読者通信**）編集者、執筆者、投稿者等への通信、前号の批評、希望、感想、思い出話、読者相互の呼び掛け、応答或は編集や雑誌のあり方等について思惟なきお便りをどしどしお寄せ下さい。つとめて誌上に発表いたします。但し、読者交歓室は都合により当分の間中止いたします。

従来準備しておりました払込料金加入者負担の振替用紙は都合により中止いたしましたので御諒承願います。御送金は振替、為替、現金書留、切手代用（八円切手）等、どんな方法でも結構です。送り先は必ず楷書ではつきりお書き願います。

◎本誌月極購読料◎

一月分　一冊（送料共）二百円
三月分　三冊（送料共）六百円
半年分　六冊（送料共）千二百円
一年分十二冊（送料共）二千四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。荷造送料は全部こちらで負担いたします故、誌代のみお送り下さい。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキヤビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ　第十二巻　第八号
毎月一回一日発行
定価二百円

七月号

昭和三十三年六月三十日印刷
昭和三十三年七月一日発行

編集人　箕田京二
印刷兼発行人　吉田稔
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号

発行所　天星社
振替口座大阪五〇〇四二番

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

大衆小説の中から拾った縛りシーン……山下　真一
残虐芸術展覧会……伊藤　晴雨
ある夢想家の手帖から……沼　正三
ある女給の体験（6）……日下　絹子
探ったい秘密……須藤　律夫
看護人……青葉　模一
帝国海軍の私刑……香川　章二
「真実は誰も知らない」……辻村　隆
ナースと浣腸日記……岩村美智子
ケンちゃんのこと……柴崎　黎子
男奴隷のことども……皆川のぶ子
本誌紹介「緊縛映画一覧」……編集部編
読者通信……

○新年号（復刊第二十二号）【定価二百円】

巻頭口絵
責画……木馬責の構想……久留木　栄
滝れい子画集「女学生」「三十娘」縛絵……柱後手しばり……杉原虹児画
写真〈腰元折檻〉……辻村隆構成
「ニュー・ガールの緊縛模様」写真
洋画スチール「女囚一一三号」より
新年の責めのアイデア……久留木　栄
カメラと映画雑記……黒河　徹也
カラーシャの教典……西小路公彦
マゾヒズムのいさない「ボクの責め方」続稿……黒田　史朗
マニア通信……宝塚二三夫
お灸通信　灸折檻と妻……伊吹寅太郎
映画女優緊縛に関する一考察……河村　操
ある夢想家の手帖より……沼　正三
女性ホルモン服用の実験報告……古井真哉
プレさんの浣腸記……岩村美智子
ナースの浣腸日記……伊藤　晴雨
責物美人伝（腰元お菊）……久留木　栄
美容病院……
告白　慕情のあり方……桂　弥生

九雅節夫氏に寄す「三浦右衛門の最期」……佐々木ツトム
姫鏡……桂　牧次郎
〝我が娘を鎖で監禁〟……近藤　模一
〈創作〉鞭とナイフ……青葉
お伊勢参り
時代小説「女賊変化」……海野　築朗
〈手記〉私のいたづら……南　時夫
麻生保氏の生活と意見……麻生　保
〈マゾヒストの告白〉
犬の生態……杉本　真三
女体切腹秘話　愁風連……青山　芳樹
奇ク十二月号雑感……楓月　太郎
夜光る……辻村　隆
生首礼讃……南方　純
家畜人ヤプー……沼　正三
雑報と雑感……沼　秀
緊縛映画速報欄……阿部
読者通信
編集後記……

○臨時増刊号（復刊第二十三号）【定価二百円】

責小説特集号

口絵
拷問……滝れい子画
吸血女流画家……北原純子画
ある奇術師の恋……滝れい子画
鬼兵衛刺青異譚……滝れい子画
遊女葦水の最期……滝れい子画
縛られた妻……滝れい子画
巫女屋敷の責絵巻……滝れい子画
拷問（特高刑事の惨虐行為）……片矢
賭戯（淫奔マダム狂騒曲）……二俣志津子
巫女屋敷の責め絵巻……岡田　咲子
老いらくの恋異聞……榛ノ木参一
復讐のドラマ……片矢　薫
鬼兵衛刺青異譚……二俣志津子
吸血女流画家……岡田　咲子
ある奇術師の恋……吉丘　垣根
惨虐戦慄の徴用女工……片矢　薫
遊女葦水の最後……片矢

囚衣……古川　裕子
奴隷妻……片矢　薫
悪魔と口紅……桂　牧次郎
悪女……岡田　咲子
縛られた妻……早川新二郎
廓の灯影……片矢　薫
MとS……岡田　咲子
責苦……竹谷　十三
記録係……岡田　咲子
赤につかれた男……上村秀久雄

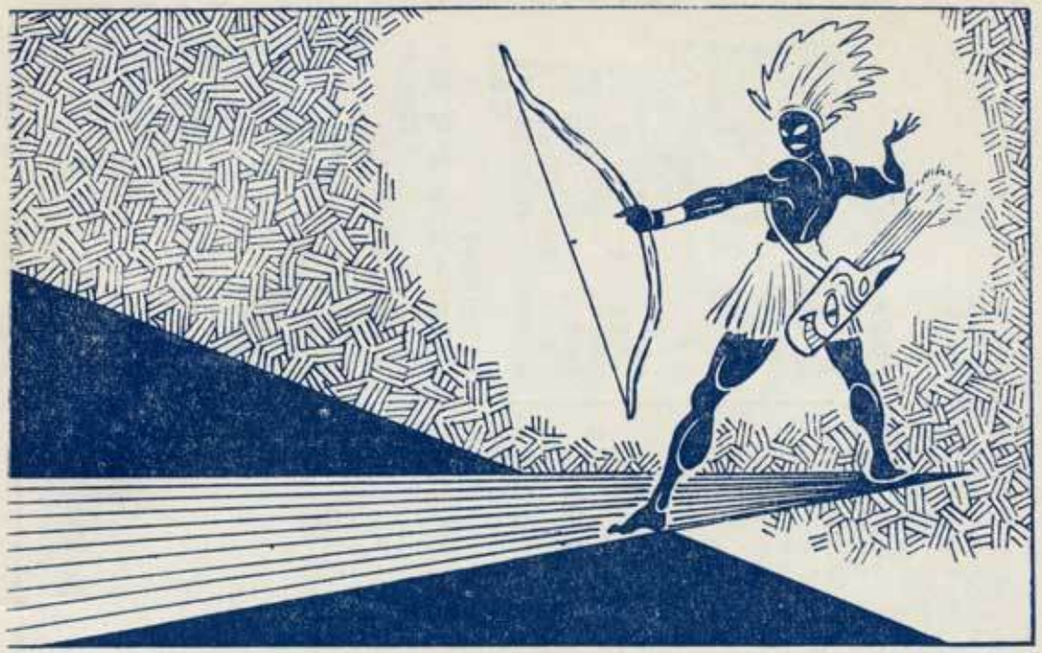
○二月号（復刊第二十四号）【定価二百円】

口絵
責画……歌姫誘拐……四馬　孝画
滝れい子画集「女体自刃」〈滝れい子画〉
「舞妓受難」
緊縛映画名場面集……阿部秀提供
「冥土の顔役」「危し伊達六十二万石」
緊縛写真……（本誌写真部特写）
ニュー・ガールの緊縛模様
愛川悦子、大塚啓子、田中芳代
洋画スチール二題……編集部選
米映画「ポーリンの冒険」
一九五七年の時代劇映画から……南方　佳男
美容病院……久留木　栄
姉妹先生の惨虐な責め……岸本　青柳
家畜人ヤプー……沼　正三
少年禅美に関する構想……杉　俊夫
黒の魅惑……須藤　律夫
被虐の一日……吉田　慈一
病者の獄……青葉　模一
フアンドロナの女王……辻村　隆
ある夢想家の手帖より……沼　正三
大阪屋花鳥（女牢名主）……小坂多美枝
マヤの黄昏……山川　和男
さんまをやく哀愁……鬼山　絢策
現代マゾヒスム芸術時評……原　忠正
街で見つけたフェチシズム……と　ま
嵐の中の花……浦田　紀夫
一見合写真の撮り方……牧　高志
最近の縛りシーンから……嵯峨美也子

責物美人伝……伊藤　晴雨
マニア通信……宝塚二三夫
磔刑と女優……奈加田須磨尾
探偵小説に現れた地獄絵巻……高崎　勉
マゾヒズムへのいざない……黒田　史朗
十三人目の奴隷……夢原　狂介
麻生保氏の生活と意見……麻生　保
沼正三便り……
浣腸物語……朝霧　幾代
臨時増刊号「責小説特集号」について……
滝れい子画「マゾヒズム画廊」……
読者通信……

○三月号（復刊第二十五号）【定価二百円】

口絵
責画　蠟涙……四馬　孝画
滝れい子画集　五輪塔……滝れい子画
写真「腰元折檻」後手吊責……村井知可子
ニューガールの緊縛模様……大塚　啓子
縛られた女優たち……阿部　秀
冥土の顔役、柳生武芸帳、大名囃子……
緊縛映画のスチール……藤本　仙治
千原しのぶの巻
東映「快傑黒頭巾」「はやぶさ奉行」
シナリオとその周囲……黒河　徹也
ガーベラの甘き香り……辻村　隆
大阪屋花鳥（女牢名主）……小坂多美枝
家畜人ヤプー……沼　正三
女体切腹　屠腹乙女桜……藤山　秀緒
探偵小説にあらわれた地獄絵巻
江戸川乱歩の「盲獣」……高崎　勉
緊縛映画誌上封切……阿部　秀
「女体風俗」和装開眼の巻……牧　高志
体験記　椿事……青葉　模一
麻生保氏の生活と意見……麻生　保
漁村風景（褌美雑記）……山口　幸一
美容病院……久留木　栄
被虐の一日……吉田　慈一
菅物語にあらわれた男責……菅原　良太
十三人目の奴隷……夢原　狂介
街でみつけたフェチシズム……と　ま



奇譚クラブ　復刊第二十九号　七月号　目次

絵口頭巻

四馬　孝傑作集　一本足の窄衣……四馬　孝・画

緊縛映画名場面集

〝縛られた女優たち〟……提供（田辺　啓二／阿部　秀）

東映「鬼面龍騎隊」（星　美智子）

大映「おけさ鴉」（近藤恵美子）

大映「遊侠五人男」（中村玉緒）

責絵　浴室のPLAY……杉原虹児・画

特写写真　『腰　元　折　檻』……村井　知可子嬢／辻村　隆・構成

縛り写真　囚衣の女……大塚　啓子嬢／辻村　隆・構成

縛り戯画　下り藤と坐禅草……南村俊平・画

図書・雑誌通信　特異な角度から……九雅節夫…18

或る御殿女中の「拷問記」……緑　猛比古…27

話の屑籠……辻村　隆…32

黒田史朗氏に寄せる……原　忠正…36

マゾヒズムへのいざない十回記念

創作　黒い霧の中で……黒田史朗…38

プレさんの浣腸記　「ナースの浣腸日記」……岩村美智子…44

女体風俗（緊縛衣裳さよならの巻）……牧　高志…46

「創作」条痕（じょうこん）……槇村　奏…50

海原にありて歌える（二）

誘拐されゆく美少女の詩……菅谷はるみ…58

「女体切腹」夕陽に散る華（後篇）……藤山秀緒…59

愛好者の記録（ノート）「私が拾ったアブの種々相」……とやま・かづひこ…64

創作　運命の少女……嵯峨紀世…70

創作　紅山彦（四）……三条卓史…78

創作　『月明に泣く』……河村　操…86

私のイメージ　〝憧れの女性〟……近藤　一…95

「研究発表」切腹風土記……壬生三郎…98

残虐なる女性達

女斗美短歌……土俵四股平…103

子供の時の浣腸……池田喜代子…106

古典にみられる「男責」について……菅　良太…113

乗杉貴代子様に寄せて

〝私の馬〟……西田佐代美…114

「本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品」

〝創作〟お町の最期……花巻京太郎…116

断層の女……辻村　隆…130

美容病院（完結篇）……久留木　栄…139

再びビーチボールの魅力について……佐田春雄…144

緊縛映画速報とその雑感……藤木仙治…146

魔教圏　No.8（その五）……土路草一…148

マゾヒズム百景……馬場好男…159

〝映画通信〟今月の縛られた女優達……大河原珠樹…162

「沼正三たより」「手帖速報欄」……沼　正三…164

読者通信……167

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

現代マゾヒズム芸術時評……原　忠正
映画通信「縛られた女優」……南方　佳男
強盗事件に関する新聞記事……南　時夫
女将と女装の種々責……岸本　青柳
マヤの黄昏……山川　和男
ある夢想家の手帖……沼　正三
マゾヒズムのいざない……黒田　史朗
マニア通信……宝塚　三夫
魔教団NO8……土路　草一
初姿縛られた女優……大河原珠樹
読者通信……

○四月号（復刊第二十六号）【定価二百円】

口絵
「猿ガ島に捕われた令嬢」……滝　れい子
縛られた女優たち……阿部　秀
（危し伊達六十二万石）……北沢典子）
（若き日の千葉周作）……高木悠子）
（力闘空手打ち第三部）……園ゆき子）
画集　屋根裏の秘密室……四馬　孝画
和装縛り　赤い扱帯……花坂　道子
緊縛写真「早春賦」……本誌写真部選
洋画スチール二題……編集部
米画「ジャワへの順風」「肉の蠟人形」
緊縛女性に関する小品五題
「捕われの令嬢」……水沢　雅美
十三人目の奴隷……夢原　狂介
切腹雑感とその種々相……須藤　律夫
私は訴える　愚者の言……貴山　茂
創作　被虐供養……槙　一
家畜人ヤプー……沼　正三
ある夢想家の手帖から……沼　正三
日本印象記　外人の見た女腹切南方
忙中閑お慰み読本……牧　純
——縛り舞踊放談の巻——
私のアイデア　磔縛り七態……奈加　朗
時代小説　繃恋草紙……海野　築郎
マゾヒズムへのいざない……黒田　史多
創作　紅山彦……三条　卓史

最近の時代劇の縛り映画……嵯峨　美也子
棒を使用した女体拘束……久留木　栄
シナリオとその周囲……黒河　徹也
美容病院……久留木　栄
千恵子より泰子さんへの手紙
変ないたずら……三隅千恵子
魔教団NO8（2）……土路　草一
現代マゾヒズム芸術時評……原　忠正
ジャーナリズムに見るコブロとやま趣味（街に拾つたフエチ）
麻生保氏の生活と意見……麻生　保
縛られ女優二十花選……南方　佳男
悦虐クラブ定例会報告……泉　かよ子
告白　私の生い立ち……杉江美津子
緊縛映画速報欄……阿部　秀
読者通信
編集後記

○五月号（復刊第二十七号）【定価二百円】

口絵
四馬孝傑作集美人調教馬……四馬　孝画
責画　女友達（乳房責めの部）……杉原　虹児画
滝れい子画集　横恋慕……滝　れい子画
縛り写真「屏風の前にて」……田中芳代嬢
和装縛り「赤い扱帯」（二）……花坂道子嬢
緊縛映画名場面集……藤本仙治・阿部秀・提供
（大映「東京暴力団」……矢島ひろ子）
（東映「力闘空手打ち」……園ゆき子）
洋画スチール　伊映画「カルタゴの女奴隷」……編集部・選
論文　下着と女性の進化を論ず……S・S生
緊縛映画研究　縛られた女優たち……大河原珠樹
マリアンヌの手記（その五）
赤いペチコート……鴉嘔吐夫訳
続・変ないたづら……三隅千恵子
マゾヒズムへのいざない……黒田　史朗

時代物特写集「腰元折檻」……村井知可子
緊縛映画名場面集……阿部秀提供
大映（銭形平次捕物帖）
松竹（題名不詳）
洋画スチール二題……編集部選
仏映画（情婦マノン）
米映画（激情の断崖）
写真　双丘（そうきゅう）……愛川悦子嬢
やくさしがらみ草紙……海野　築朗
春浅き日に……佐藤すみ子
私の見聞したマゾヒズム……とやま
十三人目の奴隷……夢原　狂介
縛られた女優新十花選……南方　佳男
結婚の条件（二）……近藤　一
映画通信「縛られた女優達……大河原珠樹
事実小説　貸し男……槙村　奏
映画ストーリイ　嵐の中の花……浦田　紀夫
残虐なる女性達……森本　愛造
創作　美容病院……久留木　栄
粋興春宵座談会……牧　高志
マゾヒズムへのいざない……黒田　史朗
現代マゾヒズム芸術時評……原　忠正
創作　小僧と褌……内田　武男
女はらきりのイメージ……南方　純
一告白」羞恥を水めて……柴崎　黎子
創作　紅山彦（三）……三条　卓史
誘拐されゆく美女の詩……賀谷はるみ
創作　運命の少女……嵯峨　紀世
最近の時代劇縛りシーンから……嵯峨　美也子
マリアンヌの手記（その六）
「レポート」その女の急所を刺せ……鴉嘔吐夫訳
魔教団NO8（4）……近藤　一
体験記　パー「ナナ」の人々……南　時夫
今月の縛られた女優達……大河原珠樹
誘拐された令嬢……水沢　雅美
緊縛映画速報とその雑感……藤木　仙治
読者通信……

○六月号（復刊第二十八号）【定価二百円】

口絵
画集　革製縫ぐるみ……四馬　孝画
責絵　迫りくるスリル……杉原虹児画
縛画　変形吊り責機……忍頂寺保画
写真「三味線」……写真部特写

一本足の窄衣

四馬　孝傑作集(3)

ふくよかな足を一つにして、革の窄衣を着せた着想の奇抜さ、その上、胸には亀甲型に革紐が肌に喰い込んでいる。それればかりではない、頭の上に垂れ下つてきた棒は、この一本足の女体を吊り上げて傍の水槽の中へ運んでゆくのだ。

四馬孝・画

女　優　た　ち)

＜提供　　田 辺　啓 二＞

東　映　　「鬼 面 龍 騎 隊」　　（星　美智子）

東　映　　「鬼 面 龍 騎 隊」　　（星　美智子）

緊縛映画名場面集　(縛　ら　れ　た

＜提供　　阿　部　　秀＞

大　映　　「お　け　さ　鴉」　　（近藤美恵子）

＜4月号の「速報欄」160頁参照＞

大　映　　「遊　侠　五　人　男」　　（中　村　玉　緒）

＜4月号の「速報欄」161頁参照＞

浴室のPLAY

杉原虹児・画

腰元折檻

<モデル　村井知可子
構成　辻村　隆>

因衣の女

本月号「話の屑籠」（辻村隆）に言及した大塚啓子嬢の縛られ姿の中の一部。

辻村　隆・構成……

モデル　大塚啓子・嬢……

下藤（さがりふじ）と坐禅草（ざぜんぐさ）

南村俊平・画

新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1958年 7月号

(第十二巻 第八号 通刊第百九号)

═══図書・雑誌通信═══

特異な角度から

九雅節夫

◎**谷崎潤一郎**「細雪」上巻。◎

往古の悪魔主義作風（江戸川乱歩の初期の名短篇群すら、その影響から出ている）を離れて、この「細雪」に於ては、谷崎潤一郎は、家庭作家のような印象を与える。つまり、壺井栄的健全さを示すのである。しかし、以下に示す一小節などは、やはり、耽美作家の一面を感じさせて呉れる。上巻の冒頭である。

雪子は毎度のことなので、馴れた手附で、ベタキシンのアンプールをやすりで切って液を注射器に吸い上げると、まだ鏡の前に立ってお太鼓に背負上げを入れさせている幸子の左の腕をとらえて、肩の辺までまくり上げた。そしてアルコールを染ました脱脂綿で二の腕をゴシゴシ擦ってから、器用に注射の針を入れた。

「あ、痛い」

「今日は、ちょっと痛いかもしれん、時間ないよってにそないゆっくりしてられへん」

一瞬間ビタミンBの強い匂が部屋じゆうに満ちた。雪子が絆創膏を貼った上から、ぴたぴた叩いて肉を揉んでやっていると。（以下略）

さすがの大谷崎も、昭和十年代の準執筆禁止のためにか、上巻後半から、中半にかけては、なんとなく暗さが漂う。私のこの稿で紹介するのは「細雪」では、以上に尽きるかと思う。（この項第2部11項）

◎**アースキン・コールドウエル**「苺つみの頃」龍口・小林訳（河出文庫版）◎

「タバコ道路」や「神の狭い土地」の作者である。コールドウエルにも、ほのかなエロチシズムをたたえた、ロマンチックな作品がある。米版コールドウエル短篇全集、全九十三篇の内に十篇近いその傾向の作品がある。

早春の苺が熟しはじめる頃になると、誰も彼もが、百姓の苺つみの手伝いをしてあちこち渡り歩いた。（中略）娘たちの一人が少々屈みこみすぎて、肌のどこかを一寸でも見せようものなら、さいしよにそれを見付けたものは誰でも、あらんかぎりの大声で叫ぶ。この叫びの原因となった娘はすっかり顔を赤らめ、他の娘たちは自分ら同志でくすくす笑いながら、自分のスカートを引下げる。

（僕は、彼女フアニイの襟から苺を落して叩くという悪戯をやる）

「そりや」ひざの上に、ぽろぽろ涙をこぼしながら彼女はいった。「でも、ほんとに痛かったわ。こんなとこ、叩くものじやなくってよ」

フアニイは腰のあたりまで、ドレスのボタンをはずした。さっきの苺は下着の内側でつぶれていた。緋色のしみが、白い布地にまるで朝顔が咲いたようについていた。

彼女は下着のボタンをはずした。さっきの苺が、彼女の二つの乳房のあいだで砕けていた。ミルクのように白い二つの乳房、そして、どちらの真中にも、つぶれた苺のような色がついていた。

自分でもそれと気づかない内に、僕は両腕に彼女をしっかと抱きしめ、長いこと、その唇に接吻しているのだった。

明快にして健康である。谷崎、川端流のタッチとは、両極端をなしている。

そのあとも、この幼い二人は、(しばらくお互に顔を見合って)別れて行く。(かって、フアニイがいったことがあった。あたしはこれまで恋人をもったことはない。この女が自分のものであってくれたらいいがなと僕は思った)(この項、第2部12項)

◎アースキン・コールドウエル「神に捧げた土地」杉本福夫訳(角川文庫版)◎

続いて、コールドウエルの代表作から引用しよう。前出の短篇とは一転して、南部人の生活臭のにじみ出るような、熱風のような雰囲気にみちた長編である。

浮気なダーリング・ジルが、ロザモンドの夫を、誘惑している最中(雲ひとつない空から、雷鳴がとどろきでもしたように)ロザモンドが姿を現わす。

(1) ロザモンドは片手では威嚇するようにヘヤブラッシを振り上げ、片手ではダーリング・ジルの身体をひっくりかえしてうつむきにならせようとしていた。彼女はやっとのことでうつむきにさせると、ダーリング・ジルのお尻を、その暇を与えず、五、六度つづけざまにうちすえた。ダーリン・グジルは最初は笑っていたが、あまりひどくひっぱたかれたので打たれたあとが痛み、泣きだした。(2)ダーリング・ジルのお尻は、一面に火がついたように赤くなり、柔らかな肉に真紅なみみず脹れが出来ていた。もう一度よくみると、そのみみず脹れの上にまたさらに、ロザモンドのヘヤブラッシそのままの長方形のみみず脹れが出来ているのが見てとれた。プルートーは、しろから、気の毒そうに、(3)ダーリング・ジルのふるえている裸の身体やふるえている脹れ上ったお尻を覗きこんでいた。

ロザモンドは、ピストルをぶっぱなし、彼女の夫は裸のまま、街角へ飛び出してゆく。このくだりも、コールドウエル一流の筆にかかると、さっぱり喜劇的にならないのである。右に掲げた部分は、すごい迫力があって、代表的鞭打小説である、「バルカン戦争」等々の著作類もこれに較べたら、雲泥の差がある。

やがてロザモンドは(ダーリング・ジルを抱きしめて、またしてもワッと泣き出した)ロザモンドのすすり泣きが殆んどやんだと思うと、彼女は起き上ってジルを見下した。

(4) ダーリング・ジルのお尻の赤いみみず脹れは、まだ激しい痛みにうずいていたので彼女は坐ることも出来なかった。ロザモンドはそうすることで多少はその痛みをやわらげられでもするかのように、そっと指さきで、みみず脹れの一つをさわって見た。

(彼女はラードと浴用タオルをとってきて、プルートーに手伝ってくれと頼む)

プルートーはベッドのそばへ寄ってきたが、眼の前にダーリング・ジルのはだかの寝姿を見るとまっかになった。

〝可愛い〟ジルの突飛娘ぶりと、プルートーの善人さを対比して、このお尻の治療の条りはまだまだ続くが、この程でやめておこう。現代日本文学に於て、この鞭打シーンに対抗できるのは、僅かに、田村泰次郎の「肉体の門」ぐらいのものだろう。「肉体の門」も、この稿で紹介する予定だが、今は、このコールドウエルの大作に敬意を表して、本文中番号を附した部分を、龍口真太郎氏はどう訳しているか、紹介してみよう。

(1) 彼女はヘヤブラッシを持った手を物凄い剣幕で振り上げ、もう一方の手で一生懸命にダーリング・ジルを転がして俯伏せにしよう

としていた。やっと妹を転がすと、もがいて逃げる隙も与えず、続けざまに五つ六つお尻をひっぱたいた。

(2) ダーリング・ジルのお尻は、一面火のように赤くなっていて柔かい肉塊の上に、真赤なみみず脹れが、何本も出来ていた。

(3) ダーリング・ジルの震える裸の肉体と、戦く傷いたお尻を気の毒そうにみていた。

(4) ダーリング・ジルの臀部の蚯蚓脹れは、まだ痛そうにぴくぴくしていて坐ったり仰向けになったりは出来なかった。

龍口訳の方に流動感あることは否定できない。

（この項、第1部20項）

◎エミール・ゾラ「居酒屋」

田辺・河内訳（岩波文庫版）◎

ロザモンドは、ヘヤブラッシで妹のお尻をひっぱたいたが、〝ぱん、ぱん〟と歌いながら、恋敵の姉のお臀を叩いた女がある。人は或は見たであろう。水をかけられた顔を上げてニッと笑い洗濯棒をふり下ろしたマリア・シエルを。そして、ぱっとまくられた白い見事な臀部を。――それは、ルネクレマンの映画「居酒屋」だ。

こんどは彼女が桶をつかんで、若い女にぶっかけた。そこで恐しい斗いが始まった。ふたりはいずれも、バケツからバケツへ駆けまわり、水の一杯はいったバケツをつかんで相手の顔へ投げあった。そして、ざっと一投げあびせるごとに喚声をあげた。今ではヂエルヴエーズの方もやりかえしていた。

「そらゆくぞ、売女め！……ざまあみやがれ。これでお尻がひえるだろう」

「よしよし、お前の塩気をぬいてやろう。この大鱈め！」

初めて顔の真中に一杯あびせられたのは、ヴイルジニイだった。水は頸から入って、背中へ、胸に流れこみ、着物の下から流れおちた。それで、彼女がまだ茫然としているうちに、二杯目がはすかいに投げかけられて、左眼をつよくたたきつけ髷をぬらした。髷は細紐のようにほどけた。ジエルヴエーズは初め脚をやられた。一杯が靴を水びたしにし、股までもはねかえった。別の二杯が腰を水だらけにした。だが、やがて互いに投げつけたバケツの数も判らなくなった。どちらも頭から脚の先までびしょぬれになり、胴着は肩にはりつき、スカートは腰にまつわりつき、やせほそり硬くなりがたがた震え、驟雨の中の雨傘のように身体中から雫をたらした。

「ずいぶん、おかしな恰好ね！」と一人の洗濯女がしやがれ声で云った。

ヴイルジニイが、ジエルヴエーズの胸元にとびかかった。彼女はジエルヴエーズの頸をつかまえて、絞めころそうと力をつくした。ジエルヴエーズは猛然とひとゆすりして、相手をふりはなし、その髷の尻尾にぶら下った。まるで首をひっこ抜かん勢だった。格斗は一言の叫びもなく、罵言もなく、黙々としてつづけられた。ふたりは体と体をぶっつけてのもみ合いはしなかった。平手や鈎にした手で相手の顔を攻撃し会い、つかまえたものをつかみ取ったりひっ掻いたりした。栗色髪の大女の赤いリボンと青い絹の笹織の網はひきちぎられた。彼女の胴着は頸のところでやぶれて肩先の肌をみせた。一方金髪の方は、気が着かない中に白い胴着の袖をとられ、着物をはがれ、シュミーズに出来た裂目が胴体のあらわな皺をむき出しにした。長い掻き傷が三本、口から頸の下までさがって、まずジエルヴエーズが血を流した。平手打の音が三つひびいた。

頸の太い大男が一人、ふたりの女がちらちら見せる肌を楽しんで笑っていた。金髪の方の女は鶉のように肥えていた。彼はシュミーズが破れたらお笑い草だと思っていた。

「おや、あいつの腋の下には黒子がある」

彼はまばたきしながらつぶやいた。

床の上では、格斗がつづいていた。突然さっとヴイルジニイは、膝をついて起きなおった。彼女は洗濯棒をひろいとってふりまわしぜいぜいと息をきらしながら、しやがれた声でいった。

「こん畜生、ゆくぞ！用意しな、ぼろぎれ女め！」

「ああ！大洗濯をしたいのか……お前の肌をだしな、雑巾みたいにしてやるから！」

棒は彼女の腰をかすめた。洗濯女が洗いものをたたくように、二人は激しく調子をとって叩きあった。相手の身体にぶつかると、音がにぶって、水桶の中をたたくときのように聞えた。

ところが、突然ジエルヴエーズがうなった。ヴイルジニイが、彼女のむき出しの腕の肱のうえを、さっとすばやくたたきつけたのだ。赤い斑点があらわれて、たちまち肉がふくれあがった。そこで彼女は飛びかかった。相手をうち殺さん勢いだった。

「よしな、よしな」人々は叫んだ。

だが彼女があまりに凄まじい顔をしていたので、誰も近づこうとはしなかった。力を幾倍にもふるい起して彼女はヴイルジニイの胴体をつかみ、それをへし曲げ、腰を宙にうかせておいて、顔を石畳に押しつけた。そして相手がふりきろうと、もがくのもかまわず、ヴイルジニイのスカートを、くるりとまくりあげた。そのしたにはズボンがあった。彼女は裂目に手をつっこんでそれをひきちぎり、太股も尻もむき出しにして、一切をぶちまけた。

それから洗濯棒をふり上げてなぐりはじめた。

彼女の女主人が駐屯部隊の下着類の洗濯をしていたとき、彼女はプラサンの町のヴイオルタ川のほとりでそんな風に洗濯物をたたいたのだった。棒は皮膚にぶつかると、やわらかいしめった音をたてた。ひと打ちごとに、赤筋が白い肌をまだらにした。

「おお、おお」笑いがふたたび起った。

ジエルヴエーズは自分の仕事に目をそそぎ一ケ所でも乾いたままにしておくまいとむきになっていた。

彼女は何かわからなくなりながら、とにかくこの肌の全部を、たたきのめしたいと思った。それから残忍な快活さにとらわれて洗濯女の歌を思い出してしやべった。

「ぱんぱん！マルゴーは洗濯場へ……ぱんぱん！洗濯棒で調子をとって……ぱんぱん！心を洗いにまいります……」

それからこうもつづけていった。

「そらこれはお前の分だ、そら、これはお前の妹の分だ、それからこれはランチエの分だ。それ！お前のおケツを……マルゴは洗濯場へ」

人々は彼女の手からヴイルジニイを奪いとらねばならなかった。ジエルヴエーズは胴着の袖にもう一度手をとおしスカートをつけなおした。

扨ここでもう一言だけつけ加えるなら飜訳とは便利なもので、ある種の非良心的な訳は、ヴイルジニイのスカートもまくり上げないし尻をむき出しにもしないのである。訳本を求める場合には注意すべきである。

（この項第1部21項）

◎三条朝子　「黒き衣の下に」―修道尼のノート―（「知性」誌30年1月号）◎これは〝愛の記〟として〝知性〟の募集した原稿の入選作である。

以前本誌にもこの記事は紹介されたことがあったが、改めて本文を紹介しよう。

裾引く黒い衣は神の花嫁だけが着ることを許された聖なる衣、世界と虚飾に絶縁した黒い色。腰に巻き長く垂らす革ひもは色情をたたきつける貞潔の紐。これで肉情を何処かに結びつけ縛りつけておかねばならない。

鞭撻の苦行。それは修道者だけが覗くことを許されている秘密の世界である。

日毎犯されている罪人の罪を償うために、又自分の中に日毎宿り襲いくる肉の欲情にうち勝つ為に進んで我身をうち殺し、神の花嫁が最愛の主に捧げる唯一の愛の証である。初夏ともなれば私の臥す藁ブトンの上にも曙の光がただよい始めるが、冬は全くの闇の中に起床を告げる鐘の音にとび起きる。夜の続きがまだ私の独房に匂っているとき私は「キリストとの秘宝」と呼ばれる行為に入るためにいそしんで身仕度を整える。右手に堅く編んだ綱を握りしめる。そして今まとった聖衣の

裾を下半身を露わにたくし上げる。昼間は貴婦人の如く裾ひくこの衣も今はその影もなく包み隠さねばならない肉体が誇らしげに顔を現す。私は臀部の肉に鞭を入れ始める。初めは流石に痛く苦痛である。床に目を落せば私の脚が二本怪物のようにつっ立っている。打たれている肉が熱を持ち始める頃から痛みは次第に遠退いてゆく。私の肉体を何物かがゆすぶっているという快感が襲って来る。そうなると私の腕にはいよいよ熱が加り狂気の如く打ち続ける。そして最後にマゾヒズムの陶酔が私を虜にしてしまう。

この女性の肉感には自覚しているように、マゾヒズムの影が濃い。デイドロ「修道尼物語」は虐げ虐げられる修道尼の愛憎絵巻だが、この三条朝子氏の手記はその本を私に連想させた。（この項第1部22項）

◎**若杉慧**「禁　断」（角川文庫版）◎

若杉慧が好んで描くイヴ的な少女みふねが教師の子を宿し、それを罪として背負いつつ、ついに自殺に至る罪悪意識をテーマにした中編小説である。

白い上ツ張の背中をみせた医者は案外若かった。看護婦がさっきの紙を持って来て机の上に置き、そこらを片づけ始めた。みふねは医者と二人だけならいいと思った。医者は勝手にうなづいて、上衣のボタンに手をのばしかけたので、みふねはあわてて自分で脱ぎ、下着の紐をといた。

黒い乳首の少女にしては、大きな乳房があらわれた。医者が一寸ふれると、みふねは気が遠くなりそうだった。聴診器をぐっと押しつけては離すたびに皮膚の上に白い輪が残って、すみやかに消えていった。胸の診察はすぐ終った。

――脱ぐんですか？

――じゃ、あちらへ。

カーテンの環が鳴った。

みふねは目をみはり、顔いろを変えた。

――手術ですか？

少女は一歩さがった。顔が妙に長く引きのばされて唇のまわりに醜い線があらわれた。

――見るだけです。

黒い皮張りの高く傾斜した短い台、開いた両脚をうけとめる靴型の金属、凡そ想像したことのない黒い機械は、その上に一つの姿勢を要求して無言に待っていた。

――お上りになって……ズロースもおとりにならなくちゃ、

体の下の方がギーッとなって、とたんに脚が開いて空中に逆吊りにされたようだった。

両手の置き場がない。いつまで、こんなに吊り下げておくんだろう。

――そんなに力んじゃいけません。腹の力をぬいて、

体を起すと、スリッパがまるで谷底にみえた。

ズロースをはきかけ、みふねはよろめいた。（この項第3部18項）

◎**クープリン**「ヤーマ」昇曙夢訳（創元文庫版）◎

クープリン（アレクサンドル・イヴノウイッチ・クープリン）は、ロシヤの軍人出身の作家。その代表作「ヤーマ」――とは〝魔窟〟である。南ロシヤのキエフの遊廓の内幕をバクロし凄惨な人肉市場の光景を直写した問題作である。

最初に娼婦が口ずさむ小唄を紹介し、次に本文から一節を引用しよう。

(1) 月曜がくりや、
検査に行きます。行けば、
お医師のクラソフめが放さない――
厭な畜生！
はっはっは！

(2) 土曜日は、医者の検査日だった。誰でもが、ごく念入に、おずおずと準備するのだったが、それはちょうど上流婦人が、婦人科医を訪ねるときに支度するのと、同じだった。中庭に向いた、一つの窓の近くに、寝台が据えてあって、丁度腰が当る処に、堅い長い枕が、置いてあるのだった。

「みなさん、お支度！　お医者さまがお見えですよ」ヤリテのゾーシヤが廊下で呼んだ。市医クリメンコは、検査に心要なもの

を、広間で用意していた。昇汞水やワセリンや、その外のものは、別な小さなテーブルの上に皆配置した。左の手許には、女たちの旅券代用の白い札とアルファベット順の名簿があった。抱女たちは肌着と靴下とスリッパという服装で、離れた所に集って来た。テーブルの近くには、おかみのアンナ・マルコーブナ自身が立っている。医者というのは年取った、だらしのなさそうな、汚らしい、何に対しても平気な男で斜めに鼻眼鏡をかけ、名簿をみて呼んだ。

「アレクサンドラ・ブジンスカヤー」

鉤鼻のニーナが顔をしかめて出て来た。顔には忌々しいという色を浮べ、恥しさ、きまり悪さの意識や努力などのために鼻をならしながら、不器用に寝台の上にのぼった。その時腰の下に入れるあて枕が、つるりと飛び出し、医者が、それを腰の下に再び入れようとしたとき、ニーナが、うまく腰を上げなかったので、彼は腹を立てた。医者は手荒くニーナの足を押しひろげた。

「よろしい！健康」そしてすぐ、

「次！、イリーナー」

今度はリューブカの番だった。彼女は比較的自由なこの一日半の間、検査をうけていなかったので、医者が肌着を胸の上まで捲り上げると、非常にはずかしがりの女だけに、見るまに、背中や胸までもぱっと赤くなった。

医者は驚くべき早さで、片っぱしから片づけた。かれこれ、もう二十年も毎週土曜日には、こういう風に数百人の女を検査して来たので、無差別な畜群を検査するとの同じだった。

（この項、第3部19項）

◎中 勘助「沼のほとり」

（「中勘助集」新潮社）◎

大分、熱っぽい所を、今迄になく数篇まとめて掲載したので、ここで又、一寸、ほのかな情感を紹介しよう。

畑がえり大根しょひゆく妹が屁のはしくもあるか鄙にしあれば、

美少女のモンペの尻から、かすかな音のもれる屁なら、又別の味わいもあろう。

（この項第2部13項）

◎山川柳子

「薔薇は生きてる・後記」◎

三十代の川端康成が山川弥千枝の「バラは生きてる」を愛読していたのは有名な事実で、それは名作「禽獣」の主人公の口からも語られている。

〝生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し〟という有名な一句は、初版の「バラは生きてる」に母の柳子さんが書き加えたものだという（高見順・昭和文学盛衰史）ところで、ここに挙げるのは、昭和三十一年版・美和書院の同書に、同じく柳子さんが書いた後書の一句なのである。

それは、病床の弥千枝さんの言葉で、心臓が弱ったとみえて浣腸するとドキドキしてくるの。

というのである。

私が、本稿の第二回、第三部第八項として挙げた。

浣腸されるときが、いちばんいやだわ。もう、なにもしないでよ。（川端康成「万葉姉妹」）の如きも、この山川弥千枝さんの言葉がヒントとなっているのかも知れない。私は、某誌に投稿する際、住所を明記したので、一部の人々には、私の正体？が判ったらしく、時には熱心な読者からおたよりをいただいている。

その一つに、この第三部第八項で、浣腸されるときとことをなぜ区別するのか、という御質問がある。確かに、あのときの説明文は、私の言葉不足で、つまり、浣腸されることがいや、というと、その医療行為を否定することになる。ときと云えばそのときの施療を受けるときの羞恥を示すわけだ。そんな、言葉づかいにも、私はこの少女のデリケートな心理をみようとしたのであった。

（この項第3部20項）

◎週刊朝日、三十三年三月二日号

「アンネの最後」◎

◎皆藤幸蔵「アンネの日記（光ほのかに）後記」◎

アンネ・フランク。この少女は、ただユダヤ人なるが故に、若くして殺された、――あの不幸な時代の犠牲であった。今や、日本の少女の古典となっていると云われるこの「アンネの日記」を私はひもといてみた。ただ一言だけ言っておこう。アンネ、君のために涙しようと。

（アンネたち――アンネと姉のマルゴット両親とその他の人々は、ある日、突然かくれ家にふみこまれた）アンネたち六人が壁を背にして両手をあげて、ナチの前に立たされていた。（B）（やがて彼等はユダヤ人という罪名で、秘密警察からナチの最大の収容所ヴェステルボルグへ連れて行かれた）

（ヒットラーの「夜と霧」作戦！と共に、彼等は家畜用の貨車につみこまれ、ポーランド最大の屠殺場アウシュヴィツに送られた。）

おおぜいのポーランド人に怒鳴りつけられ、愚図愚図していた者は情容赦もなく殴られた。ここで男と女とは別々にされ、持物を全部とり上げられ、素ッ裸にされた上、頭をクリクリ坊主に剃られた。（註をみよ）シャワーを浴び、腕に番号を入墨された。（B）女たちが素裸にされ、ガス室へ追われていく姿を彼女は窓の所から涙を流してジッと見守っていた。（A）

そして一九四四年十月三十日に、この部屋にも命令が来て、強い照明灯の前に女たちは素裸で並ばされた。そしてアンネはベルゼン収容所へ送る組に入れられた。（A）

そこでアンネは姉のマルゴットと共にいたが、スパイの疑いをうけて十一年間、シベリヤ北部の収容所にいたときのルポルタージュである。元版は一九五一年に出版され、「リーダース・ダイジエスト」誌に名著の要約として紹介されたことがあるので、それを読んだ人もお居でのことだろうと思う。

(1) 面白くもない。といった面持の婦人看守が私を「ふるい落」しました。それから更にたくさんのバチルカ監獄の鉄の扉、法廷、壁と鉄扉、大地下室。

ここに送り込まれた人は、誰でも、一糸まとわぬ素はだかにならねばなりません。女看守が、女囚人のかみの毛をかきむしり、耳の穴や鼻腔を検べ、口の中を指でかきまわし、腋の下を覗き、臍をほじくり、指の又をさぐり、そして最後に裸の彼女を膝まづかせて後から、婦人だけの検査までやってのけます。

だが、それで終りではありません。毎日、毎日、全員が身体捜査に呼び出されます。

また素はだかにされ、家畜のように身体じゆうを調べまわされるのです。

(3)「全員所持品を持って下りてこい」

二十五日目でした。汽車が止まり扉があくと看視兵らが口々にそう叫びます。

「降りてしやがめ、起った者は射殺するぞ」

この書は、スイスの一女性エリノアリッパー女史が、共産主義研究にソヴイエトに赴いたが、スパイの疑いをうけて十一年間、シベリヤ北部の収容所にいたときのルポルタージュである。元版は一九五一年に出版され、「リーダース・ダイジエスト」誌に名著の要約として紹介されたことがあるので、それを読んだ人もお居でのことだろうと思う。

(1) 面白くもない。といった面持の婦人看守が私を「ふるい落」しました。それから更にたくさんのバチルカ監獄の鉄の扉、法廷、壁と鉄扉、大地下室。

ここに送り込まれた人は、誰でも、一糸まとわぬ素はだかにならねばなりません。女看守が、女囚人のかみの毛をかきむしり、耳の穴や鼻腔を検べ、口の中を指でかきまわし、腋の下を覗き、臍をほじくり、指の又をさぐり、そして最後に裸の彼女を膝まづかせて後から、婦人だけの検査までやってのけます。

だが、それで終りではありません。毎日、毎日、全員が身体捜査に呼び出されます。

また素はだかにされ、家畜のように身体じゆうを調べまわされるのです。

(3)「全員所持品を持って下りてこい」

二十五日目でした。汽車が止まり扉があくと看視兵らが口々にそう叫びます。

「降りてしやがめ、起った者は射殺するぞ」

◎**エリノアリッパー**「ラーゲルの女」木島ひろ子訳（国際文化研究所出版）（この項第1部23項）

ウラジオストックについたのでした。一時間ほど行進させられると、私の最初の収容所、ウラジオ移動収容所の第一門が口をあけています。私たちは木柵に囲まれた庭に追いこまれ、私たちの入浴はもう日が暮れてからでした。

私たちも一糸まとわぬ素裸になり、寒気に全身紫色になりながら待ちました。

やって来たのは、床屋と医務助手です。助手は頭髪の虱を調べ、ひどくたかっている女は、くりくり坊主に刈られました。それから床屋の前に並んで……中略……剃り上げられます。私たちの啜り泣きも逆らいも、床屋は風馬牛でした。私たちは、もう自分の肉体の隅々までもこの悪党どもにとっくり眺められてしまったのだから、剃られるのも諦めたのでした。

(1)は、初めて入獄のときの身体検査。(3)はシベリヤ収容所での体験を描いている。どうして捕虜はこんなことをされるのか、虱予防以上の意味があるのか、いくら考えてもよく判らない。例えば、アウシュウイッツでは、焚殺する女たちからまで頭髪その他を剃り上げているのである。

シベリヤの日本人たちも、のこらず剃られたということである。(この項第3部21項)

◎**ジョン・スタインベック**

「殺　人」　大久保康雄訳（新潮社）◎

どうも陰惨な項目の後なので、最後にパーッと豪快な鞭打を紹介しよう。中部カリフオルニヤでの姦通事件。夫が妻を折檻するのである。

ジムはのろのろと家の中へ入ってゆき、九呎ほどの長さの鉛入の牡牛鞭を持ち出した。それから乾草置場へのぼる梯子をあがって行くと、かん高い仔犬のような泣き声が起るのを聞いた。

ジムが再び納屋から出て来たときにはジェルカを肩にかついでいた。彼女の胴衣の背中は、血で縞のようになっていた。

「あんたは私をひどい目にあわしたのね。ずいぶんひどい目にあわせたわ」

と彼女は言った。

「死なない程度に、思いきり、うんとぶってやったのさ」

「もうわたしを鞭でぶったりしない？今度のことでは」

「もうぶたないよ。今度のことでは」

（この項第1部24項）

第一部　折檻と拷問（未完）

第二部　成熟と未熟（未完）

第三部　臨床と羞恥（未完）

附　記

一、私は浣腸文献を集めております。例えば氏家昇三氏の「小児の病気と治療」には、女児に対する肛門検温と浣腸の図が巧みに描かれています。又、主婦の友社の家庭選書（絶版）には、臀部を押し開いて体温計を挿入している写真と、ゴム管を入れて浣腸している写真、その他があります。実用婦人雑誌と、その附録について研究することを、エネマ・マニアにおすすめします。又、本誌上に、何誌の何月号にどういう記事があったかを紹介して下さる。女性ファンはいらっしゃいませんか。

二、コールドウエルあたりに魅かれて「アメリカ文学全集」荒地出版社を求めて、大体読破しておりますが、この稿で紹介したいものが全くないのには、失望しています。

三、**常盤とよ子**「危険な毒花」を、おすすめします。

圧巻は、なんと云っても、婦人科病院のフオート・レポートです。第一図、危険なはきもの（83頁）。診療所の玄関に一杯の若い女の履物。第二・三図真金町診療所にて（83・84頁）三、四人の女が、受付の前に立っている。〝毎日洗滌と検診を受けること〟という貼紙が出ている。第四図キャンデーをかじる女（85・86頁）第五・六・七図血液検査（87・88・89・90頁）第八図～十二図、ペニシリン注射。（91～95頁）。第八図、下ばきをずり下ろし、臀部をすっかりこちらへ向けて出している。医師が、右の尻の腰の方へ針をつきさした

所。第十図。注射を終った女が起とうとする所。ざっと以上。但し、この本は再版以後、写真が一部入替えられ、第八図の如きも、修正されて、ノッペラボウなお尻になっています。古本で初版を探すことです。

四、「平凡」四月号。グラビヤに下着ショウがあります。五月号は江利チエミ等の海水着写真だけで報告するものはありません

五、「婦人画報」三月号。ブラジヤーとガードルを、日活、丘野美子がつけた広告写真一葉。

六、「オール読物」五月号。この巻頭のヌードは、一寸美くしい。

七、「新生」第一号。グラビア・モスクワの休日。公園で、ズロース一杯で長々とねそべった婦人二人。その他、グラマーもヌードも仲々よい。

八、「新生」第三号。グラビヤ・白い蛇のよる（中村正也）は、大胆なポーズ。然し腋毛はぼやけているし、尻の部分にも修正が感じられる。

雑記

一、私の親戚に、客観的には、エネマ・マニヤとしか思えない婦人がいる。彼女は娘たちに熱が出ると、すぐ便所にともなって、しやがませたままでイチヂク浣腸を行う。又それをかくそうとはしない。

二、友人の姉が盲腸の手術をした。その後、見舞に行っているとき隣のベッドの少女を看護婦が呼びに来て何気なく、

「手術の準備するから、看護室へ出てね、ズロースぬいでらっしやい」と云った途端友人の姉が、ぱっと真赤になって了った。

三、去年の十一月であるが、鎌倉の聖テレジアで療養中の一女性からお手紙を頂いたので。（一部分）

夏目漱石先生の「道草」に滋養浣腸ということが出ていますのを、九雅さんの「特異な角度から」で知り、看護婦さんからお借りして、読ましてして頂いたのです。そして、そこの所に来ると、思わず顔が赤くなってしまったのです。九雅さんの今度の斗病記、読ましてして頂き、九雅さんの悲しみも喜びも、私にはよく判ったのです。九雅さんの入院なすった病院ではいるらしいですが、「お浣腸」と云っているらしいですが、私のところでは、ただ「浣腸」と云うだけですのよ。刑務所の女囚が、身体が悪くもないのに内診を願い出るというそれにも、少し似ているの。私たちの心を知っていらっしやるのか、それともただ意地悪なのですか、婦長先生は、中々私たちに浣腸を下さいませんのよ。でも、寝たきりの私たちは、とてもとても、ベンピで苦しんでいるのです。お腹がはって、痛いので泣いている少女もいるのです。

「婦長先生、浣腸を下さいませ」

私は、とても我慢出来なくなってお願いしてみましたの。

「なに？」と、わざととぼけていらっしやいますの。

「お腹がはって痛いのです」

「幾日出ないの？」

「十日になります」

それでも、婦長先生はお許しをくれません。お便所で三十分イキンでいらっしやいとおいいつけになるのです。

三十分以上もお手洗でしやがんでいてもやっぱり出ないのです。私も涙をためながらベッドへ戻ると、

「それ、がんばれば出るんだよ。出たんだろう」私が泣き出すと、

「出ないの？。どれ、一寸」と、パジヤマとズロースにいきなり手をかけてずり下ろし、お尻を上げさせて、肛門をお調べになる。

「この肛門では、あまりイキまなかったね。それでは、30チエーチエーだけ、入れて上げますよ」

それでやっと、私は、処置へ行って浣腸していただけますのよ。

四、右の小寺A子さんのお手紙で思い出したのだが、私も、前稿（十一月号）で告白した手術のあと、腸が全く動かないという原因の、ひどい便秘になりひどく苦しんだ。看護婦が、私の肛門から便をほり出したり熱療法というのを受けた。これは「九雅節夫、その後の事件」として又書こう。

以上　（三三・四・八）

或る御殿女中の拷問記

緑猛比古

『亥の刻許に、牢番の足軽注進しけるは、咎人自害したるかと見えたり。宵より牢の内に立て、動かずしてあり、まさしく自滅かと注進す。時に行て見るに、見分けがたし。注進の如く囚立て動かず。提灯を以て照らし見るに、牢格子の間狭くして見えわかず、自殺に紛れなしとて、牢の口より入り見るに自害したり。其の体胴縄をかけ置きしに、裸になって胴縄を上の格子に通し輪となし、それに頤をかけ、舌をくい死たり。手錠六筋の取縄ともに、ずたずたにきれてあり。足かせは菱形になりたり。左の口脇より紅の糸のごとく細く、血筋流れて舌本を喰い切り、左の方に舌さがりあり。すさまじとも云わん方なし。』（『二老略伝』九皐先生嗣録）

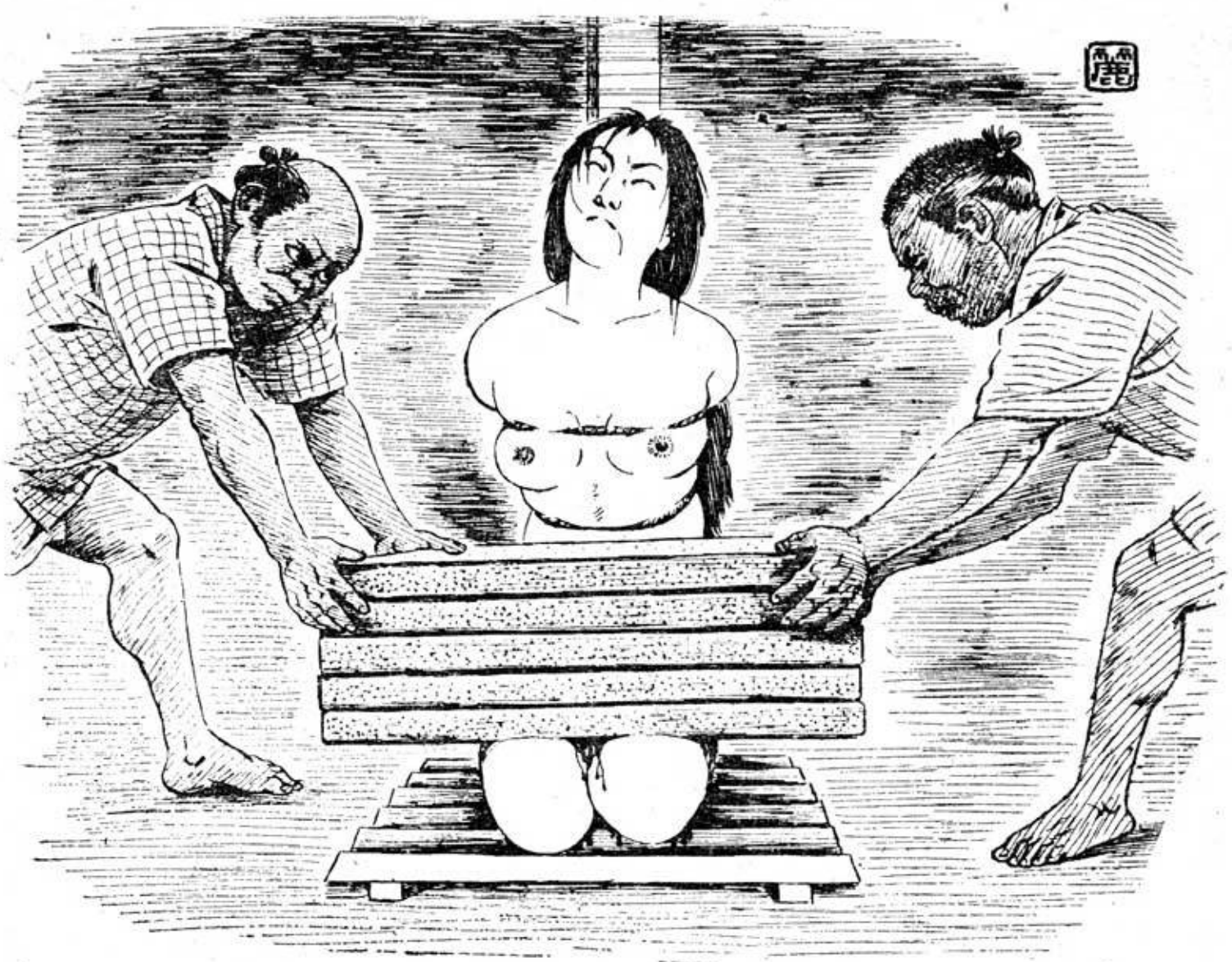
女牢の自害した女は、大奥西丸附の御祐筆でお古五と云う、十八歳の妙齢の女だった。五代将軍綱吉の時代の事である。

当時、男子禁制の御殿女中勤めは、将軍のお手がつかない限り、表向きは生娘と相場がきまっていた。

その男子禁制の大奥内で、お古五は懐胎したのである。御祐筆として、評判の聞え高かった美人のお古五を、誰が妊娠させたのか？——かねて将軍が内々、お目にとめていた女だけに、追及は厳しかったが、頑として口を割らず、可愛さ余って憎さ百倍の例え通り、入牢の身となって、峻烈な拷問を受けたが、それでも相手の名を云わない。

日毎、夜毎の、拷問蔵での責め折檻に、世を果敢なんでの自害であったが、左の文で、お古五への拷問が如何に手厳しかったかが察せられる。

因みにお古五の牢入の際は、すでにたもと



に隠し様もない、妊娠七ケ月の身重であった。

『西本丸御祐筆、中老磯川抱、お古五儀、度々牢問の上、拷問仕候得共、相手の男白状仕らず候に付、此上取調べ方存付も御座候はば申上候様仰せ渡され候。

此段、右お古五儀数度牢問の上、海老責又は拷問両度まで仕り候得共、白状仕らず旁御仕置遁れがたき者に付、其段理害申し聞け右体数度牢問の上、海老責並に拷問迄仕り、私儀も両三度牢問仕り見受け候処死を決し候体にて、白状仕らず、此上何ケ度牢問仕り候共、白状仕候様子には存じ奉らず候。相違なき悪事を白状仕らず候者に御座候間、右の趣を以て御察斗詰の上、御仕置仰せ付けられるべき処、容易ならざる儀に思召され候はば此上白状仕り候か又は死に及び候まで、際限なく牢問仰せ付らるべく候処、一旦拷問仰せ付られ候者を、此後一通りの牢問仕り候ても如何御座あるべく哉に存じ奉られ候間、一応御内慮御伺い之有り候方には御座ある間敷哉に、存じ奉り候　以上

申六月　　中島作左衛門』

文中、牢問いと称するは、牢内の訊問を云うのではなく、牢屋にて執行う故に略して責問の事をこの様に称するのであって、当時の幕府に於ては、笞打、石抱、海老責めの三種の責め方を牢問いと云った。又所謂拷問と称するは釣責めの事を單にその様に唱えるのであって、お古五が、女の身であり乍ら、度々の石抱や海老責め、又釣責めにも屈しなかった事が窺われる。

女牢はその頃、小伝馬町一丁目の西口の揚り屋で、常時の入牢者も少なかったので、東西の分ちもなかった。尤も入牢者の多い時は、遠島部屋（東の口揚り屋）も使用したらしいが、通常は牢内の言葉でいう、この女部屋のみを使用していた。

大奥での不義は、両成敗と定まっていた時

代なので、お古五も愛しい相手の男の名を、最後まで頑強に白状せず拒み通したのであるが、自害する迄の責折檻は、大奥暮しのたおやかな美女にとっては、それこそ筆舌にも尽しがたい苦痛の連続であった事だろう。

女牢にも囚人よりなる牢役人や牢名主がおって、絶対の権力を振っていたから、ツルと称する、密金を贈らなかったお古五は、先ず牢内で虐待せられた。

朝夕両度のモツソウ飯と汁と菜では、勿論お古五の口に通る筈もない。

その上、大奥からの重大犯と銘打ってあるので、牢内の囚禁具である手鎖と足を鉗するホダ（枷）がはめられてある。

牢内は自由かと云うと決してそうではなかった。牢内縄と云う定め縄があった。

揚り屋縄と云うのは両方の小手をゆるく縛るだけであるが、男牢の大牢、二間牢などの囚人は往々後ろ縛りを使用していた。

又、藁縄二筋合せてなった切縄と云うのは牢内の死罪の者に懸けておくものであるし、この切縄の種類にも四通りもある。

揚り屋縄、腰縄、張番縄、それに病気か何かで肘関節の効かなくなった者に使う片手縄の四種である。片手縄に懸る時は、片手を後ろへ廻して縛り、片手は腰に縛りつけた。

縄にしても、格式があって、召捕りの科人の縄は白縄、本役は白細引、その外牢内の縄はすべて紺染めの縄を使った。

扨、入牢者の定め通り日暮れて牢送りになったお古五は、牢改めで裸になった上、牢名主に引継がれた。裸にして衣類改めする役は、乞食の女房であって、これは女牢附人として、一人づつ一ケ月代りに替り合せて、女牢内におる賤しい女である。

牢番が女牢の入口を開けて、新人りを告げると、中に居る乞食女房が出て来て、お古五の、島縮緬の着物、黒繻子の帯を剝ぎとり、素裸にした上、下帯（腰巻のこと）をとってこれをしめさせると、衣類を一つ一つ改め、髪をくずして改めて、そこで牢内へと押しやった。

牢内名主一番役は、おれんと称する顔の醜くい強か者であった。続いて二番役、すみの隠居、ツメ（雪隠）の隠居、穴の隠居、三番役、四番役、五番役と、女狼連が牙をといでいる。

お古五が全裸体で牢内入口の縁頬で乞食女房の改めのあったの眺めていた女狼達は、彼女が身重である事に逸早く気付き、新入り者に科せられる、体刑的な牢習慣を考えて、一様にニヤリとほくそ笑んだ。

誰しも男の経験ありそうな、そうそうたる連中だから、早速、腹の子の赤裸々な顚末を聞きにかかったが、お古五は一言も発しない。業を煮やした女牢名主が、ソレッと合図をすると、待ってましたと許り、お手伝役と称する女共が、お古五を引曳って行って、長い黒髪をぐるぐると牢格子に結びつけ、両手を押えて格子にかけさせ、両足を少し後へ引き下げ、囚衣も下帯も剝ぎとって素裸にむき、お手伝がお古五の首根ッこを押えつけ、他のお手伝はホダのかけられた両足を押えて、臀部に濡れ雑巾を当てて、キメ板の横で続け様に打擲する。激しい痛みでお古五はやがて気を失うが、正気づいても一言も云わない。

膨らんだ腹を、思いきりキメ板で打擲されたり、塩なめをさせられて、ツメに行かせず自分の排泄したものを、モッツウ椀に盛って喰べさせられ、汁代りに自分のものを呑まされたりしたが、悪臭に満ちた牢内では、これらを『御馳走』と称して、特に怨みのある者には、茶飯事の如く糞飯を喰わしたらしい。

飽く迄、男の名を云わず、死ぬ覚悟でいるから、責め問も厳しくなる。

牢内から引き出されても、牢内でも、お古五の身の一時たりと安隠でいる暇はない。

三番役のおきそと云う女等は、要領がいいから、拷問蔵に引き出されてもすぐ戻ってくる。この女は、密通した男と相談ずくで、夫を毒殺し、両人共召捕られて、男の方は既に白状したのに、未だ白をきり通して仲々白状しない強か者である。拷問にかけて（所謂釣責）一打すると、忽ち癪気を起して絶息して

しまう。余儀なく数日を延ばす。鞭打ちにすぐ絶息するコツを工夫しているからだ。まして釣責の際、釣しにかけて打たれた時、加役に小便をひっかけたと云うのが、この女の自慢の種である。

お古五はそんな要領は使えないから、絶え入る様な苦しみを味わっている。

手鎖をはめて白衣姿で拷問蔵へと引出す。二間に二間半、内二坪は座敷で残りは白洲となっている拷問蔵の板塀の際には、拷問の道具の、伊豆石、真木（十露盤木）、太縄、箒尻（拷問杖）などがずらりと並んで、ここに引出された囚人の度胆を抜く様、麗々しく陰惨に置かれてある。

拷問は身分の差別がない。打役はお古五の手鎖を外づし、諸肌をぬがせ、下男と共に、白い柔肌に、実った乳もめり込む程に太縄できつく縛り、左右の後手に縛られた両手は、背後の肩に上るだけあげてしめ上げ、其縄先を前後に引分けて、下男二人が之を強く引っ張って、お古五の身を動かさない様にする。薬しべで結ばれた豊かな髪も、乱れて顔にふりかかり、身重のお古五はこれだけでも息のつまる思いで苦痛がはげしい。

太縄の太さ一寸五分、長さ四尋の苧縄は、お古五の肉体に喰い込んで、肩に思い切り吊り上げられた両腕の感覚は、半ば失なわれている。

打役は容赦なくお古五の肩先を、力任せに拷問杖で打敲く。

長さ二尺、太さ三寸、真竹二本を苧縄で巻き、上を歓世捻りにて巻きつめた拷問杖の打撾は、忽ちにしてお古五の皮肉を破り、ピュッと血がほと走る。打役はその傷口に情容赦もなく、白洲の砂を振りかけて血止めとし、尚も打つ、大抵百五六十回にして、白状しない時はそれ迄とするが、お古五はこの笞打ちにも遂に耐えて、男の名を白状しなかった。

この笞打ちの数日後、尚も白状しないお古五に石抱きが待っていた。

庇受柱の前に十露盤板を据えてお古五の尻をまくりて其の上に坐らせ、後手に縛った儘、その上から体を柱にくくりつけて、一枚の処方十三貫はあろうと云う、伊豆石を順次五枚積んだ。左右の下男が、力をこめてこの石をゆすぶれば、流石にお古五も総身は悉く蒼色に変じて、口や鼻から泡を吹き目を引きつらせてうめき苦しん

だ。胫の柔かい肉は、十露盤板にめりめりと喰い込んで、板をしとど血で染める。遂に彼女は絶息したが尚白状しなかったのである。

釣台にのせられてお古五は牢内に戻ったが十日程と云うものは立つ気力もなく、辛うじて医師の気付薬で元気を取り戻した。

身体がもとに復した頃、三度お古五に恐ろしい拷問が待ち構えていた。

後手に縛られ、両足と頤を密着させて青細引でくくり上げる海老責である。

普通の体の者でも到底耐えられぬ拷問であるが、特にお古五の場合、七ケ月の身重ときているから、腹部の圧迫は想像以上である。

大小便は垂れ流しとなり、全身蒼白となって絶息した。

若い女にも似合わぬ強情さに、加役もホトホト感心し、可哀想に思ったが、何分将軍直々のお声掛りの拷問である。白状するまで、トコトンやれとの上司の命令で、お古五の体がやや元に復した日をまって釣しにかけることにきまった。

後手縛りで、地面より三寸六分、青細引で吊り上げられると、三番役のおきそならずとも、小便がほとばしる。とりわけ十八才のお古五の様な美人が、上半身裸体で吊り下げられていると、自然に打役の手も鈍ってくる。

海老責、釣し責めが再三度に亘ると、流石鬼の様な役人共も参って仕舞った。お古五の命脈は既に風前の灯で、辛うじて気力で生き長らえているだけである。

遂に牢内より連絡して、冒頭に掲げた様な拷問暫時中止願が出されたのである。

将軍の我儘は、併しお古五のこの様な、血を吐く思いの責苦に堪える姿と御存じない。唯々、強情な憎い奴、如何にしてもとの、たっての下知に、牢内の責め役は、しばしお古五の身に同情はしたものの、己むを得ず、手を変えて、うつつつ責めをする事にした。

拷問蔵で、程々に鞭打ちをしては、お古五を眠らせず、うわ言に男の名を呼ばしめる様しむけたのである。

夢うつつでは、お古五といえど、うわ言に相手の名を口にするかも知れない。彼女は死を決して、茲に遂に白状するからと云って、牢内への送り返しを願った。

その夜、最後の力を振り絞り、牢内の寝静った亥の刻（午前零時）、お古五は自ら首を吊って、舌をかみ切って、あえなくも若い蕾を散らしたのである。

序文に書いた報告が、将軍の耳に達した時、彼は烈火の如く怒った。人間を犬猫と同視した将軍の、専制時代の陋弊とも云うべきか、死者に迄鞭たん執念で、命じて、其の首を塩漬けにして、獄門に梟したのである。

單に、好いた同志が、ほんのきっかけから契りを結んだ結果が、かくも恐ろしい、惨忍極まる報復手段となって、お古五の身に振りかかって来たのである。

梟し首が四日目の早暁、張り番の非人が斬殺されて紛失していた。

将軍の近習の某の姿が消えて、沓として行方は分らなかったが、榛名山中に、白骨死体と、首だけの骸骨が転がっているのを発見したのは、既に十幾年も経ってからの事である。

近習の名は分らない。それが風の便りに、お古五とその恋人の死骸であると知った村人が、その地にささやかな比翼塚を建てたそうであるが、今はどうなっているか——

× × ×

絵画 写真 のアイデア募集

本誌の口絵（写真を含めて）並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフオトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略画の添布をお願いします。（困難なときは略画はなくとも差支えありません。）（編集部）

「話の屑籠」

辻村隆

映画界のオエラ方は、頭が古いと云うのかそれとも映倫が怖いのか、責めや、縛りの、我々にとっては、それこそ垂涎ものの個所を惜しげもなくカットして仕舞う。

松竹の「江戸群盗伝」でも、福田公子の吊し責めを大いに期待したが、これは見事カット——。福田晴一をして、大いに嘆かしめたというお話。

必然的縛りなら致し方ないが、筋の運びに縛りがあってもなくてもとなると、殆んどがカットされる。

東映、大映、松竹等にて、我々がスクリーンで見られる縛りシーンは、そのカットを漸くにして免れた何分の一と見て差支えない。

× × ×

その点、新東宝さんは案外割切っている。折角苦心して撮った、ヨキ場面はカットの要なしとて、我々の眼を愉しませてくれる。『女の防波堤』に見られた、物置で私刑の、裏切り女の鞭打ちシーン等、これでもか、〳〵と悲鳴を挙げる位長々と続いた。賢明な観客なら、このシーンが、決して映画にとって必然的シーンでないことをチヤンと御存知であろう。

『風雲天満動乱』の筑紫あけみのハリツケシーン然り——。

所謂、映画の遊びの、縛りが往々、屢々に見られるのは、断然新東宝である。これでも映倫には引っ掛る事もないのだから、大映さん、松竹さんのエラ方は、もチッと広い眼で我々の様な縛りフアンのある事にも活眼して欲しいものである。別段、縛りや責めが、エロに抵触するわけでもないからネ……

× × ×

エロと云えば、松竹の映倫を怖れるさまは全く想像以上のもので、それと云うのも、松竹の「オンボロ人生」で、宮城マリ子が、何気なくサツマイモを持って出るシーンがあったのを、映倫は何の理由からか、カットを命じたらしい。その理由と云うのを聞き訊すと「サツマ芋が、あるものを連想させる」からいけないと云うのであった。

これでは女の子たるもの、大好物のサツマイモも碌々、喰べられない事になりそうである。

鈍感なる筆者はサツマイモを頬張る女の子に、それを連想した吹奏曲を想像した事は未だ曽ってないのであるが……

斯うしてカットされた、責め場や惨虐シーン。又、エロ風景のNGフィルムはどうなって居るのであろうか——。

或るセカンド助監督氏は、さも莫迦〳〵しそうに云った事である。

「なあに、これをつなぎ合せて、エラ方で結構愉しんでいるのさ——」

虚実は詳らかでないが、ありそうにも思える話だ。

サド傾向の、或る撮影所のエラ方は、8ミリブームに便乗して、濡れ場、責め場となると、しきりに片隅から、素知らぬ振りで望遠レンズで、女優のクローズアップシーンを撮っているそうだが、一度そんな機会に、こちらもあやかり度いものである。

× × ×

8ミリブームは今やかくれもない。猫も杓子も迄は行かなくとも、高価なキヤノンVTや、ニコンのSPを買う位なら、一万円台で安く手に入る、ヤシカ8級のものが続々現われて来た。

『撮りますかなどとポン引そっと寄り』

と云った風景が、東京は新宿、旧青線街の歌舞伎町、花園町辺りで、チラホラ見受けられる様になった。

勿論、ヌードの毛の生えた奴であるが、客の求めに応じては、マネー次第で、何でもお好み次第と云うのもある。

一方からしか見えない、反射鏡応用のその道のホテルで、案外アベックの中に、女を責める、男を責める客がある事を私は聞いている。人為的に構成しない、感情のおもむく儘のアブノマルプレイを、潜かに反射鏡の小穴より8ミリカメラに納め得たら、どんなにか人生は愉しかろうに……

× ×

それも関西では、仲々未だしの感である。白浜湯崎へ湯治に行った夜、徒然の儘に、泊っている旅館の前のヌードスタジオへ、誘い込まれるままに這入った。

薄汚ない一杯のみ屋を改造した様なスタジオに、女とは名のみの、五尺たらずのブヨブヨした、おっぱいだけは異常に発達したヌードが、事務的に、立ったり、坐ったり、横を向いたりして、何ポーズかとる。

カメラ撮影が三百円、見るだけなら百円であれば、余り文句も云えないが、こんな女でも、若しやの一抹の望みに托して、責め写真を要求したら、見事蹴られた。その言が振っている。

「ヌードは芸術ですから、せんです」

チエッ、芸術糞喰えだ。あれが芸術と呼ばれる類いであれば、縛りの奇クの一連の作品は、至高の芸術の賜物ではあるまいか——。

× ×

奇クの緊縛写真が、類型的に堕していると知友のKはよく云う。確かにそうも云える点がないでもない。責めは本来昔のものだ。

断髪の眉毛を引いた娘を、ベニヤ板の上で撮っても、これは責めの本質的な感興をもよおさない。謂わば責めの型に過ぎないからだ。

こう書くと、現代に責めはない様に聞えるが、私の云う意味は、単なるヌードやグラマーに縄を巻きつけた、縄が一種のアクセサリーになっているものを排すべきだと云いたいのであって、責めは、何処までもリアリスティックな責めに徹して貰いたいと云う事である。

× × ×

責めに徹したもの——、これは云うは易く、難かしい事であるが、編集の箕田氏は、私の言をいれて、先日、髪の毛の長い大塚啓子嬢をモデルとして、白衣の責折檻を撮る事になった。

U氏の裏の離屋を借り、前日から、はりつけの材木、十露板木の代用品、吊柱等いろいろに準備して、コンテもちやんと書いておいて、いざ撮る段になると、そうそう大塚啓子嬢の体が云うことを聞かない。

そろばん責め、はりつけは、痛い〳〵の連続のうちに、何とか撮り終ったが、逆吊りとなると、始めから拒んでしまって、挺子でも動かない。コンテの五分の一も進行しないう

ち、この日はチヨンとなったが、それでも、まあ初期の目的の、幾分かは達成したと、私は二人が帰った後、撮り終えた35ミリのフイルムをとり出そうとすると、なんとフイルムが全然廻っていない。落着いたつもりでも、矢張りあがっていたのか、完全にフイルムを装填せず、あれでもない、これでもないと、空廻しのフイルムを散々にひねくり廻していたのである。唖然、呆然、落胆……。

箕田氏のは間違なく撮れている筈であるから、何れ誌上で見ても戴こうが、かくて私は三時間と云うもの、独りりきみ、張切り、写らぬカメラを振り廻していたのである。

× × ×

痛い〳〵と云う大塚嬢を撮って、つくづく思い出した事は、旧聞に属するが、川端嬢の事であった。

初期の誌上を賑わしたあの娘は、今にして思えば完全なるマゾであった。

縛られて眼を細め、極端な緊縛に歓喜の呻きを洩らし、逆吊りに、吊し責に、ローソク責めに、カッと血の上った頬を愈々紅潮させて、肉に喰い入る縄の強さにも、むしろ喜んでいる様に思えた。一日中でも縛られていたい娘であった。人間は妙なもので、女に緊縛の抵抗がなくなると、反って飽気なく、やるだけやって、いつしかその儘になった。

読者のU・I氏と異常恋愛が実を結んで、結婚した事は、古い限定された読者の方の中には、或いは御存知の方もあろうかと思うが結婚後一年許りして、箕田氏の許へ送られてきた、プローニー版の密着の、数葉のベッド上での緊縛写真は、彼女が結婚後も、U・I氏と、緊縛プレイの華を咲かしている事が想像（確認？）された。

手紙に判っきり、縛られたいと書いてあったそうであるが、人妻となった川端君に、箕田氏は以前の様な情熱は、感じなかったらしく、その儘になっていた。

ホンの一ケ月許り前、当のU・I氏から、彼女と故あって別れたとの便りに接したと、箕田氏は、無表情で語っていたが、とするとマゾヒスト川端嬢は、今も次から次へと、マゾの遍歴を続けているのではなかろうか。

数多く、彼女を身近く縛ってきた私だけにあの娘が毒牙にかからねばよいがと測隠の情にかられる事切なるものがある。

× ×

毒牙にかかった女性で、香港に売られたバーの女給の事が、今年の二月頃新聞誌上をにぎわせた。今、私の手許にある二月二十四日附の新聞によると、

女は、呉市の青木節子さん（二七）で、正月二十八日の夜、勤め先の神戸三宮のバーで酔っ払い、元町附近をうろついていた処を、オランダ人の三名の船員に誘われ、神戸第四突堤に停泊中の、フランス船ベトナム号に引づり込まれた。

気がついた時は東支那海の洋上——。

船室は一般の部屋から離れている上、鍵がかけられてある。

（筆者想定——。多分節子さんは、両手、両足を縛られ、猿轡を嵌められ、転がされていた事であろう——）

二月一日、船が香港に着く——。

節子さんは逃げ出そうとしたが監視の眼が強い。

（筆者想定——。逃げ様として、荒くれの外人船員に取囲まれ、鞭打ちを受け、或いは両手を縛られて吊り下げられていたかも知れない。売り飛ばすつもりの女だから、外人共は交互に、節子さんに凌辱の限りを尽したのもこの間であろう）

くた〳〵に痛められ、責められた節子さんは、船員から、四十才位の中国女に売飛ばされ、香港市北角、英皇道三六一五のバー、〝アリゾナ〟で〝ジユーク〟と云う名で強制的に働らかされ、客をとらされた。

（筆者想定——、このバーは恐らく売春の白線バーであろう。働く間にも節子さんは幾度か脱走を試み、その都度、恐ろしいリンチと激しい責め折檻が容赦なく彼女を襲ったであろう。香港バー特有の、看々に曝され、秘密バーの強制売春は、云う事をきかぬと、素ッ

裸にして、足鎖を嵌め、秘密クラブ会員の、弄みものに供したり、所謂シロクロや、イヌシロの相手を勤めさすそうである。そうした事があり得たと思われるのは、その次の記事にも、歴々と窺える）

日本人だと云う物珍らしさの為、彼女に新たな誘かいの手が伸び、あわや魔くつへ転売されかけたが、その寸前、仲間割れとなった業者の密告で、香港水上警察に引取られ、大阪商船の銀光丸で強制送還されて、やっと九死に一生を得た。

節子さんは、

「もう酒は絶対やめました。業者の密告がなかったら……と思うとゾッとします」

と恐怖の香港行を語っていた。（大阪新聞より）（筆者想定――、帰還する迄の間、彼女が如何に激しい屈辱と暴行と責めを受けたかは、彼女の告白からもチラリと洩れている。業者とは如何なる業者？、転売されかけた魔くつの正体？、凡そ想像がつこうと云うものだ）

恐怖の香港行を地で行った、青木節子さんに、若し文筆の才あらば、書きますわよの時流にのって、その恐怖の一ページを書いて貰えたら、好事者にとっては一篇の好個の読物ともなり得たろうに、――神戸の女性のよき教訓ともなり得たろうに、全く惜しむらくではある。

×　×

恐怖の香港行程でなくとも、恐怖の〇〇行と云うのが、日本に現存している。

売春禁止法によって、乾上った女達を好餌で釣る、人買人やポン引共だ。

月に三、四万円も稼いだ女が、どうして一万円にも足らぬ月給で暮す事が出来よう。

そこが悪魔の附ケ目で、相当数が温泉芸者（何をする芸者か筆者は知らない）に流れて行く。ヒモが網を張り、人肉バーが出現し、逃げ口のあるヌードスタジオが急造され、コールガールは殖えて行く。

夜遅く、流しのタクシーに乗れば、運ちゃんは心得て、早速、連絡のついたコールガールの巣（関西でボンヤと謂う）を次から次へと訪問する。堀江――日本橋――霞町――天下茶屋――。コールガールの巣は、こうして大阪中、隈なく抜け目なく張りめぐらされているのだ。猟奇を好むムキには、ブラザーガール（こいつはマンボズボン、角刈り、俺、てめえと男をつくり。パンツ迄男物を履いている。）がシスターボーイ（既に芸者姿の裾を引くオンナ？　が現われたからオソロシイ）を相手に喋々喃々し、金次第では、責めの一手も開陳しつつある。

×　×

恐ろしい時代と云えば、白昼レビューガールが衆人環視のセリ上げに消えて、瞬間、胴体真二つの機械の殺人が、宝塚で起った。

香月弘美（月組）が、死ぬにもよりけりでこうした怖ろしい惨殺死体となった事は、装具のスチールベルトが、原因の最たるものであるが、考え様によっては、これも一種の束縛具ではあるまいか――。

〝レビュー殺人事件〟と片附けるは余りに死者への冒瀆であるが、消えてなくなれと、不吉を盛った〝トランプの国〟の場面は、女護ケ島の宝塚には、余りにもふさわしくない作者のアブノーマルな産物ではなかったろうか――。

〝トランプの国〟が高木史郎の意図する、科学の進歩を諷刺する重要な場面であるならばその科学の進歩によって、哀れないけにえとなった、香月嬢は死んでも死にきれないであろう。

それでも私は行く――。ショックを受けて休演していた同僚の、日夏有里、松島三那子の二人は、胴体切断を覚悟で、退団もせずセリ乗りを続けて行くのだから、その意気たるや、到底男の及ばざるところである――。

×　×

だ。考えればオソロシイ時代になりつつあると云える。

×　×

×

恐ろしい時代と云えば、白昼レビューガールが衆人環視のセリ上げに消えて、瞬間、胴体真二つの機械の殺人が、宝塚で起った。

香月弘美（月組）が、死ぬにもよりけりでこうした怖ろしい惨殺死体となった事は、装具のスチールベルトが、原因の最たるものであるが、考え様によっては、これも一種の束縛具ではあるまいか――。

〝レビュー殺人事件〟と片附けるは余りに死者への冒瀆であるが、消えてなくなれと、不吉を盛った〝トランプの国〟の場面は、女護ケ島の宝塚には、余りにもふさわしくない作者のアブノーマルな産物ではなかったろうか――。

〝トランプの国〟が高木史郎の意図する、科学の進歩を諷刺する重要な場面であるならばその科学の進歩によって、哀れないけにえとなった、香月嬢は死んでも死にきれないであろう。

それでも私は行く――。ショックを受けて休演していた同僚の、日夏有里、松島三那子の二人は、胴体切断を覚悟で、退団もせずセリ乗りを続けて行くのだから、その意気たるや、到底男の及ばざるところである――。

×　×

その宝塚を受けてパスし乍ら、家庭の事情で行けなくなったモデル嬢、村井知可子の事を最後に一寸報告しよう。

既に〝腰元折檻〟のグラビアで紹介の通りかつらや、腰元の衣裳まで一揃い整えて、彼女に、美女折檻の構図を求めたのであるが、之は残念乍ら、失敗と云わねばならない。

村井嬢が、カリプソスタイルで、全然着物の着付すら知らなかったこと。顔容が古風でない為、水に油の如き洋妾的腰元が出来上った事。不馴れな日本式化粧が、緊縛の途中崩れて、化粧直しはしたが何とも奇妙な様相に一変したこと。一読者は彼女のこの写真を見て、男の変装だと云ってがえんじない。何とも情ない事である。相当の費用を使っての撮影だっただけに、箕田氏もカクンと来て、改めてもう一度とは申されない。これが成功しておれば、奇クに劃期的な責め写真が載るのであるが、何時かは、純日本式のモデルを駆使して、今ひとたび、昔風の美女の責めを撮らして貰いたいと考えている。何れ折を見て、新らしい近頃のモデルの、素顔の断片を紹介したいとは思っているが、筆の重い私の事だから、何時の事かわからない。

黒田史朗氏に寄せる

原　忠正

本誌五月号の貴文「マゾヒズムへのいざない」の中に、私に多少関連した記述があるので、ここに弁明旁々、御手紙を誌上を借りて差上げる次第であります。

第一に『マゾヒストが夢想家であり、その余りに男性化した女性をドミナと見勝ちであるが、それは屢々ドミナの本来内包する「女らしさ」を欠いた女性までもマゾヒスムの対象と見る事が多いのではないか』として、イルゼ・コッホが美女でない云々と主張して居られる点について、私は次の様に貴兄に対抗致します。

まず、マゾヒストが夢想家であるということ。これは全くマゾヒストの通有性とも云い得る特性でありますが、その起因は二つに大別され、一つは生来、夢想家である場合と欲望の実際的満足が得られぬが故にのみ夢想する習慣が、後天的についてしまった場合とがあるのではないでしょうか。

前者の場合、彼は絵画、文章等によって、その実行為の有無に拘らず常に満足感を充足し、実行為に於ても甚しく偏好を有するものであります。従って、本誌等へ投稿する人々の中の多くが、この類別に属すると、簡単に云えば云えるのではないでしょうか。後者の場合、絵画、文章は特に春画的要素を求められ、実行為の存在の度合が少く且、又、投稿というよりは、投稿家として本誌に現れる場合が多いと思われます。

貴君の云う真のマゾヒストとは、この前者を指すものと思われます。その意味で、私は貴意に同感であります。

次に男性化した女性をドミナと同一視するということは、少くともマゾヒスティークな心の持主なら絶対にありますまい。中性的な女性を引例した事は、私も沼氏も一度もない筈です。女性の中の女性が、特定の環境、特定の時期に、特定の対象に対して、男性的な態度を採ることが、マゾヒストにとって興味があるのであります。ここに云う男性的とは勇気、果敢、征服的という意味であって、決して中性的の意味ではありません。むしろマゾヒストにとって中性的女性は、中性的男性に対してより嫌悪

感を以て迎えられるのではありますまいか。

従って、貴文にあるイルゼ・コッホについての記述は、根本的に誤った引用と思われます。貴兄は、コッホの写真といわれるが、彼女が一九四〇年前後に何才であったか。写真がニュールンベルグの裁判の前後に撮影されたものではないか。裁判記録中にも確か、在住当時と現在（裁判中）との被告の容姿は全く異るという意味の記載が証言として出てくる筈ではないか。の諸点に留意して下さい。更に西欧婦人が、多く三十才を境として甚だしく容姿の変化を来たすこと。戦後、二分されたドイツの生活状況を併せ考えるとき、又コッホが、ナチス要人連と面識があり且つ、情婦的存在であったこと等を考えると、むしろコッホは当時、美しかったと考える方が当っていましょう。特にイルゼ・コッホに限らず、エリザベト・マルシヤル、ドロテア・ビンツイルマ・ギイゼ等のサディスティックな収容所職員は、すべて十人並以上の容色を持っていることに注意して下さい。特にイルマ・ギイゼなどは美女に属するといってよい程、美しい女であります。

（人工地獄、所載の写真参照）

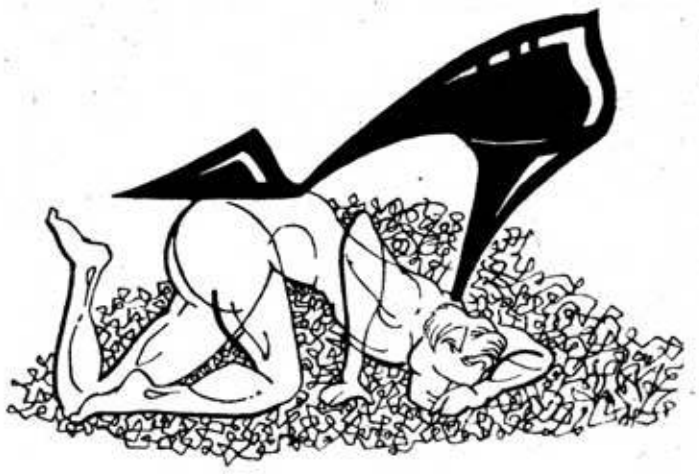
「夜と霧」の収容所の生活が、マゾヒストにとって、羨望の的であるとは私も思いません。そこには忌わしい幼児虐殺や殺人狂の事例が山積しているからであります。ただ私の強調しているのは、サディークな心理が特定の環境の下で、どこまで発揚されたかサディスティンが厳存しているか否か、という点での讃美であります。勿論、彼女等の収容所での全行為が、即ちマゾヒストの憧れであるとは申しません。猶、当然の事乍らサディスティンとは、残虐行為によって淫慾を発動、又は増加する女性を称するのであって、只、残虐な女性——例えば、まま子いじめの如き——がサディスティンであると思われては困るのです。

以上の如く、貴兄のいわれる「女らしさ」を度外視するということは決してありませんし、中性的と男性的との根本的相違も留意している心算でありますので、収容所関係の記事についての御叱正は、遂に的外れの観を呈するに至りました。何卒、悪しからず。但し、貴兄には御指摘を深謝致します。

又、「毛皮のヴィナス」については、沼氏と麻生氏の論争が、お互いに中心を違えている点を指摘します。以前のズボンとスラックスの論争の時も、沼氏は外着用のズボンとスラックスの総称の下に、勝手に認識して論じ争ったため結論が出ずじまいでしたが、今回も沼氏は只、ドミナは対マゾヒストに対して、こういう言葉を用いた方がマゾヒストが満足する率が多いという論点であるに対し、麻生氏は、むしろ言葉遣いより内容の総体を新訳がよく伝えているという点で主張しているので、論争にならないのではないですか。私の立場は、むしろ佐藤春夫氏が名前をかしたにせよ、一流の文学者が一流の出版社から、マゾッホの作品を、しかも文芸雑誌に全訳して出したという事実、それを敢えて奇としない現在の世相を主として論じ、全訳が一般にマゾッホを、とにかく読み易く日本語で提供したということを、賛じているのであります。三者、夫々立場が異なるのですが、誤訳はあっても、異訳が発見されても、治州訳と春夫訳の二篇を並べたときに、春夫訳が絶対的に分があることは明白であります。

語学は文学ではなく、学問でさえないという人がいると、私は確か以前にも書いたのでしたが、何にせよ、陣容の少いマゾヒズムの本陣に貴兄の如き有能の士を迎えることは、心強い限りであります。今後共、相互に論争の場を持って、正しい認識により深い理解を持ちたいと思います。

妄言多謝



黒い霧の中で

マゾヒズムへのいざない十回記念

（冒頭に）　予告しておきましたように、此の回は従来と趣を異にし創作を発表させていただきます。

黒田史朗

ぼくは彼の様子にすくなからず驚いた。彼の様子には、やっぱり噂通りのあるなにものかの気配がうかがいみられた。西独留学から帰朝して四ケ月、彼は一度もぼくを訪れない。ぼくはそのことに大きな不満を持ったが、しかしすべてを好意的に解釈して、いずれかの日に彼が来訪することを信じてうたがわなかった。まして彼の人伝てにきく発狂したらしい、といったような噂は、一笑にふすだけですこしも気がかりにはならなかった。それほどぼくは彼を信じ彼の才能に傾倒していた。

大袈裟に云って、彼はぼくにとって一つの希望だった。東大法学部に席を同じうした間柄だと言ってしまえばそれまでだが、彼のずぬけた智能を一目で看破したのはまずぼくだった。在学期間中、ぼくが彼とあまり口をきかなかったのは、何も彼をうとんじたというような理由によるのでなく、むしろぼくの彼に対する畏敬の情がしからしめたのではないかと思うのである。彼の才走った風貌の端正さもさることながら、その隆々たる筋肉質の、よく磨きあげられたあかがねの像の如くに均斉のとれたその肉体を見たものは、ぼくでなくっても誰でもがひとしく嘆声を放つことだろう。彼は秀才であると同時に最も洗練されたスポーツマンであった。

卒業後、彼は西ドイツに留学した。その折ぼくは友人代表として心からの祝辞を彼に述べた。彼の前途はまさに洋々としてひらけていた。

彼からの手紙は常に活気に溢れていた。すこしの迷いも悩みも彼の辞書にあっては、なきが如くにみえた。やがて彼からの目下恋愛中なりの誇らしげな手紙を手にしたとき、ぼくはその幸福を羨望するより、むしろ彼を恋人に選定したクララ・フォン・コトヴィッツ嬢のその選定眼のたしかさに拍手を送って賛同したものだった。

彼が帰国した時、誰もそれを知らなかった。

ぼくでさえもが何の知らせもうけなかった。彼は唯一人、こっそりと帰国した。予定の留学期間三年を待たずして彼は早々に帰ってきた。何のためかぼくは知らない。ぼくは心のはやるのを抑えながら、彼を自宅に訪問するのを遠慮した。何かこれには理由がある、單身帰国の状態からいって、クララ嬢との恋愛に破綻をきたしたんではないかという一般友人の見解には同意出来なかったが、その外の何等かの理由がそこにあるというぼくの臆測はぼく一人の胸にしまったままでいたのである。ということは、決して彼に対する信頼の情が動揺することではない。四ケ月の間ぼくは彼を待ちつづけた。その間中、ずっとぼくは心の中で彼を前以上に畏敬し続けていた。遂にある日、ぼくは自分を抑えることが出来なかった。遂に意を決して彼を自宅に訪問した。

部屋に通されて暫く待つ間、ぼくは妙に不安だった。その不安の根因がどこにあるのかぼくは考える余裕を失っていた。

不図、正面の壁に目をやったとき、ぼくの注意はしばらくの間そこに奪われた。がっしりとした木枠に守られるようにして、一人の女性の像がぼくを見結めていたのである。ぼくは思わずその場にいすくんでしまうほどの恐怖感をも織りまぜたようなある種の感動をおぼえた。彼女の瞳のあの蠱惑的な力強さの正体は何なのか。灰褐色にくすんだ背景の光沢の中にとけこんでゆく彼女の金髪のうねりのあの神秘さの正体は何なのか。どちらかといえば、小さめにうかがえる彼女の顔の輪郭が、しかもある種の烈しさで訴えようとするそのものの正体は何なのか。

右手の扉がひらいて彼が這入ってきた。ぼくは彼との久方ぶりの対面のその瞬間、ただ黙っていた。これは一体なんとしたことだろう。ぼくの前には、すっかり面変りした如くにみえる彼、瀬部麟一郎が坐っていた。彼の表情には病み果てた者のみが持つ、あの物憂い、それでいて投げやりな沈鬱さがあった。

「せべ君、一体どうしたっていうんだ」

ぼくは遂に我慢がしきれなくなって云ったのだった。麟一郎は顔をあげてぼくを見た。おだやかな微笑が彼の表情をよぎった。ぼくはぼくの中にも彼のその微笑がよぎるのをかんじた。ぼくは急に愉快になった。彼とぼくの間にのみ感じあえるあの愉快さが復活したのだ。

「申し訳ない。……でも真実、ぼくは君と会いたかった」

麟一郎のそういう口調には、しかし以前のようなあの野放図に明るい処はなかった。

ぼくは何からどのように切りだそうかとしばらく迷った末に、視線が自然に壁の方にいくのを止めることが出来なかった。

「そうだ。云いおくれるところだった」

麟一郎は立上り、二足、三足歩いてその絵の下に立った。

「クララ・フオン・コトヴィッツ嬢、現在では瀬部麟一郎夫人。……」

「えっ、もう結婚したのか」

ぼくはそのことの手まわしのよさについてよりも、一層何が何やらわけが分らないと思った。麟一郎の早急な帰朝と、その前後の事情の複雑さとその他一切の原因を、若しや失恋では、とカンぐっていたので。

「なんにも知らせないで悪かった。彼女は近いうちにこちらへくるんだけど……いや、いや、そうむつかしくとってくれるな。なんにも知らせなかったとはいうものの、別段、悪気があったわけじやないんだ」

彼はそう云って大きく笑った。

「そうだ。君にもすぐ彼女と会って貰おう。彼女こそ、まさしく選り抜きのドイツ美人なんだから……」

瀬部麟一郎のそういう表情には、十二分の幸福感が満ち溢れ、ぼくの嫉妬心を大いにさそった。しかし、それもほんの短い時間の間でしかなかった。席に戻って再びぼくと対坐した彼の様子をぼくはどのように説明したらよいだろう。さながら夜のしじまをおおう黒

い霧の中をさまようが如き、自失せる男の表情がそこにあった。

「君！」

麟一郎は不意にそう呼びかけた。

「なんだ」

ぼくはいつものとおりの気楽な応え方をしたつもりだったが、胸元に不思議な緊張を覚えたので、声が喉元で不様につっかえたのである。

「君は夢を信じるか」

麟一郎のその問い方があまりに唐突で、ぼくはその意味がのみこめず、だまったままで相手の顔を見結めるばかりだった。すると何を思ったのか、麟一郎はぐっと一膝乗り出すようにして声をひそめた。しかし、その声には思い結めた者のみがもつ、あの真剣な熱っぽさがあった。

「頼む、ぼくのこれから語ることをきいてくれ。ぼくは今迄誰にもこのことは云わなかった。いや、云おうたって、とても言えるような事柄じゃない。ぼくはひどく苦しいんだ。とても馬鹿げたことがらだけに、ぼくは苦しい。今のぼくは君だけが頼りだ。だからきいてくれ。そして、このことは絶対に誰にもしやべらないと約束してくれ」

彼は一気にしやべった。ぼくは緊張の末、ただ曖昧に笑った。すると彼は又せっかちに卓上のぼくの手を捕えてゆすった。

「頼むから誰にも、どんなに親しい奴にだってこのことはしやべらないでくれ。俺とそう固く約束をしてくれ」

ぼくは追い結められた兎のように首をたてに振ってみせた。その儘かな所作が彼をやっと落着かせた。彼は卓上のコップの水を一息に干しそれから次のような奇怪な話をしたのだった。俺はただ夢を見たのだ。ながい夢だ。クララと一緒に目をさました。それだけのことだ。それだけのことでもう俺はまともに彼女の顔を見ることが出来なくなった。眠ってる間にみたその夢の現実以上の迫真力が俺を一変させたんだ。

麟一郎はまず始めにそう前置きした。それからその夢の内容について、ことこまかに語ってくれた。それは誠に驚くべき夢だった。遠い遠い二千年も未来についての夢だった。八つの太陽をすべる宇宙帝国イースに麟一郎とクララは生きたのだ。あんなにも優しく忠実であった筈のクララが麟一郎の絶対的主人として彼の上に君臨したのだ。彼は彼女の靴の下にふまえられ、彼女のを全身に浴びせられた。屈辱感に身もだえする彼の顔を、あのいとしいクララが、何の動揺の色をみせることなく、冷然と鞭打った。既に彼は彼女の前に人間ではなく、ただ單にモノとしての意味しか与えられていなかった。

（夢の内容についての詳細ないきさつは、ここでは必要ではなかろう。一切は沼氏の小説家蓄人ヤプーに委曲がつくされている）

ぼくはおそろしいほどの衝撃をうけて家に戻った。出迎えに出てきた妻の笑顔にもこたえず室にとじこもった。

すくなくとも、彼に会う迄のぼくは彼の奇怪な変貌の原因が気がかりで、いや、それよりも彼の苦痛を見るにしのびず、すべての問題の一切を彼、麟一郎の身の上においていたのだ。ところが今では問題はぼく自身のものとなった。ぼくは室の中にぼく自身と対坐していた。話をきいたのはぼくだ。そのことを経験したのはぼくだ。今迄世の中の酸いも甘いもかみわけたといったようにしてきたぼくの顔が、みじめにも崩れ去っていった。心の内部にひそむ、憎悪と復讐、その全容をエドモンド・ダンテスがぼくに示してくれた。ぼくは絢爛たる心の、冷徹なるパッシヨンの一つの型をそれで学んだ。

しかし、ヤプーを考えることが、果して人間に可能であろうか。これは実に大変なことではないのか。ぼくはそれを考える能力も資格もない。したがって話し了えた麟一郎の、あの半ば安堵の状態に、遂に一言の助言らしき言葉をもなし得ずにおわった。

「あの、瀬部さんがお見えですけど」

妻の声にぼくはふっと我にかえった気持で

立上った。

「なんだ。瀬部君か。それならすぐ上ってくりやいいのに」

ぼくは妻に云ったのか自分に云ったのか、不責任な様子で呟いた。

「どうしたんだ。そんなところにつったってて。とにかく這入ってこいよ」

室の入口に立往生の麟一郎をぼくは促したが、彼はそのままの位置で

「すぐ帰るからいいんだ。……実は君が帰ったあと、すぐ電報が来たんで、それを知らせに……いや、なに、妻が明後日羽田に着くんだ。クララがくるんだ」

麟一郎はそれだけ云い置くと、何やら意味の判じかねる微笑を残して、ぼくが引き留めるのを振り切るようにして帰っていった。

「あら、もうお帰りになったの」

お茶をいれてきた妻が怪訝そうに眉根をくもらせてぼくの顔を見たが、ぼくにもそのことの説明がなんにも出来なかった。ぼくは妻のその切れながの瞳を見据えたとき、不図幸福感がぼくの体内に湧き上るのを感じた。とっさに妻の体を抱きよせ、その唇を吸った。彼女の頬に血の気がさし、ぼくの腕の中で弱いあがきを示した。

明後日、羽田へはぼくも行く。クララ・フォン・コトヴィッツ嬢、いや、瀬部麟一郎夫人の肖像の、あの強烈な牽引力がぼくを既にしっかりと捕えていた。

羽田の空港は大勢の人でごったがえしていた。

「ずいぶんの人だな」

ぼくの呟きに

「そうだな。越冬隊の連中が帰ってくるんだからな」

麟一郎は明るい調子でそう応え、折からの春先の季節風の強まりを避けるように、合オーバーの襟をかき合わせた。麟一郎の後にはぼくの妻が、白地に細い黒縞の茶羽織を着て立っているのが印象的に眺められた。ぼくは妻を同伴した、麟一郎夫人を迎えるのだ。

麟一郎とぼくの妻とはまえまえからの見知り越しである。麟一郎が家庭教師として面倒をみたお嬢さんが、今のぼくの妻である。彼はいきなり話をきり出し、遮二無二彼女をぼくに押しつけそして間もなくドイツに留学したのだった。ぼくはぼくなりに彼のそのおせっかいを有難く受けたわけなので、今度こそ妻とともども瀬部夫人を心から歓迎し、多少なりとの恩返しをするつもりだったのだ。

ぼくはしかしこの時、彼のあの話をきいた後だったのだ。あろうことか、ヤプーの話をである。それはぼくの内部でさまざまな形象に細分化し、心の奥の無限の拡がりへ連鎖反応をおこしながら拡散してゆく。麟一郎のこの日の明るさに引き変え。今度はぼくが沈鬱になる番だった。

やがて到着の時刻が近づいた。機影が雲間に現われたかとみる間に、それは未来の何ものかを象徴するようにぐんぐんと近づいた。

万才！　万才！　の声がどよめく。フラッシュがたかれる。子供連れの隊員夫人らしい人達の無言の姿がそれらの中にあって空を仰いでいた。

旋回を了えた機は、大きく羽ばたきをしながら目の前の滑走路に辷りこんできた。人々は係員の制止を無視し、一斉に走り出した。ぼくらだけが後にのこっていた。タラップの上段で手をふり、報道陣にこたえる陽灼けしたあの男が隊長なんだな。

最後に彼女が降りてきた。そのとき、人々の騒ぎは後方の建物の方へ移動していたのでよそ目にはなんにも分らなかったであろうが……しかし、今日、最も歓迎さるべき資格を持つのはおそらく彼女ではなかったのか。クララは軽快な服装で、何の気どりも持ってなかった。黒のブラウスに黒のスラックス、その長身の肩にふりそそぐ金色の髪は、そうだ、まさしくあの肖像の人に間ちがいはなかった。

麟一郎に続いてぼくらも小走りによっていった。

「リン」

一声叫ぶと、クララはかけおりながら、ひとっとびに麟一郎の両腕の中へとびこんだ。ぼくの後で妻がほほえむのを感じた。夫と妻との涙ぐましい対面の情景にである。しかしぼくは既にあの話をきいた後だったのだ。単なる珍夢としてそれをかたづけるにはあまりにも生々しい話なのだ。おそらく、クララはまだなんにも知らぬのだろうが。

ぼくは麟一郎の苦しみに何の助言をもなし得ないので、というより、クララと会うのを怖れて、と言った方が正直かもしれない。とにかくしばらくの間彼の家を訪問するのを避けていた。彼からはその後の連絡はない。ぼくは何時の間にかぼくの本業である新らしい機械をドイツから購入するについての予備折衝やそれらに関するさまざまな研究に没頭するようになり、日夜その筋の要人や学者達の門を叩いて歩き、ぼく自身の家をかえりみる暇もない位に忙しいおもいだった。いつもは口やかましい妻も、この頃ではあまりそのことに干渉しない。それが有難くもあり半ば物足りぬ感じもした。ただ一度、半分冗談めいた口調で、あなたが仕事仕事でわたしをうっちやっておくなら、そうね、わたしだって一人前の女性、浮気するかもしれなくってよと言ったことがある位、別に気にとめるようなことではなかったけれど……女は競争相手があらわれると、過度にそれを意識する本能があるのか、妻はしきりにクララのことについてきたがった。ぼくはその度に一種の恐怖を覚え、口をつぐんでだまりこくるのだが、妻はそうした私に興味があるらしく、あなたは、クララさんが、好きなんでしょとからかい半分に言うのだった。見当ちがいもはなはだしい、とぼくは心の内で反駁するばかりで、適当な言葉を探しあてることが出来なかった。

或る日、不図思いたって彼を訪ねた。クララが玄関にぼくを迎えた。一別以来の彼女、彼女はより美しく派手やかだった。彼女の所作は、テキパキとして律動的で、しかも親切だった。

「まあ、あなたでしたの、さあ、どうぞお上りになって」

ぼくは靴を脱ぎながら

「麟一郎君は」

と訊くと

「お宅へうかがいませんでした?」

と逆に訊かれた。ぼくはすっかり面くらって

「きませんよ」

とぶっくさ返事をして

「それじや、又来てみましよう」

脱ぎかけの靴に再び足を入れはじめた。するとクララの表情から微笑が消え、如何にも思案深げに何かを考え詰める様子が見え、やがて彼女は真剣な面持ちでぼくを見詰めて言うのだった。

「ちようどいい機会です。是非あなたにお話したいことがありますので、宜しかったらお上りになって下さい。お願いします」

あの時と同じように、不思議な彼女のあの肖像がぼくを見下していた。ぼくは、不覚にも、一種の恐怖感から彼女の話をきくのを避けようとした。それはなんのいわれもなき恐怖感ではあったが、重苦しい実感がこもっていた。クララはぼくを離そうとしない。

「わたしは、これ以上、自己の祕密にたえることが出来ないんです。是非きいて下さい。ただ、だまってきいて下さい。ただ、だまってきいて下さるだけでわたしは救われます。……」

クララはしばらくの間言いよどむように口を噤んだが、やがて決然たる面持ちで言った。

「わたしはリンを愛しています。本当に愛しています。しかし、それでいてわたしは、…

……いや、よしましょう。それよりあなたは、夢というものをお信じになりますか」

クララの瞳はけわしく光った。ぼくは心の中で思わず叫んだのだ。ぼくをそんなに強く見つめないで下さい。ぼくはその夢のことについてよく承知しているのです。あなたはヤプーの夢を見られたんでしょう。ぼくはよく知っています。

クララの一挙手一投足の、あの侵しがたいプラウドが、ぼくに予言する。ぼくの予感は見事に的中した。しかし、こんな不思議なことがあってよいものだろうか。偶然の一致と言いきるには、あまりにも符節の合いすぎるクララの告白に、ぼくは慄然としたのだ。

「ぼくには、助言をしてさし上げるだけの資格はありません。あなたのごらんになったヤプーの夢が、如何にその内容において不思議であろうと、夢であることに変りはありません。早くお忘れになることです。麟一郎君はあなたにとってどうしてヤプーでなんかありましょう。立派な夫です。ぼくだって、ぼくの妻だって、彼を心から尊敬しています」

ぼくは、偶然にも同じ妄想にとりつかれ、同じ妄想に苦しみ悩む夫と妻と、本来、誰よりも幸福であるべき友人達をば、一刻も早くその悪夢から救いたかったのだ。麟一郎もクララもどちらもがどうかしてるんだ。

「神経病の一種かもしれませんよ。リンがヤプーだなんて。とんでもないことです。神経がすこし疲れてらっしゃる。ただそれだけです」

「そうかもしれません。わたし自身、どこか変なんですわ」

クララは力無く立ち上った。ぼくはそのとき思わず叫んでしまったのだ。

「クララさん。待って下さい」

ぼくは一旦椅子から腰をうかし、それから彼女の足元に坐りこんだ。

「ヤプーであるのは、麟一郎君ではありません。ぼくです。このぼくです」

ぼくは自分が今何をやり、何をやろうとしているのかなんにも分ってはいなかった。ぼくのその狂態を、ただあきれたようにクララは立ったままの姿勢で見下すばかりだった。

ぼくは今、何を云い何を弁明しようとするのか、この不可思議な慾求の源泉はしかも奈辺にあるのかぼくには一切あずかりしらぬことばかだ。ただのめりこむような心の傾斜が心地よいリズム感でぼくをいざなうのだ。ぼくは不覚にも涙ぐんだ。点滴が一つ、二つと床にしたたるのをぼくはぼんやりと見ていた。視線の外れにクララのスリッパの尖が認められた。血液が一瞬に凝結するような瞬間だった。ぼくはただそうして審判の下るのを待った。クララは目を見開き、その場に立ち竦んだまま、ぼくを見下していた。彼女はぼくの涙のしたたりを認めた。あらたな共鳴をそれに寄せた訳でもない。しかし体が小刻みにふるえ心臓の筋肉が痙攣をおこした。彼女はそこに不思議なタイミングの一致を知覚した。自己の内部の知らなかった部分を今こそ発見した。ためらいと羞恥が、かえって彼女の態度をそのように決定する油の役目を果した。

「あなたがヤプーですって？」

クララの声は銀鈴のようにぼくの頭の上でふるえた。ぼくはなんにも答えることが出来なかった。思い切って顔を前につき出した。クララのスリッパの先が、かすかにぼくの頬にふれた。ぼくはカッと全身が燃えるのを感じた。彼女は足をひかない。彼女はぼくの頬が爪先にふれるのを避けようとしない。ぼくはこの一瞬を決して逃してはならぬと感じて今度は思いきり頬をスリッパに押しつけた。彼女の足の体温のためか、ぼくの頬のホテリの為なのか、その箇所がジットリと汗ばんだ。

「分りました。あなたのおっしゃること、全て分りました。……とにかく一先ずそこをどいて下さい」

ぼくは床にうつぶしたまま目をとじていたので、姿は見えずクララの声だけをきいていた。

「とにかく、一先ず体をおこしなさい」

クララは、足にまといついたまま、離れよ

うとしないぼくの両手をふりほどきにかかった。しかし、それは厄介な仕事だった。で、彼女は、幾分乱暴にぼくを押しのけようとして、足を後にひいた。そのはずみに、持ち上げたスリッパの裏が、ぼくの額をしたたかにこすった。クララは少し驚いたようだった。しかし別にそのことを釈明しようとはしなかった。それどころか、一方の脱げたスリッパを口にくわえて差出すぼくの親切を、実に無造作に受け、急に大きな声で吹き出しながら

「ごめんなさい。でも、なんだかおかしくってしかたないんですもの」

ぼくは大真面目だった。

「スリッパを拾ったお礼に、ぼくの頭をなでてください」

クララの笑いは止まらなかった。

「そうそう。あたりまえのなで方じゃ通用しないわね。ヤプーに対しては、それ、こうして、なでたげる。お前って、ほんとにお利口さんね」

クララは跣足の足裏をぼくの頭の上にのせそら、これでいいわね、と軽く叩くのだった。

麟一郎は遂に、その夜クララのところに戻ってこなかった。ぼくは朝早く、彼女の許を辞した。ぼくの舌は、他のどんな人間のものよりも忠実に、主人を満足させた。何べんもうがいをしたが、それでもにおいが口中に残った。麟一郎が帰ってくにとって幸であったのだ。ぼくは帰宅を急いだ。連絡なしに外泊したことは一度だってない。妻の待ちわびる顔がうらがなしくぼくの瞼にうかぶ。妻が昨夜のことを若しも感知したならば、一体どんな顔をするだろうか。

路上でぼくは麟一郎と思いがけなくぶつかった。避けようとしたが駄目だった。どちら

プレさんの浣腸記
ナースの浣腸日記

岩村美智子

×月×日

今日の患者さんは十七才の女高生、病気は神経性食欲不振症というのだそうでもう一月も入院している。

非常に我が儘な患者さんで食事も摂ろうとしないのでゾンデによる強制栄養、ブドウ糖注などを行っている。そしてお通じもそのような神経質な方にありがちなひどい便秘、入院以来浣腸した時に通じがあるだけだ。

今日も便秘してもう四日にもなるので浣腸せよとの先生のお云いつけ。勿論浣腸の際は非常に嫌がる。——人の見ている中で浣腸され、しかも便器やおしめをあてられて排便まで世話をされることが十七才の女性にとってどんなに恥しいことであるか、私自身学院時代、そのような経験があるからよく解る。——いつもそれを押えつけて無理矢理に浣腸しているのである。今日は先生に上半身を抑えていただき、お母さんに足を持ち上げていただいて私が浣腸してさしあげる。するとお嬢さんは泣き出して腹圧が高まりグリセリンは泄ってしまうし始末におえない。便器をあてるより早く小量の便と共に浣腸液が排泄された。

×月×日

私鉄の通勤駅のトイレへ入ったら小さなブリーフを手にしたお母さんと三、四才の男の子が出て来てをお母さんの呟いていうには「ほんとんにこの子ったら、浣腸された時出せばよかったのに、電車の中で出るといったから私はあわてたよ。」

『浣腸された時出せばよかったのに、といったって、それは小母さん無理ですよ。小母さん自身が浣腸されたとしてもその時うまくお通じがつくとは限らないですから

からともなく、やあ、やあ、と声をかけ合った。彼はぼくと会うのがいかにも気まずそうだった。それで二人は、結局話をすることなく別れた。こんな別れ方を二人の間でしたのは、ついぞないことだったが、ぼくは先を急いでいた。彼も急いでいるようだった。彼はクラクラのところへ、ぼくは妻のところへ。

妻は、昨夜ぼくが戻らなかったことについて一言の不足がましい言葉を云わなかった。ぼくはそれを有難く思いながら、しかしそれが又非常に不満に思えてジリジリ気が焦立った。水を飲もうと、台所のコップを手にしたとき、ぼくは不意に緊張した。そのコップは洗ってないままおかれていた。ぼくの六感は実に鋭敏に働いた。

「瀬部君はこなかったか」

「そう、昨日の夕方、ちよっと見えました」

さりげないふうにつとめてはいたが、妻の異常な緊張がぼくにはよく分った。

コップにのこるにおいに間ちがいない。妻のものに相違はない筈だった。何故、そして何のために！ それは訊く必要のないことだった。昨夜、一匹のヤプーが、妻の床にかしずいたのだ。黒くたそがれ始めた野の霧を分けるように、そろうとした麟一郎の歩む足どりが、ぼくの心の中で重った。

（了）

ね。」と私はいってやりたかった。

私の病院の外来で浣腸を受けて（レントゲン撮影の為、婦人科診察の為）も便意をもよおさずそのまま診察を受けて帰っていく人々の中にも、この男の子みたいな方がいるのかもしれない。

例えば、今述べた子供づれのお母さんが婦人科診察の為うちの病院を訪れたとしよう。先ず腸の内容物排除の為といって浣腸を受けたが別にその時は便意をもよおさないので、そのまま直腸診を受けて帰路につく。しかし電車に乗った頃から浣腸液の効果が現れてきて、下腹部が少し痛くなり急に激しくなった便意はもう耐えられないばかり。もしこの電車の中で便を洩してしまったら、——と電車が次の駅へ着く迄全くつらい思いである。

電車が次の駅につくより早く彼女は駅の便所へ向ってそろっと歩き出した。急いではかえって泄す心配があったので。しかし唯一の大便所は使用中、躊躇している余裕なく意を決した彼女は……。

×月×日

今日はペニシリンショックの患者を初めて見た。その人は外来へ来た二十二才のお嬢さん。ペニシリン60万單位を臀筋に注射してやった。注射後胸内苦悶、腹痛を訴え顔面紅潮、驚いて先生の指示に従いビタカンとチラプチクを注射する。脈搏やゝ良好となり呼吸困難やゝ軽快するが腹部激痛は去らずに便意を訴える。次いでコントミンとブドウ糖混注、四・五分後に眠に陥る。脈搏、呼吸も正常となり約三時間眠る。

眼が覚めたらしいので行ってみると彼女はなにかもじもじしながら「あの、あの、泄してしまったのですが」といって顔を真赤に染めて、すっかり恥じいった風情であった。色々の患者には慣れたはずの私もいささか驚いた。二十二才といえばお通じはと聞れただけでうつむいてしまう年頃、さっきペニシリン筋注の際おしりを出すのさえ恥しがった彼女がこともあろうに小児の如く泄すとは、とても考えられないことだった。「えゝ？どうしたの、御不浄判らなかったの？」彼女はかぶりを振って「ううん、なんだか判らないけど眼が覚めたら泄していたの。」後に先生に聞いたら便意をもよおすことはペニシリンショックの一つの特徴だそうだ。

そこで便器をもってきて、あてると排便小量、あとはすっかりきれいにぬぐってやった。そして私の新しいブリーフをはいて帰っていただいた。

（終）

『女体風俗』

——緊縛衣裳よ、さよならの巻——

牧高志　文・画

和服衣裳も詮じ詰めると緊縛衣裳の一句に尽きるが、その最高は何と云っても豪華な丸帯を檜扇に、文庫にと高々と結び上げ、絞り縮緬の帯揚げを、巾広に盛り上げた振袖、訪問着に在る——とは云うものの事ここに至る道程は要するに無数の腰紐を如何に上手に使い、上前の幅がどうのこうの、下前を合わせて衿先をどう始末して衣紋を抜き、余分のたるみ、おはしょりたるみは二重にしないで、と帯を結ぶ直前の伊達巻までがすこぶる大変なものである。

医学的に診断を下しても脂肪に富んだ女体ならでは出来ない芸当である。若し本篇を愛好される奇特の士にして登場の女体と同じく晴の衣裳を召されんとするならば、嬉しい悲鳴を必ず発するであろうことはよも間違いないし、如何にウエットなシスターボウイであっても骨張った我が身を嘆くであろうことも云わぬが花。

和服和装の持つ強みは実にここに在るのである。鳥ならば絢爛たる孔雀、花木ならば雨に濡れた海棠か、なよなよとした女体にからみつく重目一八〇匁の絹織物の豪華佳麗の着物姿はただ拝見しただけでも威圧を感ずるものであるが、この女体を故あって更らに紐縄で緊縛するに至っては最早や道義を離れての言語同断、哀れみを通り越しての破廉恥と申してもよかろう。

——だが、しかし、ここに問題の分れ道がある。すなわち理窟で押せない審美感、もともと本テーマの下に緋縮緬の蹴出しから始まって次第に開眼させて来た女体をむげに道義の世界に押し込んで有終の美を放棄する（のは筆者の勝手だが……）それ程の文献でもなかろうし、以て生れた着物愛好ごころにひとしお色艶を添えての戯文戯画の世界なれば、まあまあ、しばらくお眼をつぶるのが賢明な策でありましょう。

さて——満天下誌界の諸君、そうともなれ

ばですよ、理論を抜いて猪突猛進するのが最終篇『女体風俗』の本来の使命ではないでしょうか。使命を果さんとするにはまず以て特選女性に御登場願わなければならないと云うことになります。では先ず最初に……。

（一）人形の箱から出て来て見れば——

一越縮緬に今流行の近代模様を染めて人形然と出て来た生人形、ゆえあって胴体だけで御観賞願いましょうか。

『いかがです？　御感想の程は……。随分窮窟でしたでしょう。西陣の袋帯を羽衣に結んでも窮窟な処に後手に両手をきちっと縛られては泣きたい位だったでしょう。箱のせいじゃないんですよ。貴女がなんです、その帯の結び方は縦横十文字に紐で絞め合せるんですが夜会やパーティには上背をつくって一番映える帯姿なんですし、若い和装の女性には最も安定感のある結び方なのです。軽い紋綸子や錦紗縮緬のものと違って帯揚げは縮緬絞りでどっしりした貴女のものは流石に……復古調ですな。本当は赤の匹田絞りで巾広く出す昔風が好ましいんですが濃い目のピンク地を思い切って巾広に出された処は感心しました。普段の訪問着と違って特にお振袖なんですから、帯揚げは出してもかまいませんよ。それこそ若き女体のシンボルです。

帯も丸帯よりは軽いでしょう、長さは別として重さが万事敬遠される時代ですから、それで充分です。

——で、どうです、一つ科でも作って、二三回歩いて見て呉れません？。フアッションショウ見たいに……。狭い場処ですが後姿も是非見たいものです。矢張り何んと云っても一越は身体のこなしには締っていいですなあ……。上半身をくびれるように帯で締めつけて腰から下を肉体の線もあらわに包んだ女体はきものでなくちゃ味われない魅力です。

へじゃ、どうしておくくりになりますの？って……それはその何んでもないんです、つまり——ですな、英語で申すならばザア、モア、ザア、モアと云う処です。ですから初めに窮窟でしたでしょうと、お断りしたんですよ。一通り御披露が済んだらまた箱の中に入って貰いましょう。貴女は永久に箱の中に入っている振袖の生人形なんですから……。これからあと貴女と同様晴れの盛装をこらした女性お二人にも御登場願うんですが今日は下に召しておられる長襦袢、裾除け、お腰、肌襦袢には触れない建前ですから、どうぞ御安心下さい。

何んですって？……、一寸聴き取りにくいんですが——まだあたしに云いたいことがあるって、それは私の冗談ですよ。まさか貴女のそのなよなよした胴体を抱いてほほずりしたって、貴女の後手は解く訳には行きませんよ。何故ってお振袖の後手姿は万金の価値があるんですから……。お好みならひざから下をもう一つ縛り上げたい位ですよ。まあそんなに笑わないで下さい。それ程きもの姿の女体に惚れ込んでいる証拠なんですから、どう

い図

も男心って奴はほとほとに困りますねえ、全くの話が――。』ではお次、ろ図に移って見ましょうか。先ず何んとこれは題目をきめますかな。場処は某アトリエなんですがカメラがあればさしずめ写場となりますな。緋の鹿の子絞りの帯揚も高々にちどりに結び上げた丸帯は流石大家のお嬢様、ぽってりとした厚みのしぼの大きい古浜縮緬のお召物は娘十九の蕾を包むに誠に充分。先ず愁にうるんだ眼元から一つ御覧下さい。

ろ図

（二）今日の記念にとお誘いすれば

『今日はお誕生日なんですってねえ、いや、どうもお目出度う。バースデイパーティはおうちで……それは結構です。お祝いに何をさし上げましょうか。まさか男の私から粋筋好みの塩沢緋縮緬の長襦袢を進呈する訳には行きますまいが白足袋位ならお安い御用です。紐が締って痛くはありませんか？。どうも慣れないもんですから貴女の手を帯の下ですが少し上の方へ捻じ上げたのが効いたかも知れません。まあ一寸の間我まんしていて下さい。

これと云うのも盛装姿の貴女でなければ実現しないと思ったからです。十五貫の貴女の身体を古浜縮緬でぎゅっと包み、ふっくらとした胸と二つの腕から帯にかけての緊縛はどう見ても待望の珠玉篇です。本当は立って頂きたいですが腰をおろして私の云い分をまず聴いて下さい。高島田のかつらを冠ればそのまま美しい花嫁さんになりますね。もっとも、両の手を後ろに廻わしては三々九度のお盃は頂けませんね。誠に、どうもお気の毒に堪えません。色々とお芝居もやってみたいんですが突然で、失礼に亘ってもいけませんから今日は割愛させて頂くこととしましょう。紐を解くと暫らくの間跡が残るでしょうが縛られたなどと仰言らずに澄ましてパーテイに御出席下さい。きものの跡目は人絹交ぜ物ではないんですからすぐ消えて了いますよ。じや十九の春をお祝いして私の方がお先に消滅することに致しましょう……。』

先般は下着篇、長襦袢篇と順序を追って駄文駄画を御披歴した訳であるが終着駅の振袖訪問着に到いてみれば勢い表型的にも総論的にならざるを得ない。総論をふり返って分類して過程を求めることはよいが着付けの注意は長襦袢までで大綱が判っているし同じ愚を最終点で繰り返したくないから直接四つに組むことを諒承されたいのである。

晴れの衣裳の女体と四つに取組む！　何んと光栄の至りではないか。同じ光栄をになうならば更に飛躍する要があろう。女体開眼はすべからく沈黙的でありたいものである。

世に云う沈黙は金かも知れないがその道具

は図

は白布か手拭いで沢山であろう。雲助の薄汚れたふんどしまがいの手拭いは箱根山中ですら光ったものである。場面はかくして更に、は図にと進展する——。

（三）柱を背にして坐つてみれば——

『縫取お召を着て頂いてお色直しの姿をして頂いたんですが何も柱の前に行って縄尻を縛ろうなんて粋興な真似をした訳じゃないんです。立ち姿、腰掛け姿と続けば坐り姿も矢張り必要ですからねえ。最近は文金高島田の日本調の結婚衣裳に代って簡素な略衣裳が流行する時代ですから高級なお召に丸打でなく高麗の平打ちの帯締めを締めただけで式場は華やかになります。ただ帯揚げが帯にかくれては寂しいうんと出して欲しいので薄目のピンクでも、うんものです。お頭の飾りは高島田に代るものですから出来る丈け飾るともう何も云う処はありません。

一寸猿轡をさせて貰いますよ。とても哀れっぽくて美しさが出て来ましたね。女体の線があやしい光彩を放つのはこの時です。ただし裾を乱してはいけません。よく裾前が割れて錦紗縮緬の長繻袢に真紅の蹴出しがからみつく画がありますが普段着ならいざ知らず、盛装の場合は何かのひどい折檻を受けたあとと見なくてはなりません。小説ならすぐ作れるでしょうが、実際はあり得ない情景でしょう。

こうして一時間も坐っていると後手に縛った手首がしびれて来て、貴女は泣き出すかも知れない。その時が女体風俗開眼の最高潮時とお思召下さい。そして、それは貴女ばかりでなくて世の和装女体全般に通ずることなのです。和装の極が振袖に在るとすれば、その女体が両手を後ろに廻わした時の姿こそ彼岸に到着したことを忘れてはなりません。

やれやれ——私もやっと安心することが出来ましたっけ。御登場の若き女性の皆さんにはその都度大変御迷惑をかけました。いずれその償いは稿を改めてお詫び申上げます。

では貴女がたの後手の紐を解きますよ。大らかに自由に和装の羽を伸ばしてわが世の春をおうたい下さい、と同時に本篇を愛好された誌界の諸君！　いずれまた駄画駄文を冗筆にのせて——それまで御機嫌よう、さようなら……。

（おわり）

× × ×

条

（創作）

痕

（じょうこん）

槇村奏

一

「先生！」

という声が、突然、上から降ってきたので谷川は、思わずギクリとして立ち止った。

崖の上をふり仰ぐと、明るい陽射しを浴びて、真崎が、白い歯を光らせて笑っていた。

谷川は、眩しげにパチパチとまばたきをすると、子供がベソをかくような妙な表情をした。

真崎は、薄い上衣をヒラヒラさせて、身軽に崖を下りて来ると、

「びっくりしましたか――？」

「そりやあ、びっくりもするさ。君は、いつでも、僕を驚かせるような現れかたをするんだナ」

「すみません――」

「イヤ、謝ることアないが、いつ来たんだね？」

「たった今――先生、少しお痩せになりしたね……」

「そうかナ……」

谷川は、無意識に頬へ手をやった。無精髭ののびているのが佗しかった。

『先生。お忙しいんじやありませんか――？』

「ウン、いや、今昼休みだから、一時まではかまわンよ」

小学校の運動場からは、子供達の騒ぐ声が賑やかに聞えていた。

「じや、一寸その辺の道までつきあっていただけませんか？」

「うン。それより君。学校へ来たらどうだ？お茶ぐらいはあるぜ」

真崎は、靴先で小石を転がしながら、

「先生は、僕を警戒してるんですね。僕が可恐いんですね」

「イヤ、そういうわけじやア……」

と云ったが、谷川は、真崎の、そういう、ものの云いかたに恐怖を感じるのだ。彼は、昔の教え子である真崎の前へ出ると、日頃の豪放さを失っていく自分に、自信が持てなかった。眼をそらして煙草をさぐると、すかさ

ずマッチをすってくれる真崎の、いつに変らぬ気の利きかたにも、谷川の胸は痛んだ。

「先生と、この村で初めてお会いしたときも、今日のように鶯が鳴いていましたね……」

「ウム、そうだったなア……」

谷川は、初めて鶯の声に気づいた。

二人は、どちらからともなく歩きだしていた。

県道へでると、空色の真新しい乗用車が止っていた。村人が物珍らしげに覗きこんでいる。

「ホウ。すばらしい高級車だ！——一体、誰だろう？」

「僕が乗って来たんです」

真崎が小さな声で云った。

「君が?!——じゃ、君の自動車かい？」

「ええ、まア……」

「しかし——」

「先生！　僕。今、平松の処にいるんです」

「平松って、平松組のかい?!……」

「ええ——」

「き、君は！——君は、平松をどんな男か知っているのか？」

「知ってます。何もかも承知のうえです」

谷川は、よろめきそうになる軀を、やっと支えた。いきなり、胸許を、グサリと突刺された思いであった。

「軽蔑されてもかまいません。僕は、そういう生きかたしかできない人間なんです！　先生は御立派です。でも、僕には、とても、先生のようにはできないんです。——では、もう二度とお目にはかかりません。お幸せに、さようなら……」

立ち竦んでいた谷川が、ハッと我に返ったとき、自動車は微かな埃を巻いて、滑り出していた。

「アッ、待ってくれ！　真崎。真崎ッ——オイ——ま、ざ、き……」

谷川は、自動車の後を追って駆けながら、叫んだ。

その姿が、バック・ミラーに映ると、真崎は、一瞬眼をつぶり、それから、一気にスピードをあげた。涙に濡れた頬を、向い風が切った。

駆けるのをやめた谷川は、肩で荒い呼吸をして、立ちつくした。自動車は、視界から消えていたが、真崎の最後に云った言葉は鮮かに残っている。

「センセーイ——校長先生エ——」

遥か後で、児童達の呼ぶ声が聞える。

谷川は、腕時計に眼をやると、悄然としてひき返しはじめた。

谷川圭作が、この山村の小学校へ、校長となって赴任して来てから二年目の春、ちょうど去年の今頃に、真崎俊吾は、突然訪ねて来たのであった。

真崎は、いきなり学校へ入っていくのを躊躇って、裏山へ登ると、たった一棟きりの校舎を眺めた。あの建物の中に谷川がいると思うと、息苦しいほどに胸が騒ぐ。

小学校五年生のとき、或る日真崎は感冒で体操を休んでいた。一人で教室に残っていると、教壇の横の椅子に、谷川の上衣が掛けてあった。真崎は、誰も見ていないのを確かめると、上衣に近よって、ソッと撫でてみた。毛織地の柔軟な感触が、谷川の肌のように懐しく、思わず顔を埋めると、濃い煙草の臭とともに、大人の男の甘酸っぱい体臭が、強く臭った。

フト気がつくと、運動場に大勢の子供達が集って、ワイワイ云いながら、此方を見上げている。中には指をさしている子がある。草色のカーデイガンを着た、女教員らしい若い女も混っていた。

村に見馴れない、真崎の都会風な身形が珍らしいのであろう。

面映ゆさに、真崎は、足早やに山を下りると、田ン圃のほうへ歩いていった。そうして、ますます、学校へ入っていくきっかけを失っていきそうな自分が、腹立たしく、苛々していた。

小さな流があり、水車が回っていた。手を浸すと、山から流れてくる水は、氷のような

冷さである。真崎は、濡れた手で、火照った顔を押えた。

「ハイキングですか――？」

土手の上から、聞きおぼえのある太い声がした。

「先生！　僕です……！」

風に頭髪をなぶらせて立っている、長身の谷川めがけて、真崎は土手を駆けあがった。

夢で何かうなされたような気がして、谷川は眠りを中断された。薄目を開けてみると、部屋には、消した筈の電灯が点っている。昨夜は、真崎を、一組きりの布団へ無理に寝かし、谷川は、毛布を被ってゴロ寝したのであった。意識が急にハッキリしてくると、谷川は、今自分がどんなめにあおうとしているかを覚り、軀中が硬直した。瞼を再び閉じると、眠った振をよそおったが、胸は早鐘のように鳴っていた。妙に寒いと思ったら、彼の上半身は、既に裸にされていたのだ。ズボン下が、ズルズルとひっぱられて脱がされていくのが判る。谷川は、何度か跳ね起きようとしたが、軀は金縛りにあったように動かない。しかし谷川は、遂に勇を鼓して眼を開けた。

ハッとして立ちあがった真崎は、いきなりバタバタと部屋を駆けだすと、玄関の戸を開け、跣足でどこまでも走った。いつか、運動場に来ていた。夢中で校長住宅を逃げだしたが、脳が混乱していて、どうしていいか判らなかった。

「真崎ッ！……」

叫ぶなり、谷川も、真崎の後を追って外へ走りでた。真崎のただならぬ様子に、不安が先にたち、衣服を纏う余裕はなく、裸のままである。

「真崎。待ちたまえ！　どこへいくんだ――」

谷川の声を聞くと、真崎の足は竦んだ。

谷川が、グイと真崎の肩を摑んだ。

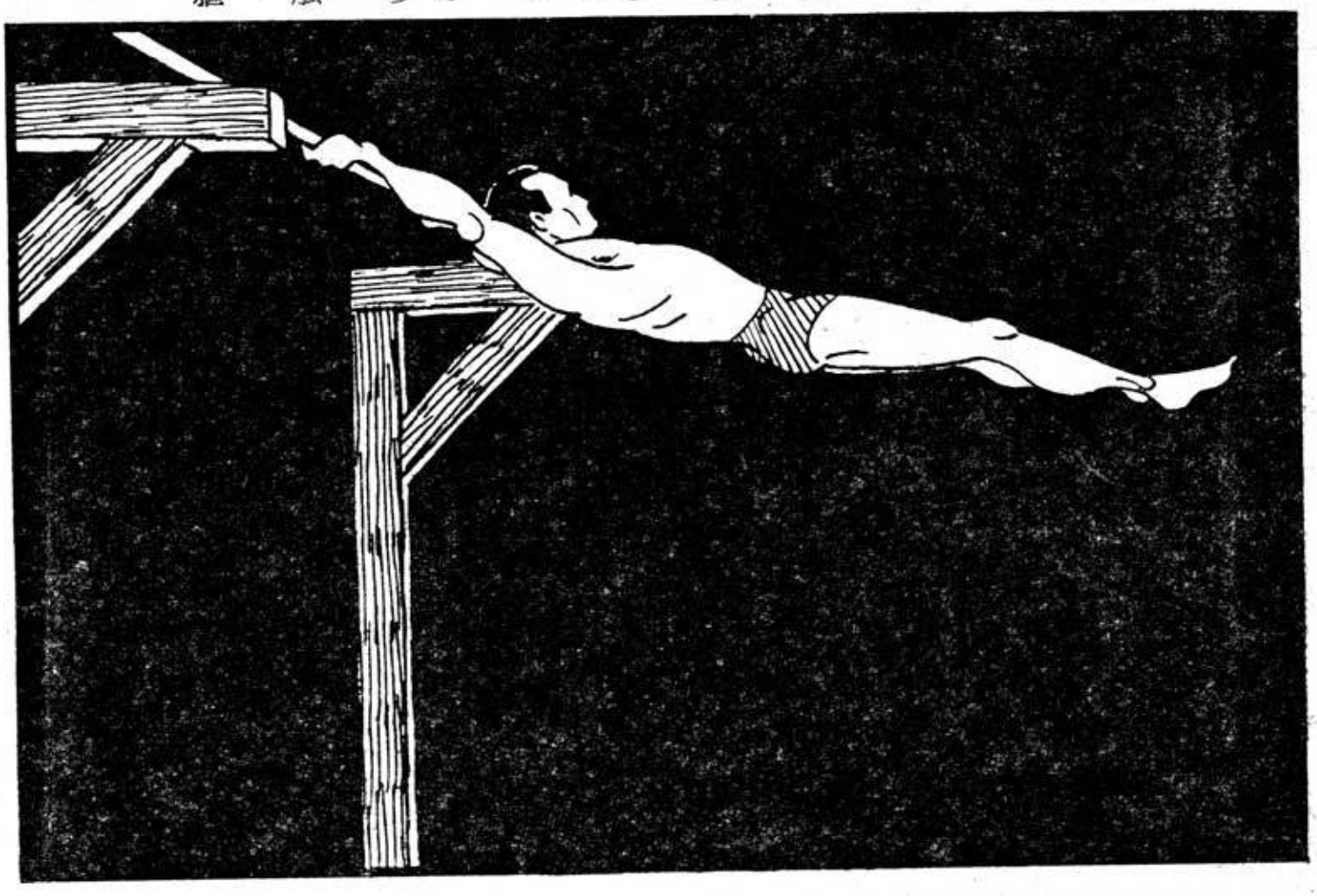
「すみません！　僕、とんでもないことをしました――赦してください――でも、僕、先生のこと――」

「もういい――君が、なぜこんなことをしたか、僕には、判らないわけじゃないんだ」

谷川の胸毛が、真崎の頬に触れた。

鉄棒の下の砂場が、二人の軀を柔くうけとめた。

朝陽の射す縁側で、谷川は、煙草に火を点けた。



「先生。では、僕、帰ります――」

「そうか。真崎。昨夜のことは、お互に忘れよう。君の人生はこれからだ。僕はもう三十八だが、やっと校長になれたばかりだ。卑怯だと思うだろうが、僕は、自分の地位を失いたくない。判ってくれるね。――君が僕を好いてくれるなら、いや、僕も前から君が好きだった！　だから、精神的には、どこまでも深く愛しあっていこう。僕は一度結婚に失敗しているし、この後も妻帯はしないつもりだ。一生涯君を愛しつづけよう……。しかし、君は結婚しなければいけないよ。そして、立派な社会人としてやっていくのだ。僕のことは、旧師として、友人として、忘れないでいてくれればいい。ナ……」

谷川は、深い眼の色で、慈むように真崎を瞶めながら、言葉を結んだ。

蒼白な顔を上げた真崎は、何か云おうとして唇を顫わせたが、そのまま黙って頭を下げると、桜の蕾もまだ固い山里を立ち去っていったのである。

二

午後の授業が始まると、谷川は、六年生の社会科を教えに教室へいったが、黒板へ書く字を間違えて、児童達に笑われた。彼は、その文字を、子供の頃、どうしたわけか間違えて覚え、若い時分は時々その癖が出て困ったものだが、最近では、もう絶対にそんなことはなくなっていたのだ。谷川は、真崎のことで脳が乱れているのを知って、狼狽した。

放課後、掃除当番の児童も帰り、職員も各々に下校すると、急にガランとなった学校に一人残った谷川は、頭を抱えて、机に俯ッ伏した。激しい悔恨が胸を嚙み、いても立ってもいられぬ思いであった。

三年もすれば、市の中学校長のポストが約束されている谷川は、卑怯とは知りながら、失脚を惧れて真崎の求愛を斥けたのである。谷川は、同性愛者であった。しかし、教育者である彼は、己の性向を敵として、それにうちかって来た。一度結婚したのも、その手段だったが、まもなく破綻に終った。彼は二度と結婚する意志は無くしたものの、欲望を制していける自信はあった。彼は、児童の教育にうちこみ、教育者としての順調なコースを辿ることしか考えなかった。

かつての教え子である真崎が、同じ性向の所有者だと知ったとき、谷川は、云いようのない戦慄を覚えた。歓喜と恐怖の入り混った感情であった。

谷川は、自分を卑劣だとは思いたくなかった。真崎にわざと冷い能度をとったのは、何も自分の為ばかりではない、真崎のことを真に思えばこそであり、教職にある身として、当然の措置だと自負したかった。

しかし、真崎が、平松豊造の許へ走ったと知った今、谷川の心は動揺した。

母一人の家に育って、世間知らずの真崎が、やくざの世界に入ったことは、余りに残酷である。色事師として有名な平松は、男色家としても噂に高かった。そこで真崎が、どんな生活を送っているかは、想像に難くない。

気がつくと、運動場はもうトップリと暮れていた。

谷川は、不意に、気違いじみた動作で、着ているものを脱ぎ捨てはじめた。そして、外へ駆けだしていった。

夜気の冷さも感じなかった。彼は、まっしぐらに、鉄棒めがけて走った。

軽く跳躍すると、谷川の両掌がバーを把った。師範学校時代、鉄棒の名手として鳴らしたしなやかな軀は、引き締った筋肉を伸縮させて、鮮かに回転をはじめた。

観衆を湧かせた、彼の得意の技である〝大逆手車輪〟は、少しの衰えもみせていなかった。

何回か、何十回か、機械のように回り続けた谷川の軀は、急に投げだされるように、砂の上に落ちた。そのとき、はじめて、谷川は自分がパンツ一枚の裸になっていることに気づいたのである。砂の感触が、苦しい思い出を甦らせた。

（ああ、俺は馬鹿だった！……真崎。赦してくれ……！　俺を赦してくれ。真崎……真

崎……)

谷川は、心で絶叫しながら、見えない鞭で打たれるかのように、砂場の中をのたうち回った。

平松豊造は、何軒かの妾宅を別にもっていたが、本宅へは、一切女気をおかず、家事万端は、若い者に交代でさせていた。

真崎は、いわば別格だったから、仕事は何もしなくていい。

丹前をひっかけた平松が、長火鉢の前に胡坐をかいて、朝酒をはじめると、やっと寝床を抜けだした真崎は、白いスエーターに首を通しながら縁側にでて、のびをする。

「真崎」

「はア」

「どうだ。少しは馴れたか?」

「え、ええ……」

真崎は、振り返ると、乱れた髪を荒っぽく掻きあげた。真崎は、夜の間、あんなに彼を夢中にさせる平松を、朝になると、暗い眼付きで見る。脂ぎった、精力的な五十男の顔を見ていると、こんな男にと、自分自身に嫌悪を感じるのだ。

平松は、酒に濡れた唇を舐め回しながら、

「ところで、真崎。お前、その女の子の穿くパンテイみたいなヘンなヤツをやめンといかんな。ウチではみンな、俺のように六尺褌で晒を巻いているんだ。他の組は知らぬこと、ウチの身内は、全員が褌を締めている。男はこれでなくっちゃいけねエ。平松組が、褌組と異名をとっているのを、お前も聞いているだろうが。そうだ。二、三人呼んで見せてやろう。オイ。誰かいねえか!」

すぐに、顔の浅黒い敏捷そうな若い者が顔をだした。

「タケか。誰か来てるか?」

「ヘエ。建に、定吉に、鉄哥イと来てますが――」

「そうか。みんな此処へ呼んでこい。手前も来るんだぞ」

「へえ。只今――」

吉良鉄男という、筋骨の逞しいボクサーくずれの男を先頭に、ドヤドヤと四人が入って来た。

「ヨシ。みんな来たな。手前達、そこで裸になってみろ」

平松の言葉に、四人は一寸顔を見合せたが、吉良がすぐに服を脱ぎはじめると、建も定吉もそれにならった。タケだけが、妙にモジモジしていて、裸になるのを躊躇う様子である。吉良は、見るまに、褌一本になった。

固く筋肉の盛りあがった、肩や胸にくらべ、小気味よい程細く締った腰へ、白い縄のように食い追んでいる褌は、精力あふれる肉体の圧力に耐えてきんと張り、見る者の心を唆る。

真崎の唇から、軽い溜息が洩れた。

建も定吉も、各々褌姿になった。

「タケ! どうしたんだ?」

平松の眼が光った。

ジャンパーを脱いだだけのタケは、ピクッと軀を縮めた。

「手前、俺の云うことがきけねえってのか?!」

「い、いいえ。そ、そうじゃねえんで――で、でも、今日は――」

「今日はどうだってンだ?」

「今日は、御勘弁を――」

「何ッ!」

「ど、どうか――このとおりです!……」

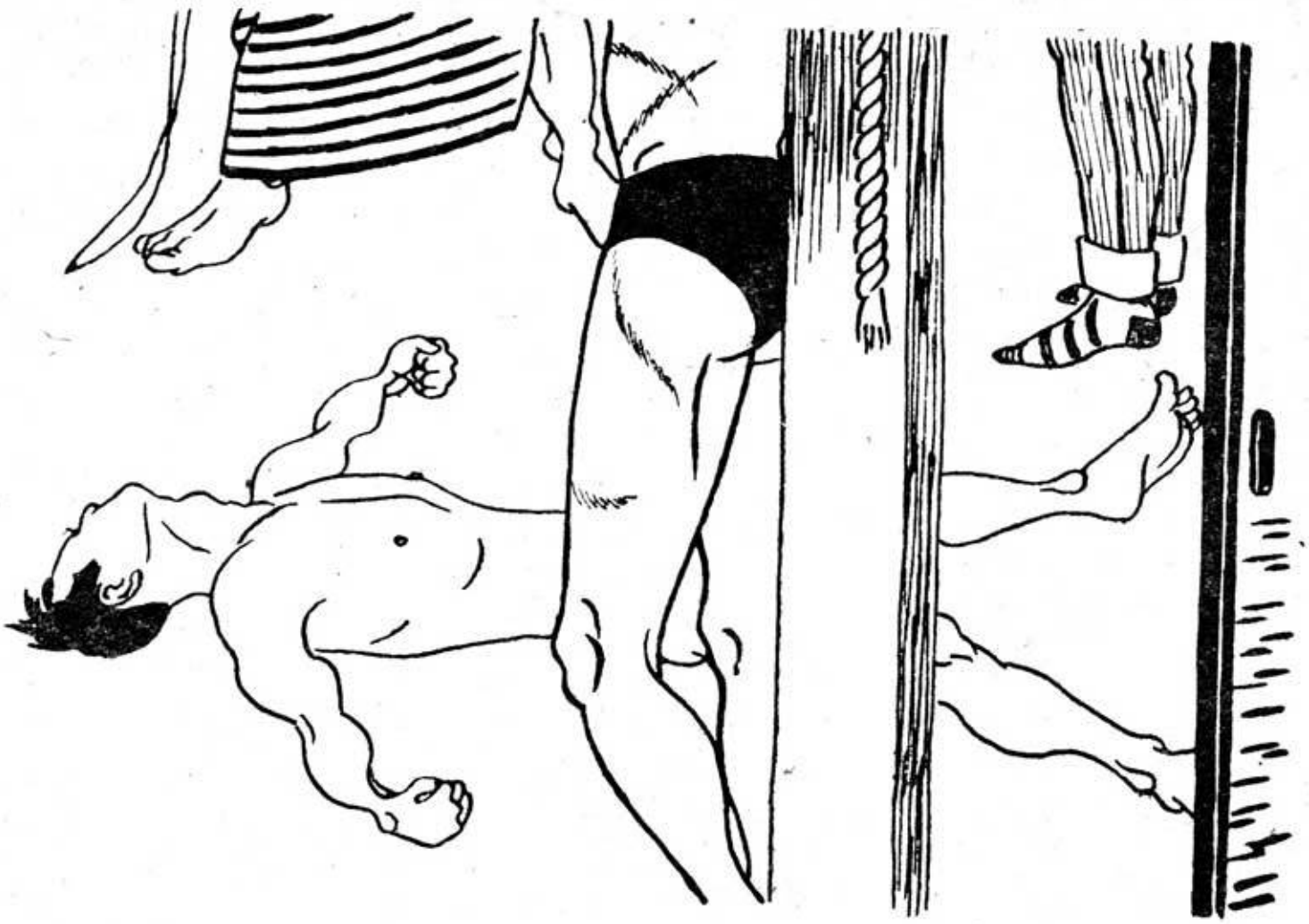
タケがペタリと坐って両手を合せるのには眼もくれず、平松は、後の三人に顎をしゃくった。三人は心得えてタケに飛びかかると、無理矢理服を剝ぎにかかった。

「アッ! 勘弁、勘弁してくれ! お願いだ。お願いだア――」

タケは、悲鳴をあげて抵抗するが、たちまちデニムのズボンも引ッ剝がれてしまった。

「タケ! 手前、裸になるのを嫌がったと思ったら、又そんなものを穿いていやがったんだなッ!」

平松の怒声を浴びて、逃げださぬよう、建と定吉に左右から押えられているタケは、今度こそ本当に縮みあがった。タケは、派手な



縞柄のパンツを穿いていたのである。

「オイ、鉄。そいつも剝いでしまえ！」

抵抗をやめたタケは、うなだれた。

「タケ。いいか。罰に、今日一日その姿でいろ！」

「へ、へエ……」

「判ったら、すぐに庭の掃除をしろ。物置の屋根も直しておくんだぞ」

「それも、このままやるんで……？」

「当前だ！今日一日裸でいろと云ったのを忘れるナ」

「へエ……」

タケが、ベソをかいてすごすごと引きさがると、平松は一気に盃をあけて、

「建と定吉はもうよし。鉄。お前は残れ」

「へえ」

「真崎。鉄から、褌の締め方を教わるんだ。鉄。みてやってくれ。新しい晒も断ってやってな」

「へえ。判りやした。真崎サン。こっちへ来なせえ――」

吉良は、脱いだものを一まとめにして小脇に抱えると、真崎を促して部屋を出た。

「真崎サン。あンた。褌ははじめてかね？」

「ええ」

「一度締めたら、やめられなくなりまさア。もっとも、タケみてえな奴もいますがね」

吉良は、押入から新しい晒を取りだすと、大体の長さを計って、ビリッと裂いた。

「サア、裸になって――。あっしが締めてあげやしょう」

真崎は肯いて、手早く裸になったが、ブリーフを脱る瞬間、不意に羞恥を感じた。

吉良の手の中で、真ッ白な晒が、生物のように動くと、真崎の全身は緊縛感に痺れていき、グイと力一杯締められた刹那、思わず咽喉の奥で呻きを発した。

「さあ、どうです？　気分は――」

吉良は少しさがると、腰に手をあてて、ニンマリと笑う。

真崎は、吉良の視線の真向に立ちながら、かって味ったことのない、不思議な満足感に浸っていた。

三

午下りの明るい浴室へ、ソッと忍び込むように入った真崎は、脱衣場の鏡の前に立つと、クルクルと裸になった。そして、鏡面の中の、己の褌姿に凝っと見入る。褌を締めるように

なって以来、彼は、日課のように、日に一度は、鏡に向かわないではいられなくなったのである。

不意に戸が開いたので、真崎は狼狽して衣服に手を伸したが、それを纏うひまはなかった。

入った来たのは、吉良であった。

「真崎サン。大分輝がいたについたね。あンたは体格がいいから、よく似うよ」

「そんな……。吉良さんに比べたら、僕なンか、駄目ですよ」

真崎は、赤くなった顔を、吉良になら見られてもいいと思い上背のある彼を見上げた。

吉良は、なぜか瞬間悲しそうな表情になると、視線をそらしながら、

「俺、いつか、あンたに云おうと思ってたんだが……。真崎サン。あンた、本当に平松が好きなのかね――？」

「……」

「真崎サン。あンたのからだは、きれい過ぎる。こんな処にいる人じやアねえ！　イヤ、いちやアいけねえんだ！　悪いことアいわねえ。からだの汚れねえうちに、一日も早く足を洗いなせえ――」

「吉良さん……」

「あンた、不思議そうな顔をしていなさるね――俺がどうしてこんなことを云うか――そいつアー、いつかは判るときがくるでしょうよ……いつかはね……」

吉良は、煙草でも探すように、ポケットをゴソゴソやった。

そのとき、玄関のほうで、何か呶鳴る声がしたと思うと、俄に騒然となった。

吉良は、すぐにとびだしていく。

真崎も急いで衣服を着けて廊下にでると、タケがバタバタと走って来た。

「ア、真崎さん。鉄哥イを知りませんか？」

「今そっちへいったよ。何かあったのかい？」

「え？　ええ、一寸……でも、あンたは出て来ねえほうが為ですぜ。怪我でもしちやアつまらねえ。判りやしたね」

あたふたと去っていく、タケの後姿を見送って、真崎は小首をかしげた。

谷川圭作は、グルリと取り囲んでいる男達を見回しながら、鋭い語気で云った。

「君達。乱暴するならしてみたまえ。僕は、どんなことがあっても、真崎を連れないでは、帰らないよ！」

谷川は、腕力に自信があるわけではなかった。しかし、身の危険を感じながら、彼の身内には、悲壮な勇気が漲っていた。

「先生。あンたも脳の悪い人だね。あンたの為を思えばこそ、こっちも穏かに、お引き取りを願おうとしているんだ。しかし、どうでもあいつを連れて帰ろうってンなら、フフフ、少しは痛いめをみるのも、覚悟のうえでしような」

懐手をした平松が、押し殺したような声で云う。

「平松さん。私も、あんたの為を思って、こうして一人で来たんだ。穏かに話がつかないんなら、こちらも非常手段に出るだけです」

「ホウ、先生も、校長となりア、さすがにいい度胸だね。おみそれしやしたよ」

平松の合図を持っていたように、一人がいきなり鉄拳を振う。更に一人が、もう一発。よろめいて倒れるところを、蹴る、踏みつける。

「オイ。裸に剝いて、縛りあげろ」

平松の言葉に、子分達の手が一齊に伸びる。合ゴートも上衣も、たちまち剝りとられ、ワイシヤツは、ベリベリと引き裂かれた。そうして遂に、谷川は、惨めな姿で、柱を後に抱かされ、ロープで括りつけられた。

「オイ。誰か、ベルトでこいつを打ちのめせ。いい加減なところで、外へほうり出すんだ。それで、二度とは来なくなるだろう」

建がベルトを取ると、一振りビユンと鳴らしてから、谷川の腹の辺りへ打ちおろした。

パシッと鋭い音がし、腹筋がグウと縮むと、赤い鮮かな条が浮きあがった。

しかし、谷川は呻き声一つたてない。固く

歯を喰いしばっただけである。

「ヨシ。俺にかせ」

定吉が、建の手から、ベルトをひったくると、口を結び、大きく息を吸い込んでから、跳ね回るように軀を動かして、続け打ちに鞭を浴びせた。

谷川の胸板が波打ち、腿の筋肉がピリピリと痙攣した。条痕はみるみる数を増し、血さえ滲んでいる。唇からは遂に呻吟が洩れた。

定吉が鞭を振りあげたまま、一歩退いた。谷川の前へ、蒼白な顔をした真崎が、突然割って入ったのだ。

「真崎ッ！　お前は引っ込んでろ！」

平松の額に、青筋がふくれた。

真崎は、かまわず、谷川の顔を両手で支えると、

「先生！なぜ、こんな処へ来られたんです。しかも、こんなめに合わされて……」

「真崎！　僕は、君を、連れ戻しに来たんだ……」

「先生……。もう遅過ぎます！僕は、もう、昔先生に可愛がっていただいた頃の僕じゃありません。僕は、駄目な人間になってしまったんです……！」

「真崎。しっかりするんだ！　僕は、どんなことがあっても君を連れていく。君も、僕と一緒に来てくれるね」

「ハイ……」

「君をこんなにしたのは、全部僕の責任だ。僕は、自分がどうなろうとも、必ず君を幸にする！　信じてくれるね」

平松が、真崎の肩をグイと摑んだ。

「オイ、邪魔だ。どかんか！」

「嫌だ！　先生を打つんなら、代りに僕を打て！」

刃のように冷い真崎の視線を受けて、平松は一瞬たじろいだが、

「うヌ、き、貴様。寝返ったな！」

と叫ぶと、後は嫉妬に狂ったように、

「ようし！　望み通り貴様も打ってやる。おい、みンな。こいつも裸にして打ちすえろ」

しかし、誰もすぐには手をださない。

平松は焦立って、真崎を突き倒した。それがきっかけのように、一人が手をだすと、続いて三、四人が、寄ってたかって裸にする。

「よし。今度は俺がやる。いいか、真崎。俺の鞭は、ちっと手強いぞ。悲鳴をあげねえように、奥歯をしっかり嚙み合せていろ！」

逃げる様子もなく、大の字になったまま、両眼を閉じている真崎を、僧々しげに見下した平松は、悪鬼の如き形相で、ゆっくりとベルトをしごいた。

「うヌ！うヌ！うヌ！うヌ！……」

一打ち毎に、獣のように咆えながら、平松は鞭を振った。

真崎の筋肉は、その度に硬直し、胸と腹が波打つ。口は固く喰いしばられ、大きく開いた鼻腔から、熱い息を噴いた。

「やめろッ！　やめんか！……」

谷川が、柱に括られた上体をよじった。

「真崎に罪はない！　打つなら、俺をもっと打て！」

「うるせえ！——ようし。一人々々じや手数がかかる。二人仲好く括って、やるとしようか。定吉。先生様の縄を解いて、真崎と括り合わせろ」

縄を解かれた谷川は、我にもなく、ガクリと膝をつく。それを、二人がかりで引きずり、グッタリとしている真崎と、向い合せに重ねて、グルグルとロープを巻きつける。

「どうだ！　一心同体で嬉しかろうが。フフフ——。サア、みンな。銘々に、なんでもいい、鞭になるものを持て」

大勢の手で、鞭の乱打が始った。息つくまもなく、鞭が皮を裂き肉を嚙む。創痕の上に又新しい鞭の痕が這う。二人の軀は、グルリグルリと回転され、上になったり、下になったりした。

平松は、フト、吉良のいないのに気づいた。そういえば、真崎が飛び込んで来た頃から、彼の姿は見えなかったようである。

「タケ。お前、鉄を知らねえか？」

「いいえ——」

「どこへいきやがったんだ、あいつ。タケ、

探してこい」

タケは、裏口を出た処にある溝川の木橋の上に、吉良の長身を見つけた。

「兄貴。こんな処にいたんですかい。どうしたんで——。あっちで呼んでますぜ」

「俺はいかねえよ」

「でも——」

「まるで、気違えざただ——！」

「へ？」

「あいつらよ」

「……」

「可哀そうに、あれじゃ、気を失うまでやめねえだろう。チッ、大人げねえっちやありやアしねえ」

「兄貴。早く来てくださいよ」

「うるせえ！　いかねえと云ったら、いかねえんだ！」

吉良は、すいさしを、ヤケのように川へ投げ捨てた。

「困るなア、兄貴……」

「お前は帰れ。俺が見つからなかったと云うんだ」

「へえ……」

「帰れッ！」

「帰りますよ。エエ、帰りやいいンでしょ。それにしても、今日の兄貴はヘンですよ。まったく——」

ブツブツ云いながら、タケが帰ってしまうと、吉良は、黒く澱んでいる川面を瞶めて、独白した。

「——可哀そうだが……あの二人……幸なのさ……俺なンかどうだ。もう、誰も愛せない人間になっちまったじやないか。フフ、可哀そうなのア、俺のほうだヨ……」

川風がたった。吉良は、上衣の襟に顎を埋めると、真崎の幻を振り払うように、大股に歩きだした。彼を待っているのは、ネオンと喧嘩と、アルコールである。

夕空は、何事もないように、赤い雲を浮かべている。

（完）

海原にありて歌える　（二）
—誘拐されゆく美少女の詩—
菅谷はるみ

芳彦さん——

私、縛られてるのよ！

赤にピンクと緑、白のタータンチェックのスーツの膨らんだ胸元にも、ロープが幾すじも嚙み、締めつけてるの、

スーツと同じ模様のスカアトは……

芳彦さん——　捲くられてしまってるの懸命にからだをくねらせるのも効なく、ピンクのガーターベルトで吊ったバラ色がかった薄いナイロン、フルファッションをピッタリと穿いた太腿に深い溝を刻んで、四筋、五すじ喰い込む縄目——、

さらに赤い靴下留でストッキングをピチンと留めた膝下も、あなたが丘の草原で白いと云って下さったふくら脛も、すらりと細い足首も、ギリギリゆわえられてるの、

赤の細くて高い踵のパンプスの靴先からナイロンストッキングに包まれた足の甲まで、ロープのはしで括られてるの。

そして、あなたが軽く指で触れて下さった黒髪、ソフトな、ウエーブした髪。

あなたがジッと見つめて下さった、つぶらな眼、あなたが贈って下さった珊瑚珠のイヤリングをつけた透きとおるような私の耳たぶ、その私の顔は今、

猿ぐつわに締めつけられてるのよ！

芳彦さん、

＝女体切腹の創作＝

夕陽に散る華（後篇）

藤山秀緒

遺書

「御立派な御最期でした。あなたの姉上は関東軍の、いや日本帝国のために、人柱となって亡くなられたのです。御最期の模様も、追ってお話致します。これが亡くなられる直前に書かれた遺書です」

相馬少尉は、一通の封書を机上に置いて、じっとうつむいてしまいました。

ここは東京の郊外、成城にある牧田美千代の留守宅です。いまは、美千代の妹千枝子が亡父の遺産と、美千代の仕送りで、学校へ通っています。千枝子は、美千代の逮捕や裁判、まして自決など、夢にも知らなかったのです。それは、井上参謀長のはからいでありました。井上参謀長は、もし、美千代の逮捕を報道するとなれば、非国民の妹と、千枝子までが白い眼で見られる。それでは、軍の身代りとなって死んでくれる、美千代にすまない、そこで内地向けの新聞記事を差しとめていたのでした。

千枝子は、未知の相馬少尉から突然姉の自決をきかされ、自分の耳を疑いました。しかし、諄々と理由を説明する相馬少尉の緊迫した表情を見、まぎれもなく姉の筆蹟である遺書の封筒を手にとっては、流石に愕然としないわけには行きませんでした。

遺書は、綿々として、憂国の情を述べ、千枝子の将来に及んで、涙にインクのにじむ個所さえのこっています。

千枝子どのへ

あなたが此の手紙を読む頃には、私はすでにこの世の人ではないのです。私は、馬賊の首領として甘んじて、刑に服すつもりです。私は明日の午後、この刑務所の庭で、女乍らも切腹して死にます。私の死は、満人達の関東軍への信頼をふかめ、祖国の名誉を守る基礎となることでしょう。なぜなら関東軍の命をうけて、私共が暗殺した満

支の要人は、これまでに数十名の多きに達し、そのすべては私の一存で、私慾のために殺害したことになっているのです。その私を、関東軍が見逃して置くことは、住民の疑惑を深め、これからの親善関係に悪い影響を与えます。私の使命は終ったのです。女だてらに、男装して、馬を乗り廻すことも、これで必要がなくなりました。お父さまのお志をついで、アジアの礎を築いたと思えば、いま死ぬことが、私にとって一番倖せなのではありますまいか。私は、命令によって行動しました。私慾のためなどと云われて死ぬのは心残りですが、これもお国の名誉を守るためには、喜んで悪名をうける覚悟です。それにしても、案じられるのはあなたの行末です。天に地にも、肉親といえばいまでは、あなたと私と二人きりなのに、あなた一人を置いて行く切なさ。腹切る苦しさより、あなたの歎きを思うと、断腸の苦しさを覚えます。どうぞ、元気で、しっかり勉強して下さい。そしてよい旦那様へ嫁いで、強く倖せに生きて下さい。姉は、悪い女として死にます。けれど、あなたにだけは私のつらい立場をわかっていただきとうございます。明日は、被害者の家族から鞭打たれ、そして大衆の面前で切腹します。汚物を流さぬよう、毎夜胃洗滌と浣腸をしています。女乍らも、日本人として恥しくない自決をとげたいとねがっております。おそらく、腹十文字にかき切り、臓腑をつかみ出して死ぬことでしょう。死装束は、いつも作戦の時に着けていたカーキ色の乗馬服と乗馬ズボンそして黒の長靴をはいた男装にします。いまの私は、死を怖れません。ただ切り損じて取乱すことを怖れます。燃えるだけ燃えて、いさぎよく死につきたいと思います。では、未練がのこります。これでお別れいたしまず。いつまでも〳〵お倖せに。

御機嫌よう。

姉より。

「……」

千枝子は、読み終って、ジッとうつむいています。

相馬少尉は、静かに立ち上って縁側へ出ます。綺麗に掃き清められた庭に、桜の花が散っています。

「相馬さん。千枝子は泣きません。姉は、お国の為に死んだのですものね。でも、姉は思い通りに切腹出来たのでしょうか。見苦しい死に方はしなかったでしょうか。」

千枝子の声は涙にくもってはいましたが、しっかりとしたひびきを持って相馬少尉の胸にせまるのでした。

「はい。御立派な御最期でありました。牧田さんは、死刑の五日前から胃洗滌と浣腸をされ、切腹にそなえていられました。当日は、はじめに被害者の代表六名が代る代る鞭で牧田さんを打ちましたが、それも立派な態度で受けていられました。切腹は、作法通りに十文字腹を切られ、右手で腸を摑み出して、尚も心臓を突こうとされましたが、すでに力つきて心臓へ届かず、かなり苦しまれたようです。そのまま室内へお運びして、井上参謀長はじめ幹部将校が御臨終に立会いました。『お約束は立派に果しました。部下をお願いします』と苦しい息の下から、途切れ〳〵にいわれた時には、一同涙にくれました。最後まで意識はしっかりしていられ、君ケ代を歌ってくれとお頼みになり、君ケ代をききながらお亡くなりになったのです。全く、男も及ばぬ美事な御最期でありました。――これはあまりお歎きになるようであったら、お見せすることは差控えるようにいわれて来たのですが……。」

相馬少尉は、そういい乍ら、ポケットから数葉の写真をとり出します。そこには、美千代の切腹の光景が、なま〳〵しく繰りひろげられて居ました。

突立てた処、引廻して一文字に口をあいた腹、十文字腹の凄惨なシーン、臓腑をつかみ出した処、担架で運ばれる処、井上参謀長に抱き起された断末魔の姿など、目をおおうような血みどろの美千代。――でも覚悟の自決

ですから、流石に取乱した様子はなく、美貌をゆがめて苦しむ姿にも、気高い大和撫子の心意気がうかがわれます。

千枝子は、むさぼるように写真に見入っていましたが、やがて

「有難うございました。姉も定めし本望だったと思います。……」

「井上参謀長殿からも、くれぐれもよろしくとのことでした。それから、御承知の通り、姉上の件は、内地では極秘事項になっておりますので、遺書は、このまま相馬が持ち帰るよう命令されております。御諒解下さい。」

相馬少尉は、遺書を千枝子の手から取上げ、ポケットへしまいます。

「では、これで。失礼しました。」

「……」

遺骨と、最期に着けていた血染の乗馬服、長靴、短刀、それに遺品の数々が自動車から座敷へ移され、相馬少尉は鄭重に挨拶して帰って行きました。

死の準備

千枝子は、どす黒くこわばった血染の乗馬服をひろげ、短刀の鞘を払ってみます。短刀は切先から二三寸の間一面に血くもりが現れ、美千代の下腹の脂肪が、ねっとりと刃をつつんでいます。涙がとめどもなくあふれて来ました。

「お姉様。さぞ苦しかった事でしょう。千枝子も、きっとお供いたします。」

……。そして何日かがすぎて行きました。

千枝子は身の廻りの品物や、家、地所などを整理し、余分の金や品物を匿名で寄附したり、葬儀の費用を積立てたりして、後へ迷惑のかからぬよう、一切の手続きをすませました。彼女は、白無垢の振袖を作らせ、裾の乱れぬよう袴まで用意して、自刃の機会をうかがうのでした。

時は来ました。井上参謀長が上京したのです。千枝子は参謀本部に井上を訪ねました。井上は、彼女に会って、自殺の危険を感じ、それとなく生命の尊さを説いて短気をいさめるのでした。彼女は、美千代生存中からの井

上の厚意を感謝し、この上は、私の行末についても力添えをねがいたい。ついては明日の夕刻に成城の宅までおいでをいただけないでしょうか、と申出ます。訪問を承知した井上参謀長の心の隅にのこる漠然とした不安。

千枝子は帰宅するや、婆やに休暇を与えて家から去らせ、こまごまとした物を片附けて切腹の席を用意するのでした。

翌日は朝、昼とも果物を摂って腸を浄め、壁に姉の写真と乗馬服を飾り、浣腸、胃洗滌もすべての姉の通りに行うのです。

姉は男装でしたが、千枝子は白振袖に、これも純白の袴を胸高に穿いた女らしい身拵えで自刃したいのでした。

千枝子は夕暮がせまる頃、美しく化粧をつくし、白装束を身につけます。純白の襦袢、振袖、袴、そして股間には、これも真新しい晒がキリキリと喰入っているのです。

彼女は玄関の式台に、井上参謀長あての遺書を置き、奥の一間へ入ります。

鏡にうつる自分の姿にジッと見入る千枝子そしてさらしを取って鉢巻をします。りりしい中にあどけなさの残る顔。

彼女は、用意の白布に端座し、姉のかたみの短刀を抜き放ちます。

姉の乗馬服と写真が飾られた正面に白布が敷かれ、彼女は、その中央に座っているのです。座右には、これも形見の拳銃が用意されて、万一死にきれぬときのために弾丸ごめされています。

彼女は、白しごきで両のヒザをしっかりとくくりつけ、静かに諸肌をくつろげはじめます。

白無垢散華

「千枝子君！しっかりしたまえ！井上だ、井上だ！」

「ううゝむッ」

「わかるか、わかるか！」

「むうっ……」

あゝ、千枝子は白無垢の死装束を朱に染めてのたうち廻っています。井上参謀長は、従卒を病院へ走らせ、千枝子を抱き起こして励ましているのでした。見れば千枝子の血みどろの下腹からは褐色の腸がはみ出し、ごぼごぼと生臭い血汐が噴流して行きます。

「うゝっ……。い、井上閣下……ち、千枝子は、千枝子は……シ、死にたい……。このまま……ころして！ウゝッ……。」

「短気をおこしてはいけない！傷は浅いぞ！しっかりするのだ。」

「い、いゝえ。ち、千枝子は……ア、ア、姉上の、ところへ……行きます。か、かなしい思い出の、中に、生きるより……い、いっそ……揃って……あ、アジアの……な、り、ます。私の……さ、最期……み、見て……見て！」

ウーッ、と烈しい呻きにつれて、短刀は右脇まできりきりと引廻され、更に、

「ア、ア、まだ足らぬ……。ま、まだ……。な、なんのッ……。ウゝムッ！」

男のように絶叫しながら千枝子は短刀を抉って左へと引戻します。歯をくいしばり、ぶるぶると両手を小きざみにふるわせながら、刃を深く〳〵押込んで行きます。

「ア、アアッ！……ウーッ！」

引廻す千枝子の手が、ぎくッと硬直したかと思うと、傷口は大きく開いて、多量の血がどっと畳の上へ飛び、彼女は眼を見開き、歯をくいしばって悼えています。

ごぼッ、ごぼッ。と生暖い血汐が堰を切ったように白布の上へ流れ落ちて行きます。

腹部の動脈をかき切ったのでしょうか。

「ウムー、ウムーウッ！」

千枝子は断末魔の苦しみに、虚空をつかみ身をよじって悶えるのでした。

もう手当てしても助かる見込みはない。

――井上参謀長は、千枝子の耳へ口を寄せ、

「千枝子君！すまぬ。姉上のみか、あなたの命まで犠牲にしてしまった。尊い人柱となって行かれた姉上に、まさるとも劣らぬ立派な最期、井上たしかに見届けましたぞ！お礼をいう。お詫もしよう。どうかお国のために、神となって守ってくれ給え。」

深傷の耳にも、井上の声は届いたのでしょう。物云いたげに息をはづませていましたが

「……む、むうっ。……う、うれしい……。ふ、ふ、ふくを、ふくを！」

〝ふく〟といわれて、井上は何のことかとっさに判断がつきかねています。

「千枝子君！何がほしいのだね！何がほしいのだね！」

「う、うつ……。か、かたみ……。ふ、ふくを……。とって……。むうっ……。」

井上は、姉のかたみの乗馬服を涙乍らに壁からはずし千枝子の手に抱かせてやります。

「く、くゝッ……。あうっ、あうっ！」

ぐッ、ぐッと腰をしごく彼女。乗馬服に頬ずりしたかと思うと、

「ア、アアッ！ウーッ

「ウーッ。」

腹から絞り出す呻き。そのまま、がばと俯伏せに倒れた彼女は、二三度烈しくけいれんして動かなくなりました。

取乱してはと、白いしごきでしばった両ヒザも、しごきはとっくに解けて、袴姿を選んだ彼女の周到さが裏書きされています。

救急車が駈けつけた時には、すでにこと切れた千枝子の遺体が、井上参謀長の手で、鄭重に横たえられ、最後まで抱きしめていた姉の乗馬服が体の上にかけてありました。

苦痛にゆがんだ顔も、いまは白蠟のようにすき通っています。

姉と妹、二人ながらの生血を吸った乗馬服と短刀が、悲しく人目をひき、血汐の生臭い香りが、凄惨な室内にいつまでも淀んで、春の夜は、いつしかしらじらと明けはなれて行くのでした。

（完）

臨時増刊号「責小説特集号」大好評発売中！

（表紙色刷、本文中質紙使用）売切れぬうち即刻お申込を！　定価一部二百円

「責小説特集号」は主として昭和二十七年度に発行しました本誌の中から悦虐作品として好評を得ました作品二十篇を選び出し全部新しく挿画を描いて再録したものであります。いずれも力作揃いばかりで、この特集号一冊によって昭和二十七度発行の本誌の主要な作品を網羅していることになります。八葉の口絵は内容から取材して、滝れい子氏、北原純子氏の二人を煩して描いて頂いた力作ばかりですから、これだけ独立しても十分に観賞価値のあるものと思います

巻頭口絵　拷問（片矢薫・作）　滝れい子画
吸血女流画家（岡田咲子・作）　北原純子画
ある奇術師の恋（吉丘垣根・作）滝れい子画
鬼兵衛刺青異譚（二俣志津子作）滝れい子画
遊女葦水の最期（片矢薫・作）　北原純子画
縛られた妻（早川新二郎・作）　滝れい子画
巫女屋敷の責絵巻（岡田咲子作）滝れい子画
読切傑作責小説　拷問（特高刑事の惨虐行為）片矢　薫
賭犠（奔淫マダム狂騒曲）　二俣志津子
巫女屋敷の責絵巻　岡田　咲子

老いらくの恋異聞　榛ノ木参一
復讐のドラマ　片矢　薫
鬼兵衛刺青異譚　二俣志津子
吸血女流画家　岡田　咲子
ある奇術師の恋　吉丘　垣根
惨虐戦慄の徴用女工　片矢　薫
遊女葦水の最期　古川　裕子
囚衣　片矢　薫
奴隷妻　桂　牧次郎
悪魔と口紅　岡田　咲子
悪女　早川新二郎
縛られた妻　片矢　薫
廓の灯影　岡田　咲子
MとS　竹谷　十三
責苦　岡田　咲子
記録係　上村秀久雄
赤に憑かれた男

愛好家の記録（ノート）

―私が拾ったアブの種々相―

とやま・かづひこ

折にふれて新聞雑誌から拾った材料に、見聞を取入れてノートしようという、かづひこの計画もことしの二月号以来六月号までで、数えれば『二十七話』に達した。

人はよく己がアブノーマルの趣好、をなにか世に恥じてひたかくしにかくそうとする。しかし、行きすぎた秘密主義は無意味だと思う。

かづひこの仮面にかくれて毎月同好の方々にレポートを送るこの拙稿にも、実は二人までもかかっては本誌の有力な寄稿家であった先輩が、かづひこの住所、職業までも相互に知った上で、いろいろとアドヴアイスをしてくれているのである。

それにつけても、何と世の中にはアブノーマルの人の多いことか。コプロラグニーの人すら、かづひこの知っているだけでも男女併せて六名。そしてそれらの人々は己の趣好を満たし、充実した生活をエンヂヨイしているのだ。たのしきかなアブの世界。さて二月号からの小話に、便宜のため第一号の『ストッキングシエーカー』からナムバーをふることにしてみた。読まれる時に利用して頂ければ幸いである。

今月の第一話は『内外タイムス』三月二十七日号のコラムから。

(28) 臭いに憑かれる

◇横浜市鶴見区内の住宅街に〝エロさん〟と呼ばれる変態男が現われてご婦人連の度肝をぬいてる。この男は白昼、住宅街を歩き回っては主婦たちに

『便所の臭いをかがせてくれ』

と云って駄々をこねる始末で主婦たちは気味悪がっている。やはり春ともなればイカレた人間がふえるものらしい。

× × ×

便所の臭いをかぎたがるのは酔狂だが、この便所の二字をかづひこ流に読み直すと、所

はオミットして『便』でよろしい。

つまり、特定の人のからだから出たそのもの、モット分り易く云うなら、ねらわれた主婦の、便の臭いをかがせてくれと懇願して歩くのなら、賛成だ。

かって、かづひこは、知り合いの、有夫の美しい女性を、崇拝するの余り、直接談判に及んで、かの女の、固形物をめぐんで下さいと頼み込もうと計画、入れる容器まで用意しながら、さすがにイザとなると、何か気おくれして、ついに計画のみに終ったことがあるが、女性の特有の臭いを慕うの余り、一軒々々野犬のごとくうろつき廻り、便所をねらうその『イカレた男』の気持が、よく解るのである。

世の婦人方よ、心配はいらない、左様なナイトが訪問したら、エンリヨなく、固形物でも液体でもめぐんでやって下さい。

(29) 若い女性をチラリ

日本観光新聞より拾う。

生理現象をチラリ二百円（これが見出し）…春風になるとアタマに来るのが増えるとみえてモロモロの珍商売が現われる。これもその一つで、最近上野公園で、生理的現象をしている女性の現場をチラリと拝見させて金を取るというのがいる。夜西郷さん付近を歩いていると二十七八才角刈りの男が、誘いの声をかけてくる。案内する先が暗い木立の蔭で、しばらくすると若い女性がキヨロキヨロ辺りを見廻しながらやって来たと思うとサッとスカートをまくって、ジヤーッと生理的現象をやる。ほんの一瞬の見料が二〇〇円也。このポン引と女はもちろん馴れ合いで二人はアトで二〇〇円を折半。イヤ驚き入った話。云々という寸話。

× × ×

ここで考えられるのは、液体が二〇〇円なら、中にはモットふんぱつしてもよいから、固形物の実演場面を、見たいという人も出てくるであろうということ。

かくされたものは余計知りたいもの。

かづひこが、この場面に出会ったとしたら彼女が立去ったあと、その場に、地に唇つけて、そのうま汁を、一滴のこさず吸いとり、一とかけらも、残さず食べつくすであろうということ。

しかも、始末に使われた、落し紙のゆくえなど考えると、胸がおどるのである。

(30) 液体置場にて

先輩のSさんが盲腸炎で、同愛病院に入院との知らせを受けて、とにかくタクシーでかけつけた。

Sさんは、すでに手術を終り、ベッドに休んでいた。大した心配もあるまいとの医師の言葉にホット安心したかづひこは、急にトイレに行きたくなった。

同愛病院は、つい最近アメリカの接収から解除されただけあって、内部の設備はすこぶるよろしく、Sさんの入院したとなりの病室は、婦人室とのことで、気のせいか、トイレまで美しく磨き立てられていた。

そしてアメリカ式に重いドアと、シンとしづまり返ったよい気分をもっていた。

ついでに朝からたまっていた排泄もすませようと、かづひこは、この落ちついたトイレが気に入って中へ足を踏み入れた。

ドアの上に『LADYS ONLY』とあったが、これは無視した。

だって、どうせ使うなら、レデイ用の方が気持がよいもの。

ところが、面白いものがあった。

窓の下に、棚があって、透明なガラスの一目で判る尿器がズラリと列をつくっているのである。

尿器には夫々、かづひこのあこがれの液体が入れられ、一個一個に患者の名がしるされてある——。

液体は、色の濃いの、濁ったの、澄んだの尿器一ぱい溢れるばかりのもの、八分目、七分目、さまざまで、これに『岩上君江』とか『大久保よし子』というように、それぞれの

尿器のあるじたちの名が記入されている。さすがに、レディス・オンリーのトイレだけあって、全部女名前であることは云うまでもない。

かづひこの視線は、この尿器にピタリとくぎづけされてしまった。

もしも、御主人の顔を一目でも見ることが出来たならば、この尿器を相手に思うさまたのしむこともできように、かづひこは、金しばりにあったようにその場に立ちすくみ、この検査用に、ベッドの上で強制的に取らされたであろう、これらの液体の主の姿態をあれこれと思いめぐらすのであった。

(31) 熱海の旅先で

会社の大切な取引先を十社ほど四月六日の第一日曜日に、熱海の富士屋ホテルにお招きしたときの話。

とくに奥様又は恋人御同伴で、とくだけた社長のしやれた発案で、十人のお客が十人の婦人を連れ、接待側のかづひこの方は、社長の秘書のT嬢と、他に婦人社員三名男子四名という、女の方が数の多いグループで、その賑やかなこと。

例によって、かづひこは、或る目的から、ソッと目を光らせ、耳をすませての随行記である——。

ふだんは、取すましている麗人たちも旅の恥はかきずて、まして、お供をうけたまわる吾々社員なぞは、人間のカスとも思わぬ人々だけに、ときにはその振舞いは、サディストそのものとも思わされるのだった。

お客さまの婦人たちと、社側の美女四名、かづひこに、よきエサを与えてくれるには、モッテコイのグループで。

ゆきの車中で、すでに、

『分らなくて困るから、トイレに一緒にきてちようだい』

と、落し紙を持たせ、お供を命じた女性群は、かづひこたちをこき使うのに面白味を感じているかに見えるのだった。

夕方ホテルについて、疲れた身体をバルコニーで休ませていると、突然ボタボタと雨だれのシズク……。おやと見上げると、

『ホヽヽ、かかった?』

と笑顔、そこには、Aさんという一行の中でも最も若く美しく、そして最も『残酷』なひとが、今やタオルを軒先に干すところ。そのタオルのシズクが、点々とかづひこの頭に落ちるではないか。

だが、このシズク、あるいは、彼女の汗も脂も、体液も含有しているかも知れぬ。或いは、大切な身体のすみずみまでも拭ったものと考えられる。

そう思ったら、例のクセが、頭をもたげて来た。

『よくしぼって上げましよう。下へ投げてごらんなさい』

愛想笑いにゴマ化しつつそう声を上げるのが、終るか終らぬうちに、天から、シズクをたらしたらしタオルが降ってきた。

それを受けとめ、力一ぱいしぼって、しぼった水をコップへ取る……。

『こちらへ乾しときます。かわいたら届けますよ』

誰が、この場の光景をみても、招待した商社の社員が、大切なお客さまに、さりげなくして差上げたサービスとしてうたがう者もないだろう。

さて、そのコップの中のものを光線にさらせば、さながら白ブドー酒のよう。

汗と、アカと、体液と、ホルモンと、それらのミックスされた、何とも云われぬ味!

女性のものなら、タオルのシズクまで美味と感ずる己の心を、いっそうとましく思いながらも楽しい気分もかくせない。そしてその夜の大宴会が又大さわぎだった。酔って、旅先で、自制心を失った気位の高い人々。

チーンとかんだ、ハナ紙をポンと投げてよこして捨ててちようだいという。

トイレが大変よ、と呼ばれて行ってみれば酔って、もどしたもののあと始末はさせられる、水洗の水を流し忘れて来たあとの始末を、固形物の臭いにむせびながら、かづひこ

は喜んで引受けもした。

『ちよっと、フラフラして、うまく出来ないワ』

酔ってする御不浄のむづかしさは、かづひこもよく知っているが、うしろからおさえてくれたのまれる。

宴会場にもどれば、悪酔いした、タオルの女王A子さんが、かづひこにからみ出し、宿のサービスの悪さを洗いあげて、いきなり吸い物ワンの蓋を取って、『カーッ』と青タンを吐き込み、

『これを支配人に呑ませるのだ』

ときかない。

下手に出て、おだやかにナダめれば、

『じや、支配人の代りに、アンタ呑みなさいヨ』

と来た。

ナンボ、かづひこ好みのお吸い物だとて、二十人も並んだ満座の中では、うまそうに呑むこともためらわれると、

『あたしのあげた吸い物が呑めないの』

とすごいお叱言。

止むを得ずという渋い顔で、彼女のタンをすすり込めば、満場ヤンヤのかっさい。

こうして、一と晩中、けだものと化した、美しい女性たちのすさまじい饗宴に、さすがのかづひこも、たんのうした。

ふだんはとりすましたレデイたちも、ひとたび、環境が変れば、連鎖反応をおこして、このように、変ることを知ったのは、よき体験であった。

(32) しやれことば

誰が云い出したものかは判らないが、最近水商売の女性の間では、トイレのことを『税務署』と呼び、排水することを『税金を払ってくる』とフザけて呼ぶのが流行している。客席に、はべった美しい女性が、

『ちよっと税務署へ……』

というと妙にエロテイックである。

又別の言葉で、トイレにゆくことを、『二重橋』ともいう。

これはどうもしやがんだヒップの双つの丘の形が、二重橋と似ているからのようだ。

『あゝあ、税金払って、サッパリしたわ』という女性があった。

そのたびに、かづひこは、心の中で（勿体ない）とため息をつくのである。

だって、そうではないか、無駄に流し去る『税金』なら、そのまま、じかに呑ませてくれるか、せめてグラスにとってくれれば、千円を投じても惜しくないもの。

ところで、いつだったか、飲酒後に出てくる『税金』にはアルコールが存在しているか否かためしたことがあるが。モノはためしと、ビールを一本呑んでもらい、それを『きき酒』したが、たしかにアルコール分が感ぜられ気のせいかホロリと酔った。こうなると彼女を酔わせたアルコールが、再び口から、体にまわり、快よく酔わせてくれる。面白い酒のあじわい方だと思う。

ふだんは取すましたレデイが、大酔して理性を失い、男の口を便器と見立てて使うのは空想としても面白いが、口に受けた『人の呑むべからざる酒』を喜び呑んで、酔いにひたれたら、Mの男性として、その興趣は天にも上るものではあるまいかと思う。

(33) おジユース

カゼをひいて、二日間絶食、その間ジユースばかり呑んで過した女性があった。

かづひこのクセをよく知るその女性は、見舞いに訪れたかづひこに、

『あたしのおジユースよ』

とグラスにとっておいてくれた。

熱のためであろう、赤くにごった彼女のおジユースは、ピリッとからく、ズルホンアミドのにおいをおび、お世辞にもうまいものとは云えなかった。

しかし、高熱のあとのソレを、ゆっくりとグラス一杯分を一時間もかけて、味わい深く心ゆくまで舌にのせ得たことは、たまらない幸福だった、精神的に——。

(34) チョコレート

このテーマは、二三の新聞、雑誌で、コントとして扱われているので、すでに御承知の方も多いことと思うが、一応かいつまんでノートしておこう。

横浜の洋娼の体験談で、時は終戦直後。ある女性が、米軍将校のオンリーとなった月の手当が五万円。但し条件がある。

というのは、契約後三日、四日間全然食事をしてはいけない。ただ水とチョコレートを摂ることが許される。

五万円の金ほしさに、命令を忠実に守って彼女は水とチョコレートだけで、食事の代りとする。

やがて三日、

くさいきいろい便とはうって代って、チョコレートのかたまりが、コロコロと出る。

その時の光景を彼女はこう述べている。

板の間に新聞紙を置く、前にはスープ皿、うしろにはパン皿をあて、そこでトイレに入るのと同じことをさせられた。

彼は『ワンダフル』を連発し、前に廻り、うしろに廻って、あかず眺め、しまいには感極まった表情で目を細め、そのチョコレートを残さずむさぼり食った。

という、又他の筆者によれば、彼がソレを食べたのではなく、彼女に食べることを強要し、腹を立てた彼女は、口に含んでおいて、スキをみて接吻して、口中のものを、口移しに彼に食べさせ、そのとき彼は、あまりの感動に気絶せんばかりだったという。

その後も、彼の好みは進む一方で、連日のごとく、チョコレートばかり食べさせられて悲鳴をあげ、五万円を三万円に値下げして、その代り、食事はふつうのものを食べ、ただ固形物のみを提供するという。半ばナンセンスなコントがある。

しかし、この中には、米将校のコプロ性癖がアリアリと感ぜられる。

しかもその男は固形物のみでなく、液体も要求し、訪れてくる友人にもウイスキの代りに呑むことをおすすめたというのから、これは、典型的な吾党の士である。ちなみに、外人、とくにフランス人には、コプロ党が割合い多く、日本に来ている人々の間では、これが日常茶飯事とされているとも聞いている。

(35) S子のはなし

週刊誌『土曜漫画』四月十八日号十六ページの一節から。

× ×

――彼女たちの使用している下着を売ってくれとか、身体をがんじがらみに縄でしばってくれとか、ひどいのになると『ぼくが馬になるから上に乗ってくれ』という要求もある。子供のようにS子さんは男の背中にまたがってハイシドウドウとやる。彼は一生懸命座敷中を走りまわる。これが楽しいのだ。

S子さんが一番びっくりしたのは、『排泄物を呑ませてくれ』という客がいたときだ。でもこうしたのぞみも聞いてやった。

× × ×

Mの客の生態を写した一節だが、呑ませてくれとか、食べさせてくれという要求はよくあるという。

但し断っておくが、このS子というのはゲイボーイといわれる男性。

このつけたりを読んで、異性のものなら、どんなものにも深い興味を抱く、かづひこもガッカリさせられた。

同性のものなど、身ぶるいするほどイヤだと、いつも思うからだ。

(36) トイレ修理員

鉄筋アパートがふえるにつれて、水洗便所の家庭もふえ、従ってトイレ修理業も忙しいようだ。

友人のトイレ修理店員、木戸君のはなし、

× × ×

ぼくが、三田のTアパートへたのまれて行ったときですが、トイレの奥へ何かつまっ

て取れないから修理してほしいというのです。さっそく仕事にかかりましたが、案外むずかしくて、時間がかかったのです。若い奥さんか、二号さん風の女の人が、困った顔で、

『出ちやいそうだから、一寸便所を使わして……』

と入って来ました。

丁度仕事の都合で手が離せず、ぼくは、便器の下へ首をつっ込んで作業中のまま、

『見ちやイヤよ』

とか云いながら、奥さんが、しやがんだのです。よっぽど出たかったのでしょうね。

小の方かと思ったら、それがそうでなく、大の方で、下痢気味で、そのくさいこと、長いこと、

ぼくは身動きもできずに、丁度アタマの上で、しやがんでいる奥さんの様子を描きながら鉛のパイプをひねくっていたのです。奥さんは、やがてすまして出ていきましたが、水も流さないのですよ。

修理屋なんて、人間じやない。便所の一部だぐらいにしきや考えてないんですね。

とボヤいていた。

木戸君よ、ひがむなかれ。

見ようったって仲々見られない、麗人のお、なか掃除の図を、しかも頭の上にし、そのにおいをかぎ、惜しみなく、流さずに出て行った食欲のはてのものまで見せてもらえたなんて、吾々から云わせれば君は天下の幸福者。

ただ君が、ノーマルだったために、その奥さんのことをボヤいているが、よいではないか、便所の一部、便器以下と見られることに身を灼くような快感が存在することを知れば。

足の下に身をさしのべた男の頭上またがって、思う存分、はいせつの快味にひたったであろう。その奥さんは、或いはSであったかも知れない。うらやましきは木戸君だ。

奇譚クラブ旧号の在庫案内

本誌は復刊以来、すでに二十八号を数えましたが、現在既刊の中左記の通り在庫しておりますから御入用の方は、お早い目にお申込下さい。既刊の中、すでに若干の売切品が出ておりますが、売切品の補充は絶対に出来ませんし、在庫している中でも、残部の僅少なものがございますから、欠号は今の中に御求め願います。尚、各月号の目次は、最近号の表紙裏、目次裏に掲げてありますから御参照下さい。

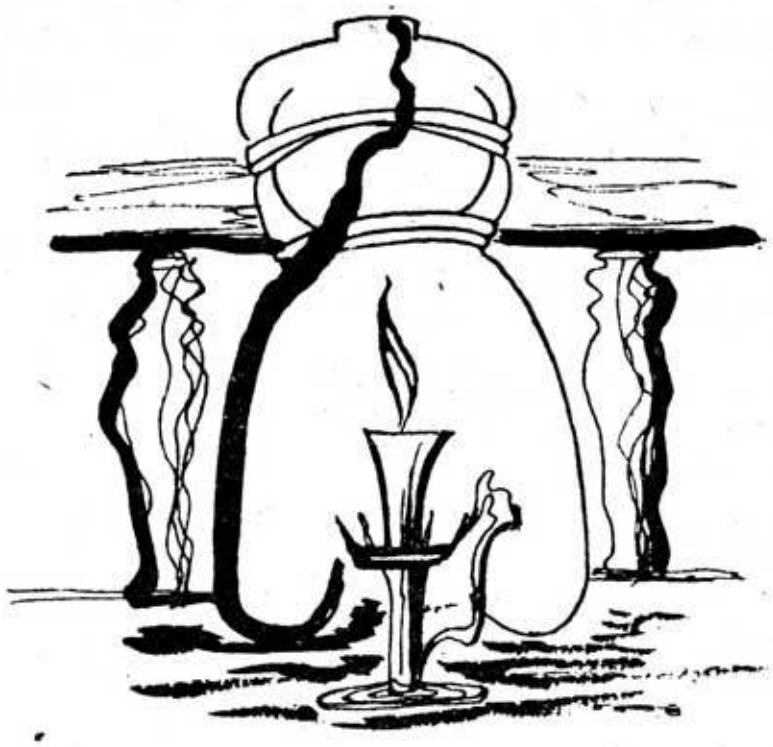
★復刊号の分

復刊第1号（昭和30年10月号）〈売切〉
復刊第2号（昭和30年11月号）〈売切〉
復刊第3号（昭和31年4月号）定価二百円
復刊第4号（昭和31年5月号）定価二百円
復刊第5号（昭和31年6月号）定価二百円
復刊第6号（昭和31年7月号）〈売切〉
復刊第7号（昭和31年8月号）〈売切〉
復刊第8号（昭和31年9月号）定価二百円
復刊第9号（昭和31年10月号）定価二百円
復刊第10号（昭和31年12月号）定価二百円
復刊第11号（昭和32年1月号）定価二百円
復刊第12号（昭和32年2月号）定価二百円
復刊第13号（昭和32年3月号）定価二百円
復刊第14号（昭和32年4月号）定価二百円
復刊第15号（昭和32年6月号）定価二百円
復刊第16号（昭和32年7月号）定価二百円
復刊第17号（昭和32年8月号）定価二百円
復刊第18号（昭和32年9月号）定価二百円
復刊第19号（昭和32年10月号）定価二百円
復刊第20号（昭和32年11月号）定価二百円
復刊第21号（昭和32年12月号）定価二百円
復刊第22号（昭和33年1月号）定価二百円
復刊第23号（臨時増刊号）定価二百円
復刊第24号（昭和33年2月号）定価二百円
復刊第25号（昭和33年3月号）定価二百円
復刊第26号（昭和33年4月号）定価二百円
復刊第27号（昭和33年5月号）定価二百円
復刊第28号（昭和33年6月号）定価二百円

〔代理部だより〕

○本誌復刊号は全部送料は当方にて負担いたします故、誌代のみお送り下さい。六冊以上一緒にお求めの方には、手札型写真三枚、十二冊以上一括してお求めの方にはキヤビネ版写真三枚贈呈いたします。

○休刊前の本誌は全部売切れてしまいました。今後の補充はつきかねます故、御諒承願います。



運命の少女

創作

嵯峨紀世

食事が済み、さっと後片付けを済ませた志津江は、何もかもさらけ出した気分の晴れやかさと、芙佐子の優しい気持、そして芙佐子も自分と同じように縛られる事に興味を持っている事が分った事などで、嬉しくて仕様がなかった。そして急いで芙佐子の部屋へとって返すと、いきなり、

「奥様ア、昨夜から今朝迄、奥様、どんなにされたか教えてエ」

と甘えながらせがんだ。今はお互いに同じ気持である二人であり、芙佐子も隠さずに一昨夜から今朝にかけての事を話して聞かせるのだった。それによると、

『あの夜、志津江の部屋から帰った英雄は不機嫌にむっつりしていたが、芙佐子がどうしたのかと問うと、矢庭に躍りかかり、志津江が使ったハンカチをあっと云う間もなく芙佐子の口の中に押し込むと手拭で猿轡を嵌め、両腕を背にねじ上げると、もがき暴れる芙佐子の寝巻の紐を解き、寝巻を剝いでパンテイ一つにして高手小手に縛り上げ、ばたつかせる両足も括ると、志津江を縛り上げていじめただろうと詰問した。勿論、芙佐子は知らないと首を左右に振ると、嘘をつくな、本当の事を白状しろと皮バンドで打たれたが、寝耳に水の事であり、真実知らないのだから、それに芙佐子は、未だ実際の経験はなかったが、映画の緊縛場面や雑誌の挿絵中の緊縛姿態を見ても、胸がときめき、その主人公と自分とを置き換えて考える程の謂わば軽いマゾヒストだった為、今、英雄に始めての実際経験を味わされる事に興味は感じても、別に恐しいとか厭だとかは感じない程だったから、尚更の事、首は縦には振らなかった。二、三回バンドで鞭打った英雄は、そのバンドを放り出すと、芙佐子を抱え上げてベッドの端に身体

を弓なりにそらせた恰好にくくりつけると針箱から出した針で、腕、乳房、腹、尻、ももと所構わずチクリチクリと刺し始めた。その苦痛とほのかにわき始めた愉悦の感とにやがてぐったりとなった芙佐子を見ると、英雄は責める手を止め、急いで彼女の縛しめの紐を解き、抱きしめると今迄と打って変った優しい言葉をかけ、彼の腕の中で顔を埋めた芙佐子をそっと寝かせた。

そして暁方、再び猿轡を嵌めて縛り上げ逆海老の姿勢の儘、布団の中に横たえ、朝食を食べる時だけは猿轡を外したが、あとはその儘の姿態で半日を過ごさせ、退勤して帰宅すると、志津江を映画に出してやった後、裏の物置迄毛布で包んだ儘抱いて行き、梁に吊り下げて鞭打ち、気絶すると再び部屋に運ばれ、夜は志津江を縛って来て誰にも気付かれぬようにした上で、ベッドの両端に両手両足を拡げた姿勢で縛りつけて体の隅々までくすぐられ、失神すると、縄を解かれた上、ウイスキーを飲まされ、暁方迄眠らせた上、朝になってから再び志津江が見たように縛り上げられた儘、布団を掛けられていた』

というのである。志津江が

「奥様、それで縛られる時、全然抵抗なさらなかったのですか」

と聞くと、芙佐子は、

「それが不思議なのよ。最初は突然で驚いたし、軽い抵抗したけど、二回目からあとは、どういうものか、強く抵抗する気が起きないで殆ど黙って縛られたみたいなのよ。そして、どんな責めに遭っても、苦痛は感じたけど、それが不思議とうっとりとなるのよ。私ってマゾヒストなのでしょうね」

と笑いながら答えるのだった。それを聞きながら志津江は、過去の自分のたどって来た道は、仕置、折檻、リンチの連続だった事を想い浮かべ、その為に自分も何時の間にか奥様と同じように責められることを喜ぶというマゾヒストになってしまったのではあるまいかと真剣に考えて居た。

夕方、英雄の帰宅時間が迫った頃、芙佐子は、英雄を怒らせるもとだからという理由で志津江に朝と同じように高手小手、逆海老の姿勢で縛らせ、猿轡を嵌めさせて貰い、ベッドに横になった。

やがて、英雄が帰宅し、夕食も済み、志津江の仕事も一段落つき、時計が八時を報じた頃、志津江の部屋に英雄が現われ、話があるからその儘でよいからと呼びに来た。何だろうと不思議に思いながら、寝巻の儘英雄達の室に一歩足を踏み入れた志津江は、あっと驚きの声を発し、急いで室を出ようとしたが、いち早く英雄に扉を閉められ、両肩を押えられてしまった。室内には、身体をベッドの両端に両足を開いてそれぞれ括りつけられ、高手小手に縛り上げられた上体は、床に逆さに頭と肩だけを支えて置かれ、芙佐子の両膝の上にローソクが立てられ、次々に垂れる蠟涙の熱さに猿轡の下からうめき声を出し逆さまの上体をくねらせている姿があったのだ。志津江はあの優しい芙佐子の責められ、苦悶している姿は正視出来なかった。両手で顔を覆うとうつむいてしまった。だが、その手は英雄の強い腕で引き下げられ、後にねじ上げられると、寝巻の帯を解かれ、寝巻を剝ぎとられた上、シュミーズ一枚のまま高手小手に縛り上げられてしまった。それはあっという間もない程の早さであり、志津江が驚いて叫んだ言葉も「あっ、旦那様、許して、ゆる……う、う……」と、口の中に布切れを押し込まれ、その上を手拭で覆われてしまうと、うめき声になってしまった。次いで英雄は、パンテイ一枚で緊縛された志津江を芙佐子の真向いに立っている柱に、胸から腹、腰から脚とぐるぐる巻きに縛りつけると、顔を下げない様に猿轡の上から帯で柱ごと巻きつけてしまった。志津江は、芙佐子の苦悶の様を見まいとしても直ぐ目の前に見なければならなかった。だん〳〵膝の上のローソクが短かくなり、焔の熱さが直接肌を焦がすようになると芙佐子の苦悶の様子は一層凄まじさを加えて来た。全身油汗を流し、あの美しい顔も正視し得ない程苦悶にゆがみ、口を覆った

猿轡の下からは、けもののほえる様なうめき声を洩らし、緊縛された上半身をくねらせる様は此の世のものとも思われぬものだった。然し、流石に愛妻に火傷を負わせる様な真似もしたくなかったのであろう。英雄は短かくなったローソクを急いで取り去ると、濡らしたタオルで両膝を冷やした。やっと、ローソク責めから開放された芙佐子は極度の疲労の為に気を失ってしまったらしく、全身から力が脱け、ぐったりして目を閉じていた。勿論、その様子を見せつけられた志津江も恐怖と興奮に、全身びっしょり油汗を流し、猿轡の下で激しい息遣いをしていた。

やがて、猿轡を外され、口の中にウイスキーを注ぎ込まれ、意識を取り戻した芙佐子はやっと目の前に柱に括りつけられた志津江を発見すると、「貴女、志津江さんだけは止めて、ね、お願いだから、こんなにしない……う、う、う」と叫んだが、素早く嵌められた猿轡の為に後の言葉はうめき声になってしまった。身もだえしながら哀願する芙佐子を意にかけない様な素振りで、タバコに火をつけた英雄は、吸い込んだ煙を大きく吐き出した後、次の様な告白をして二人を驚かせた。

「今夜は、お前達には悪いけれども、今迄僕の計画して来た事をすっかり話して聞かせてあげよう。本当は、僕はサディストなんだ。然し、それを仲々表面に出せずに居た。出来る事なら女を縛り上げて責めてみたいと内心何時も思っていたが、矢張りそうされるのを喜ぶ女を相手にするのでなければ出来る事ではない。それに之は他人ではうまくない。少くとも僕としてはね、矢張り、互いに信頼し合い、愛情で繋っているものでなければ出来ないのだ。そこで、僕は最愛の妻である芙佐子、お前に目をつけた。然し、何かのチャンスがなければ、突然、訳もなく躍りかかってというわけにはゆかない。それでそのチャンスをつかむ迄は或る程度無意識のうちにそういう女になってゆく事を願って、僕は緊縛雑

誌を素知らぬ振りをしては、お前の目につく所に置いて、内容を見たお前がどんな反応を示すかを注意していた。ところが嬉しい事には、お前はその本の縛られた女の絵や写真を見た時の目の輝きが違うし、息も弾ませている様だという事が分り、之は大丈夫だと思った。然し、先刻も云った様に、訳もなくいきなり縛り上げるという訳にはゆかないから、何かお前の落度を見つけて、それを理由に責めるという動機を作り、その上で望みを遂げるのであれば不自然ではないと思い、始終、注意していたのだが、お前ほどしっかりしている女はない。何一つとして落度らしいものが見当らない。僕はがっかりした。之は何か策略を回らして濡れ衣でも被せた上、それを理由にして責め上げる方法しかないと思っていた矢先き、運よく、志津江、お前を見つける事が出来た。而かも身の上話を聞いてみると随分、縛られ、責められた経験を持って居る事が分り、之又嬉しく思った。そして、僕の望みの相手は最初の一人から二人に変った。そこで、僕の策略だが、確かにお前達二人には済まないと思ったが、志津江にお前自身が気付かない様に一芝居打たせる、それはもう実行済みで既に二人共充分承知している事だが、志津江が芙佐子、お前に縛り上げられて苛められているのを僕が発見して、それを理由に芙佐子、お前を有無を云わさず縛り上げ本当の事を白状しろと責め上げる。色々な責めを出来るだけ数多く、身体に障らない程度にやれば、きっとマゾの傾向のあるお前だから、やがては僕の思う通りになって呉れるだろう。同時に、志津江の方は志津江の方で、後でお前は嘘をついて僕を瞞した罰にお仕置だと縛り上げる。そうすると過去にいやという程経験して来ている事だから、その経験の積み重りと、その時の経験の再現とで、これ又マゾ化するだろう。こう思って、出張を幸いに志津江に一寸耳打ちし、縛られて苛められた様に計画させる為に緊縛雑誌をそれとなく見るように仕組んだ。その結果は御覧の通りすべて僕の策略通りになった。僕は嬉しくて仕様がなかった。だが、時々、冷静になった時、策略を用いて迄お前達二人にこんな苦痛を与えてよいのかと反省させられ、一そのい事もうこんなむごい仕打は止めてしまおうかと思うのだが、僕のサデスティックな性格は直ぐ又暴威を振いたくなる。どうしても押えられないんだ。然し、僕はお前達二人を此の上なく愛しているつもりだし、それにお前達二人に傍を離れられたらと思うと、僕はどうしたらよいのか自分でも分らなくなるんだ。でも、今、僕はお前達に之迄の事を詫びて、之からは何とか止める様努力しようという気になった。芙佐子、志津江、済まなかった。」

話し終った英雄は、つか〳〵と芙佐子の傍へ寄ると手早く縄を解き、更に志津江の縄も解き放すと、ベッドに腰を下し、頭を抱えてうなだれた。芙佐子はじっとまぶたを閉じて夫の話を聞いていたが、告白が終り、縛った縄を解かれると

「貴方、私、そんなこと何とも思っていませんのよ。私、こうして貴方に責められるのが嬉しいくらいなのよ。そんな顔をなさらずにもっとひどく責めて」

と、英雄の膝にしがみついて云った。

志津江は、英雄の告白を聞いて、始めは英雄の策略に乗せられた事を怨み、又随分むごい事をする旦那様だと思ったが、芙佐子の此の言葉を耳にすると、それに引ずられる様に矢張り、旦那様は本心は優しい人なのだ。こんな人に救われてこうして此の家に暮らさせて貰っている自分は本当は幸福なのだ。それに、自分は過去、お仕置、折檻、リンチと縛られる事ばかりを経験して来たせいか、縛られ、責められる事には、今ではそんなに恐怖感も嫌悪感も起きないし、むしろ快い気持がする位だ。どうせ私の歩んで来た道が縛られる事ばかりだったという事は、之からも矢張り縛られる事の連続だという事になるのだろう。きっと私は縛られ責められる運命を背負っているのだろう。そんな運命にあるのであるならば、此の優しい人ばかりの家でその運

命と共に暮らした方が幸福かも知れない。それに奥様もああ云って居られるのだし、奥様と一緒ならどんなにして責められても我慢出来る様な気もする。と瞞された怒りも忘れ、多分に少女の持つ感傷の中に浸りながら志津江も

「旦那様、奥様、私をどうか、何時迄も此処に置いて下さい。そして、うんと責めて下さい。どんなにされても構いません。お願いですから、奥様と二人一緒に責めて下さい」

と叫んだ。英雄は、志津江の此の叫びを耳にすると、いきなり志津江の手を取り、しみじみした口調で

「志津江、お前には、本当に済まない事をした。それでも、此処に居て呉れると云うんだね。それはこっちから頼みたいくらいだ。是非何時迄も居て呉れ。なあ、芙佐子、お前、どう思う」

と云ったが、勿論、芙佐子もその言葉に大きく頷いた。

その夜は、芙佐子が極度に疲労しているので、その儘寝む事にしたが、志津江もそこに泊まり、三人で、此の次から休日の前夜、遊戯的に芙佐子と志津江とが責められるという約束をした。

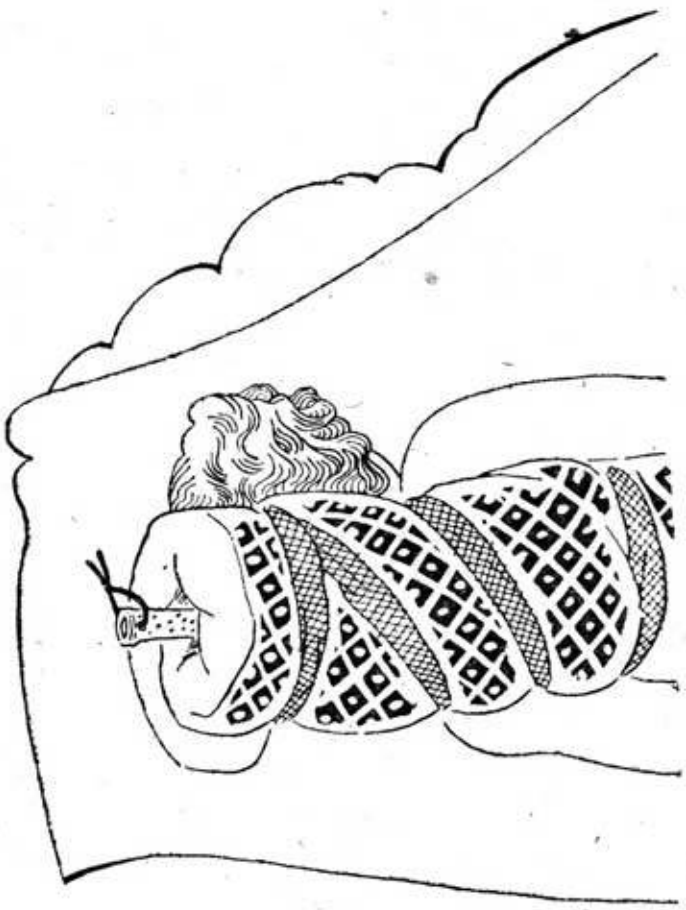
こうした約束の後の最初の土曜日がやって来た。志津江は、今夜英雄に責められる事を思うと朝から不思議に落付かない気持で、そわそわして押え様もなかった。だが、運悪く、芙佐子が風邪がもとで微熱を出し、朝から床に臥った儘、夜を迎えた。志津江は、奥様と一緒にと思いながら、一日中付きっきりで看病に努めたが、熱は下っても到底緊縛遊戯には参加出来ない容態だった。帰宅した英雄は心配して、「今日はお前が駄目だし、止して又此の次にしよう」と云ったが、折角楽しみにしていたであろう夫の気持を察すると、芙佐子は

「私、無理と思うから止すけど、貴方、志津江さんを相手になさったら、ねえ、志津江さんも楽しみにして居たらしいわ。私、一人で居てももう大丈夫なんだし、でも、十二時前には戻って来てね」

と、しきりに奨めたので、英雄もその気になり、「そうか、お前には悪いけど、一寸だけ志津江を相手にやって来るか、直ぐ戻るからね」と云うと、芙佐子のひたいに接吻して寝室を出志津江の部屋へやって来た。今日は奥様が御病気だし、残念だけど諦めなければならないと観念した志津江が雑誌でも見てと手に取った所へガラリと襖を開けて入って来た英雄を見ると、びっくりしながらも遊戯が出来る事に胸を躍らせ、急に明かるい気分になると、英雄に云われる儘に、普段ならばこんな筈が

ないのに、恥ずかしさも感じないものの様にさっさと寝巻を脱ぎ捨てパンテイ一枚になると、両眼を閉じた儘その場に坐った。今日はどんな縛り方をするのだろう。志津江の心の裡はその期待で一杯であった。

英雄は先ず長柄の箒を軸にして掛布団をぐるぐると丸め、更にその周りを帯で端から端迄をしっかり巻き、一寸位では曲らない丸太ン棒の様にすると、それを一体こんなものを作ってどうする積りなのだろうと、いぶかしげに見つめていた志津江をいきなり押し倒し口中に布切れを押し込み、その上を手拭で覆い後頭部でしっかり結ぶと殆ど為すが儘の志津江に布団の丸太ン棒を手足で抱きかかえる様にさせ、両手首を合わせて縛り、両足首もあぐらをかいた様にして重ね合わせ縛ると、その余り紐を両肩から背に持って来て交叉させた後、両腕から手首へ廻して結ぶと、身体を屈めて丸太ン棒を抱きかかえた姿勢の為にぐんと突き出た尻を目がけて皮バンドの鞭が飛んだ。ピシリッ、尻に焼きつく様な痛みを感じた志津江は屈めた身体を伸ばして尻を引こうともがきながら猿轡の中から低いうなるような声を発した。ピシリッ。又一打ち、又ピシリッ。流石の志津江もその痛さに縮められた身体を伸ばし加減にしながら頭をのけぞらせ、うめいた。志津江のその苦しむ様をじっと手を休めて見ていた英雄は、手にした皮バンドを放り出すと、ゆっくり志津江の手足の紐を解き、自由になった身体を一廻転させて仰向かせると、両手を布団の丸太ン棒を背負わせる様にねじ上げると、その後で両手首をきっちり括り、更に両足首も両足をうんと拡げさせた上、布団の背後でしっかりと括ると、その姿をじっと見つめていたが、やおら腰を下げると、両手の指先きを細かく使いながら、わきの下、脇腹、足の裏と次々にくすぐり始めた。



「うッふ、ふ、む、む、うー」

と、猿轡の下からうめき声を洩らしながら殆ど動かし得ない身体を僅かによじり、涙を流しながら苦しみもがく志津江から目を離さずに尚もくすぐり責めが続いた。

やがて、英雄の激しい擽り責めに精魂尽き果てたかの様にぐったりとなった志津江は、緊縛の紐を解かれ、猿轡を外されると、布団の上に横たえられた。掛布団をその上に掛けてやった英雄は、うっすらと目を開き、ニッコリと笑って、「旦那様、まだまだ行かないで、もっと責めて」とささやきかける志津江に、

「だめ〳〵。今日は此の辺で止めとこう。奥さんが病気で寝ているんだからね。」

と優しく云うと、可愛いいやつと云わんばかりに志津江の頬を両手で挟むと、その可愛いい唇に軽く接吻して「じや、おやすみ、ゆっくり寝なさいよ」と云い残して部屋を出て行った。だが、英雄が志津江を責めている最中、足音を忍ばせながら廊下を歩いて来て志津江の部屋の襖をそっと開けて中を隙見して帰った芙佐子のある事には、この二人には全然気が付かなかった。

翌日は休日を好天に恵まれたので、三人揃って公園で楽しい一日を過ごしたが、その翌日、月曜日、英雄が出勤し、志津江の仕事も一段落ついた頃、芙佐子に呼ばれた志津江は芙佐子の部屋へ入ってみると、芙佐子は珍ら

しく一人で緊縛雑誌を出して見て居た。驚き且自分も見たい気持になった志津江は

「あら、奥様、その雑誌、ご覧になっていらっしやるのですか」

と、自分が呼ばれて来た事も忘れ、いきなり、芙佐子の横に坐りその雑誌をのぞいた。

「まあ、志津江さんったら、入って来るなりなんなの」

芙佐子はこう云いながら、雑誌を志津江の方に廻しながら、その目がキラリと光った。

「志津江さん。貴女に来て頂いたのはね、本当は此の本の事なのよ」

芙佐子にそう云われて始めて、自分が呼ばれて来た事に気付き、

「あら、御免なさい。奥様。私、それを忘れて、いきなり此の本に飛びつくなんて」

と詫びたが、

「いいえ、いいんですよ。あのね、実は、此の雑誌見てたら急に貴女を責めてみたくなったのよ。一昨夜、私駄目だったでしょう。だから、無性にやってみたくなったのよ。貴女責められて呉れる。それとも今日は駄目」

と云う芙佐子の言葉に、責めてみたいというのは一寸おかしいとは思ったが、別に気にも止めずに

「あら、奥様が私をですか。ええ、私、喜んでどんな責めでも受けますわ。私の大好きな奥様に責められるんなら」

と答えると、芙佐子はニッコリ笑うと、

「そう、じやあ、此の雑誌持ってお部屋の方へ行きましょう」

と云いながら、志津江の手を握りながら立ち上ると、隣りの室の扉を開けて中へ入って行った。一緒に付いて入った志津江は「あっ」と驚きの声を挙げた。そこのベッドの上には、麻縄やら帯やら、手拭やら小さなスポンジの玉やらがきちんと用意されてあったからだ。奥様は随分手廻しがいいなと内心思ったが、芙佐子に

「さあ、始めましょう。此の雑誌の此処の所此の通りやってみたいのよ。いい」

と云われ、緊縛雑誌を差し出されてそれを覗いてみると、そこには「本妻のリンチを受ける二号」という四枚ばかりの絵が載っていた。志津江はそれを見た途端、自分が英雄に恩のある主人である云うこと以上の慕情を抱いていることが脳裡をかすめ、本妻である芙佐子に責められる自分は二号、と思うと偶然の一致だろうが、何か肌寒い感じがわいたが、この優しい奥様がまさかと思い、幾分気を取り直すと、芙佐子に命令される儘に着ている衣服を脱ぎ捨て、シュミーズ一枚の儘、おずおずと芙佐子の前へ進み出た。芙佐子は先刻とは打って変って幾分青ざめ、キラキラする目を志津江に向けると、

「志津江さん、今日は、すべて本当らしくやるつもりだから覚悟してね」

と云うが早いか、志津江が「あっ」と声を立てる間もなく、口中にあのスポンヂ玉が無理矢理押し込み、その上を手拭で頬がくくびれる程きつく縛ると、両手を背に高々と括し上げ、余り縄を腕から胸に二巻き巻きつけると、その縄尻を握り、片方の手で、いきなり縄でくびれてむっちりと盛り上った乳房をいやという程つねり上げた。

「むむ、むむ、」

その痛さに耐えかねて、顔をしかめ、猿轡の下からうめき声をあげながら、芙佐子の手から乳房を避け様と身体をよじらせる志津江を見ると、芙佐子は

「さあ、おとなしく此の上に上るのよ」

と云いながら志津江の背をこずいてベッドの上に上らせると、両足首をベッドの両端に括りつけ、両足を大きく拡げた形で膝をつかせると、手首の縄尻をぐっと後に引いて手首がベツドのてすりに付く程にしてそこに結びつけた。志津江は両足を大きくひらいた儘膝立ちの姿勢で身体を背後に大きくそらされてしまった。どうする事も出来ない志津江をギラギラする目でねめつけていた芙佐子は、再び、脇腹をつねった。そしてひねり上げた儘仲々その手を離さない。

「むむ、むむ、むむ」

縮める事も伸ばす事も出来ない身をよじら

せながら、志津江はうめいた。やがて、全身に油汗が流れ始めた。それを見た芙佐子はつねる手を引込めると、志津江の手首からベッドのてすりに繋いだ縄だけを解いてやった。今迄弓なりにそらされていた身体が自由になったのだが、志津江はその身体を起した儘支える力を失って前のめりに布団のうえに勢よく倒れると、その儘気を失ってしまった。

「あっつつ、」

胸に焼ける様な熱さを感じて、ハッと正気に戻った志津江は、ベッドのテスリに膝の後を乗つけた様にして開いた両足の儘縛りつけられ、その胸の隆起の間にローソクを立てられて居たのに気付いた。勿論、両手は背に高々と括られた儘である。焔の下から次々に溶けて流れる蠟涙の熱さに僅かに動かせる腰をよじり、上体をくねらせながら、志津江は猿轡の下から、けもののほえるようなうなり声を出して居た。芙佐子はそれをじっと見つめていたが、見るに忍びなくなったのか、つと手を伸ばすと、志津江の胸からローソクを取り去りながら、

「どうだい。少しは骨身にこたえたかい。私の夫を寝取った罪の償いは、まだまだ之からされるんだよ」

と、今迄の芙佐子とも思えぬそんざいな言葉を投げかけると、急いで志津江の膝の縄を解き、殆どその疲れの為に無抵抗の志津江の両足首を重ね合わせてぐる〳〵巻きに縛るとその縄尻を取り、更に志津江をうつ向きにすると、口を覆った手拭を外して、志津江が口中のスポンジ球を吐き出す余裕も与えず、足首をぐんと背後にそらせ、その縄尻を球の為に大きく開かれている志津江の唇の間に割り込ませると再び足首迄伸ばして結びつけた。あぐらをかいた姿勢を更にそらされ、足で引張れてぐっと後にそらされた顔、唇の間に割り込ませられた麻縄で唇の端は裂けんばかりの志津江は死ぬ思いであった。一杯に開いた口唇の間から「あーあ、あ、」と言葉にならぬ声を絶えず出し続け、それと同時に出すまいとしても、ひとりで出て来るよだれを流し、

「奥様もう許して。私、この儘だと死んでしまいます」言葉を出せぬ志津江は一杯涙を溜めた目で必死に芙佐子に哀願した。芙佐子はそれを見ると、急いで口唇の縄を取り除き、再び手拭で猿轡をすると、やっとそり身から解放され、ぐったりしながらも肩で大きく呼吸している志津江を見下すと、

「志津江さん。苦しかったでしょう。私、本当はこんなひどい事はしたくないの。だけど貴女は、貴女は」

と云うと、「ワッ」と顔を両手で覆うと泣き出した。ハッと我に返り、芙佐子の方に顔をねじ向けた志津江は、そこに肩を震わせながら泣き続ける芙佐子を見た途端、芙佐子が此のあと何を云おうとしているかも、又、こんなむごいリンチを加えたのかも分る様な気がした。すべては、自分が英雄に愛された事に起因しているのだ。その場合、殆どの妻は夫よりも相手の女を憎む。あの優しかった芙佐子も矢張り、自分を憎んでいる。だから、こんなむごいリンチも気兼ねなく出来るのだ。然し自分は自分から進んで英雄の愛を求めたのではない。自分には罪はない。何とか、その事を芙佐子に知らせたい。そして早く誤解を解かなければ。志津江は必死になって叫んだ。だが、いくら叫んでも、その声は口をしっかり覆った猿轡の下で消えてしまう、外に出た声はうめきだけである。志津江は諦めた。どうせ私は縛られ、責められて暮らす運命を背負っているのだ。此の儘黙って居れば、旦那様も安泰だろうし、私だけが憎まれ責められて居ればよいのだ。こうして責められるのも今の自分にとっては、苦痛でも何でもない。むしろ、たのしみであり、よろこびである様に思われる。私の運命は、私をだんだんこんな人間に仕立ててゆくようになっているのだろう。志津江はそう考えると、何となく気も楽になり、先刻の激しい責苦の疲れで、高手小手に縛しめられ、猿轡を嚙まされた姿の儘深い眠りに落ちて行った。それを放神した様にぼんやり見つめている芙佐子を忘れたかの様に。

（終）

鬱陶しい梅雨が終って、初夏の太陽が樹間に輝やき、裏の赤松の木の梢で松蟬がジージーと鳴き出す頃になると、彦造たちの仕事も暫く忙がしくなった。

彦造は開墾に行くのをやめて、段々畑で麦を刈った。おたねも鎌を持って彦造と一緒に立働いた。京子も生れて初めて手甲と脚絆をつけて谷間の麦畑に立ったが

おたねは、日本手拭を顔の両側に垂らした上に、縁の広い経木の帽子を冠った姿で、京子に注意した。

この谷間の畑から彦造の家まで、距離はわずか一キロほどしかないが、細い登り道が多いので、最初は「なアにこれ位ー」とたかを括っていた穂麦の重量が、次第に肩にこたえて来て、思わず顔から汗が流れた。

京子は、部落へ降りる広い道まで出ると、傍の草の上に腰をおろして、肩から背負い木を外して一息入れた。初夏の風が京子の少し、はだけた胸に吹き入って爽やかな気分になった。眼を上げると道端の柿の若葉がみずみずしい新緑の色を湛えて風にそよいでいた。そしてその上を真澄の空からくっきりと抜け出たような白い雲が、ぽっかりと中天に浮んでいた。町にいた時には想像もできなかったような清澄な空気、そして静寂な風景であった。京子はふっと信一郎と一緒に暮していた頃の町の生活を思い出した。煤煙と埃の混ざった濁った空気と絶え間ない騒音、そして夜が明けたら眠るまで金、金、金と金銭に追われ通しで些か

「お前はまだ馴れとらんから、この束ねた麦を少しずつ運んだがいい」

、彦造はそう云って束ねた穂麦を鎌で指さした。

京子は背負い木に数束の穂麦を載せて肩に背負った。

「肩に荷を背負ったら、足許に気を付けないと危いよ」

も心に余裕のない毎日の生活――。そこで頼れるものは信一郎の愛情だけであった。しかしその信一郎も今は亡くなってしまった。

京子は其処でもう一度今の自分を振り返って考えた。彦造とおたねの生活の中に入って来て、家族と同じように生活している。自分は身寄りの無い身体ではあり、仕事も人並みに出来ない不馴れな者なので、彦造とおたねに対しては家族というよりも、もっと従順に仕えて来ているつもりであるが、彦造もおたねも京子を別に厄介物扱いにはしていない。おたねは時折、京子に激しい嫉妬の情を燃やすことがあるが、平常はむしろ肉親の姉のように、甲斐甲斐しく世話をして呉れる。彦造は小さな女の感情など、まるで無視した者のように括然としているが、少なくとも彼が従来おたねと二人きりの單調な生活の中へ、京子を加えたことによって起る、種々の変化を楽しんでいる様に思われる。

今では京子の心の隅に、彦造の愛情のこもった荒々しい責めを秘かに望んでいる気持があることを京子自身で意識するようになっていた。それはおたねという、はっきりとした妻の座を持つ彦造へ対しての京子の変型の愛情かも知れなかった。

――ひよう、りろ――

向うの藪から聞えてきた老鶯の声に、我に返った京子は、慌てて背負い木の紐に両手を通して肩に担がうとしたが、疲れた彼女は容易に立ち上れなかった。彼女は穂麦の束を積んだその背負い木を柿の木の根元まで引摺って行き、更めて紐を肩に掛け、荷を柿の幹を利用して滑り上らせて担がうとした。そして肩を揺っては上体を反らし、両足をもろに開いて踏ん張った。力を入れて踏ん張ると、裾を短かく着た絣の着物の裾が乱れて、あられもない姿になった。京子は、その背負木ごとな恰好の自分の姿に気が付いて思わず頬を赤らめた。

京子が穂麦を三回ほど運ぶと昼になったので、彼女は飯櫃と菜を入れた鍋に、茶碗や土瓶や湯呑箸などを大きな籠に入れ、背角い木に担いで畑に行った。その時、彦造は畑の畦に腰を下して煙草を吸っていたが、おたねの姿が見えなかった。

京子は籠から食器を取出しながら

「おや、義姉さんは？」

とたずねると、彦造は

「あそこだよ」

と顎で谷の向うを指した。

この畑を、とろとろと降りきると谷川があり、岩を伝って清冽な水が音を立てて流れている。

――お便所にでもいったのか知ら――と思った京子に

「行って見なよ」

と彦造が意味ありげな薄笑いを頬に泛べて促した。京子が畦道を下りようとすると

「それを持って行って、昼飯は向うでしようや」

と彦造が云ったので、京子は又引返して、食器を担いだ。

梅雨あとの谷川は、いつもより水かさが増していて、飛び石伝いに用心して渡らねばならなかった。

とんとん、と身軽に渡った彦造が、危なつかしげに越えかねている京子の様子を見ると

「ははは、手を貸してやろうか」

と笑いながら、又戻って来て京子の担いでいる食器を自分の肩へ掛け、岩と岩とを大きく踏まえて彼女の体を抱き上げた。京子は――ひよっとして彦造の足が滑ったら――と不安な気持ちで、思わずしっかりと彦造の肩にしがみ付いた。近々と男の体臭が彼女の嗅覚を刺激して、急に血が頬に上るように思われた。

谷を渡るも道はなく、色んな木と雑草が生い繁っていた。

彦造は京子を抱いたまま、

「そろそろ蛇が出る頃だ」

とからかいながら、ずんずん熊笹を踏み分けてゆくと、間もなくぽっかりと開けた場所に出た。

松や栗や椎の木などの喬木に囲まれた中に三十メートルほど、まるで芝生の庭のように柔かい草で蔽われた平地があった。

「そうら」

彦造は笑いながら、わざと急に手を離したので、京子は

「あッ」

と叫んでその草の上に横倒しに転がった。

「まあ、ひどい義兄さんたら……」

京子が小娘のように羞らいながら、慌てて乱れた裾を掻き合せて起き上ると

「遅かったのねえ、もうちやんと用意はできてしまってるよ」

と、おたねが二人の傍へ寄って来た。

おたねは彦造に云い付けられて、この平地の中程にある一本の松の枝から、長いぶらんこを吊り下げていたのである。

「ほう、もう出来たのかい？　どれ、ちょっと乗って見ようか」

彦造は無造作にそのぶらんこの板に片足を掛けると、片方の足で身軽に大地を蹴った。

「義姉さん、上って下さいな、こんなお菜で不味いけれど」

「ああ、お昼は何だって良いんだよ、お腹さえ大きくなれやいいんだから」

おたねと京子が飯をよそっている処へ、彦造もぶらんこから降りて来た。

「よし、あれなら頑丈で大抵大丈夫だろう、お京、食事が済んだら、今日は面白いぶらんこ遊びをやるんだぜ」

「京さんは大人になって、ぶらんこに乗ったことがあるの？」

「いいえ、子供の頃、町内の幼稚園で乗った位のものですわ。その時分も、男の児たちが我先きにと争って、仲々私達女の児は乗れなかったの」

「そうだろうね。今日はそんな餓鬼大将がいないからゆっくり乗れるわよ」

「あたしがあのぶらんこに乗るのですか？」

京子は高い枝から垂れ下った普通の二倍は充分にある長いぶらんこを見上げて、一寸不安そうな顔付きをした。

「そう心配しなくったって大丈夫、おたねは毎年今頃になると何遍もこのぶらんこ遊びをやっているんだから、おたねは自分が落ちないように、ぶらんこ作りも上手になったな」

彦造は土瓶の口から冷えた茶を唇へ流し込みながら、そう云って笑った。

明るい初夏の陽のあたる草の上で、話しながら昼食している三人の姿は、あたかも楽しいピ

クニックの様であった。ただ京子だけは彦造とおたねの云うぶらんこ遊びがどんなものか分らないので、軽い好奇心と不安の気持で食べ終りの食器を片附けた。

「片附けが済んだら、そろそろ始めようか」

「ええ、京さん、さあお出で」

おたねは京子の手を取ってぶらんこの傍へ連れていった。

「時候が好いんだから、着物は脱いだ方が良いだろうよ」

おたねはそう云いながら京子の帯へ手を掛けた。

「ああ、義姉さん」

京子は慌てて、おたねの手を拒んで身を退いたが

「誰も見ていやアしないよ。なんだねえ、いい年をして」

「でも、こんなに明るい戸外で……」

「いいじゃないか、すがすがしくって。あたしが乗る時には、いつも身体に何もつけてはいないんだよ。さあ、その手をお離し」

「ああ」

京子はおたねの激しい語調に押されて、ぐったりと腕の力を抜いた。

——真昼の戸外で裸にされる——

そう思うと、羞恥で思わず身体が小刻みに震えるのであった。

「腰の物は残しておいた方がよいぜ。それからおたね、今日はお京にこれを胸に締めてぶらんこに乗せよう」

彦造は、そう云ってズボンのポケッとから X型に中央を結んだ細紐を取り出して、おたねの足許へ投げた。

「おや、お前さんも案外思い付きがいいんだねえ」

「ハハハ、お前を縛ってやろうかと思って持ってきたんだ」

「ええ、あとで縛ってね。お前さんに責められるんだったら、あたし……」

「まあいい、早くしなよ」

「ええ、京さん。両手を横にうんと伸ばしてじっとしているんだよ」

おたねは細紐の結び目を京子の胸の中央に当てがって、四本の紐を左右の乳房の上下に廻して、背中できりっと締め上げた。

「ひーッ」

その細紐が京子のふくよかな胸の隆起の上下に喰い入る痛みに、思わず水平に伸ばしていた両手を胸へ当てて、悲鳴を上げると

「なぜ手を動かすんだい。ちったア辛抱するんだよ。それ、手を胸から離さないかい」

おたねは紐をぐっと引きつけて、向う脛で京子の尻をどんと突いた。

「フフフ、すっかり引締って、良い恰好になったじゃないか」

前へまわった彦造は、そういいながら、くりくりとむくれ上った京子の胸の辺りを眺めていた。

「ううッ」

京子は再び手を下したが、彦造はその手を摑むと、軽々と抱き上げて京子の身体をぶらんこに乗せた。

「あんた、京さんの手を留めてよ。あたしが足を繋ぐから」

おたねはそう云って京子の左足をぶらんこの乗り板の両端まで開かせて、くるぶしの上の所を左右の綱に別の細綱でぎっちり縛りつけた。同じ様に彦造が京子の両手を綱に縛ると

「さあ振るぜ」

と云って、京子の体をどーんと押した。

二度、三度。次第に振りの付いた京子の身体はぐるり、ぐるりと中天に弧を描いた。

燦々と初夏の陽の射す森の中の広場で、手甲脚絆に腰巻姿の京子が、高い松の木の枝から吊られたぶらんこに縛られて、まるで時計の振子のように大きく前後に揺られている。

それが後退する時には女の髪が顔に乱れて水中の人魚の髪のようにハラハラとそよいだ。

また、京子の身が前進する時には、腰巻の裾が乱れて旗のようにはためいた。京子はぶらんこの上で、捲れた白い脚を隠そうとしきりに膝を狭めたが、足首を左右の綱に縛られているので、風の弄るに委せるより仕方がなか

った。
「俺が乗って振ってやろう」
彦造はそう云うと、ぶらんこを一旦止めた。
「く、苦しい。義兄さん、もう降して……」
京子が哀願するのを
「まだまだ、これからだ。そら、今度は俺が相乗りだから一層気持が良いぜ」
そう云って彦造は六十糎程の竹を持って、京子の縛られている後からぶらんこに乗るとその竹を紐で締められて、むっくり隆起して張り切っている胸に当ててその両端を握り
「ひい、ふう、みい」
とぶらんこを揺った。ぶらんこの揺れが大きくなる程、彦造の身体の重量が京子の胸を押えている竹にかかるので、彼女は息が切れる程の苦痛に
「ひえーッ」
と悲鳴をあげた。
しかし、この苦痛は断続的で、ぶらんこが後退し切った時には、二人の身体が一瞬引力から遊離して宙に浮くので、サッと消えた。その代り、前進し切って後退を初める時には彦造の身体の全部の重みが、その竹に懸るので、それはぎりぎりと容赦なく京子の肌に喰い入り、乳房が今にも弾けるかと思われる程だった。
更に京子を苦しめたのは、彦造がぶらんこの振りをつけるため体を動かす度に、彦造の胯が彼女を後から押し上げるので、両足を開いたまま、身体をうんと前へ突き出した姿にならざるを得ないことであった。
草の上に腰を下して彦造と京子のぶらんこ乗りを見ていたおたねは、彦造が京子の胸にかけていた竹をぱらりと落したのを見て、ハッと眼を見はった。竹を捨てた彦造の左手は京子の髪の毛をしっかりと摑んでいる。京子は頭を後ざまに身を反らして悶えている。おたねには彦造のこの空中の責めが、何だか只事でないように思われて、妖しい嫉妬感情が昂ぶった。
おたねは草の上から腰を上げると、
「ちよっと待って」
と云ってぶらんこを止めた。
「どうした」
彦造はひらりとぶらんこから飛び降りると
「お前も乗りたいか」
とおたねの右手をぐっと摑んだ。
「あたしより、京さんを降して少し休ませておやりよ、ねえ」
「うん、そうしよう」
彦造は軽くうなずくと、京子の手足の綱を解いて草の上へ抱え降した。胸を締めている細紐を解いてやると、京子は半ば失神したようにぐったりと青草の上へ体を横たえた。午後の陽光に照らされて、つやつやと張りのある彼女の胸に、蝶型に細紐の痕が赤く浮いている。
「おい、おたね。今度はお前の番だ」
「ええ」
おたねは彦造が京子の責めに心を惹かれるのが堪えられなくなっていた。そして、京子より激しい責めに耐えることによって彦造の自分に対する愛情を繋ぎ留めようとした。
彼女は手甲も脚絆も外し、身につけている物を次々と足許へ辷らせて、あたかも森の精のような、小麦色の健康な肌を白日の下に浮き上らせた。
「フフフ、今日はうんと苛めてやるぜ」
「いいよ、あたしやお前さんの連れ添いなんだから、どうにでも気の済むようにしてー」
「強気なことを云っているが、どうせ音を上げるだろうよ」
「まあ、ねえ――。いいの？乗るよ」
おたねはそう云うと、ぶらんこの綱に手をかけようとした。
「おっと待った。お前にや、これではちよいと低いんだ」
彦造は、そう云って松の幹に巻き止めてある控えの網を解いて、ぶらんこを以前の位置より一メートル程吊り上げた。そうするとぶらんこの乗り板がおたねの胸の辺りになったので彼女一人では乗れなくなってしまった。
「こんなに高くしてどうするの、乗れないじやアないの」

「そうら、これでいいだろう」
彦造に押し上げられ、おたねはやっとぶらんこに乗った。
「高くて何だか危ないようだよ」
「しっかり綱を握っていろよ」
と云うと、彦造はおたねを縛る綱を口にくわえて
「やッ」
と懸声と共に飛び上っておたねの横に乗った。
「ああ、お前さん」
ぐらりと大きく揺れるぶらんこの動揺に、おたねは思わず、その上体を彦造に擦り寄せたが
「勝手に動くんじやアねえ、じっとしているんだ」
そう云って暫らくぶらんこの動揺の止まるのを待った。そして彦造はおたねに云った。
「おたね、尻をおろしてその乗り板を跨げ」
「えッ、こうして立っているんじやアないの？」
「お京とお前とは違う。お前はどんなにでもなると云ったろう。早くしろ」
「だって、そんなひどい恰好では……」
「お前は俺の云う通りにすればいいんだよ」
「あたしをぶらんこに跨がらせて、地に足が届かないように綱を上げたんだね」
「そうだ。お前はぶらんこ馬に乗って空中を走るんだ。さあ跨げ」
「ああ」
おたねが怖る怖る乗り板の上へ腰をおろすと、彦造は片方の綱を必死で握っているおたねの高く上げた両手首を細綱で離れないように緊ぎとめた。更に先刻京子の胸を締めていた細紐を取り出し
「もっと腹を綱の方へ押し付けるんだ」
と云いながら、腰のくびれのあたりへ廻してぶらんこの綱もろともに真一文字に腹を縛った。
おたねは、こんな縛られ方は初めてであった。女体を縦に引裂いたように胸乳の中央からぶらんこの綱が密着して、ざらざら、と異様な感触を肌に感じた。
彦造はおたねを縛っておいて下へ降りると松の枝を折って来て、一番尖端の松葉だけ残して小枝を払った。そして、思い切り高く吊

り縛られて張り切っている、おたねの腋の下を突ッついた。

「あッ、やめて、やめて……お前さん、そんなこと……」

「ハハハハ、松葉蜘蛛が這って、腋から胸だ」

「あッ、あッ、くッ苦しいッ……もうやめてッ……」

おたねは必死になって松葉を避けようと藻掻いたが、両手と腰をきっちりとぶらんこの綱に縛られている身体は、わずかに左右に揺れるだけである。

彦造は、おたねの身悶えする姿態を楽しむ様にあちこちを突っつき廻した。次には松の葉を束ねて、おたねの足の裏を擽った。手で触れてさえ気持の悪い足の裏を松の葉で擦られる苦痛に、おたねは

「あーッ、ゆるしてッ」

と悲鳴をあげて両足をばたつかせた。足は縛られていないので自由になったが、それゆえに彦造の松葉から逃れようとして足を上げたり反らせたりして一層むざんな姿態を展げた。

彦造は、草の上に起き直って、胸の赤い痕を撫でている京子を見ると

「お京、お前も来い」

と云って彼女の腕を取って、ぶらんこの傍へ引立てた。そして京子をおたねの後に同じように跨がせ、両手をおたねの腋の下から胸を抱えるように廻して、ぶらんこの綱に縛った。丁度おたねに被さった恰好になった京子の手と足から、手甲と脚絆とをはずすと、あとは腰巻一枚の姿になった。

彦造は、おたねと京子をそうして置いて附近の樹立の中へ歩いて行ったが、やがて手に太鼓の撥ほどの棒切れを持って帰って来た。おたねも京子もぶらんこの乗り板に馬乗りに縛られたまま、こんどは何をされるのかと彦造の挙動を眼で追っていた。

「お前たちの乗っているぶらんこ馬はじやじや馬だから、俺がこれから調教してやろう」

彦造はそう云うと、おたねの縛られている前へ廻ってその棒切れを振り上げた。そして

「ぶらんこ馬よ、ひんと鳴け、ひんと鳴け」

と拍子を取りながら、乗り板の木口を、丁度杭木を打込むように、こつんこつんと叩いた。

「ひえーッ」

と二人は狂気のような悲鳴をあげた。跨がされている乗り板から身体に響いて来るショックは、其処に全身の重量が懸っているだけに耐え難いものであった。おたねは吊られている腕を縮めて乗り板から腰を浮かせようと藻掻いたが、背後の京子が、抱いている恰好のおたねの胸をぎゆうぎゆう抱きしめて自分の尻を上げようとするので、お互の足掻きも結局は徒労に終ってしまった。

「お前さん、やめてッ……あーッ又……」

「ああッ……義姉さんッ……」

こつん、こつん。ぶらんこを跨いで身悶えする二人の女のふくよかな姿態を見ながら、彦造は乗り板の尖端を叩き続けた。

喚いても叫んでも、どうにもならない苦しさに、おたねは眼を瞑って喘いだ。眼尻から一条の涙がすーっと糸を引いた。

「おたね、そんなに嬉しいかい？そら、今度は。お寺の小僧が鐘を突きや、お山の鴉がカアと鳴く、それ、カアと鳴く」

彦造は、わざと面白そうに唄いながら、おたねの胸にその棒の先を当てて、ぐいと押した。

「うえーッ、たッ……たすけてッ……」

はッと眼を開いて、新らしい責めに、悲痛の叫びをあげたおたねの胸は、羽二重餅の真中を悪戯ッ子が指で押したように無残な姿になっていた。

「お客は庫裡で魚板を叩く、小僧は鐘木で鐘をつく、和尚は本堂で木魚をたたく、ぽんこらぽんこら木魚をたたく」

どこで覚えて来たのか、彦造は勝手な節をつけて唄いながら、ぴしりとおたねの胸をその棒で横打ちに打ち据えた。

「ぎえーッ」

おたねは魂切るような悲鳴をあげて、のけ反った。その棒で、今度は京子の露わになっ

切腹幻想曲

佐藤すみ子

双肌をぬぎて構えし十九なる
　処女（おとめ）の腹は波打ちあえぐ
下腹に刃あつれば行燈の
　ともしび消えぬ春寒き夜
恥かしと腹を押えき切腹の
　きず痕白く残れる娘は
春深く若き人妻もかかる夜は
　腹切りてみたくいとど悩めり
胸くつろげ下腹までも押開き
　刃（やいば）さか手に人妻あはれ
力こめぐつと突込むそのひとみ
　空しきまでに腹をみつめぬ
血しぶきの中に埋（うも）れる刃の手は
　一文字えがき静かに動く

ふつふつと血わき出でぬ切りさきし
　黄いろき脂肪の層の中より
もだゆれば膝はあらはになりにけり
　のけぞれば肩より着物すべり落ちにき
切先きを抜きてかざせばうつろなる
　目にもとまらぬ血のしたたりは
むかむかと嘔きつぽくなりぬ引廻し
　みのわたふくれ出でしその時
既に一文字またみぞおちに突立てて
　押下ぐとすらんか宙に刃ふるえる
あえぎあえぎ若き女は引廻し
　つと差し入れぬ我が腹へ手を

苛なんだ。

「さあ、最後に振り当てだ」彦造はそう云うとぶらんこに手を掛けて

「よいしよ――よいしよ」

と揺った。次第に振りを大きくつけると、ぶらんこはキラキラときらめく初夏の陽光の空中に躍って、おたねと京子の苦痛に悶える妖しい裸形が、赤い腰巻の裾をひらめかせて松の梢の近くまで舞い上っていった。

身体が真横になる位まで振り上げられた二人の身体が、まるで飛行機が降下するように地表に降りてくると、下で待ち構えている彦造の手に握られている手頃な太綱が

「びしーッ」と音を立てて二人の肌へ打込まれる。

「ひえーッ」

と悲鳴を残して、その打擲の下の二人は再び空中へ――。

降りて来る度におたねと京子の肌に交るがわる激しい責めの綱が飛ぶ。ぶらんこは半死半生の艶かしい二人の女を乗せて、無心に初夏の森の風を切って空中に弧を描いている。鳶が一羽空の高い処を大きく廻りながら、この三人の異様な動作を見ていた。

――つづく――

をばたつかせ、その打擲の棒から遁れようとすると、今度は胸を斜め前から、小ッぴどく突き上げられ、尻を叩かれ、腋の下を突かれ一本の棒が徹底的に京子とおたねの身体中を

た白い太股を、ぴしッ、ぴしッと続けざまに打った。

「ひえッ、義兄さんッ……ゆるしてッ」

京子がおたねの背中に顔を押しつけて、足

創作

月明に泣く

河村操

一

南国四国の徳島も年の暮ともなれば寒さはきびしい。昼すぎに駅についた佐田はそのままブラリと街の目抜通りを歩いてみた。歳末売り出しの飾付けも大分色あせた商店街を、人々は忙しげにゆき通っている。旅の途中の佐田にとっては、何のかかわり合いもない街の人々の動きだった……。

徳島の街は彼にとってはじめてではない。もう殆んど一年近くも毎月のように訪れておりながら、まだこれといって定まった宿もなく、あちらこちらとその時の気分や、懐具合でねぐらをかえてきていた。今日もどこか新しいところはないしからといった気持で歩いていると、

「佐田さん」突然呼ばれてふりかえった。商用相手の藤井だった。

〝まずい〟心の中でつい舌打をする。藤井はあまり今の佐田の気分に歓迎する相手ではない。しかし商売は大事だ。

「佐田さん。ここへついて知らさんとはひどいじやないか。どうしたんです。」

「なに、一寸街の景気をみていたところですがね。まあ、いいところで逢いましたよ。これから、つきあいませんか。」

「ああ、いいですよ。案内役は私がやりましょう。けどあんた宿はまだとっていないんですか。」

「ええまあね。どこか面白いところはないかと思ってるんですが

ね。」
「ああ、そんなことですか。それもどうです、私にまかせては。」
藤井に逢っては仕方もない。今日は止むを得ぬと佐田も一切をまかせることにした。やがて二人は肩をならべて富田街へ出た。
「天一の天ぷらといきましょう。どうです、佐田さん。」
「ええ、結構ですね。」
藤井は口先のまめさと裏はらに、大きい鞄を手一杯にもった佐田に手助けしようともせず、スタスタと足早に先立って急いだ。
天一の手前で藤井は、ふと足を止めて、
「佐田さん、あれ、どうです。」
「ええ？。」
「あの旅館、老松というんですがね。こういうところも泊らにやいけませんぜ。」
なるほど天一の真向いに一寸気付かない古びた格子戸の旅館があった。老松という看板も小さく目立たない。ただ色街にあるだけ、流石になんとなくなまめかしいにおいは残している。
「料理屋じゃないの？とめるかな。」
「ええ、とめますとも、相手によってはね。旅館ですよ。」
藤井のひやかす様な調子に反撥をかんじて
「よし。これにしよう。」
佐田はいいきった。
「ハハ……。まあ佐田さん。お向いでまず腹をこしらえてからだ。」
藤井は佐田の肩を押すようにして天一に入った。
「ラッシヤイ。」と勢いよく声がかかった。
佐田はつづいてのれんをくぐりかけながら、何気なく老松の方をふりむいてフト足をとめた。
一間半ほどの玄関戸をサラリとあけて、上り口の黒板をしきりとカラブキしていた女が、表をみて佐田とバッタリ視線を合わした。
「オヤ」と佐田はそれにかるい驚きをかんじた。それまで何年か、旅から旅への出張員の生活をしている佐田には、旅館の女中というものに大たい一つの既成観念をもっていた。しかし、その女は何か佐田の観念の枠からはなれたものを感じさしたのである。
「大きなハッキリした目だな。」佐田はまずそれを感じた。女中などにはみられないし生き生きとした視線だった。その目が、徐々に佐田の存在を意識し、はにかむような、それでいて相手をさそうような視線に変っていった。
「芸者みたいだな。着物もわりと派手だが……。まさか芸者が昼日中、こんな旅館でふき掃除もしまいし、ここの娘分かな。」
そんな考えにとらわれているうち、なんとなく足をとめてジッと女をみつめていたものらしい。
「佐田さん、佐田さん。早くおいでなさいよ。」
藤井が中からせきたてていた。
佐田はくるりと女に背を向けて天一の中に入ったが、女の視線をなお背後に強く感じた。

二

佐田が老松を常宿にしてから二月たった。あのときの女は美佐子といった。元大阪の南で芸者に出ていたが、戦後徳島へ戻り、今は伯母のやっているこの老松の手伝い女中をしていることを聞いた。彼女は佐田より三つ年上だったが、最初は同年だといい張った。佐田もそう思いこむ程動作や身体全体に張りがあって若くみえた。
佐田は徳島と高知の間を毎月歩くので、徳島へ泊るのも月の中三乃至五日だったから、二ケ月といっても、実際は十日たらず老松に泊ったにすぎない。しかし美佐子との最初の奇妙な出合いはお互いの心に強い印象を残し、逢うたびに親しみはましていった。
あの日の夕方、藤井と分れた佐田はその足で老松に宿を求めて入

った時、応待に出てきた女中は美佐子ではなかった。加代さんという娘で、佐田を二階の静かな裏座敷へ案内してくれた。美佐子の姿はみえないし、なんとなく失望しながら、昼間の人ときくわけにもゆかず、物足りない気持で加代さんに手伝わせ簡単な食事をとって一息入れているとき、美佐子が入れかわって出てきた。

そのとき佐田はちょっと面わゆいような気持だったし、美佐子も妙にとりすました恰好で佐田の顔もあまりみず、「どうぞ」と運んできたお茶をすすめた。昼間の派手な衣裳に化粧が濃い目だった。

「君は芸者をしていたのかい。」

佐田の質問は意地わるいようでもあり、また最初のきり出しにしては勢いあまって突飛でもあった。

美佐子はビックリしたように佐田をみつめて、

「ええ、三年程」とこたえた。

この最初の会話は後で二人で思い出してよく笑った。

「イキナリから君は芸者か、なんて随分えらそうな口をきく人だと思ったわ。」

美佐子はあとでこういった。

そのとき佐田は老松に二日泊って高知へ立った。

「早くかえっていらっしゃいね。」

美佐子はそういって佐田を送り出した。だが彼は約束の日より二、三日もおくれて徳島へ戻った。美佐子は

「もう、おいでにならないのかしらと心配したわ。けどお荷物もお預りしてるし、一度は御連絡下さるとたのみにしてましたのよ。」

と、さりげなくいったが、通り一遍でない彼女の気持が佐田の胸にツンときた。

親しみの増すのは早かった。加代さんともう一人他の女中がいた

が、もう誰も顔を出そうとはしなかった。二月のある夜、美佐子は二階の佐田の寝室を訪れた。おそくまでサンザめく近くの料亭の三味の音と、明滅する富田街のネオンが、真暗な佐田の寝室に色どりをそえた。

三

春になった。佐田が老松で過す日は、時と共に永くなっていった。徳島高知に色々分散させていた荷物も今は殆んど老松にまとめ上げられた。或日佐田は一つの小箱を運びこんだ。その箱とはこの年月彼が蒐集した女の責めに関する資料をあつめたものであった。

「なに？その箱。」

と美佐子が不思議がったが、

「大事の品さ、あけちやいけないよ。」

彼はそういってそれを書類箱の中におさめた。美佐子は彼の身のまわりにはとくによく気をつけ、衣類等自分の好きな様に手入れし整理しなければ承知しなかったが、彼の仕事の事については、一切ふれようとしない女だった。書類箱等には指一つさわらないのである。

しかし佐田は何かの時に、その箱を衣類行李の方に移したままで高知へたった。美佐子に今更知られても愛情にかわりがないという自信が働いたからだろう。高知行の途中、ふとそれを考えて

「あいつ、みたかな」

と思ったが、「みたならみたでもいいさ。」と何の心配もしなかった。そういえば美佐子と知りあってからこの数ケ月、新しい愛情の芽生えに心を奪われて、縛りに対する欲求が遠のいているのを知った。といって勿論全く忘れ去られるものでもなく、高知での一人寝の時など、悶える様な胸のうずきを覚えることも一再でなかったが美佐子と逢い、求めあう魂のままに赴くとき、それらはすべて忘却のかなたに去ってしまうのだった。

佐田が高知からかえったとき、美佐子は目をまるくしていった。

「あんた、あの箱なによ。」

「中をみたのか？。」

「みたわよ。ビックリしたわ。大切なもんだなんていって、」

「フフ……フン。」

「ホントにおどろいたわ。胸がハッとしてドキドキするのよ。」

佐田は笑ってゴマカした。しかし美佐子の目が彼をなじりながらも、あつく燃え、しつように追っているのにわざと気づかぬふりをして、心の中は同じような興奮を覚えた。

「毒だから、あんなものみるんじやない。」

という逆戦法に美佐子は、かえって彼の術中におちて入った。

それからは佐田はもう大っぴらに箱を床の間にそなえ、これみよがしに新しい蒐集をその中に入れた。美佐子は何か吾れからその箱の事に口出しできず、毎日掃除の度に箱をうごかし整頓したりしたが、敢てそれ以上ふれられないのがもどかしそうだった。

美佐子との佐田の生活はこの数ケ月幸福な新婚夫婦のそれに似ていた。朝はいっていらっしやいと送り、夜はおかえりなさいと迎え時に肩をならべて散策し映画をみた。彼が大阪へ戻るときは波止場に送って、しばしの別れを悲しんだ。佐田は今では老松の客か家人か分らぬ程で、おかみである伯母も彼を一族のつもりでいるようだった。彼は美佐子と共に老松の親せき知人のつき合いにも顔を出す程になった。

四

夏がきた。徳島の夏は有名な阿波踊りを頂点としている。富田の街中はこれに備えて浴衣の新調や、踊り、三味、笛、太鼓、かねの練習などに浮きたち、気のはやい人々は、小規模な屋内予行をやり出

す仕末だった。佐田も二年目の夏であり、去年覚えた踊りを今年は老松という拠点もあることだし充分楽しんでやろうと心待ちしていた。

そんなある晩、老松の二階座敷で彼は美佐子と風呂上りのサッパリした浴衣にくつろぎ、夕食を楽しんでいた。附近の料亭の三味タイコのはやしが盛んだった。

「ねえ、あんた踊りうまい?。」

「あたりまえさ、このあいだも云ったろう。今年は竹仕込みのうでまえだぜ。」

「ホント?。」

「ホントもウソも、みておどろくなってんだ。」

「だけどね。あれは芝居気がないと駄目なのよ。あんたに芝居気あるかしら?」

「チエッ。人のことをいって、お前はどうなんだい?。」

「アラー、わたしわね。」

そういって彼女はチラッと佐田をいたづらげにみた。ビールにほんのり赤味をおびた顔がなまめしかった。

「わたしはね、お芝居にでたことあるのよ。」

「学芸会か?。」

「バカね。ホントの芝居。」そういって美佐子は真顔で説明した。彼女が大阪から引揚げて直後、終戦後の混乱時でなんという仕事もなくブラブラしている時、たのまれて姉さん株の人といっしょにある劇団に入り、四国中を打ってまわったことがあるというのだ。

「フーン、そりやしらなかったね。お前もずいぶん色んなことをしているじやないか。」

佐田の言葉には、なぜ今まで黙っていたという非難もこめられていた。だが彼とても美佐子にすべてを打明けているわけでもない。

「なにしろあの頃のことでしょう、私等も食糧事情のせいもあってそんな仕事を手伝ったんだけど、田舎の人たちはどこも親切だったわ。楽しい思い出よ。」

ひとしきりビールをあけて酔もかなりまわった頃、美佐子はまた語り出した。

「私、いろんなお芝居やったわ。現代物も、時代物も。」

「ストリップは願い下げだぜ。」

「マサカ。でもたちまわりはやったわ。」

「たちまわり?女けんげきか。おもしろいじやないか。チヨットやってみろよ。」

「バカネ、ソンナのじやないのよ。鎌でやるの。」

「カマ?」

「エエ、鎌よ。つまり私が娘役で義理の父になる人と鎌のたちまわりをやって、結局殺してしまうの。」

「何故殺しちやうんだ?」

「そのお父さんというのがわるい人で、妹娘を虐めるもんだから殺すわけね。そして私は刑事に捕えられてひかれてゆかれるのよ。」

「エエ?、ひいてゆかれる。」

佐田は吐胸をつかれて、思わず美佐子の顔をマジマジとみつめずにはいられなかった。

「エエ、父を殺してハッとおどろいているところを、家の外から刑事にみつけられるのね。その場で私は縛られてしまうの。」

美佐子は佐田によりかかるようにして語ったが、その目はますます生き生きと輝いていた。佐田は無性に心中をかきたてられ声も弾むのだった。

「可愛想に、くくられちやうのか、お前は。」

「ソウナノ。刑事がわるいところにいたわけね。こうして前でくくってくれるのならまだいいのよ。」

美佐子はあの映画などでみなれたそのままに、佐田の前に両手を

出して手首を重ねてみせた。

「こうだったらね、まだ手も動かせるしお芝居がやりやすいのね。ところがこうしてくくられてしまうのよ。」

こんどは両手を後にまわして重ね、脊後を佐田の方に向け

「こうして後手にくくられてね。花道をひいてゆかれるの。そうすると妹娘が走り出てきて、お姉さん、ととりすがって泣くのね。私は後手にくくられてるでしょう、お芝居を身体全体の動きでやらなきやならないのね。うごかせるのは頭だけ、それがつらかったわ。だけどこのお芝居のときは、いつもここでお客さんは泣いたわ。」

かたり乍ら美佐子がピッタリと佐田に身をよせたとき佐田は声もなくいつかヒシと美佐子を抱きしめていた。美佐子の話は佐田の心をこよなくかきたてた。

しかし佐田は、そのとき毫末も美佐子の話にしや口して彼女を縛ってみよう等と考えなかった。無心に語る彼女が唯イトしかった。そして美佐子もまた男の燃えたちが自分の話の内容のどこにあったかを思うよりも先に、自らの愛情の中に溺れきってゆく女だった。

五

盆もすぎ秋風がたちそめようとする頃、

佐田の仕事の面は急に忙しさが増し、又実家の方からいつまでも独身で居れない事情が深まってきた。公私の多事にさらに加えて、すでに徳島方面に二年の任期もすぎようとしている今、通例なら翌月にでも転勤の命が下るかも知れないという予感があり、あわただしさは日々にましてゆくのだった。

美佐子との仲を佐田は反省した。今は夢の様な知りそめた当初の恋の味もすぎ、お互いの愛情の花を美しく育てようとするしっとりとした段階もすぎ、唯依然として全身を打込んでいる美佐子の愛情の中にたゆたっている捨小舟の様な自分を苦々しく感ずる日が多くなった。佐田は二月のある日はじめて美佐子を腕に抱いた時、お前とはこうなっても結婚だけはしないよといい、美佐子が「エエ、イイノヨ、ソンナコト。」とこたえたのを思い出した。

そのとき美佐子はたしかにそういった。そして今日の日まで、ホントウの彼は美佐子の愛情の中に甘え、ときにはすがり乍ら、やがてその言葉を生かそうという打算の中に終始していたのではないだろうか。ただひとすじの愛情だけに生きる女の心を佐田はもてあそんだ。「イヤな奴。」

そして佐田はそんな一方的な反省の上にたって、美佐子に別れようときり出したのである。

美佐子は、もとより佐田の説明に納得しようもなかった。

「あんたが、徳島へ来られるあいだは、そんなことムリよ。」

「おれは結婚するんだ。サヨナラだ。」

そんな話しのくりかえしのうちに、事情はかわって佐田が直面する仕事の都合で、彼の転勤もあと少くも一年は実現しないことがハッキリしてきた。そして一方、年もかわったら結婚せよという話が彼の周囲で急速に進んできた。

九月の末、佐田はとうとう美佐子にたいし、お前と別れるし、来月からは徳島へきても老松へは立ちよらないと云いきり、美佐子の「あんた、私も一度老松を出てひとりになってよく考えてみるわ。」という、こたえに満足して大阪へかえった。

「あんた、これ。」美佐子は老松をでる佐田に、夏中つかった女持ちの扇子を与えた。

「これで済んだ。」そう考えていた佐田にとって、その翌月、勿論、日も知らさず徳島駅へ降りたち、駅出口の片隅にたたずんでジット彼をみつめている美佐子の姿をみた時は、がくぜんとした思いだった。

美佐子は、コワバッた顔のまま黙って佐田の傍へよると、恐れるように伏眼がちに会釈した。チラッと片ホホをほころばせただけでまた元の表情に戻ると、彼の荷物をもぎとって歩き出した。

「オイ、どうして今日これでくると分ったんだ。」

それは佐田にとって理解できないことだった。

「あんたのくるの、私には分るのよ。」

低くつぶやくように答える美佐子との間には、何か大きな開きが形をととのえて現れてきていた。

そういえばその日の美佐子は、佐田のみたこともないしぶい御召に黒の羽織で、これまでの派手さからガラリと変った落着きがあり当初から佐田は圧倒されていた。

「どこへゆくんだ？。」

「ついてきて。老松ではないわ。」

そしてその日から佐田と美佐子は杤木の一室に人目をさける駈落者の様な生活に入った。杤木もやはり旅館だが富田街とは全く環境の変った裏街の商人宿で、別天地のおもむきがあった。美佐子の兄が経営する家だった。美佐子はそこで老松の頃の生き生きとしたハナヤかさを目にみえて日一日と失い、沈うつな目でジット佐田をみつめている日が多くなった。

そしてそれはまた佐田自身の心の反映であったのかも知れない。中途半端な反省とそれからおきる自己嫌悪を美佐子にうつした、わ

がままな佐田のエゴイズムだった。

この柊木の一室にあるものは、かつての老松のそれの様に愛情花咲く春の空気ではなく、時にただれるような狂態と、時に氷室様な寒風の交錯だった。

佐田はその頃になって女体の責めに関する嗜欲を猛烈にかきたそれらの資料を貪る様にあつめ、それに溺れた。吾れと吾身を投思考する力を磨滅ささずには居れぬのだった。そして

「美佐子、どうだこれ。」一つ枕の中で取りちらかした写真を美佐に示せばことのゆきつくところはきまっていた。

「あんた、ずいぶん沢山あつめたわね。アラ、これなんかいいじないの。」

「縛ってみたいな。」

「誰を、私を?」

「ソウサ。」

「アラ、縛ったらいいじやないの。この写真の恰好、みんな私にたらいいわ。」

「縄がないよ。お前、今度おれが高知からかえるまでに買っておよ。」

「エエ、イイワ。」美佐子は久しぶりに佐田の弾む顔をみてニッコ笑ったが、美佐子の肉体は最早佐田にとって、かつての美佐子そ人でなく、縛り責めさいなもうとする対象としての愛情に変ってるのではなかったか。翌日「美佐子、昨夜のあれ忘れるな。」念をして柊木を出る後で美佐子は「ハイ」と彼を見上げ乍らハッキリうなづいていた。

美佐子は約束を忘れなかった。四、五日後にかえってきた彼のに座って彼女は後手にかくしていた麻縄を「ハイ。これ。」といっ差出した。

「ハズかしかったわ。おかあさんとお湯へ行ったかえり、荒物屋よってかったのよ。おかあさんが、なにするんだい。そんなの、家にあるじやないかというし弱っちやった。これ、やわらかいの選ったのよ。」それは綿ロープだった。

「御苦労さん。お前、おれをくくるかい?」

「イヤ、イヤヨ。私をくくって。」

「ヨシ、手を出せ。」

佐田は彼女の両手を前にとって手首をかさね縄をかけようとしたが、

「イヤ、コンナノイヤヨ。後手にくくって。」

こうしてこの麻縄は美佐子の身体に、はじめてヒシヒシと喰い入った。

「モット、モットきつくしめて。」胸にまわされる縄目に身をよじり乍ら、美佐子の唇は佐田のそれを求めてあえいだ。

六

そして数ケ月、冬は去り翌年の春となった。佐田の徳島に居る間毎夜の様に使用される麻縄は手垢で汚れ黒ずむようになったが、二人の枕もとに欠かされることはなかった。手に麻縄をかけ、シゴキで両足首を縛り合わし高々と首に吊り上げた姿のまま、真白なシーツの上に美佐子を放置して佐田は何時間も夜の街へ一人で出ていった。

「あんた、こんなにして私をほっとくの。イヤ、私もゆく。……ネエゆかないで。」

苦しい顔をわずかに上げ、ホロホロと涙を頬にこぼし乍らうったえる美佐子に、佐田もはじめのうちは負けたが、ついには強引にサルグツワをかけてでかけるようになった。かえると美佐子をころがしてシーツを調べる。汚していればそれを種に彼女をいじめた。

美佐子はそんなにされても彼が傍にいるかぎり恨み言一ついわな

かった。「私からはなれないで。あんた愛しているわ。」それが美佐子の唯一つの悲しい願いだった。

佐田が不きげんなとき、美佐子は縄をもって彼にとりすがった。

「あんた括って。」

「ネエ、柱にガンジガラミにくくりつけてほしいわ。」

そして佐田は美佐子のヒ態がみえずき、俺の弱味をついてひきつけようとしていると、ますます不きげんになった。

「あんた、くくってくれないなら私がくくってあげる。」美佐子はときに彼の背に馬のりになって見まねで佐田を縛り上げたりした。そしてやりきれない無常感に呆然とする佐田の顔をじっと上からみつめ乍ら

「あんた。私がわるいのね。」

美佐子は佐田にしがみついて泣きくずれるのだった。杉木の一室のそうしたことは家の人々に知られないではおれなかった。美佐子もまた、いつしか大たんになって縛られた身をふとんの中にかくしたまま、「水頂戴」などと大声で他の女中をよんだりした。

おかみさんの姪として一目おく美佐子というだけでなく、気のよさと人づきあいの快活さで彼女はみんなから敬愛されていた。その親愛感は自ら佐田にも移されていて、他の女中たちも、二人の気げんの良いときは元気づいた。

「オヤ。美佐チヤン。括られてるな。」

フトンの中でみえなくても、それとさっして徳さんという女中が水を入口にソッとおき乍らいうと、美佐子は

「ウフフフ。」

とさもたのしげに笑って枕もとの佐田をにらんだりした。

あるとき大阪にかえっている佐田のもとへ、美佐子からきた手紙の一節に次の様にかいてあった。

ただだまっていつまでも歩いた。せまい露地から仰ぐ仲天の皓月をみつめ乍ら佐田はおそらく一生この月明を忘れず憶えているだろうと思った。

——私はあなたが居られないときは全くだめなんです。この間もお客さんがあっておかあさんが手伝ってくれといわれたのですが、全く元気がなく、酒の勢でと思ったら四五杯でメチヤクチヤに暴れたくなってしまいました。とうとうおかあさんが怒ってお前は佐田さんがいないとなんとだらしないんだろう。よしそれなら思い出さしてやろうといって、おにいさんと二人であなたのお部屋へつれこみ、かくしておいた麻縄をみつけ出されて、ガンジガラミに後手にくくり、足もくくり合わしてとうとう一晩御座敷着のままほっておかれました。私はあなたの御部屋の畳を涙でぬらし乍らねこんでしまったんです。あなた早くかえってきて下さい。

七

その年の秋、佐田の任期は突然終り、他への転勤命令が出された。一週間の予告期間であった。異常なものの力をもっても沈でんする心をかきたてることの少くなった美佐子との仲であったが、いざとなると佐田も美佐子も呆然としまたたくまに一週間をすごした。別れの宴はいつもの杉木の部屋で二人切りであった。

佐田が四国をたつさいごの日、船は小松島の夜行便ときめた。

美佐子はただ大粒の涙をホホにおとし乍ら、だまって酒盃をあけていた。

「美佐子、いよいよお別れだ。」

「別れるの。」

「ウン。」

「イヤ。」

そんな会話も何度くりかえしただろう。美佐子はもう物もいわず佐田をみつめているだけだった。

「美佐子。歩こう」

「エエ。」

佐田は三年間親しんだ徳島の街を、美佐子と共に歩きつづけた。その夜は満月で冷気は身にしみた。自然と足は裏道へとむいた。

（終）

—私のイメージ—
憧れの女性

近藤 一

あの人の瞳の中に妖しい炎がチロ〳〵と燃え始めて来ました。冴えた冷やかな光に見つめられている事を意識すると、途端に私の躰の内に真赤に粘ったマゾヒズムの血が、ぶつぶつ湧き立って、私はいつの間にか夜の粧いに身を委ね嗜虐の宴の開幕を待ち焦がれる女になってしまうのです。

扉をあけてあの人が現われます。ベッドの傍に立ちすくんでいる私を眼の端で見ながら扉の鍵穴へキイを差し込んで右へ廻します。カチッ！小さな音が心臓に刻まれるように響くのです。私は戦くような恐怖と、恥知らずな期待の入り混った複雑な気持で、あの人の逞しい肩の辺りをじっと見ているばかりです。

鍵を弄びながら、あの人はゆっくりと私に迫って来ます。本能的に後ずさりした私は、壁を伝って部屋の隅から隅へと逃げ廻りながら、結局は追い詰められ、摑まれた腕を捻じ上げられてしまうのです。

疼く痛みとそれに得体の知れない恐怖とで私は躰をくの字なりに曲げたり反り返ったりしながら、肩を振り腰を動かし脚をばた〳〵させて、あの人の手を振りほどこうとします。二度。三度。あの人は無理強いをしないで私の逃れるに任せ、そしてゆっくりと追い詰めて来るのです。丁度野獣が獲物の足掻きを楽しむように……

ドアに駆け寄って把手を握ります、錠がおりていることは充分承知していながら……把手は幾らでも動く癖に扉は微動だもしないのです。それでも絶望に陥っている暇もありません。あの人がすぐ後に迫っているからです。扉から離れて反対側の隅へ逃げなければ捉えられてしまいます。

逃れ出ることのできない檻の中で、どちらにも結末の知れきっている闘争。つまりは非情なルールの鬼ごっこなのです。脳裡の一隅では冷静に事の成り行きを客観視していながら、それでいて無闇に混乱し動顚しているのです。幾度も試み、失敗していながらドアの把手を廻す時の、ああ！と叫び出したいような想い。私にはそれが強烈な刺戟なのです。この想いも、悦虐の歓喜と云うものでしょうか。

羽交締めにされ、後から引き摺るようにベッドへ運ばれて俯伏に抑えつけられると、縛めの拘束が始まるのです。普通この段階になると最早立っている元気もない程ですが、それでも時によると、まだ〳〵暴れている内に抑えられることもあり、そんな時は僅かな隙にあの人をはねのけて逃れようとします。投縄にかかった獣のように、或る時は胸に、或る時は手首に、そして或る時は喉に紐を絡ませたまま、その長さの限りで、右に左に、よろ〳〵と曳かれながら逃げまどうのです。そんな時の結果は、髪も胸許も裾も滅茶々々に

裁を受ける私の座です
沓脱石の下へ
膝も解かれぬまま

乱れた姿でがんじがらめになって抛り出されてしまうのです。

が、いずれにせよ、真白いシーツに頬を押しつけていると、これでもう逃げなくてもいい、あの心臓を締めつける恐怖から逃げ廻らなくてもいいんだわ。あの人の思い通りにされるだけなんだもの、という一種の諦めと安堵を感じるのです。時として、きり〳〵と喰い入る痛みや何とも云えない痺れを感じながらも、全身を荒い呼吸に波打たせたまま、うっとりとしてしまうのです。

喘ぎの裡の恍惚が、あの人の冷やかな命令で破られます。

立てっ！俯伏の上体が縛めに吊られて引起され、裁きの庭へ、処刑の柱へと曳かれて行くのです。両の手首が背中に廻されて括り合わされただけで、もう顔を上げて立っていることもできないのに、胸にまで忌わしい捕縄が絡みついてしまっては、犯した罪も知らされぬ内に頭を深く垂れ、おぼつかない足取を自ら眼で辿りながら、小突かれ〳〵追い立てられて歩くのです。

寝室から廊下へ突出された私の背後から紐の端を持ったあの人のスリッパの音がばた〳〵と蹤いて来るのを、素足の私は締めつけられるような被虐の快感を味わいながら聴いているのです。

一坪足らずの玄関のコンクリートの上に、沓脱石の上から蓆が一枚敷いてあります。裁きを

受ける私の座です。

私は沓脱石の下へ縛めも解かれぬまま正坐をしています。あの人は眼の前の上り端に座蒲団を持ち出して坐ります。そして初めて私が犯した罪を知らされるのです。私は義のために悪人を滅しながら偶々悪人に服従しなければならなかった身分関係をもつヒロインであったり、勢力家の権謀の渦に巻き込まれて知らない間に死の祭壇に供えられた犠牲であったり、或いはまた身を焼く恋の炎に命を賭けた女であったりします。

このようなストーリーの設定は、あの人が私の意向を汲んでくれたものやら、私があの人の嗜好に同調したのやら、今では判りません。二人の方向がそちらを指し示し、二人が満ち足りている以上、それで充分の筈です。私は潔く罪を認めます。その徴に、私は縛めのまま石に額をつける迄身を伏せて、すぐに処刑を執行されるよう願うのです。

稀に体力と時間に余裕があると、私は頑強に罪を否認して拷問を受けます。拷問と云っても苦痛の烈しい体位での緊縛だけで、あの人は私の躰にアザや傷跡の残る責め方をとても嫌うのです。海老縛りや後手首縄の逆海老縛りやその他それに負けない位苦しい酷い縛り方をされると、柔らかな衣服を通して肌に縄目が残ります。色白な私の場合、上膊部にはあの人が幾ら蒸しタオルのマッサージを続けても消えない赤い環がつき易く、バストやウエストは紫がかかることさえあります。

そんなむごたらしい拷問の時、痛苦と屈辱にしやくり上げて哭きながらも尚、私が歯を喰い縛って耐えていると、あの人は私の意志などお構い無しに無抵抗の後手から拇印を採って厭応なしに服罪させてしまうのです。

有罪が決まり私はトイレへ引き立てられます。ここで初めて縛めが解かれます。私を中へ突き入れるとあの人は自分で取りつけた錠を外からおろしてしまいます。

お仕置の最中に粗忽のないようまず用を足し身仕度をします。時には死装束に着換えたり薄化粧迄することもあります。

眼の縁をアイシャドウで隈取って憔悴を表わすこともあり、とにかく死刑囚としての装いをする訳ですが、狭いトイレの床に坐って脱いだ肌着などを畳んでいると、タイル張りでないだけ余計に囚獄に哭くような想いがします。こういうことは主に男子用の方でなければ都合が悪いのですが、幾ら水洗式に改造したとは云え、坐っている顔の高さに便器があるということが非常な屈辱になって、私のマゾヒズムに身も世もない戦きを感じさせるのです。

身仕度が済むと合図をします。軽く三回扉をノックして「お願い致します」と云うのです。狭い男子用のトイレの中で本縄の縛めが施されます。おとなしくされるままになっているという気持も何とも云えず刺戟の強いものです。胸の上に結び目を作ると喉を締めつけることができませんが、頸を一巻するのも形が悪いし、そうまで呼吸を制約する必要もありません。私は充分に屈辱と苦痛を味わっているのですから……。この時には手首の拘束がないので縄尻はウエストを一廻りして後へ垂れています。私は女子用のトイレへ入れられ、縄尻を水の管に繋がれます。あの人は中の扉、外の扉を閉め、外から燈を消して行きます。あの人が刑場の仕度を終えて来るまで、女子用の狭い板の間に立って、真暗な独房の中から戸外を眺めます。身に縛めを受けたまま僅かに自由な肘から先を動かして窓の縁に縋りつくのです。窓には自由な世界を隔てる堰が縦横の格子になって嵌っています。私は闇の中から父や母や、姉妹達に訣れを告げ、そして必らず居ることになっている愛しい人に小声で呼びかけてみます。

愈々処刑です。私はまず席の上に曳き出され死刑の方法を知らされます。そして後手に縛められ刑場まで引廻されるのです。玄関から一番奥にある寝室までの間で四回か五回は歩みが止められます。

あの人の命令する場所に正坐してこう云うのです。

「雪路は謀叛を企てました。お慈悲により

切腹風土記

壬生三郎

まして只今縛り首にして頂きます。」

雪路というのは其の時の名です。ですから筋によって名前も変り、「朱実は御法度を犯し不義を致しました。火焙りにして頂きます」ということもありました。

私がこういうとあの人は頷いて私の両頬を平手でぴしやん〳〵と一回づつ打ちます。私は「有難うございます」と後手のまま平伏し、そしてまた引廻しが続くのです。これは辻々の晒の意味を持っているのです。

寝室の入口に辿り着くとあの人は正坐している私に向って「何か云い残すことはないか」と訊ねます。私は頸を垂れながら「はい何もございません。ただ私は大罪を犯しました者、能う限りの苦しみをお与えの上命をお取り下さいませ」と答えるのです。

残虐な刑罰で嬲り殺しにされた私の屍体は非人頭の頑弄物にされてしまいます。

私が捕えられてから処刑されるまでのどの段階でも、あの人は私を裸体にすることを好まないようです。私も、裸体には自信がありますが、できるなら矢張り衣類を許された方が変化も多く楽しいと思います。

処刑の種類や方法は秘中の秘、どなたにも申せません。ただかなり迫真的なものとして私を責めつけることは事実です。

このような娯しみを持つ私達も、娯しみ以外の時間はそれ〳〵独立に仕事を持ち、それなりに社会的な尊敬を受ける生活を営んでいます。世間では私達を夫婦と観ています。しかし私はあの人を〝夫〟などと思いません。あの人は私の師でありパートナーであり、そして私自身なのですもの……。

私達は、その時々につける名前の他本来の名前を呼ぶことも、それに代る動作も不要です。すぐに用件をきり出して何の支障もない会話を交わしているからです。

娯しみが烈しいだけに、私達はいつも一体であり、健康で平和な暮しをしています。

このような女性が私の前に出現し、共に手をとり合って行くことが私の常に抱いているイメージなのですが……

この話には異説があって、丹羽長秀が死んで火葬にした所、灰の中からまだ焼けきれぬ石亀の形をした塊りが出てきたので秀吉に見せて竹田法印に賜したという。（雑誌嚢話）

どちらが本当か、正史には書いてないので極め手がない。

もう一つは女性で、元禄頃、三十歳ばかりになる侍の妻が、やはり永年腹痛に悩んだ末、剃刀で切腹し、腹の中から積の根を切取り、あとは膏薬をはっておいたら創も治り、七十余歳まで長生きしたと（養生要論）

この節は大したこともないのに直ぐ外科で切腹して貰いたがる人が多い。地下の長秀は

自ら開腹手術をした男・女

志賀直哉の小説赤螺蠟太が腹膜炎を起したのを切腹して治した話は誰でも知っていよう。所が本当にやった人がある。

天正十三年という豊臣秀吉が関白の位についた年だが、その年に丹羽長秀という武将が年がら年中腹痛に悩まされるものだから遂にたまりかねて切腹し、腹中からこぶのようなものを取出してそれを秀吉に献上した。秀吉もこれは食えないと侍医の竹田法印へ下げ渡したという。（嘉良喜随筆）

腹をなでて、俺の方が先輩だと威張っているかも知れない。

切腹用器

日本刀、剃刀、出刃庖丁、ナイフなどの刃物の類は極くありふれた凶器だが、刃物といえぬ品物を使って切腹した例が沢山にある。

昭和九年五月五日横須賀の待合で元海軍兵曹（三五）と芸者（三）が心中を図り、男は鋭利な竹べらで女の右乳下を刺した上、自分は腹を刺し、剃刀で左の乳下を切って生命危篤という。竹べら心中といわれた。

同年四月十九日東京で病苦の姉を絞殺した弟が彫刻用ののみで下腹を八ケ所斬って心中を企てた。この外に明治年間にはのみを使ったものが六人あり、なたが三人、ガラスの破片が二人ある。

突飛（とっぴ）なのは明治三十六年に狂人が煙管で切腹したが　確かに変っている。

その他火箸あり、鋸あり、正しく切腹狂躁曲である。

女でも大正十三年五月十三日長野県下で三十六歳になる人妻が病気を苦にしてガラスの破片で切腹したが助かった。

切腹を治療した外科医の記録

必要がなければ技術は発達しない。切腹する者が多くなれば外科医も工夫をこらし、経験をつむようになる。

平安、鎌倉時代には一般創傷の治療法が主で、まだ切腹創の治験はないが、戦国時代になると流石に発達し、「浅見対馬守秘伝療治之次第」には天文二十一年八月六日に切腹した井上太兵衛の傷を治療した記録が見え、切腹創の治療としてはこれが最も古いようだ。その後は外科技術も発達し、数例の治験例を集めることが出来たが、次に挙げたのは紀州の外科医華岡青洲の門人で、後にはシーボルトについて学んだ水戸藩の侍医本間玄調の報告である。

年代は明かでないが幕末ごろ江戸馬喰町の葛屋弥兵衛なるものが発狂して庖丁で切腹し咽を刺した挙句井戸に投身した。

それを救上げて診察すると。

「大小腸尽く出でて腹上に畳積し、和蘭解剖書に所謂網膜、腸間膜、乳糜脉、門脉下支等燦然として見るべし。」

という有様だったが、本間玄調は火酒を稀釈して腸を消毒した後。

「指を深く創口へ入れて腸の本をつまみ、漸次にくり込み、腸尽く本位に復するに（中略）創の長さ八寸余、白条にて中を隔て左右両をなせり。縫合すること二十一針（中略）定期に至って糸を去り十余日にて全癒す」

（続瘍科秘録）

という。まことに見事な腕前で、現代の外科医がやることも原則的にはこれ以外ではない。

私は大正六年から昭和十五年にかけて男子二十六名、女性六名の治療又は検屍記録、を持っているが、田谷敬生氏には女性十七例の記録がある。私の資料は今秋刊行する予定の拙著「切腹七部集」には各例を詳細に書いておいたが、一例をあげると昭和十三年三月二十八日午前六時頃静岡県下でH・K五十歳が軍刀で割腹したときの所見は、

部位　下腹部に於て臍下一・五センチ
方向　水平
長さ　二〇センチ
傷数　二条、殆ど平行し、二ケ所に於て相接す
創縁　鋭整
哆開度　大にして大腸小腸ともに脱出す
出血　多量
主なる損傷組織　腹膜、腸間膜、横行結腸小腸
汚染度　腸腔は腸内容で汚染著し
処置　大腸小腸縫合、生理的食塩水及びリバノール液で清洗し、脱出内容を整復、創口大部分縫合一部開放し排膿管ドレーンを挿入
転帰　同午前十時三十分死亡
死因　失血及び衰弱

Das Grausame Weib

Dr. Yohannes R. Birlinger.

☆ 残虐なる女性達 ☆

—1901年刊行の独文絵入単行本より—

森本愛造・訳

〝女歌手の想出〟(1)の中にも同様に、公開刑を鑑賞する女性たちに就いての記述が発見される。

〝私は一人の洪牙利の女友達を持っていました。彼女は或る士官の娘で家族は全部維納(2)の市内のアルゼルカアゼルンに住んで居りました。当時市内でよく公開された鞭打刑の観覧に、彼女は殆んど必らずといってよい位出掛けてゆくのでした。彼女は自分が広場を見渡せる窓を買切って、兵士達が一列に並ばせられて鞭や笞で打たれる光景に見入るのでした。〟

アルバン・シユトルツ(3)も墺太利で同様の事実を見た。彼は一八〇〇年当時、公開鞭打刑の観衆に女性が多く交っていたことを記し、こうして、街の女や一般女性の目の前で体刑を受けねばならぬということは、受刑者にとって、甚だ不快なことであったろうと書いて居る。

上流婦人達は、特に監獄に於ける男女囚の鞭打刑に深い関心と興味を持って居た。この事実を見たクヴアンテル(4)の論文ことは、筆者の主張や仮定を甚だ有利に立証するものであるが、私は各種の数多い実例を引証する代りに二つの代表的な独乙に於ける実例を引用しようと思う。

第一に、ルドルフ・クヴアンテルの論文「刑罰に於ける性感」の中にある一例、次にコルヴイン(5)の労作からの引用である。

クヴアンテルは次の様に書いている。〝そうした裁判上の集団的作業（訳者註、公開、非公開を問わず、判決に基いて執行される体刑、特に鞭打刑を指すと思われる。）の目撃者の談話によれば、忌わしい死刑の公開よりは遙かに上品であるにせよ、其等の刑の執行を招待された婦人達が観覧している様子は甚だ興味深く思われる。という事である。恐怖に慄え乍ら、次の瞬間には打ち据えられて血の塊と化する男達の後姿を見ていることが、之等の婦人達に抗し難い性的な昂奮を齎すことは明らかであった。この疎むべき印象は、彼女達が、女囚達の鞭打刑に際して示した憎悪と快感の交錯した表情と共に見逃すべからざるものである。〟

更に第二の引例は、如何にも信じ難く思われるが著者コルヴインによって確証されているものである。彼は、存在し難い事実として、過去の時代に属する記述をしている。

〝多くの市には、処刑される女をしっかり押えつけて抵抗出来ない様にする為の装置が常備されていた。通常女囚は肌着のみを残して刑を執行されるのであったが、人々はそうした女囚の羞恥心を顧慮する必要はないと考えて居り、屢々獄吏は気晴らしの為に女囚を全裸にして鞭を揮ったのである。〟

フランスに於ける視虐趣味の実証として、

「英国での死刑の方法の研究者」として高名なデュノワイエ夫人[6]の報告によって見よう。

彼女のフランス旅行記には純真な精神によって書かれた次の様な記事が発見される。

〃幸か不幸か私が住んで居たのは、国会議事堂のあるラ・グレエヴ広場[7]に面した建物でした。此の広場で、あらゆる死刑囚が処刑されるのです。近所の人々は、此の広場に面した住居を持つことが如何にお金儲けになるかを私に教えて呉れるのでした。死刑の見物人は、その処刑が厳しく、残酷であり、且時間が長ければ長いだけ多額の礼金を支払って、広場に面した窓を借り切るのでした。私や同居していたエリゼ[8]には納得し難いことではありましたが、この様な窓の借受人の多くは婦人客なのでした。〃

当時此の悪名高かったラ・グレエヴ広場で処刑された最大の死刑囚は、アンリ四世[9]の暗殺者ラヴイアックとダミアン[10]とであった。ラヴイアック[11]の死刑の時には、ギユイーズ家の或るプリンセスまでもその女官と一緒に処刑の様子を市役所の窓から見物したという有名な事実が知られている。こうして、当時の教養も地位も高い女性でさえ、加虐慾望の満足の為めに憶面もなく公開の席上で行動したという事は、一切の社会上の束縛をうけない下層の女達が、如何に安易且公然とその視虐慾を発揮したかに私達の想像力をそゝるのである。当代の女性達は、この様に好色的な慾望を現代の如くに強いて「温順」の仮面の下におしかくす必要がなかった様に思われる。創物主は、ずっと後の世代に至って、始めて女性にしとやかざの本来的な潜在を求めたのかもしれない。

ダミアンの処刑に当っても、多くの婦人の観客が動員された事が多くの記録によって明らかである。私達は、ポムパドウール夫人[12]の侍女オウセ夫人のメモワール[13]から、多くの婦人がこの処刑の場に居合せたこと、中でもあの地主の美しい夫人が処刑の始まるまでの退屈をしのぐためにゲームに耽っていたという雄弁な暗示的な事実を知ることが出来るのである。

カサノヴア[14]の忠実な叙述によって、私達は肉慾と残虐性との密接な関係を更にはっきりと知ることが出来る。

〃私は話題をラ・グレエヴ広場でのダミアンの死刑に多くの婦人の観客が集るであろうということに移した。すると彼女達（カサノヴアの話をきいていた女達）の多くが、そうした処刑を見たいという大変強い好奇心を示したので、私は自分で借りていた、広場をよく見渡せる窓を提供しようと申し出た。彼女達が喜んで其の申出をうけて呉れたので、翌日、ダミアンの処刑に充分に間に合う時間を約束して別れた。三月二十八日、ダミアン処刑の日、私は早朝から婦人達をランベルチニ[15]へ迎えに行った。車に乗り切れなかったので、私は幸運にも私の膝の上に彼女等の一人を乗せて、ラ・グレエヴ広場へ行ったのだった。三人の婦人は出来るだけ詰め合って、窓に近い席に目白押しに並び、私達男性達がよく見える様に身をかがめるのであった。此の窓は上下に三段に別れており、彼女達はその第二段目の窓辺に立ったのである。私は理由なく、こうした細かい叙述をつづけるのではない。この時の彼女達の立つた位置と同じ水平に私達が並んだという事は重大なことであることは、後にお判りになると思う。私達はそれから処刑の完了まで四時間の間そのままの姿勢で立ちつづけたのである。

――ジエスイット教徒であったダミアンの処刑の間、私は引裂く様な叫声やいたましい情景に耳を塞ぎ、目をそむけたが、ランベルチニの女達は身じろぎ一つするのでもなかった。それは彼女等の心の中の残虐性の満足を示すものであったのであろうか。彼女等が後でダミアンの腹黒い暗殺計画は同情の余地がないと処刑の残酷さを肯定したとき私は同意するふりをせねばならなかった。ところが、[15]同席した私の友人テイレッタは其の前に立っ

ていた彼女等の一人を後ろから処刑の間中独特の方法で楽しませていたのである。その時にこの友人は彼女のスカートを……中略……ていたので、私が一寸その方を向いた時にやっている行為がすぐ判ってしまった。しかし私は友人とその女友達を狼狽させたくなかったので、知らぬ顔をしていた。しかし、私はその女性の「忍耐力」――こうした処刑を見ながらも実行出来るという――に驚ろくより先に、彼女の此種の「忍耐」は、むしろ、視覚的に性愛が昂進させられたと見ることが正しいと思う。〃

斯くの如く述べられた通り、同様の「忍耐」は靴下をつくろい乍ら、又踊りながら、ギロチン（ギヨチィヌ）斬殺刑の処刑を見ていた革命時代の女性達にも多く実証されているのである。この件については後に詳述するが、彼女等の忍耐は驚くべきものであると共に特筆すべき複雑な心理を伴っていることを附記しておく。

四十年戦争の間、巴里では仮面舞踊会の一番終りに、未だ血のしたたっているギロチンのまわりで踊ることが慣わしとなっていた事は一般に知られていまい。

西班牙でも、死刑の観客の大半が女性であったとグロブス[16]の辞典が説明している。〔原註‖第三巻〕

就中次の記事は興味を惹く部分である。

〃数千の人間が徒歩で死刑の見物に出掛ける。刑場は恰度歳の市の様に飲食店で賑やかである。観衆の過半は女性である。〃

死刑について、最も洗練された技巧を持つ支那でも、人は同様の経験をする。支那の死刑についてモウリツツ・プフアイフエル博士[17]はこう書いている。

〃大衆の死刑に対する態度は奇異である。婦人達は抱いている子供を高くさし上げて、死刑の様子を、子供によく見せてやるのである。

又、シュタインレ[18]は比、支那紀行に、ある支那の高官の妻が、囚人に数多くの死刑を宣告し、その娘が必らずその執行を見ていることに奇異の念を持ったと述べている。〃

（未完）

〈註〉

1 Memoire der Sängerin
2 Alserkasern ; Wien
3 Alban Stolz
4 Rudolf Quanter
5 Corvin
6 Mme Dunoyer
7 La Gréve
8 Elise
9 Henrich IV〉HenriIVe
10 Ravillac ; Damiens
11 Guise
12 Madame Pompadeure
13 Memoire de Mme Hausset
14 Cassanova
15 Lambertini
15′ Tiretta
16 Globus
17 Dr Motitz Pfeifer
18 Steinle

◎本誌百号突破記念　懸賞原稿募集　について

本誌百号突破記念として「懸賞原稿」の募集を広告しましたところ、早速多数の愛読者の方から応募を頂き、感謝しております。本月号では、入選作品の第一回発表として、花巻京太郎氏の「お町の最期」を掲載いたしました。今までのところ、特に傑出した作品に接してはおりませんが、数篇の入選候補作品がありますので、漸次本誌上を飾りたいと思います。入選作品多数のときは特別号を臨時増刊いたしますから、何卒奮って御応募下さるよう、お待ちいたしております。

〈編集部〉

女斗美短歌

土俵四股平

俳句では若干の窮屈さがあるが、短歌とすると充分に女斗美の場面誘出が可能となる。

中途半端な女斗美小説やメトミ画を見るよりも、三十一文字に表現される女斗美文学の方が数等上位にあると私は思っている。倖にも私の秘蔵弟子、私が家元?である女斗美道の〝名取〟とも云うべき佶子は、彼女の私的な創作帖に、すばらしい女斗美短歌を書き込んでいる。私がその公表をうながすと、「先生、先生お一人が御覧になるのはいいですけど誌上公開はカンニンして下さいナ、第一作品が穢れるような気がしますワ、ニキビ面の男などに」とキツイ抗議である。だが奇譚クラブの読者中には熱心な女斗美のフアンも多いし、執筆を御無沙汰している私に、催促がましい私信を寄せる人もあるのだから、一つ女斗美の亡者?を済度する（怒っては無粋ですゾ）つもりで、是非共つかわせてくれないかと、再三求めてみたところ、ソコは優にやさしい乙女とて、それほどまでに先生がおっしゃるのなら、ヒドイ歌は伏せてお使い下さいと云ってくれた。一部を伏せるとなると物足りない骨抜きの原稿となるし、マア其処は編集長の取捨に一任するとして、なるべく原作のままをと筆をとった次第、だが歌集の如く並べるだけでは、何となくソッケないので少々蛇足をつけて、女斗美土俵のにぎわいとすることにした。

娘どち互に蔭口かわすより
スックと立ちて相撲取りせん

毒舌で、相手の娘をきずつけようとたくらむより、歌の如く、褌一本に身をたくして、サッと一番取組めば、互に気もカラッとする勇敢な佶子はそんなに思っている。

口惜しくば相撲取りせん指相撲
さて坐り相撲立ては本相撲

娘だとて、サアとなれば、指相撲の勝負ぐらいでアキラメがつく筈がない。足相撲から坐相撲、結局は四股踏みならす本相撲となって、娘と娘の勝マケはつくのだ。

ま素直にみ腹せり合う腹相撲
ハッケ残ッち！乳房残ッち！
汗ばみし丸乳を腋にのぞかせて
娘相撲は投げうたんとす
一番の相撲ともえば恋敵
相手も吾も乳房狙いぬ

先の歌で〝乳房残ッち！〟が一番よくきいている。半球形の大乳房が、若い娘の生気をみなぎらせて弾み合い、憎い相手の乳房をへしつぶそうとするが、相手の乳房もソウヤスヤスとはつぶれぬ、反対に押返してつぶしにかかる。まだあまり立たぬ蕾の乳首が、するどい肉弾のまじわりに目覚めて、小じおらしくもいきっているようだ、だが又一人前の女になりきった年増のソレも捨てがたい味覚がある。

手は見せで乳房採合う大年増
声はたてずも眼は必死なり
女をば丸出しにして摑合う
乳房相撲は息たえだえに
むっちりと脂ののりし大乳房
ダブリ残ッちドテン残ッち
女と女が、一つの恋を争って組む時、一番憎く感じるのは、相手の美貌よりも、誇らしげな張り乳房だと云う、互に引摑んだが最後生汁や乳汁がにじむまで握りしめ、眉をつり上げ歯噛みして、ここを先途と渡合うのだ。褌一本の女と女が、肉と力の鎬を削る死斗である。今はどっちも後へはひけない、泣声をあげれば負はしれたこと、指にあまる大乳房が、脂汗をにじませて、もだえている。
プリンよおッ！プリンああッつ組む乳首
いずれや恋の関を奪うや

恋を土俵に賭ける、女夏場所大相撲は、どこでも花の乳房の取組である。

どうもこの歌は、坐相撲の姿勢にあるらしい。アパートの一室か、音に気をかねて、互に音と声を殺しての対戦である。それだけに双方必殺の戦法に相違ない。力士は何となく若く娘と感じられる。裸といってもズロースはつけているようだ。

お互に苦しみ抜けど恋敵
声はあげまじ娘土俵に
これでもか！まだかかる気かこれでもか！
命かけたり佶子も順子も
どてん上どてんまた下どてん上
娘寝業は今必死なり

順子は古い読者は承知の筈、島根の産、矢筈山順子のこと、佶子とは七ツも年上の娘だが、いわば先輩であるのだ。新進の花形佶子に対してウワナリ打ちを挑むは当然のなりゆきである。相撲は姉妹弟子の一騎打ちであるヤヤ小柄な順子は立業が得意だ。一方大兵肥満型の佶子は寝業に出ようとする。身軽い順子は、佶子の乳房に一撃を加えんものと畳土俵を廻る。佶子はそうはさせじと隙あらば引寄せて組もうとあせる。

師の君に捧げし丸乳守りつつ
順子が腹へムズと組まなん

だが相撲巧者の順子はナカナカ其手に乗らない。拳は法度の土俵を無視して、石の拳を女の急所左乳房へと狙うのだ。

恋敵なれば互に必死なり
娘なれども前袋とる
前袋ムズと摑みて娘どち
ここぞココゾと力限りに

娘同志であっても、女の本能はかくしきれない。必死となると、恥も外聞も忘れて、手先は自然と前袋にかかる。その前袋は、玄人力士のようなウンサイ褌ではない。兵子帯をしごいて締めた一重のそれは、決して丈夫だ

とは云えない。電気スタンドの豆電球が淡い光を汗の肌へ投げている。

外目には相撲と見ゆれ恋敵
かくしどころをムズと握りぬ

だがソコは娘同志のかなしさ、極め手までに至らず再び手はとけて四ツ相撲に戻る。土俵と云っても事実俵がある訳ではなく、腹櫓に吊っても、壁へ押しつけるが関の山、壁をあと足で蹴れば突返される。そこでヘッドロックの手をもちいたり、咽喉輪攻めに出る。だから一口に相撲と云っても、ルールのない格斗と見るのだズバリであろう。

たじたじと互にたたら踏みながら
残すと見ればムズとまた組む

前袋ムズと摑みて動かぬは
力互格の娘土俵か

勝負はいよいよ娘の力と力、恋を賭けての一騎打ちである。映画〝禁男の砂〟どころの騒ぎではない。見る者があったとすれば、どちらにもムザンな負け方はさしたくなかろうかくて幾度か手はとけて、

一突きに急所を突かん一心に
組まず組ませず土俵廻りぬ

じつに見ごたえある情景である。背も胸も腹も脂汗に光っている。若い体臭がムンムンと渦巻く畳土俵である。そうかと思えば、

娘どち張切る丸乳トッ組ませ
腿からませて絞めて動かず

どっちかの乳房が破れるか、骨がグキリと折れるかの一六勝負である。いや同体となって寝業に持込むのではなかろうか、娘としては相撲よりもレスリングが得手かもしれぬ。

野苺に似たる乳首と吾が乳首
寝業とならば如何に組ません

かくて女斗美の短歌は三百首になんなんとして綴られている。彼女が云ったキワドイもののも散見される。とは云うものの師として弟子との約束を空文にすることは許されない。ページ数もあることだから、この辺で羅列してこの稿を終りたいと思う。

斗牛の如く組みたり恋敵
嫉妬の角に乳房かけんと

パーマの獅子頭を乱して、猛然と突っかかる女と女、角はなくても頭突きの一発を胸に乳房へくらったらたまるまい。豊満な乳房を手で防ぐ、その手を払って突込もうとする相手だ。二人は土俵ならぬ畳のチリを蹴散らして荒々と息を吐く、

白やかな裏腕見せて手四っつに
互に狙う憎き乳房

手四つになれば、互に憎い相手の乳房は目の前である。だが手が解けぬ限りは、突くことも握ることも出来ない。どうしてくれようと心はハヤルばかり、狙合う視線は火花を散らす、乳房にドがつき、ド乳房と歌うところに実感がわく

乳房来い！　のぞむところよ乳房来い！
いざ！いざ！いざ！と乳房よせ合う

しまった！と心に思えど声のみて
憎き女の差手摑みぬ

気魄のこもったよい歌である。どこをどう摑まれたか、サアどうやと勝ち誇る順子に、意地でも負けまいとする佶子の死斗が目にちらつく。

土俵の砂はかんばかりにもぐりあい
太腿抱きサガリ取ったり

サガリは褌の前面に垂れる部分である。これを強く引くと、布が股へ食込み相手に苦痛をあたえる。

引分けてまた引分けて引分けて
佶子と順子はよき勝負なり

順子たて！命を賭けし本勝負
褌締めてイザや組まなん

娘どち如何なる秘術つくすらん
君には見せじ恋の死斗を

恋敵ミホトかくして立合わば
卑怯の中の卑怯なるらん

ねっとりと脂のにじむ腹と腹
片息つきて今土俵ぎわ

（完）

子供の時の浣腸

池田喜代子

私が小学五年の夏の時でした。夕食も終えて母と姉と私の三人は、楽しく語りあっておりました。

「喜代子、ちょっとこっちへ来てごらんなさい。熱があるんじやないの。」

母はそう言って私を近くへ呼ぶと、ひたいに手をやりました。姉に無言で体温計を持って来るように言いつけながら、私の顔色をじっとみつめています。私は何か不安な気持におそわれました。

その不安は、……浣腸……そうなのです。私の家では私はちよいちよい、この浣腸の洗礼をうけました。まず第一にお通じのない日。第二に熱のある時。このどちらかにあてはまる時は、母はきまって私に浣腸するのです。姉に手伝わせながら……

熱は七度何分——よく覚えておぼえていませんが確か七度ちょつとだったと思います。

「喜代子、今日お通じは？」

私は悲しく首を振りました。まだ小学生時分では、とても母親にウソをつくなどということは出来ないのです。

「ちよっと浣腸してみましようね。」

そういうと、母は次の間に消えました。いよいよ浣腸の準備です。姉はいっもの通り、私の顔色をちよっとみながら、床を敷き始めます。真白なシーツが敷かれます。私はそれをじっとみつめながら何とも言えない気分になって眼をぱたぱたさせながら、それでも一生けんめい、こんなことは別に何でもない、といった表情をしているのです。しかしその心中は……数分後のその上で展開される光景を考えると、子供ながら恥かしさと不快感でいっぱいになるのでした。

母が右手に二個のいちぢく浣腸と、左手に脱脂綿と古新聞を持って入って来ました。

私は母に言われるより早く、床に仰臥しました。どうせ嫌がっても、許してもらえるものではありませんし、嫌がって逃げまわり、そのあげく、押えつけられて、浣腸されるのは——私が小さい時は、いっもそうでしたが——もっとみじめだからです。浣腸された

翌日など隣りのおばさんが母に、
「きのうは喜代子ちやん、いやに大声で泣いてらしたけど、どうなさいましたの。」
と聞きますと、母は
「いえ、ね、浣腸したんですよ。いやがりましてね。とうとう陽子（姉）におさえつけさせて、やったんですが……。」
と言いながら私の頭をなでるのです。となりのおばさんは、一寸顔を赤らめて低く笑いながら、
「まあ、そうでしたの。本当に浣腸は、される者はいやなものですものね。」
と私の顔をのぞきます。私は母のエプロンに顔をうずめながら母親をこずきまわす。よけいなことを言わなければよいのに、と思いながら……
そういう訳で、この頃の私は、全くの無抵抗。おとなしく母の言うことを聞くようになっていました。姉が（六つ違いの）横に来て私のズローズをしずかに脱がせます。すっと下の方が涼しくなって、冷めたいシーツの上に皮膚がじかに接しますと、いよいよ私は観念しました。母がかたわらで、私の顔をみながら、いちぢく浣腸の先端に穴をあけています。姉もそれをみているのです。浣腸された者なら誰でも経験することですが、浣腸のいやなのは、それ自体が苦痛だとか、恥かしいという以上に、される者とする者との劣等感と、優越感に、いいようのない耐え難さがあるものなのです。このことは実際に浣腸される迄の準備の時間が長ければ長いほど大きくなります。必要以上に準備に手間どっている。そう思われるのです。
穴のあけられた二個のいちぢく浣腸が姉の手に渡され、母は私の両足を持ちあげて、その下に古新聞を、すべり込ませます。新聞紙をおしりに敷かれた時の、あのやりきれない想い——いよいよ始るんだ——いや応なく自分に言いきかせます。
「じや、喜代子、口を大きくあけて、お腹に力を入れちやだめですよ。すぐ終りますからね。」
そういい聞かせる母の声もうらめしく、それでも私は、言われたとおりに、口をあけ腹から力をぬき天井の一角に眼をやって、浣腸されるのを待ちます。一刻も早く終るようにいのりながら……
姉から一個の浣腸器を受け

とりながら、脱脂綿でその先端をふきます。あおむけに寝かされた私は、それをじっとみています。母の左手が、つとのびていちぢく浣腸の先端を近ずけます。もういっぺん私の顔をみて

「ちょっと気持が悪いかもしれないけど、がまんするんですよ。」

黙ってしてくれればいいのに、これがいつも私のいだく不満でした。おとなしく浣腸される者に向って、言う必要もないことをどうして言うのかと。

が、やがて静かに浣腸器の先端は差し込まれ、四つの眼が、私の顔とおしりに集中します。そして浣腸液の注入！

あの何とも言えぬ冷い液体、それが直腸内に入ってくる時のやりきれない不快感。私は依然天井をみつめています。そしていちぢく浣腸特有の、おしまいの一滴を注入し終えた時におこる、セルロイドをひしぐ音。あれがこの浣腸の効果をいや増します。

すっーと、又静かに浣腸器をぬきとる母。

「どおう？気持悪い。もうひとつ、がまんするんですよ。」

姉が私の足を押えながら又つけ加えます。

「もうひとつだけよ。」

浣腸された人が——二個以上の浣腸をされた人が——知っているように、浣腸は一回目は大抵の場合あっという間に終ってしまいますが、二回目のは相当に苦痛です。しかも、一個目のが終ると同時にすぐ始めてくれるのならまだいいのですが、ちょっとでも間をおくと、全く生理的にも、地理的にも耐え難いものなのです。

が、そういうことにならされていた私は、この場合も、いわれるままに必死になって耐えていました。

二個目の浣腸液が、例によって静かに注がれると同時に、もうれっに私は便意をもよおしました。思わず、おしりを左右に振りながら浣腸液をのがれようと——全く不可能なそしてあわれな抵抗ですが——しました。

「駄目よ。喜代子、もうすぐおわりますからね。がまんするんですよ。陽子、ちやんと押えていなさい。」

浣腸の注入を一時やめて、母は姉と私に注意しました。要するに浣腸されている時間が少しながくなった、というだけの結果だったのです。最後の一滴が注入され終ると、母はそれをぬきとり、脱脂綿で、仰臥させたまま押さえます。そして、姉に、便器の用意を命じました。毛布が私の体の上にかけられ、私の顔は勢い母の視線を受けとめねばなりません。

「十分間位、がまんしなさいね。お薬がよくお腹の中までしみこまないから。」

これからが又並々ならぬ苦痛です。浣腸から排泄までの、この時間こそ、私にとっては——他の人にとってもでしょが——一番いやな時なのです。母と姉は出来る丈、私の注意をその方から離そうと、色々な話題をつくっては、私に話しかけます。

が、こういう時の他愛ない世間話程、又いらだたしいものはありません。最小限度の答だけをしながらも、私の関心は時計の針にばかりそそがれます。

約五分程たっと、もうがまんが出来ない程強烈に便意をもよおしました。直腸がはげしく蠕動します。押えている母にもそれがわかるらしく、指の力を強められました。それでも、これ以上がまんは出来ない、と思われましたので、

「もう、喜代子、がまん出来ない。」

横に用意された、中に新聞紙を敷いた便器を見ながら、訴えました。

「もう少し、がまんしてごらんなさい。充分便が出ない時は、もういっぺん浣腸しますよ。」

もういっぺん浣腸、という言葉を聞いて、私は泣きたくなるような気持でした。母の場合、けっしておどかしや何かではなく、二度でも、三度でもお腹が空になる丈続けるのが常でしたから。実際、私もその年の冬には、カゼで一週間程学校をやすみ、床にあったため便秘していた時など、一日に四度も続けて

浣腸されたことがあったのです。

もう一度浣腸されるとしたら、今度は、ひよっとすると、母が買ったばかりのあのグリセリン浣腸じゃないだろうかと、私は思いました。当時はまず浣腸といえばいちぢく浣腸ときまっていたものでした。それを家でかかりつけの医者にすすめられて、母は当時の一般家庭ではめずらしい、三十CC入りの——と言っても実際充分吸いあげれば五十CC以上入ります——グリセリン浣腸器を購入したのでした。ほんの一週間ばかり前のことで、夜、それをあけて私と姉にその仕方や——というよりされ方や——その中に入れるグリセリンを示して、

「お医者さんで浣腸される時は大抵これなのよ。いちぢく浣腸より量もいっぱい入るし、液も濃いのよ。」

といったことを思いだしたのでした。私はそのブドウ糖注射器みたいな太い浣腸器を電燈の下でみせつけられながら、何といういやなものを発明したんだろう、とのろわずにはいられませんでした。そしていつかは、この浣腸器で、浣腸されるのだと思いつつも、その日が一日でも遅いことを本気で神様にお祈りしたものです。

私はもういっぺん自分にあの時のことを想い浮べさせて、がまんすることにしました。幸い便意は周期的におこるもので、それから二、三分程、どうにか私はがまんしました。

八分位の時、泣いても笑っても、もうがまんが出来ないと思われましたので、

「お母ちやん、もう喜代子がまん出来ない。」

多分、半分は泣き声だったと思います。母も、それがわかったらしく、側の便器を注意深くおしりの下にあてました。

脱脂綿がとられると同時に、激しく私は排泄しました。姉と母の目の前で、もっともそれはいつものことでしたが……

姉は静かに私の下腹をなでて、時々私の顔と便器と母の顔とを見くらべていました。

「喜代子ちやん、よく我慢したわね。」

と私をなぐさめるかのようにいってくれますが、一方母の顔を見る眼は、どうします？もういっぺん浣腸かけてみたら？と母をうながしているように私にはみえました。きっと姉の頭にも例の大きいグリセリン浣腸器のことがあったのに違いありません。私は出来るだけ十分に排泄しようとけんめいでした。そしてその間中も私は、母の顔にやっきとなっていました。顔色を読めとれても、結局は何にもならないのでしたが。姉がまだ小さい時に父は姉と私の二人を残して死んでしまい、以後は母が我が家では、絶対的な存在だったのです。そして姉も小さい時は、私と同様に、よく浣腸されたものでした。もっとも姉はずっと小さい時から、浣腸にかぎらず、母の言うことには従順で、いやで泣きながらも、母が

「陽子、もういっぺん浣腸しましょうね。」

というと、こっくりうなずいて用意するのでした。とにかく性格的にいって私とは正反対らしかったのです。

それで、私が姉の浣腸されるのをのぞき込んだり、子供達が大勢集まっている時に

「陽子姉ちやん、ゆうべ浣腸されたのよ。」

とさわぎたてると、まっ赤になって泣き出すのでした。それでも、私が浣腸される時はいわれた時のほかは、つとめて視線をはずしていましたし、友達に私が浣腸されたことなどけっして言ったりはしませんでした。

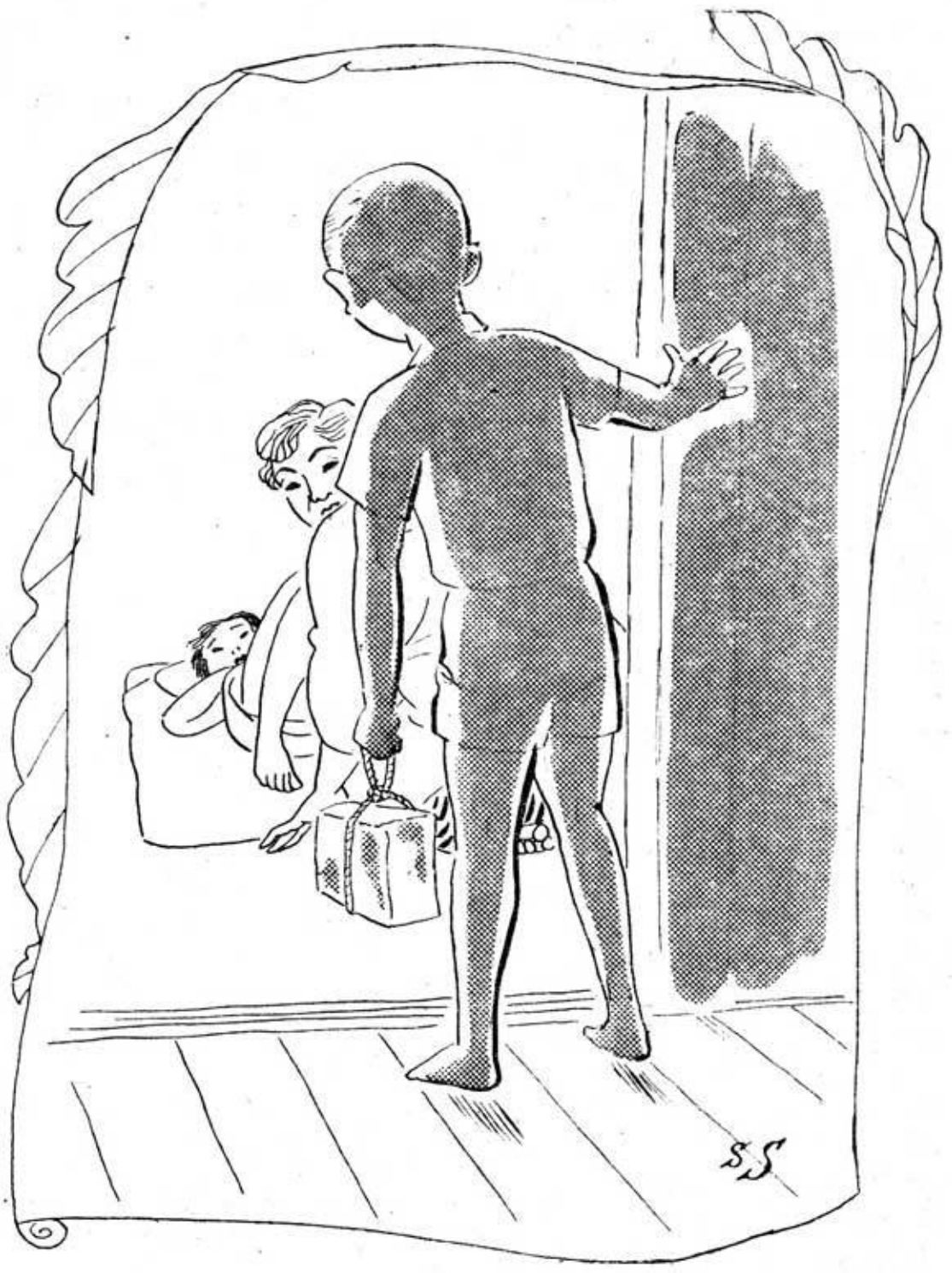
ところで今夜は、例のグリセリン浣腸のことが頭にあるせいか、どうも姉も、私にもっと浣腸したがっているように思われてしようがなかったのです。

「もう出ないわ」姉と母の顔を半分ずつ見ながら、私はおずおず言いました。ていねいに便器にちらっと注がれました。母はだまって便の始末をするようにいいました。姉はそれを持って、便所へ捨てに行きました。

「どお、何ともなかったでしょう。」

母は私の髪の毛をやさしくなでながら、いいましたが、まだズロースは、はかしてくれません。浣腸された後の、軽い腹痛と何とも

言えぬあの屈辱感。でも私は卒直に
「気持悪かったわ、とても。」
そう言って、これ以上の浣腸から逃れようと必死でした。
姉が便の始末を終えて帰ってきました。又横に坐って母の顔をみました。
「そうね、十分出たようだから、もう今夜はいいでしょう。」
この言葉を聞いて私は飛び起きました。そして母の気が変らぬうちにと、急いでズロースを身につけました。
ほっとした気持になると同時に、いままでの不満がふたたび私の胸にこみあげてきました。母の手で浣腸されるのは仕方ないにしても、姉がいっもそれを手伝うのは何としてもいやでいやでしようがないのでした。
姉が中学へ入ると同時に、母はぴたりと姉に浣腸するのをやめたのです。そして姉が便秘だと言えば大抵下剤をのませるのでした。そして私が便秘の時は浣腸。それも姉に手伝わせるのが常でした。もっとも姉が当時、全然浣腸されなかったのではない、ということは後になって偶然わかりましたが……つまり母は子供の私が寝てしまってから、姉には浣腸していたのでした。しかしそれはせいぜい月に一回位でした。
ところでこの位の浣腸なら、当時の私としては決してめずらしいことではなく、今まで



記憶になど残ってはいないはずですが、数時間後には例の私の怖れていたグリセリン浣腸をされることになってしまったのです。しかもお友達の見ている前で……
浣腸が一段落して、一時間程たっと母も姉もフトンを敷いて寝床に入りました。私も別にめずらしいことでもないので、浣腸されたことなど忘れて床に着きました。
カヤの中はむし暑く、郊外のことですので蚊のうなり声がうるさく中々ねむれませんでした。私はその日は本当に体の様子がおかしかったらしく、熱のあるせいか何度も寝返りをうっては母や姉に心配させました。普段こういうことはめったになかったのです。

でもいつのまにかうとうとしていました。ようやく眠りについたか、つかないかという時です。私は母がゆり起す声にねむそうに眼をあけました。

「どうしたの、喜代子、ものすごく熱があるわよ。」

母は明らかに驚いていました。私もその時かっかっ、とほてるような感じがしていました。しかし例のことが頭にあるものですから

「何でもないわ、喜代子ねむい。」

といって母の言葉を無視しようとしましたが、母はその時姉に隣りの家に行って医者を頼んで貰うようにいいつけていたのでした。姉はまもなく帰って来て、母とこそこそ話しています。するとその時、隣りの家の俊夫ちゃんという私と同じ年の男の子が、電話の医者の返事をもって来てくれたのです。

「あのね。お医者さんはね、あと三十分か一時間のうちにおうかがいしますって。そしてね、それまでにひまし油飲ませて浣腸かけておきなさいって。」

私はこの同じ年の男の子の口から浣腸という言葉を聞いた時は、恥かしさと気まりわるさで一杯でした。でも母と姉はすぐ支度にかかりました。

「俊夫ちゃん、どうもありがとう。ついでに氷屋さんへ行って氷買って来てくれない。」

俊夫ちゃんはこっくりうなずいて出て行ったのです。いよいよ例の浣腸が始るのです。

母は茶わんにひまし油を入れて持って来ました。姉は母に云われて浣腸の用意をしているのでしょう。未だ姿をみせません。母はひまし油を一旦下に置くと私に言いました。

「さあ、一ぺんにぐっと飲みなさい。そしてお仕置より子供にとっていやなものなのですから終ったらおとなしく浣腸しましょうね。」

ひまし油と浣腸。夏の病院の季節となるといかに多くの子供達が、この二重のお仕置をうけるでしょうか。実際この二つは他のどんな浣腸より冷い液体をみす。油っこい——当然のことですが——ひまし油を、鼻を押えられて無理やりに流し込まれる時の苦しさ。しかもその苦しさは、この後ですぐもっといやな浣腸がひかえているのだ、ということを考えることによっていっそううあわれさを増します。はき気のくるのをかろうじてこらえ、ひまし油を私は飲み下しました。ほっとした時、又さっきの俊夫ちゃんのいった「浣腸かけておきなさいって」という言葉を思い出しました。

「はいお母さん、浣腸器とグリセリン。」

姉が用意の品を母に差し出しました。私はいやいやをしています。

「いや、そんな浣腸。」

私はそこで泣き出してしまったのです。

「なにを云うんです。病気が直りませんよ。おとなしく浣腸するのよ。」

母は私にお構いなく、例の浣腸器で洗面器に入っている水を、いっぱいに吸い上げました。満足そうにそれをみて、今後はその水を又洗面器に返し、いよいよグリセリン液を注意深く吸い上げました。私も姉も、その浣腸器の目盛を無情にも上ってゆく冷い液体をみつめています。十CC、二十CC、三十CCそれよりぐっと上まで液を入れています。私は又泣きました。

「いやよ、そんなにいっぱい。」

許されないこととわかっていても、そういわずにはいられなかったのです。それ程グリセリン浣腸は私にとっては恐い存在だったのです。

「ねえ、いちぢく浣腸にして、ね、ね、」

私の最後の願いも、全然顧慮されず、たっぷり五十CCは吸いあげた浣腸器を横におくと、手早くズロースを脱がせました。さっきのように新聞紙を下にすべらすと、母は厳しく私にこう云いました。

「グリセリン浣腸だから、少し苦しいけど我まんしなさい。でないと直りませんからね。さあ、口をあけて。陽子、動かないようにしっかりおさえていなさい。」

この時、姉が電気が暗い、と云ったので中断されました。大きな電球につけかえられた時、それは芝居でいうと、クライマックスになって照明が、ひときわ光り輝いた時です。

姉は私の左横にすわって、両太ももをしっかり押えつけました。母は私のうしろ右横から浣腸器の先端をさし込みました。姉のおさえていた手に力が加わりました。静かに注入が始ります。冷い液体が少しずつおしりの中に入ってくるのですが、その気持の悪さ、といったら、先のいちぢく浣腸の比ではありません。普通はグリセリン浣腸といっても二倍にうすめるのですが、その時は文字通りのグリセリン浣腸でした。それに量が五十CC以上です。グリセリン浣腸はこんなにもいやなものなのか、と泣きたい気持でした。注入は未だつづいています。

「おばさん、買って来たよ。」

その時、俊太ちやんが玄関の戸をあけて、いつものように無遠慮に座敷にまで上って来ました。母も姉も一寸あわてたのですが、浣腸中の為、手がはなせません。俊夫ちやんは私の浣腸されている最中をみてしまったのです。流石に驚いて氷をそこに置いたまま、

「さようなら。」

と云って出て行きました。それと同時に浣腸も終りました。私の眼からは涙がとめどもなく出ていました。明日からは恥かしくて学校へ行けない、と思いながら。

幸い俊夫ちやんが思いやりのある子で、誰にもそのことを言わなかったので、結果的には、知られずに済みましたが、子供——未だ小学生であること——ということを考えるとそれは奇蹟的、と云ってもいい位でした。

私は不愉快さと、浣腸の後の苦しさでぼろぼろ涙を流していました。姉が、そっと涙をハンカチでふいてくれましたが、そんなことで刺激されて、便意はつのるし、お腹も痛く等今更何にもなりません。グリセリン浣腸液なってきました。

「もうちよつとがまんしなさいね。」

母は、丁寧にグリセリン浣腸器を片附け始めました。グリセリンの何とも云えないあの臭いが、今された浣腸の想い出をいっそう明瞭にします。

約十分程我慢出来たのは、さっきのいちぢく浣腸で直腸近くの便は排泄されていたからでしよう。母が便器をさし込んだ時、玄関に人の気配がしました。私は又はっ、としました。今度は医者が来たのです。医者は私が仰臥になって排便しているをみて

「もう浣腸はすんだんですね。どうなんですか具合は。」

「寝る前に今日お通じがなかったもんですから一寸浣腸かけてみたんですよ。いい便が出たものですから、そのまま寝せたんですが、いま一寸前熱を計ってみたら、熱が高いものですから……」

「先に浣腸かけた時の便は？」

「あの捨ててしまいましたけど。」

「そうですか、その便がみたかったな。」

医者はそう云うと私の排泄した便をのぞき込みました。

この始めてのグリセリン浣腸が終ると、私はほっ、とため息をつきました。それから医者は色々診察をしましたが、そのことは今殆んど記憶にありません。

医者が帰る時母に

「学校は二、三日休ませた方がいいでしよう。軽い腸カタルですよ。心配はいりません。食事は、明日はオモユであさってからおかゆにして下さい。番茶以外は飲ませないで下さい。それから、あしたからは寝る前にお通じがあっても無くても浣腸して置いて、その便はとっておいて下さい。」

私はオモユ等飲ませてお通じなんかある筈ないのに、と医者の云う事がうらめしくてしようがありませんでした。よしんばお通じがあったところで、浣腸されるのだから全くやりきれない気持でした。それに明日はきっと近所の人達がお見舞に来るだろうし、その時又今夜の浣腸の話が出る、と思うと余計悲しくなるのでした。

そして翌日から約一週間程、母の手で私は浣腸されつづけたのです。

（終）

× × ×

古典にみられる『男責』について

菅良太

文献にみえる最古の男性の責は古事記にある須佐之男命の千位置戸であろう。高天ケ原において畔放ち、逆剝ぎの乱暴を行った須佐之男命は天照大神の怒りに触れ、千位置戸という祓物（今でいう罰金刑）を課せられた上、体刑を加えられる。「ここに八百万の神共に議りて速須佐之男命に千位置戸を負はせ、髯を切り、手足の爪を抜かしてて神遂いに遂ひき。」とある。須佐之男命といえば古代最も男性的な英雄である。それを多数の神々が捕えて押えつけ髯を抜き、手足の爪を一本一本引抜く刑罰は神話ながら男性マゾ向きである。その須佐之男命が娘婿の大国主命を試した「蛇の室屋」の話は日本の蛇責の最古のものであろう。命は蛇の後に呉公や蜂を責道具に使っているがこうなると命は一種のサドになる。「日本書記」に載っている、調伊企難の物語も面白い。韓国白村口の戦で破れ、妻の大葉子と共に捕えられた日本軍の勇士調伊企難は、新羅王の面前に引かれて裸にされ「日本王我臀を食らへ」と叫ばしめられるが肯んぜず、却って「新羅王我臀を食らへ」と連呼しその場で虐殺されるが、この物語一篇の小説に書き上げたいと思っている。大葉子はむごたらしく斬りさいなまれた夫の死骸の傍に立って、

韓国の城の辺に立ちて大葉子は領布を振らすも倭国に向きて

と詠う哀話はあまりに有名である。平安朝の説話物語「今昔物語」に「女の怪盗に遭ふの話」という中に、一人の若者がある夜美しい女の色香に誘われてその家に行き、幾日かもてなしを受けたが、ある夜一室に連れて行かれ、裸にされ、髪を縄で括られ、体は幡物という礎柱のような刑具に緊縛されて女から鞭を七八十杖も受ける。女は鳥帽子、水干に太刀をはいた男姿になって楽しそうに鞭を振う描写は、王朝時代に最初に現われたマゾ物語であろう。鞭打の後、女は男に土と酢をまぜたものを飲ませて介抱し数日、大切に扱い御馳走を与えるが、傷が回復した頃、又同じような事を行う。勿論鞭の数は次第に増えて行く。男がそれを耐えるのを見て女は男が逞ましくなって行くのをよろこぶ。その女は盗賊の首領で男はその手下として働かされる話であるが王朝時代にすでにサド、マゾの物語があることを紹介して置く。鎌倉時代の説話「宇治拾遺」に「中納言師実、法師玉茎検知の事」という話がある。中納言師実の邸にある時一人の若い法師がやって来て「自分は諸々の煩悩を切り捨てた聖法師だ」と言い寄付を乞うので中納言は「煩悩を切捨てるとはどんな事だ。」ときくと、法師は法衣の裾を捲って見せる。そこには男の象徴がなく叢ばかりであった。然し下の方に何やら大きな嚢があるので怪しいとにらんだ中納言は下人達に法師を取押えさせて十二三の小侍（当時の小姓らしい）を呼び出だした。愛らしい小侍が命ぜられる儘、法師の眼前に立ち現れると、法師の顔面は俄かに紅潮し嚢の部分がゆらゆら

と動き始めたので、人々は大笑したと書いてある。この似而非法師は男の象徴を奥にかくし叢をそくいにてはりつけて自ら去勢僧と称したものらしい。その話なども小侍を枷に使った所はその頃すでに流行しつつあった男色物語の萌芽を感じるが、これ等も一種の男色を加味した男責の話と考えてよかろう。同じ鎌倉時代の僧侶の書いた「愚管抄」に北条の討手によって伊豆の修善寺で暗殺される若い源氏の将軍頼家の事が書いてあるが、岡本綺堂の戯曲「修善寺物語」のように美しく描かれてはいない。入浴中を襲われた頼家は「とみにも殺さず首に緒をつけ、ふぐり切り取りなどして……」と書かれているから、むくつけき関東の荒武者達はこの源氏の若き将軍を弄り殺しにしたらしい。

「鍋冠日親上人伝」は江戸初期の高僧の伝記であるが、この物語にある北条幕府の日親に対する責め方は日本拷問史上最大の記録ではなかろうか。裸に剝いての吊責、水責、火責は勿論、風呂桶を使っての蒸責は珍しいものであった。それでも念仏を唱えることを止めない上人の急所を竹串に油を塗ったもので貫いた。更に灼熱の鋤を裸の両腋に挿ませたり舌を切断するなど、惨鼻を極めている。灼熱の鍋を冠せられたのはその最後の拷問であった。当時未だ青年の僧であった日親がこれらの言語に絶する拷問に耐え忍ぶ物語は殉教の物語でもあるとともに一種のサドの物語でもある。この伝記には稚拙ではあるが一つ一つ拷問の挿絵が入っている。一見をおすすめしたい。挿絵の何と言ってもすぐれた責絵は滝沢馬琴の「南総里見八犬伝」の中の犬川荘介が代官所で奸人輩から水責の拷問に遭う挿絵で仰向けに九つ梯子に括られた荘介が二人の奴に手桶の水を口中に注ぎ込まれている図である。鞭打、吊責、石抱き、海老責の順である。就中海老責の図は惨鼻を極めている。両肌脱ぎの男が顔と股とが密着する程緊め上げるが耐痛のあまりクワッと口を開いた姿といい、それを心持良げに見ている三人の役人といい、白洲の玉砂利が一つ一つ刻明に描かれている密画である。然し本文の方は拷問の割竹打ちと水責だけでいささか平凡である。日本刑法の貴重な文献としての「徳川実記」には拷問についての過程が図入りで出ている。鞭打、吊責、石抱き、海老責の順である。就中海老責の図は惨鼻を極めている。両肌脱ぎの男が顔と股とが密着する程緊め上げ

乗杉貴代子様に寄せて

私の馬

西田佐代美

乗杉様、貴女のお作は誌上に発表される毎に、一入興味深く拝見致しておりますが私は私用の馬を持って楽しんでおりますので一寸お知らせしたいと思います。

私の馬は当年十四才の少年です。私のいとこに当りますが色の白い弱々しい内気な少年で仲々乗心地は宜しゆうございます。大分以前から毎日乗っておりますので近頃

られている図は異色ある図である。この他に火あぶりの図があり上半身を裸にされた男が薪の上に載せられ囲りに鉄の枠を付けられそこに柴を沢山結びつけて罪人の姿が見えなくなる迄柴でおおい火をかける。罪人の躰がすっかり焼けて了うと非人は燃え残りの薪でもって罪人の急所を焼く、これは生きているかどうか試すのである。若し完全に焼けていない罪人は最後の苦痛を味わされるのである。女性は乳を焼く事になっている。

安政の大獄の時、井伊直弼の懐刀と言われた長野主膳や島田左近の手先となって勤皇の志士を捕縛した京都の目明し文吉は、志士達の憎悪の的となり捕われて私刑をうけたが、この私刑については徳富蘇峯の日本国民史にもあり、船橋聖一の「花の生涯」にも立野信之の「明治大帝」にも詳述されているが四条磧の刑木に縛し晒物にした上急所に竹串を刺し嬲り物にした上扼殺された。主膳の妾のたか女もこの時捕えられて晒物にされた事は映画にもなっているので衆知の事であろう。

その他、平家物語の西光法師、慶安の乱の丸橋忠弥、屎責になった大島逸平、中山勘解由の考案になる海老責に最初に掛けられた町奴、放駒四郎兵衛など挙げることが出来るがここでは古典で見られるものを挙げて巷説的なものはすべて省略した。

（了）

は三十分位は耐えられるようになりました。申し忘れておりましたが私は二十八才になるOLDMISSです。目方は十四貫御座居ます。乗ります時には少年馬は赤色の下帯だけで、掌と膝とに畳ずれを防ぐ布製のくつを穿かせますが、背中には座蒲団を鞍がわりに置いたこともございますが、何もない方が馬の胴をぴったり締められて味がありますので近頃はずっとそうしております。

鐙はさらしを馬の首と下帯とにかけ渡して代用と致します。これは跨った時に、ともすれば私の膝が畳につきますので、全体重を馬に托す為に是非必要なものでございます。手綱を噛ますことは勿論欠かせません。

それから私には、乗馬に際して赤いネルの腰巻が必要なんです。これは馬に与える被虐感と共に私自身の征服感を満足させてくれるものですから……その姿で鏡台の前へ歩かせます。世にも悲しげな表情の馬、その哀れな首の廻りに腰巻が威厳をもってかぶさり、ぎゆっと私の豊満な足で締めつけられて可愛くあえぐ細い胴……この征服感は得もいわれぬものでございます。

馬が疲れて倒れると蒲団を細長く畳んでその上に腹這いにならせ、私は跨ったまま休ませます。又日に依っては馬を高手小手に厳しく縛り上げて休息に代えることも度々ございます。

私は一人身でアパート生活をしておりますので、気兼ねする人もない気安さのためか、この変った、しかし楽しい乗馬遊びを止めることを出来ず、毎日繰返しているのでございます。いとこも嫌がらず通って来てくれております。

乗杉様、貴女は私の様な乗馬経験をお持ちになっていらっしゃいましょうかしら？お金はなくても私にはこんな立派な馬がございます。私は他のものに乗ったことはございません。かよわき、いとこ馬ONLYです。

けれどこのいとこが逞しい若者に成長して行くだろうと思うと……私は今からそれを心配しておりますの。

大変突然に失礼なことを申し上げました。どうぞお許し下さいませ。では又、貴女のお作の発表される日をお待ち致しております。

佐代美

乗杉貴代子様

◎本誌百号突破記念◎

『懸賞募集原稿』入選作品

お町の最期

花巻京太郎

器量が良い、その上に踊り三味線などの芸事の下地があり、それに小太刀の使い手というのだから、お町に人気があるのは当然で、水茶屋の女にしておくのは惜しい、と幡随院の長兵衛までお町を贔屓にし、芝居見物の帰りには、お町の茶屋へ必ず寄るのであった。

「どうだい、いいお婿さんを世話してやろうか。」

と冗談めかして長兵衛は、時々お町に言うのだが、

「あら親分は私の男嫌いをよく御存知のくせに。」

と、お町は笑って軽く受け流すのである。笑うとお町には笑窪が出来、色気が出て、これが男嫌いで通っている女とは、どうしても見えねえ、と長兵衛の子分達は話し合うのだが、それが、お町のいい所さ、と長兵衛は満足げに一人でうなずくのであった。

そうした或日の事、お町は、江戸中の人気を一人で奪うような手柄をたてたのである。長い間、役人を散々手こずらせていた盗人の紋七が、お町の手で捕ったのだ。紋七というのは、押込強盗を働くだけではなく、入った家の娘を必ず凌辱して去るというのだから、年頃の娘を持つ親達を非常な恐怖におとしいれたのである。その紋七が猿若町の材木小屋に潜伏している所を岡っ引の佐平に見つかり追われて逃げ込んだ水茶屋が運悪くもお町の店だったのである。土足のまま座敷へかけ上り、裏口から逃げ出そうとした紋七の足にからみつくようにしてお町は邪魔をし、

「野郎、ふざけた真似をしやがる…」

と必死になった紋七が匕首をふりかざしたが、お町はひるまず紋七の利腕をつかんで見事にねじ伏せたのであった。そこへ岡っ引の佐平が飛びこんで来て紋七は難なく御用となったわけだ。

さあ、それからのお町の評判といったら大変であった。お町ちゃんは小太刀だけではなく柔術も出来る。ひょっとすると武芸十八般何でも心得ているんじゃないか、など噂が立ち、この女の姿を一目見んものと田舎からわざわざ芝居ではなく、お町を見るため出向いて来る者もあり、息子の嫁に欲しいと丁稚を連れた商家の主人がやって来たり、似顔絵を書かせてくれと頼みに来る浮世絵師もあり、また喧嘩の仲裁を頼みに来る者もあった。とにかく世間では、お町の事を女伊達、女俠客だとワイワイ騒ぎ出したのだが、その中でお町を仇敵として秘かにつけ狙っている女があった。うわばみのお銀と異名を持つ女スリである。お銀は、お町のために捕えられた紋七の情婦で、紋七の仇をとると心に決めたのであったが、それでなくとも、ヤレ女伊達、女俠客とお町がメキメキ売り出してきた事に嫉妬めいた憎悪を覚えていたのであった。この猿若町一帯を縄張りにしているお銀だけに、お町の評判が上がるのに対し、反感を持つようになるのは無理のない事だが、そのお町が水ぎわ立った美人であるという事が、一層、お銀を不快にする原因ともなっているようである。そういう気持であったところへ自分の情夫の紋七がお町の手によって捕ったのだ。畜生、今に見ていやがれ、と口惜しさにキリキリ歯を嚙みならしながら、お銀はお町に対する復讐を心に誓ったのであった。

或日、お町の水茶屋に青ざめた顔をして、やって来たのは、呉服問屋、越後屋の主人、藤兵衛と女房のお春である。藤兵衛は、弧児であったお町を救い上げ、一人娘のお絹と同様、自分の娘のようにして育てあげ、そして、お町の希望を入れて現在の水茶屋を開かせたのであり、いわば藤兵衛はお町にとっては、親同様の大恩人なのであった、その藤兵衛の何時にない顔色の悪さを見て、お町は、

「おじさん、何かあったのですの」

と不審な顔附きをして聞いた。

「お町さん、実は内密で相談したい事があるのじゃが」

困惑しきった顔を更に曇らして、藤兵衛は言うのである。お町は藤兵衛夫婦を二階へ上げた。

お町の出した坐布団に藤兵衛夫婦は元気なく坐り、夫婦揃って、しばらく、うなだれていたが、やがて思い切ったように藤兵衛は口を開いた。

「お町さん、わしの頼みを聞いてくれるか。」

お町は、妙に緊張したこの場の空気をほぐすように笑窪を作ってにっこり笑い、

「私は、おじさんに命を助けられて育てて頂いた女です。おじさんの頼みとあらば、生意気なようですが、たとえ火の中、水の底、命だって投げ出しますよ。」

「よく言うて下さった、お町さん。」

藤兵衛とお春は、手拭で目頭をおおいながら言った。

「実は、お町さん。」

藤兵衛夫婦が交互で語るのは、こうである。——昨夜、藤兵衛の家へ三人の押込強盗が入った。そのうちの一人は女で、これが、どうも首領らしく、二人の手下に命令して家内の者を全部縛りあげ、土蔵を破って千両箱を一つ盗み出し、それだけならともかく、長襦袢姿で縛りあげられてるお絹をかつぎ上げ、表に待たせてある駕籠に押し込んだ。首領の女盗賊は、娘の命が惜しければ、この手紙を猿若町のお町に渡せ、もし役人などに知らしたりすれば、娘の命は無いものと思え、そういう捨科白を残し、お絹の押しこめられた駕

籠をかついで去ってしまった——という事であった。

「お絹ちやんが!!」

さすがにお町は顔色を変えた。お絹は越後屋の目に入れても痛くない秘蔵娘、世間では赤坂小町と呼んでいる器量良し、藤兵衛の心痛を思うとお町も胸がつまって来、女盗賊が渡して行ったというその手紙をあわてて開けた。

お町さん、お絹の命が救いたければ明晩、蓮台寺裏へ一人で出ておいで、そこで私と一騎討するのさ、約束を違えれば、お絹を男達に散々おもちやにさした上、息の根を止めてやるから、そう思うがいい。

うわばみのお銀より

手紙の内容は、女同志のいわば果し合い状だ。

「このお銀という女は、どういう素性の女か知りませんがどうか、おじさん心配なさらないで下さいまし。私の命に換えても、お絹ちやんは無事に救い出してみせます」

と、お町は藤兵衛にはっきり言った。藤兵衛に受けた恩を返えすのはこの時だとお町は單身危地へ出かける事を決心したのである。

「お町さん、お願いだ。どう

か、お絹を助けてやっておくんなさい」

藤兵衛は畳に頭をつけんばかりにして、お町に哀願するのである。

「まあ、おじさん、どうか手をあげて下さいまし。私も十分用心はするつもりですが、もしも、という事があります。夜明けの一番鶏が鳴いても私が帰って来ないようでしたら幡随院の親分さんに事情を話し、蓮台寺裏へかけつけて頂くよう、おじさんも、悪い場合にそなえて打つ手だけは打っておいて下さいまし」

と言って、お町は早速仕度にとりかかった。

荒れ放題に荒れた蓮台寺の本堂。中央の四角柱に緋の長襦袢姿のまま、ぐったり高島田のくずれたお絹が、猿轡をはめられ、後手に縛りつけられている。長襦袢の裾から赤いものが見えている。そんなあられもないお絹の前に坐って、酒をくみ合っているのは、お銀と子分の花吉、捨三の三人だ。

「姐御、お町の奴、やって来ますかね。」

花吉が、お銀の茶わんに酒を満たして言った。

「そりや来るともさ。小太刀のお町なんぞと世間にもてはやされてる手前、呼び出しを受けて来ないとなりや男が、いや女がすたろうというものさ。」

「なるほどね。」

「それに、このお絹という娘は、お町の恩人の娘なんだよ。お町の気性からしても、きっと、死にもの狂いでやって来るに違いないさ。」

「そうでしょうね。しかし、姐御、こんな別嬪の生娘を長い間、俺達にお預けを喰わすたあ罪ですぜ。」

「フフフ、助平のお前達の事だから、そりや辛かっただろうよ。だけど、もうじきさ。お町の阿女さえ片ずけちまえば、お前達、気のすむまで、この娘をしやぶらせてやるから。」

そのお銀の言葉を聞いて、前の柱に縛りつけられているお絹は、体を震わし、猿轡の中で声にならぬ泣き声をあげ始めた。花吉は、ニヤリとして、お絹に近ずき

「お嬢さん、まだ泣くのは早いぜ。今、姐御が言った通り、お町をたたんじまったら、お前さんを素っ裸にして、うんと泣かせてやらあな。楽しみにして待っていな」

と言って、顔をそむけてすすり泣くお絹の白い頬をつついた。すると、

突然、

「お絹ちやん、しっかりするんだよ。」

と、破れ障子をへだてた廊下から、女の声がした。

ハッとしてその方を見た三人は思わず声をあげた。廊下から本堂の中へ入って来たのは、藤鼠色の織縮緬に黒い丸帯をしめ、お高祖頭布をしたお町であったからだ。

「お町だね、よく来た。」

お銀はすっと立上って、懐から匕首を抜いた。

「小太刀のお町さんとやら、冥土への土産に私の素性を教えてやる。私はね、お前のために島流しにされた紋七の女房、うわばみのお銀さ。よくも可愛いい亭主を島送りにしやがった。今、その恨を晴らしてやる。覚悟しやがれ。」

お銀の言う事を黙って聞いていたお町は、ニッコリと顔をくずし

「お銀さんとやら。今、素直にお絹さんをこちらへ渡せばよし、さもないととんだ大怪我をしても知らないよ。」

と、後に隠すように持っていた長脇差をスラリと抜いた。

「何をいやがる、この阿女。」

空然、横から捨三が棒を持って打ちかかって来た。ヒラリと裾をひるがえして体をかわしたお町は、再び、ニッコリと不敵な笑顔を作って、

「お銀さん、一騎討と言ったのは、ありや出鱈目かい。まあ、いい

さ、三人共、束になって、かかっておいで。」
「聞いた風な事を!!」
花吉も匕首をふりかざして横手から打ってかかったが、お町に軽く体を開かれて、これも大きく空を斬って、よろめき、肩をバッサリ猿轡をされて縛られているお絹は、お銀に匕首を突きつけられながら、私はどうなってもお町さん、がんばってと、心の中で言うのだが、いたずらに体を悶えさすばかりで、それがお町の目にはお絹が恐怖におののいていると映ずるのである。お町は無念そうに刀を下へ落した。
「おい、花吉、捨三、早くお町を縛りあげな。」
お銀は、お絹の胸元に匕首を突きつけたまま勝ち誇ったように言った。お町に峯打で手きびしく打たれた肩や手首を押さえながら、花吉と捨三はお町に近ずき、
「畜生、虫も殺さぬ可愛いい顔してやがるのに強い阿女だ。」
などと言いながら、懐から麻縄を取り出し、
「やい、お町、手を後へ廻すんだ。暴れたりしやがるとお絹の命はないぞ。」
と楽しそうに言った。お絹の命をお銀が握ってるかぎり、お町は全くどうしようもなかった。こんな、やくざな男二人に情などかけて峯打ちで命を助けたのが失敗だったと、お町は後悔して無念さに唇をかんだが、もうおそい。お町の峯打ちで命拾いした事などに何の恩義も感じぬ花吉と捨三は、お町の両手を二人がかりで後へねじまげ、お町の胸に縄をかけた。
勝った、とお銀は心の中で叫んだ。
「しっかり縛るんだよ、いいかい。」
と念をおして、お銀は、ようやく匕首をお絹の胸元から離した。
「さあ、その物騒な脇差を手から離すんだ。そうでないと、この娘を——。」
更にお銀は、お絹の胸元へ匕首を近ずけた。
「あっ、危い、お止しったら。」
お町は、あわて出した。
「それじゃ、刀をお離し。」
お銀は、せせら笑うように言った。
猿轡をされて縛られているお絹は、お銀に匕首を突きつけられながら、私はどうなってもお町さん、がんばってと、心の中で言うのだが、いたずらに体を悶えさすばかりで、それがお町の目にはお絹が恐怖におののいていると映ずるのである。お町は無念そうに刀を下へ落した。
「おい、花吉、捨三、早くお町を縛りあげな。」
お銀は、お絹の胸元に匕首を突きつけたまま勝ち誇ったように言った。お町に峯打で手きびしく打たれた肩や手首を押さえながら、花吉と捨三はお町に近ずき、
「畜生、虫も殺さぬ可愛いい顔してやがるのに強い阿女だ。」
などと言いながら、懐から麻縄を取り出し、
「やい、お町、手を後へ廻すんだ。暴れたりしやがるとお絹の命はないぞ。」
と楽しそうに言った。お絹の命をお銀が握ってるかぎり、お町は全くどうしようもなかった。こんな、やくざな男二人に情などかけて峯打ちで命を助けたのが失敗だったと、お町は後悔して無念さに唇をかんだが、もうおそい。お町の峯打ちで命拾いした事などに何の恩義も感じぬ花吉と捨三は、お町の両手を二人がかりで後へねじまげ、お町の胸に縄をかけた。
勝った、とお銀は心の中で叫んだ。
「しっかり縛るんだよ、いいかい。」
と念をおして、お銀は、ようやく匕首をお絹の胸元から離した。
「さあ、その物騒な脇差を手から離すんだ。そうでないと、この娘を——。」
更にお銀は、お絹の胸元へ匕首を近ずけた。
「あっ、危い、お止しったら。」
お町は、あわて出した。
「骨折らしやがったぜ、この阿女。」
花吉と捨三は、お町を後手に厳重に縛りあげると、ほっとして言った。お銀はお町の縄尻を取った。
「さあ、お町さん、お歩き。散々、痛めつけられたお礼をたっぷり

してやるから。」

「何処へ行くのさ。」

お町は柳眉をさか立て、後の縄尻をとったお銀をにらんだ。

「今に解るさ。さあ、花吉、越後屋のお嬢さんもひき立てな。この二人を地下へお連れするんだ。」

待ってました、と花吉は、必死に身をよじるお絹を上へ抱き上げるようにして起し、捨三は、本堂の隅のハメ板を外し始めた。ハメ板をはずすと暗い地下に向かって、段梯子がとりつけてある。

お町は、こうして悪党共の罠に落ちた現在、どうにかして時を稼ぎ、明け方、長兵衛の手下が救出にかけつけてくれるまで、お絹を守らねば、と決心したのであったが、こんなハメ板を外した深い地下を救援者が見つけてくれるだろうかとますます暗い気持になって、地下へ降ろそうとするお銀にさからって、体を悶えさせた。

「何をぐずぐずしてるんだ。この地下は、私達の隠れ家だよ。いくら泣いたり、わめいたりしたって外へは聞こえないのだから、さあ観念して、とっととお入り!!」

と、どなって、お銀は、お町の腰をけった。そして、子分達に、

「お前達、この二人の女の裸おどりが見たいのなら、早く運ばないか。」

と叱った。

燭台に灯がつけられるとカビ臭い地下室の中は八坪位の広さで、天井からつり下がっている鎖にお町を縛ってある縄尻はつなぎ合わされた。お絹は中央に立たされているお町から、二間ばかり離れた所の柱に、これも立ったまま縛りつけられ、丁度、お町と向かい合った恰好になった。お絹は、肩に頬をすりつけて猿轡をひきはずし

「お、お町さん。」

と始めて、お絹は声を出し、涙ぐんだ目附きで哀れな姿のお町を見、

「私のために、お町さんをこんな目に合わし……」

と縛られた体を震わして泣きじゃくるのである。

「お絹さん、しっかりするんだよ。負けちやいけない。」

お町も縛られた体を震わせて言った。

「フフフ、お町さん。今、このお嬢さんを素っ裸にして、男二人が楽しむからね、よく見物するがいいや。」

とお銀は言い、そして子分達に、

「長い間、お預けくわしてすまなかったね。さあ、お絹を裸にしちまいな。」

有難てえ、とばかり、花吉と捨三は、お絹に襲いかかり、扱帯をほどきにかかる。

「お町さん、助けてー」

とお絹は思わず大きな悲鳴をあげる。

「お待ち、一寸、待っとくれったら。」

お町は必死に自由のきかぬ体を悶えさして叫んだ。

「何だよ、お町さん。お前さんが、お絹の代りに素っ裸になるのならお絹は後廻しにしてもいいんだよ。」

お銀は、ニヤリとしてお町に言い、お絹を押えつけている子分達を制した。

「は、はだかにするのだけは堪忍しとくれ。その代り吊し上げるなり、鞭で折檻するなりお前達の気のすむまで私は責められてもいいから」

お町は哀願するように三人に言った。

「ならねえ、ならねえ。吊し上げるにしても、鞭で責めるにしてもとにかく着物を脱いでもらわねえと張合いがねえんだ」

花吉は、せせら笑うように言った。

こんな野卑な人間達に裸にされる、思っただけでも、気が遠くなる程の口惜しさだ。自分だけなら舌をかんで、この屈辱から逃れられるとしても、どうしても、時を稼いで、お絹を救わなければ、死ぬにも死ねず、お町は遂に観念した。

「なりやいいんだろう、なりや。そんな小娘の体より年増姐さんの油の乗った裸の方が面白いだろうよ。」

とお町は半分やけになって言った。

「よく言った、お町さん。」

と、お銀は、ニヤリとして、

「お前さんの着物を脱がせるのは一寸、骨が折れると心配していたんだ。それじや縄を解いてやるから、おとなしく着ているものを全部脱ぐんだよ、いいね。」

お銀は、抜け目なく、お絹の所へ行き、お絹の胸元に匕首を再び当てがって、お町に暴れられぬ用心をした。

「へッへッへッ、鉄火姐さんの素っ裸たあ有難てえ。」

花吉と捨三は、お町の縄を解く前に、まずお町の着物の帯を解きくるくる廻しては、ずり取り、それから幾つもの腰紐を解いては次々と抜きとった。お町は、口惜しさに唇を固くかみ、目を閉じ、顔を横へそむけている。やがて、花吉と捨三は、お町の縛しめを解き、二人がかりで一気に着物をはがし、緋の長襦袢を脱がせ、肌着もかな

ぐり捨て、小桜ちらしの湯文字一枚のあられもない姿にしてしまった。お町は豊満な白いマリのような乳房を思わず両手でおおい、恥しさのため顔を真赤に染めて、その場へ身をかがめようとしたが、もう目は血走って一種の淫獣になりきってしまっている花吉と捨三は、

「いけねえ、いけねえ」

と言って、そんな恥しさに身をもむお町のうで卵の白味のような艶のある体を引き起し、

「さあ、お町姐さん。も一度、お手々を後に廻すんだ。」

と、唾をのみこんだり、舌なめずりをしたりしながら、お町の肉づきのよい白い腕を後にまわし豊かな乳房の上下へ麻縄をかけて、厳重に縛り始めた。そしてお町を縛り上げるとその縄尻を元のように上から下がっている鎖につなぎ止めた。

「畜生、いい体をしてやがる。」

男達だけでなく、お銀まで、適度に脂肪ののった光沢のあるお町の裸身に眺め入るのであった。花吉は、たまらなくなったようにお町に近ずくと、

「さあ、お町さん、この湯文字も脱がせてやるぜ。」

と花吉は、しやがんで、お町の湯文字の紐を解きにかかる。

「け、けだもの!!　お前達は、それでも人間かい!!」

最後の楯を剝がれるという羞恥と恐怖に、死んだようにぐったりなっていたお町も、かっと頭に血がのぼって叫んだ。

「ヘッヘッヘッ、小太刀のお町さんともあろう人が、たかが湯文字を剝がれる事位で、大きな声を出しなさんな、みっともねえぜ。」

「ああ、畜生。」

お町は恥しさと口惜しさに歯をキリキリとかみ鳴らし、目を固く閉じて顔をそむけ、出来る限り固く両足を閉じ合わした。

お銀は散乱しているお町の脱がされた衣類を両手に一杯抱きかかえて、勝ち誇ったように言った。

「お町さん、お前さんの着物は全部私が頂戴しておくよ、いくらお前さんが気丈な姐さんでも、そうして縛られちまえば、少しはこたえただろうよ。だけど、これは、まだ序の口さ。これから本当の責めに入るのだからね。フフフ、そうして足を必死に閉じ合わせているところなんか、やっぱりお前さんも女だねーだけど今にその足も大きく開かして縛ってやるから、まあ、せいぜい今のうち、しっかり閉めておくがいいさ。」

そして、お銀は子分達に言った。

「先刻、ひどい目に合わされたお礼をしてやんな。」

花吉は、エヘヘヘ、と喜んで舌なめずりをして、お町に近ずいてしやがみかけたが、

「あっ」

と下腹をおさえて横転した。

「何をするんだよ、助平野郎!!」

我慢のせきを切って、お町は足で花吉の下腹をけったのだ。

「この阿女、よくもやりやがったな、もう用捨はしねえぞ。」

足を縄で縛りつけておかなかったのが不覚と知って、捨三は麻縄を持ち、お町の両足を取りおさえに行ったが、お町は必死になって足をばたつかせ、寄せつけまいとした。

「縛られていても強情な女だねえー」

と、お銀は舌打ちして、

「よし、それじや、お絹を裸にしな」

と子分達に言い、お町の動揺をうかがった。

「そ、それは……」

急所をつかれて、お町は、あえぎながら、

「お絹さんだけは触らないでおくれ、後生だから。」

とお銀の顔を見る。

「そうかい、じやあ、おとなしく男達の言うことを聞くというんだね。」

お銀は、チクリチクリお町の心を刺すように言った。こうして、お町をいじめ抜きながら何ともいえぬ優越感をお銀は味わっているのだ。

「さあ、返答、返答。」

花吉も今お町にけられた所を痛そうにさすりながら立上って来て、お町に迫った。

お町の目に口惜し涙が光る。

「さあ、お町、言う事を聞くのか聞かねえのか、はっきり返答しろい。」

と、花吉は芝居じみて、お町に凄んで見せる。お町は、涙にうるんだ目を閉じ、唇をかんで、首を縦に動かした。

「じや、おとなしくすると言うんだね、二度と暴れたりすると、お絹を折檻するからそう思いな。」

お銀は楽しそうに言った。

「それじや、二度と暴れられないよう足を縛ってあげるよ。おとなしくするんだよ。」

お銀は、引き脱がされたお町の衣類の中から、細い腰紐を一本抜き取って、お町の足もとへ、しやがんだ。ああ足の自由さえも奪われてしまったなら、どのような悪どい悪戯を男達にされても、お町は、いよいよどうしようもなくなるのだ。

「く、くやしい。」

お町は顔を伏せた。

「やめとくれ!!そんな事、嫌。」

「へへへ、小太刀のお町さん。これ位で音をあげるようじや、これからの責めが思いやられるぜ。」

花吉と捨三は、そんな事をいいながら、更に、きつく腰紐をひきしぼって、足首に巻いた紐に結びつけた。
「お前さんのような強い女には、こうしておかないと危いからな」
と男達は笑った。
お町は顔を真赤にして、首を激しく振った。お町の髷の根は、ぐったり崩れてしまった。
これで勝気な女の高慢ちきな鼻もへし折れただろうと、毒婦お銀は思う存分、仇が取れた事に、そくそくする程、嬉しくなり、
「いいざまだよ、お町さん、どうだい」
と、消え入るように、うなだれているお町の頬をつつき、
「何とかお言いよ」
と、お町の白い背を平手でピシヤリとたたいて笑うのだった。
「さあ、お町を生捕ったお祝いだ、酒盛の用意をしな。」
お銀は花吉に命じて、酒の用意をさせ、屈辱の口惜し涙を流すお町を囲むようにして坐り、そんな、あられもないお町の姿を酒の肴にして、卑猥な都々逸を唄ったりしながら酒盛を始めた
「ついでの事だ。お絹も素っ裸にむいて、この阿女と同じように縛りあげやしよう。」
と、花吉は、酒の興を一段とそなえるためにお絹を裸にしてお町と並べようと提案したのである。
「畜生、約束が違うじやないか!!」
お町は、今まで伏せていた顔をキッとして正面に向けて言った。お絹をかばうために観念して、このような恥しい姿にされたのだ。それに今になって、お絹も嬲りものにするとは……あまりの口惜しさにお町は、縛られた身体を必死に悶えさせて叫んだ。
「お絹さんの身体に指一本でもさしたら承知しないよ!!」
しかし、お銀も、子分達も相変らずニヤリニヤリ笑いながら酒を飲むのである。
「フフフ、仲々大きな口をきくじやないか、それじや、お町さん、お絹を嬲りものにするかわりにお前さん、何か酒の席の余興をやってくれるかえ」
お銀は、お町のひきつったような顔を楽しそうに見ながら言った。
「これ以上、私に何をしろというのさ!!」
お町は柳眉をさかだてて、お銀をにらむ。
「フフフ、お町さん、そうして怒ると滅法色っぽくなるね。そうさね、お酒の余興にお前さんがお小用をする様を見せて貰おうか」
お銀の言葉を聞いて、花吉と捨三は、どっと笑い、
「お町姐さんのお小用の図てえのは見物だぜ」
と言った。
「畜生、人非人、そ、そんな事、誰が、誰が。」
お町は激しく首を振った。
花吉は匕首を持って、自由のきかぬお町に近ずき、お町の脇腹を匕首の背でピチヤピチヤたたいた。
「ヘッヘッヘッ、一思いにこいつで、ずぶりと殺してほしいだろうが、そうはいかねえ、お前さんに痛められたお礼に俺達は気のすむまでお前さんの身体を嬲りぬいてやるんだ。まあ観念して俺達の言う通りするんだ。」
お銀も茶わん酒をあふりながら、ニヤリとして言った。
「さあ、お町さん、後の始末は男達がしてくれるから、安心して、そのまま、お小用をして見せとくれ」
お町は唇を固くかんで、うなだれたままである。
「強情な阿女だ、少し痛い目をさしてやろうか」
お銀は、隅から青竹を持ち出してくると、お町の弾力のある尻をピシリとぶった。
「これでもか、これでもか」
お銀は、何かに憑かれたように血走った目付きになって、お町の

尻をぶち続けた。

「ああ、」

お町は、思わず首をのけぞらせて苦しそうにあえぐ。お町の尻は真赤にふくれ上った。

「待って、待って下さい。」

見ていられなくなったお絹が、叫んだ。

「お町さんをそんなにいじめないで、お願い。」

と、柱に縛られたままの姿で涙にうるんだ目をし、お絹は、哀願するようにお銀を見た。

「じや、今度は、お前さんがお町の身代りになるって言うんだね」

お銀は、お町の尻を叩く事を止めて、お絹に言った。

「何を言うの、お絹ちやん。」

と、苦しい息をしながら、お町は叱るようにお絹に言った。そして、お銀に、

「さあ、いくらでも責めとくれ、気のすむまで私を責めとくれ。」

と、あえぐように叫んだ。

悪党三人は、顔を見合わして笑った。花吉は、お銀に、こう言った。

「姐御、さすがに小太刀のお町姐さんは、青竹で、ひっぱたかれた位では音をあげねえ、ここは、わっしと捨三の二人にまかしておくんなさい。女を責めるには、こつがありまさあ。きっと、音をあげさして見せますから、まあ姐御は、見物していておくんなせえ」

お銀は、満足げにうなずいて、

「そうかい、じや、見物さしてもらおうかねえ。」

と嬉しそうに言った。

花吉と捨三は、心得たとばかり、壁に立てかけてあった戸板を土間に倒すと、その四隅に五寸位の杭を打ちつけ始めた。

お町は、ちらとそれを見て、再び、体中が、かっと熱くなった。

あの戸板に磔りつけられるのだ。それから、野卑な男達は、どんな手段で責めようというのだろう。想像するだけで気が狂いそうになる。

何とか、縛し目を解こうとして体を必死に悶えさせ始めたお町の傍へ寄って来たお銀は、お町の豊満な乳房を指ではじきながら、

「フフフ、お町さん、いよいよこれから最後の責めが始まるのだよ。この男達はね、喧嘩は下手だが、女を泣かす事にかけては、滅法うまいという事さ。女は女らしく責めてあげるから、まあ、せいぜいすすり泣くがいいさ」

そして、お銀は、ちらと男達の方を見て、戸板の準備が未だ出来ていないのに気附くと、

「じや、用意が出来るのを待っているのも退屈だろうから、その間お前さんの高慢ちきな鼻をいじめてやる、おとなしくしな」

と、お銀は、必死に逃がれようと振り動かすお町の首を片手で抱きかかえるようにし、お町の鼻を指でつまみ上げた。

お町は顔中、汗びっしょりになり、やっとお銀から解放されて、ほっとしたのも束の間、

「姐御、戸板の準備が出来やした。」

戸板の四隅に杭を打ち終った花吉と捨三は、お銀に告げた。

「さあ、お町さん、戸板の上へ乗せてあげるから、両手両足をうんと開くんだよ、いいね。」

お町を縛ってある縄尻が、鎖から、取りはずされた。今までのお銀の執拗な鼻責めで、ぐったりなっていたお町は、

「さあ、お歩き、戸板の所まで歩くのだよ。」

とお銀に縄尻を取られ、尻をたたかれ、よろよろと歩き出した。

「さあ、おとなしく、この上におねんねするのさ。」

三人がかりで戸板の上へ倒されたお町は、一旦は、後手の縄目は解かれたが、すぐ両手は素早く男二人に押えられ、戸板の両隅の

へ縛りつけられてしまった。

「ああ、それだけは、堪忍して、お願い!!」

遂に気丈なお町も悲鳴をあげた。

男達は必死に逃れようとばたつかすお町の両足を取り押えたのである。お銀は、茶わんに酒を注ぎながら、ニヤリと目を光らして言った。

「かまう事はないさ、思いきりうんと開かして縛っておしまい。」

男達は、お町の両手両足を力一杯左右へ大きく開かして、遂に隅の杭に縛りつけた。

「やれやれ手間を取らせやがった。」

花吉と捨三は、ほっと息をついて立上った。

無残にも、お町は、あられもない大の字に戸板に縛りつけられてしまったのである。

「畜生　畜生。」

お町は、狂気のように体を悶えさし、左へ体をねじ曲げようとしたり、右へ体を伏せようとしたり、はかない努力を続けたが、遂にどうにもならぬとあきらめたのかぐったりと、元の体勢に戻ってしまった。

「どうやら、観念したらしいね、お町姐さん。鯉が俎に乗ったと同様、人間、往生ぎわが大切だよ。」

などと言いながら、花吉は、ヘッヘッヘッと笑い、お銀も、

「いいざまだよ、お町さん。」

と言って、両手で、お町の両頬をおさえて、正面に向かせ、

「フフフ、さぞ口惜しいだろうね。私は、ここで、お前さんのベソをかく顔をゆっくり見物さしてもらうから、

思いきり男達を楽しませてやるがいいさ。」
と言って、お銀は男達に、
「さあ、お前達、気のすむまで、この女に先刻のお礼をしてやりな。」
と言った。

どれ位の時刻が流れたのであろう。ふと、お町は、目の前に恐しいお銀ではなく、越後屋夫婦の心配げな顔が、かすむように浮かんでいるのに気が附いた。その隣には幡随院の長兵衛を始め、その子分が数人並んでいた。お町は、ようやく、はっきり意識を取り戻した。何時の間にか、越後屋の奥の八帖の部屋に寝かされていたのである。
「おお、気がついた。気がついた。」
越後屋夫婦は、嬉しそうに目を大きく見張って言った。
「でかしたぞ、お町」
長兵衛も、目を輝かし、身体を乗り出すようにして言った。
戸板の上に大の字に縛りつけられ、お銀の子分達にあくどい責め方をされている時、気を失ったのだが、丁度、その頃、長兵衛達がかけつけて来て救ってくれたのだと、越後屋夫婦の話を聞いている中、やっとお町はのみこめた。
「お前のおかげで、お絹さんは、何の怪我もなくすんだのだぞ。本当の女伊達、女俠客とは、お前の事だ。よく辛抱してくれた。」
と、長兵衛に言われて、お町は、思わず胸がつまり、涙が出そうになった。しかし、あの地下へ助けにかけつけてくれた長兵衛にしても、長兵衛の子分達にしても、あんな浅ましい姿にされて責められていた自分をはっきり見ただろうと思うと、恥しさと情なさで顔が真赤になり、お町は、まともに長兵衛の顔を見られない思いだった。
蓮台寺の地下では、半死半生の思いであったお絹も、今は、高島田に黄八丈の可愛いい姿で、
「お町さん、私、何とお礼を言ってよいやら。」
と、涙ぐみながら、傍から、お町の額の手拭を取りかえたりしている。
「お絹ちやん、怪我がなくてよかったね。」
とお町は、気弱に笑って見せた。
「ところで親分さん、お銀達は、どうなりました。」
と、お町は、次に長兵衛に聞いた。
「ウム、佐平親分に三人共御用になった。恐らく、お銀も、亭主の紋七同様、遠島位にはなるだろう。」
お町が、蓮台寺の地下で、お銀達から受けた屈辱は、お銀を遠島にした位で、癒えるものではない。思い出して、その口惜しさに、お町が唇をかむのを、長兵衛は、見てとったのか、
「いいか、お町。あんな辛い目に逢わされて、さぞ、お前も口惜しい事だろうが、お銀達の事は、お上にお任せするんだ、解ったな。」
と、優しく言った。
「ハイ。」
と答えて、お町は、枕に顔を埋め、しくしく泣き出した。
「もう何も考えるな、お町。」
長兵衛は、お町の辛い気持を察して、再び優しく言い、
「お前も、小太刀のお町だ。これ位の事で、くよくよするな。」
と励まし、お銀達から、奪い返して来たお町の脇差を枕元に置いた。
「それじや、また見舞いに来るからな。」
と長兵衛は、子分達をうながして立上った。が、その時、さっと体を起したお町は、枕元の脇差を取って引抜くと、長襦袢の前を開けて、ズブリと下腹に突き立てたのである。
「あっ。」

と叫んだまま、越後屋夫婦も、お絹も、止める間はなかった。お町は、苦しそうにあえぎながら、突き立てた刀を一ひねりした。腹部から、ふき出た真赤な血は、お町の長襦袢を通し伊達巻を染める。

「な、何をするんだ、お町。」

長兵衛は、あわてて、脇差を取り上げ、くずれ落ちかけるお町の体を抱き止めた。お町の髪の元結が切れて、長い髪は、お町の肩へ垂れ下がった。

「か、かんにんしておくんなさい、親分さん。」

お町は、苦しい息を吐きながら言った。

「馬鹿!!お町、何故、こんな事をする。」

「親分さん、私は前から親分さんをお慕い申しておりました。」

「何、何だって。」

「お、親分さん、お町も、やっぱり、女でございます、お絹さんを助けたい一心からとは申せ、あのような浅ましい姿を親分さんに見られたとあっては、ど、どうして、生きている事が出来ましょう。」

「お町、しっかりしろ」

「お、親分さん、私は、私は女侠客などになりたくはなかった。親分さんのお嫁さん、いえ、お妾にでもしてほしかった。かんにんして下さい。親分さん、私は、私は、やっぱり女でございました。」

（おわり）

【新版】女体緊縛フォト　◎分譲◎

R組　七十組　（印画紙の大きさ　9×13ｃｍ）

各組一枚一組（全部送料共）

一組一枚	一〇〇円
五組五枚	四〇〇円
十組十枚	七五〇円
二十組二十枚	一四〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇円
四十組四十枚	二四〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇円
六十組六十枚	三五〇〇円
七十組七十枚	四二〇〇円

R1 柔肌と荒縄（須川令子）
R2 海浜の緊縛（萩千恵子）
R3 床間の飾り（佐賀美智子）
R4 高手小手（花坂道子）
R5 海老縛り（萩千恵子）

R6 後手猿轡（須川令子）
R7 後手足縛り（村田那美子）
R8 鏡うつし（伊吹真佐子）
R9 股間しばり（須川令子）
R10 鎖縛晒責（萩千恵子）
R11 股間縛正面（伊吹真佐子）
R12 女学生縛り（須川令子）
R13 尻立縛り（萩千恵子）
R14 開股しばり（川辺砂登子）
R15 猿轡の魅力（伊吹真砂子）
R16 トイレ縛り（須川令子）
R17 立木しばり（村田那美子）
R18 緊縛横臥（厚狭春江）
R19 足揚梯子責（伊吹真佐子）
R20 いたぶり（春日、伊吹）
R21 帆立縛（萩千恵子）
R22 強烈梯子責（伊吹真佐子）
R23 椅子責め（佐賀美智子）
R24 逆さ吊り（伊吹真佐子）

R25 後手吊責め（伊吹真佐子）
R26 股間縛後手（中塚文子）
R27 逆海老責め（伊吹真佐子）
R28 高手小手（加賀利江子）
R29 変型しばり（萩千恵子）
R30 松樹後手縛（村田那美子）
R31 くさり責め（伊吹真佐子）
R32 薄羅の緊縛（加賀利江子）
R33 股間縦縛り（中富綾子）
R34 首縄股間縛（坂口利子）
R35 手足逆吊り（伊吹真佐子）
R37 和装責め（藤田節子）
R38 仰向悦虐責（川端多奈子）
R39 後手首縄締（加賀利江子）
R40 乳房下緊縛（村田那美子）
R41 肉体美誇示（伊吹真佐子）
R42 お灸責め（春日、伊吹）
R43 後手猿轡（萩千恵子）
R44 松樹しばり（村田那美子）
R45 コルセット（中塚文子）
R46 股間しばり（〃）
R47 手足緊縛（萩千恵子）
R48 後手しばり（加賀利江子）

R49 御開帳（萩千恵子）
R50 くさり責（川端多奈子）
R51 折檻の魅力（須川令子）
R52 雁字搦目（津森静子）
R53 股間緊縛（〃）
R54 のぞき見（〃）
R55 引き裂き（〃）
R56 後手しばり（〃）
R57 猿ぐつわ（〃）
R58 苦悶の表情（〃）
R59 あきらめ（〃）
R60 強烈しばり（〃）
R62 トップモード（〃）
R63 全裸股間縛（愛川悦子）
R64 逆立折檻（大塚啓子）
R65 開股椅子責（大塚啓子）
R66 振袖緊縛（花坂道子）
R67 腰元吊り責（村井知可子）
R68 ヌード縛り（愛川悦子）
R69 本縄しばり（愛川悦子）
R70 股間しばり（田仲芳代）
落花狼籍（田中芳代）
ハリツケ（川辺砂登子）

『断層の女』

辻村隆

一

売春防止法のために、救われて、幸福になった女の数よりも、却って苦しい立場、生きにくい立場に追込まれた女の方が多いのではあるまいか——。

どうもそんな気がする。過度期の犠牲というには、余りにも傷ましい、あまりにも多過ぎる人数ではなかろうか。

三輪美子も、この法律で、自分の意思に反して、世間からは救われたと見做された一人である。

ここは神戸の赤線地帯——、不夜城の名をほしいままにして、夜毎々々に艶名を流したこの街も、明日からの転業に廓は慌ただしく、既に疎になったネオンの灯が、この街の衰頽をまざまざと物語っていた。

三万円近い借金も、棒引とは表向き、衣服類で殆んど相殺されて、美子はチッポケな手廻品の風呂敷包一つで、放り出される様に、「銀影楼」を出た。

籠の中から解放され、羽ばたく自由を与えられたけれども、美子は両羽根をもがれたフクロ鳥同然だった。闇に慣れ切ったフクロは、狃れた巣を追立てられて街頭に立って途方に暮れる。国法がいうなれば、彼女の生きる為の自由を奪ったと云えば云い過ぎであろうか。三年前に出奔した、郷里の愛媛県の大州へも、今更のめのめ帰れない。

まともな職業であるとは思ってもいないが、それでも月々二万円近い仕送りを、郷里の老母に続けて来た。妹が高校へ行けたのも、勿論仕送りが出来たためである。

美子は瞼の裏に、病気で寝ているだろう母の事や、いまは勤めに行っているという妹の面影を追っていた。田も畑もない貧農の娘

が、国法のために生きるすべさえ失なって、飼主に棄てられた犬の子のように、当てもなく路頭をさまよっている。

美子は二十一才、丸顔の肌の白い、汚れなき少女の匂を身につけた女だった。

目的もなく、美子の足は、三越の黒い建物を左にとって、元町へと向っていた。

数日食べて行くだけの貯えしかない今は、故郷への仕送りなどということよりも明日からの口を糊するため、何処かへ住込まなくてはならない。赤線の女を雇ってくれる店があるだろうか。

五十円の中華そばを啜って、又、美子は歩く——。

薄あかるい朧月の光の下に、上り下りの省線のガードが鈍重に響いて、ひややかな夜の気配を突き破って、列車が交叉して過ぎて行く。

ガードの下に立ちつくす美子——。

一台のシボレーが、クラクションをわめかせて彼女の横を走り抜け、数米先の処でギーッと急停車する。

「明美じゃないか？——」

「えッ——」

驚いて、目をあげる彼女の前に、頭髪を綺麗に七三に分けた、縁無眼鏡のりゆうとした紳士が立っている。

彼女の源氏名は光子であったが、明美ではない。人違いだ。彼女は一寸ガッカリする。

「いいえ、違いますわ……、わたし——」

「成程、よく見ると違っている。どうも失礼——。だけど、お見受けしたところ、何かお困りの御様子らしい。よかったら乗りませんか——」

紳士はシガレットケースをとり出し、一本にパチリとライターで火をつけ、悠然とふかし乍ら他意なくすすめる。

何かに縋りつきたい気持の美子は、あれこれと考える暇もなく、ふらふらと誘われる儘、車中に乗り込んだ。心の片隅で、ヒヨッとして、幸福に巡り合えるのではないかしら……そんな甘い気持と、どうせ一度は泥沼の生活をした今となれば、これ以上悪くなるまいとの、浅い考えから——。

紳士の仮面に隠された、悪魔の常套手段とは露知らず、美子は、コールマン髪の紳士の横顔に、或る種の期待を抱き乍ら、ホッとした気持で揺られていた。

山の手から、布引——、それから……。

既に寝静った暗夜を、音を殺して、シボレーは滑る様に走ってゆく——。

二

豪奢な晩餐、甘い心の奥まで痺れさすような赤い酒。どれほどの酒を浴びたのか、正体もなくソファに凭れて、地の底へ引曳り込まれるように 深い睡りに 陥ち込んで、微かに、軽々と何処かへ運び込まれたのを覚えてはいるが……。

背中の冷たさに、ふっと目が醒めた時、美子は愕然とした。

一糸纏わぬ裸身を曝して、彼女は冷めたいコンクリート床の上に転がっていたからだ。

ずきずきする頭を押えて、立ち上ろうとして、バタリと彼女は足を引かれてつんのめって倒れた。白い右の足首に、冷酷な鉄環がガッチリと嵌まっていて、太い鎖によって、床にしっかりと固定されていたからだ。

「ひーっ、離して！、助けて……」

大声で喉も張りさけよと、彼女は喚く。酔いのあとの喉が乾いて、ひりひりと痛んだ。精根尽きて、彼女は現実に戻る。自分の裸身を両手で抱えて、彼女は狼の牙にかかった女の肉体の惨めさをまざまざ思い知らされた。

「くっくっ…」

呻く声にハッと振り返る。暗い光の影の彼方に、二人の女の裸身が、白くうごめき、太い鎖に踏まえられて、その白い裸身をのけぞらせているのが見てとれた。

——私だけじゃないんだわ……——

美子は微かな力を覚える。

それから、どれ程の時刻が経ったであろうか——。

パッと昼もあざむく光が、陰惨な地下のコンクリートに反映する。

明るい光の下に、肌を寄せた二つの裸身が、白くうずくまっている。

ギイーと重い扉の音をきしませて、板垣勝がのっそり現われた。

勝の手が、美子の肌にかかる。いきなりその手をはねのけて、美子はキッと睨みつける。

「おう、何をしやがるんだ！ふざけた真似をするない――」

怒った勝は、一糸まとわね裸のまま慄えあがる美子の、白い堅ぶとりの肩先を、パッと蹴り上げた。

美子の体は、仰向け態に倒れる。いきなり勝はそれに飛びかかる。馬乗りになって懐よりハンカチをとり出すと、否応なく美子の口に押し込み、革製の箝口具を素早くはめて、うなじの処で緊め上げる。

必死に暴れる両手を重ねて、ガチリと手錠をはめ込む。もがけばもがく程カチリ、カチリと手錠は皮肉に喰い入る。

「フフフ、とうとう罠におちたな。早速、今夜あたり、いい目を見せてやるぜ――。」

勝は、せせら笑ってパンパンと手をはたいて立上る。

「だが、云っておくぜ。素直にいうことをきかねえと、ちいっとばかり痛い思いをして貰うぜ。そしたら、おめえもうんと素直ないい女になるだろうからな――」

美子は恐怖のどん底にと突き落される。

二人の裸身の女達は、すでに恐怖も恥かしさも忘れ、くろぐろとした陰影をのぞかせて、新らしい犠牲者の、悲鳴と絶叫を耳にしていた。いって見れば、この先輩達も既にこんな眼に逢っているに違いない。それだけに身にしみるものがある。

「くっくっ」と絶え間なく箝口具に呻き乍ら、二人の女の四本の手は、手首のところで、一纏めにきつく縛られて、壁に塗り込められた環に、諸手を挙げた儘の姿で束縛されていた。

けだもののごとく生きる――

狼どもの巣窟で、半りとられた哀れた小兎達は、秘密クラブの会員の前で、汚辱と、絶望にのたうち廻り乍ら、果てしもない狂態をくりひろげる事を強制されていたのである。

三

赤線も青線も白線すらも地上から消えて――ここに、猟奇に眼もくらむ黒線が誕生している。

紳士の仮面を被った誘かい魔が跳りようして、神戸の都心を離れた住宅街の一角に、悪魔の巣は構成される。

板垣勝は女の調教師――。

仮面のシボレーの紳士は外交員――。

バーのマダム。ホテルのボーイ――。

そんなメンメンで構成された、この黒幕は誰であるか、奴らも知らない。

電話によって、豪奢な客は安全にこの巣へ運び込まれてくる。

バイヤー、外国船の船長、機関長、貿易商三国人、有閑マダム、老政客、代議士、小説家と、客はさまざまでも、いずれも一流の名士であり、金持ちである。

戦時中の地下壕を大改造した。地下のコンクリート室が一号より三号まで――。

官能に悶え、情痴に狂い、奴隷に仕立てられて鞭の下に慄う女は十指を数える。

女たちの命を刻む非情のアパート。男共にとって、それぞれ異る、いかなる注文に対しても応じる事の出来るスリーエスクラブ――

三つのSは、サジズム、セックス、スレイブを指す。加虐と愛慾と隷属――。

客は黒い階段を下る――。そのさきに、良識のすべてを喪わせる悦楽の谷が横たわっている。光々と照らされた地下室の、覗き窓から客は好みの女を選択する。脂肪の塊の一号室。ここの五人の女はすべてセックスの要に供せられる。

選り出されたマゾの女の集う二号室。ここの女は三人――。臀部に黝々と刻まれた烙印は女の呼名だ。「R」の字の女の全身は、鞭跡でくろずんだ細かい縞目をつくっている。長い黒髪の生際に、点々と血痕がこびりついているのは、Rの黒髪に加えられる加虐の激しさを物語っている。いつか女の髪は半りと

られてしまうかも知れない。

「W」の字の女は、まだ熟れもせぬ青麦——その少女に、男の荒々しい、獣めいた非情の嵐が吹き荒ぶのか、黒い運命に待ちかまえられた「W」の体は屈み込んで、ピックともしない。しないが筈だ。連日の責苦に息も絶え絶えのこの少女は、両手足を束ねて縛られた儘転がされていたからである。みずみずしい固い蕾を好む客が多い結果、悪の愉悦にもてあそばれて、発狂の寸前をさまよっていたかも知れない——。

大きい烙印「V」を捺された彼女は、確かに異常であった。はぜる様な性態が彼女をそうさせたのか——。或いは既に醱酵した梅毒の病菌が全身をかけ巡っているのか——。爛れて熟れ切った熟柿が、正にボトリと地上に落ちる、崩れ行く寸前の年増女であった。

眼をすえてよく見れば、全身隈なく蔽う、あざや、傷痕や、肉体の缺落は、これ迄に耐えた女の、倒錯した女ごころをうそ寒く物語っていた。絶えず何事かつぶやく女の破局が、まるで急坂を転げ落ちるように、どん底にまで来つつあった。

三号室——。悦虐の奴隷の部屋。すべての自由と行動を制約され奪われて、易々として男のなすが儘に、命令の儘に動かねばならぬ女達——。美子はこの三号室の新米であった。

扉の上部に設けられた覗き口から、地下室内を眺める時、女のからだのあらゆる部分が白昼光の許に曝け出されている。

四肢や、曲線をゆたかに描いた腰が、そし

て勝の合図と共に、女がくるりと向きをかえれば、唇も、豊かな乳房もある。息づまるような一瞬である。

彼女達は客の合図があれば、否応なく引き出され、奴隷として献身せねばならない。

廃止された売春の法律の蔭に、大きな黒い網の中の社会悪がこうして潜んでいる。

ささやかな給料日の、幾許かのサラリーを握って、一夜の歓を求める若者たちの安直なセックスの刷け口は奪われて、何不自由ない有閑族は、金にあかせて、悪の放埒に、自由に憂身をやつし得る奇妙な時代。

はてしなく転落する淫慾地獄に、軀を投げ出して、泥沼のあがきを続けるのは果して、美子だけであろうか——。

報酬も、希望も、完全に断たれ、膚を紫色に腫れあがらせて呻吟する美子に、今一度スポットを当てて見よう。

四

既に赤線で三年間もまれた美子でも、未知への恐怖には、膝がガクガク震えた。

鎖を外し手錠をとって、勝は「いいか—」と念を押す様にジロリとにらみつける。

黒布で眼かくしされて、裸の儘で、美子は勝に手をとられて、冷たい石段を一歩一歩昇る。

急に汗ばむ程の温気——。微かな音楽のメロデイが洩れる——。

石段に代る柔かい絨氈の上を夢心地で歩いて、とある前で、勝の足音が止る。

ドアの開く音——。

すべて無言のうちにビジネスは運ばれたが勝は彼女の手を離して、トンと軽く背を押す。ヨロヨロとよろけて、美子はフロアにうずくまる。

近づく足音——ピンと扉に鍵をかける音。

美子は空虚な表情の目を、あらぬ彼方へ向けて、黒布をとった。

改めて意識する裸の羞恥。傷つけられ、体ごと、どうなるかわからない危険を十分に予測していたが、彼女自身、既に乱倫と浪費の生活を続けてきただけに、素人女程の凍りついた心を持っていなかった。

運命の黒い手の動くままに、刹那的な愛慾の交歓に肉体を賭けた日夜を過した美子に、今、新たなる猟奇の手が伸びようとしているのだ。

男の凝固した心を解きほぐす様に、美子は媚婦の習慣を出して、そっと媚を含んで、始めて、そこに佇立する男を見上げた。

美子の眼に飛び込んだのは、表情のない、黄金の仮面をつけた、年令も定かでない小男の姿だった。

男は無言の儘で手まねく。仮面の下の表情の分らぬ男に、美子は途迷ってオゾオゾ彼の膝下に近よる。

部屋は広い二十帖もあろうと云う洋間。中央にデンと丸い脚の長い卓机がおかれてある。男は黙々と卓机を指さすと、その卓机の下へ潜れと命ずる。

美子は云われる儘に、卓机の下へ這って入る。立てば中腰で頭が卓机の板につく。

近づいた男は卓机の真中を触ると、パクリと中央が割れて、バネ蝶番によって両側に卓机の一部がはね上る。はね上った板の真中が凹んでいて、命じて、彼女に首を卓机の上に差し出させると、バネ蝶番の板を押える。スッポリ首だけの寸法の穴を型づくって、板は掛金によって元通り押えられる。

中腰になった彼女の首だけが、卓机の上で慄えて蒼褪めている。

卓机の下の裸身は、彼女の視野から完全に遮られ、首無し人形が踊っている有様だ。

男は始めて仮面を外す。

「キヤーッ」と美子の口から悲鳴が走る。

鼻が欠落ちてないのだ。そして無惨に割れてさけた唇——。凹んで眼窩のみの眼玉のないひからびた眸。片眼がランランと光っているのみだ。

顔から唇までの物凄い、はじき割れた刀創が、この小男の顔相を一変せしめたのだ。フガフガと奇妙に空気の洩れる声で、男は始めてつぶやく様に言う。

「へんしよう（戦争）が、おへ（俺）を、こ

んな、はお（顔）にひたんだよ。フイイイ、おんは（女）は、はれ（誰）もおへ（俺）をあひて（相手）にひてふれない（してくれない）はわいわって（可愛がって）ひやるへ（やるぜ）はね（金）はあるんはよ（だ）…」

ぞっとする悪鬼のような顔が、ぐっと近附いた時、美子はフーッと気が遠くなりかけた。卓机を廻って、小男はヒヨイト机上に飛び乗る。じりじりといざり寄ってくると、ぐっと彼女の髪を摑む。彼女の眦は恐怖にさけそうに吊り上る。

「フイヒヒ、はにや（鼻）がひくい（憎い）んだ、ほのはにやが（その鼻が）……」

小男は形のよい、美子の鼻筋の通った鼻を右手で撫でる様に握りしめると、ぐいとねじり上げた。ウーッと息がつまって、千切れる様に痛い。ツーンと鼻底に涙がつき上る。

小男は獣慾の痴態に酔い痴れて、飽く事なく美子の鼻をさすり上げ、揉み下し、ひねり、嚙みしめて、燃えたぎる怪しい、どろどろのすえた匂いを、彼女の鼻の辺りに撒き散らして、倦かなかった。

辛うじて首を左右に振り、懸命に歯を立て様とあがなって見たが、それは所詮果敢ないあがきに過ぎなかったし、面倒と見るや小男は、彼女の唇に、確っかと猿轡をかましてしまった。鼻を塞いで、窒息しそうになる迄押えては、真赫にふくれ上って、血管の膨張し切った彼女の顔に、ニヤニヤと唾を吐きかけて、顔中ゴシゴシとこすりまくった。

彼女は何か切迫した、生命の限界にある様な気がした。首より下の裸身は夢中でもがいても、床から生えた様に卓机はビクリともしなかった。

しかし、これは鼻に憑かれた男の、ほんの小手調べの、序の口に過ぎない事を、彼女はやがて思い知らされたのである。

五

毛抜きを手にした、鼻のない小男が、丹念に、美子の柔かい鼻毛を一本一本抜きとり始めた時、彼女の断続して起る、小さな激痛は全身を貫いて走った。鼻腔は赤く腫れ上ってかすかな血の細胞をプツプツと脱毛の後に押し上げて来た。

小男がその厄介な仕事を終ると、やおらポケットより小さい電気錐をとり出した。電源にソケットを押込むと、キーンと蜂のなく様な回転音を発して、メッキされた小さな錐は一見静止してる如く全速力で廻転していた。

小男の手はしっかと、美子の髪を摑んで、頭を動かぬ様に押えつけてから、徐々に彼女の鼻腔へと錐を近附ける。その意図を察して美子は最後の抵抗をする。鼻腔の鼻障子に電気錐が触れたと思った瞬間、飛び上る疼痛がガーンと大脳から全神経を走って、赤く染った錐が小男の手許で静止した時は、完全に燐寸軸大の太さの穴が、左右の鼻腔を貫通していた。

頤を卓机にのせてガクリと垂れて、失神した彼女を、首の座から外して、小男は床に寝かせた。ポトポトとたれる鼻血は見る見る彼女の顔を真赤に染めた。

冷然と小男は、血糊を彼女の体で拭いて、貫通した鼻穴に強靱な金鎖を通して行く。

傷穴にサラサラと触れて、彼女の体は痛みにピクピクとけいれんする。

トントンと扉をノックする音に、小男はギクッとして、慌てて黄金の仮面をつける。

勝がのっそりと入って来て、床に血に染って倒れる美子を一べつする。

大丈夫と云う小男の手振りに、ニヤッと笑って、軽く爪先きで女の乳房を蹴る。ピクリと動く彼女に、勝は安心した様子だった。

数枚の五千円札が手早く、小男から勝に渡される。勝は又、ニヤリとして出て行く。

最早、この部屋に時間の制限とてなかった。

金、金、金がすべてを支配して、この獣男の飽くなき狂態を十分に満足させていた。

何時間でも、何日でも、彼女は小男の痴愚の対照として嬲ばれねばならなかった。

激痛と絶えず襲う幻惑の夢魔に、蒼ざめた美子は、心ならずも正気をとり戻した。

〝この女を、ずっと縛っておきたい。離したくない〟と小男は直感的にきめた様子であっ

た。夜毎の夢に見た、女へのこの妖しい嗜虐の魅力に、燃えたぎる欲情が湧いてくるのを感じた。多年の苦心が酬われた気がした。この一事の為に、既に十万円近い金を投じた事も、更に惜しくはなかった。

最大の醜さを黄金の仮面に内臓して、男は優しく美子に近附く。動く気力もない女を抱きかかえて、そっとベッドに横たえる。サラサラと鼻からこぼれ落ちる金鎖が、床をかきならして——小男はバスに走って、温湯を汲み上げる。血のりを拭い、全身の汚れを丁寧にふきとってやる。気力の萎えた彼女は、もはやなすが儘だ。絶望も恐怖も失神の彼方へ押しやって、彼女に残る想念は死と虚脱のみであった。

カロリーの豊富な食物が、小男の手から、美子の口へと運ばれ、小男の奉仕はまるで主客顚倒に等しかった。しかしこの一事も、謂わばこの可憐な牝犬をなつかせる為の飼主の懸命な努力に過ぎなかったのではあるが——。

六

大金を投じて、美子は小男に買われていった。それが幸いを生むか、不幸に終始するかは美子自体にも分らないに違いない。

確かに美子の体はピチピチと潑溂さを帯びて来た。およそは慌ただしい哀しみの連続ではあったが、今の住心地は、軽金属のパイプに囲まれた一室の、この柵さえ気にならなければ、地下室のコンクリート造りより、遙か

に快適であった。

ぽつねんと、小男の来ぬ間、ひとり静かに坐っていると、そのさきに、恐怖と戦慄を感じさせる、醜悪な鼻のない片眼男の顔がポッカリと浮び上って、今にも自分の鼻を狙って襲いかかる様に思えた。狃れれば、無気味な黄金の仮面の方が、まだしも、その無表情さに諦観の念が抱けるというものだった。

狂気の様に鼻鎖をもって引曳り廻し、憎々しげに鼻鎖に分銅をつけて、パイプに裸身を縛りつけ、首の骨の折れる程、死の苦しみを味わすかと思えば、まるで、その代償のように女王扱いに、奉仕する小男の、耽溺と恋情の、相半ばした生活も、小男の性情が徐々に分るにつれ、美子は無駄な反抗をやめ、努めて順応して行く気になった。

小男の顔相が、世にも哀れな運命のいたずらだと割切ってしまえば、それなりに可哀相になってくる。

それにもまして、この小男が、世にもあわれな不能者であることが、一層小男を焦燥させ幻滅させていた。

瑞々しい肉体の前に、もろくも頭を垂れて悄然と、如何とも術の施し様もない肉体の欠陥に、反って、美子の方が時には、粗々しくふるまう事もあった。

終戦直後の、おびただしい華北での、土匪の掠奪の際、日本人と云う、唯それだけの理由の為、拉致され、散々なぶり殺しに等しい拷問と屈辱を受けた小男の来歴も、思えば哀れであったに違いない。

鼻から抜ける、きき取りにくい言葉で、綿々と語った、凡ゆる屈辱の過去を、彼女はしんみりと憶い出す。

彼等の逃避する一団が、不幸にして、土匪に見舞われた時、男は、小男外二名のみで、後は女子供が全部を占めていた。

忽ち掠奪、暴行、輪姦——。嘗って日本軍が、中国の地の何処かで印した汚辱の一頁のお返しが、てきめんに無辜の彼等に振りかかって来た。

彼は逃避の途中、お互に好意を持ち合って秘かに彼等二人の結婚式を挙げた女と、懸命に逃げた。が、所詮餓狼の如き土匪の手から逃げ終せるものではなかった。

土匪の数騎が、忽ち追い縋って、彼等二人を捕えた。

全裸に剝がれた二人は、針金で後手に縛られると、首縄をつけられて、騎乗の土匪に引曳られる様にして、彼等の部落へと拉致された。

彼の将来の妻は、部落の広庭の真中に引き出され、土に埋めた四方の杭に仰向けに手足を縛られ、彼の面前で、数十人の土匪に輪姦の挙句、股を割かれ、腸を抉り出されて虐殺された。

彼は足首を縛られて、づるづると逆さに大木に吊り下げられ、石瓦を全身に投げつけられ、鼻をそがれ、顔を断ちわられ、急所に大きな石を投げつけられて悶絶した。

死んだと思って、投げ棄てられた高粱畑で奇蹟的に息を吹き返し、中共に助けられて、廃人となって帰還したと云うのである。

彼から見れば、未だ自分の方が、まだしもましかも知れない。

彼女はそう思う。努めてそう思って見る。汚れきった、どぶどろの世界を知っている彼女の肉体には、においのつよい汚点がついて消えないのだ。空虚な淋しさが心一杯にひろがり、今となっては、この崩れた身を、小男の思うが儘に任せるより外、彼女の生きる道とてなかったのである。

七

執拗に鼻責めは続いている。

鼻に憑かれた小男は、彼女への嗜虐のルートが、すべて鼻を中心としてグルグル廻るのだった。

圧力に圧力が加わり、既に彼女の鼻穴は、小指を通す程に拡大していた。鼻を覗けば、そこに奇妙な穴が穿たれている事が、最早隠し様もない程に目立った。

鼻粘膜の刺激に耐え得る、慣習性が既に美子に出来ていた。

小男の手に握られた、牛の鼻輪が、苦もな

く、するりと通される。小さい捻じで環をとめる。環にロープが通されて、天井のはりに取付けた滑車がきりきりと引き上げて行く。鼻障子が引きつれて、けいれんした顔の彼女の全身は伸びて行く。爪先立ちで辛うじて、親趾に力を入れて上体を支えている。

ロープを握って体を支え様とする、彼女の両手を、ピシリと革鞭が打つ。呀っと離す両手に上体がゆらゆらと揺れ、鼻柱は伸び切って、鼻腔は極度に拡大している。

両手を後に揃えて縛り、爪先立ちの片足に縄をかけて引っ張る。

全体の重みが左足一本にかかって、鼻腔は今にも千切れてしまいそうに環をギリギリ一杯に喰い込ませている。

最早、これは責めの限界といえよう。裸身に脂汗がにじんで、顔面は蒼白になりつつある。それでも美子は上唇を引きつらせた儘、許しを乞わず、この鼻責めにたえぬいた。

ドタリと体が床に崩れて、更にこの仕打ちで拡がって、亀裂を生じた鼻穴から、生温い血がポトポトと唇を伝うて流れた。

静かな部屋の夜気を震わせて、くっくっと呻き乍ら泣く、美子の声が、このひややかな深夜の静寂を破って、何時迄もつづいた。

つい、先刻まで、鬼畜の如く、猛り狂った黄金仮面は、悄然とこうべを垂れて、うそ寒くガタガタと慄えていた。彼が麻薬密売者から、何時しか己れ自身、麻薬を必要とする。頽廃の体になりつつある事を、彼女は最近知っていた。禁断症状——。

その麻薬すらも、既に入手出来難い様に、彼は切迫した経済状態にあった。

すべては、この女の為であった——。

小男——ついぞ最後まで名乗らなかったこの男——は、パイプの部屋のスイッチを慄える手で切った。暗黒の部屋に仮面をとる気配がして、小男はそっと美子に忍びやかに近寄ってくる。

額に唇が重なって、ぐっと美子の身体を抱きしめた時、小男の頬から伝う、熱い涙が、生温かく、ほのぼのと、彼女の頬にふりかかった。社会悪の憎悪が二人を包んでいたにせよ、今の二人は純粋に、感情のおもむく儘に行動していた。

そこには、醜悪な形相も、無気味な黄金仮面も消え、單なる白と黒の、縞模様だけが、この部屋を専有していた。

小男は、女の手を静かに振りほどいた。闇に手さぐりに、この愛慾の部屋の鍵と、これが小男の全財産の、最後の一束の紙幣と永別の切々たる走り書を彼女に握らせて、も一度、彼女のひたいに接吻すると、ヒヨコヒヨコと、この部屋を立去っていった。

物心内面の敗北感に打ちのめされて、最後の決算をつける決意を秘めて、去った小男は恐らく、二度と此世に姿を現わさない事であろう。

再び自由は蘇っても……。

又しても美子は呆然と虚脱している。

一束の紙幣を握りしめて、三輪美子は、何処へ行こうと云うのであろうか——。

（了）

◎臨時増刊号　サディズム特集号　定価三百五十円

読者の皆様の切なる要望に応えて、緊縛フオト並にグラマーポーズ、及び責画縛り絵を中心とした豪華なグラビヤ本位の臨時増刊号「サディズム特集号」を企画、殆どその編集を完了いたしました。大体六月中旬発売の線で進行させておりますが、限定版のため数に限りがありますので是非御予約下さい。完成次第第一番にお送りいたします。尚、数十頁のグラビヤ頁の外に、本文として、詳細なる解説ストーリーを添布し、両々相俟って必ずや皆様の座右の宝典として末永く珍重されることと思います。

尚、御予約には必ず代金同封の上お申込下さるよう御願い致します。

美容病院

（完結篇）

木村愛子の経験　その十一
久留木栄

（終りは永遠の巻）

「お客さんにせがまれて、唄ったよ！
生れ故郷のあの唄を
　唄っているうちに悲しくなって
じんと　じんと　じんと　じんと
　瞼が熱くなり、思わず泣けてしまったよ」

小野茂夫は、久振りで鼻唄まじりで歩く上気嫌さだった。

彼は單純な男だった。河野副院長の報告や愛子の気持等、あれやこれやを綜合して推測した結果、近い将来の目標である愛子との結婚という事象に、少くとも現在は自分が一番近くに位置していると思うと、それだけで鼻唄が出てくる。彼は月給を貰ったので、彼女に素晴しい指輪を買ってやろうかなと思ったのだ……。

町に出ると、珍しく池田フジに会った。池田フジは、美容病院では非常に事務的な女に見えるが、町で会うと淑かな未亡人タイプの女性に見えた。その池田フジが、珍しく長女を連れていたので、小野は思わず言葉をかけた。

「玲ちやん、コーヒー御馳走しようか。クリームがいいかい」

「クリームがいいわ、小野さん」

池田玲子は、悧巧そうな目をクリクリ回して云った。小野は

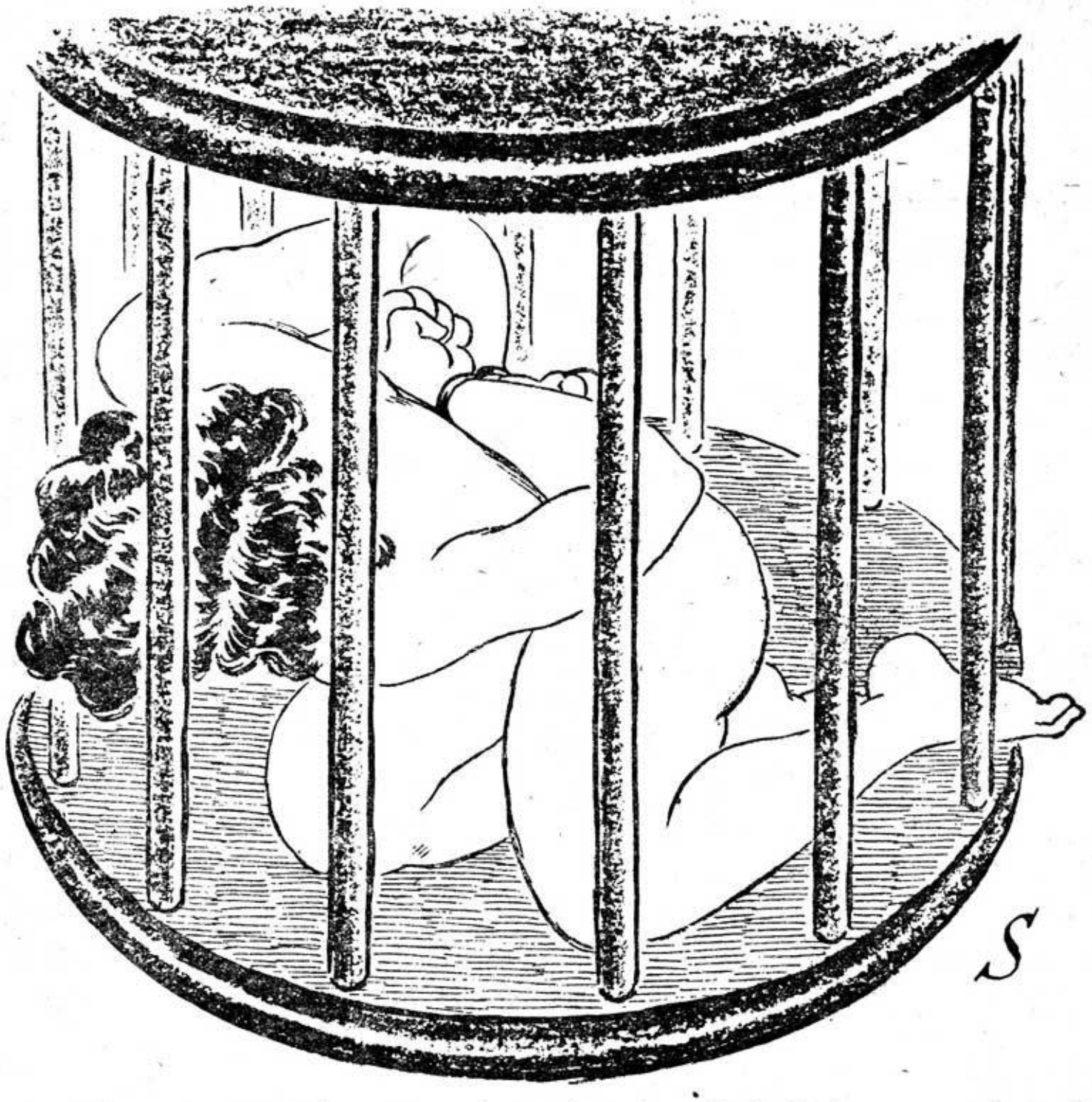
「じや、あそこの白鳥堂」

と云い乍ら大手を拡げて玲子をだっこした。玲子は五つだった。

池田フジが子供の方を、甘えちやだめよ、とでも云いたげな表情で見た。

「毎度、御馳走様ね、小野さん。処で彼女、さすがにグッタリしてたらしいわね。あれ以上、余り虐めたら元も子も台なしよ」

「そうかな、おどかすなよ。僕にとってはスーパーマン、いやスーパーガールであって欲しいなあ。そうでないと夢がなくなる！」
「あら、あんなこと云って……河野さんが心配してたわよ……どうも小野君のリードは、この頃尋常でないって、私ハラハラしてるのよ」
「有難う。僕もそのことを感じてはいるよ。人間の体は、何んと云っても生身で機械でないのだから……だから、もっと高尚なテクニックをと思うんだけど…テクニックと云うのは結局、信じ切った人間や、余り諦めのよい人間には通じないのでね。その点、心が疲れるよ。でも、今後のドラマは成功すると思うよ。叔母さんとか云う人の声の再現がね、とても巧くいったんだ。それで、きっと効果百%になると思う。とにかく今日は早目に休息させて、心身の回復をはからねばならないと思ってね」
「じや、スリーピング・ボックスにでも入れてきたの」
「そう、奴さんが気絶したのをしおにね。身体を綺麗に洗って縛しめを解いて、スリーピング・ボックスに入れといたよ。あのまま放置しておけば明日の朝、八時にしか目が醒めない計算だから、その前に例の恰好にして檻に入れて置けば、丸三日間、あの通りの姿で檻に入れられていたとしか考えない……そこで、あなたの登場ってとこじやなかったのかい」
「ハハハハハ」「ハハハハハ」
二人は、声を合わして笑った。
小野は、白鳥堂で池田フジとコーヒーを飲むと、連立って愛子のためのプレゼントを買いに町に出かけた。
翌日、池田フジは早目にスリーピング・ボックスの戸を開けた。中は、エバーソフトのフッションの深い寝台になっており、木村愛子がそれに埋もれて寝て居り、バラの芳香がたち込めていた。フジは、そんな愛子を引きずり出すに忍びなかったが……小野に云われたように縛り上げて例の檻に移した。池田フジは愛子を中に入れると、部屋の片隅に行って電気のスイッチを入れた。すると檻の天井から、小粒の水滴が滝のように落ちかかった。愛子は睡眠を破られて飛び上ったが、まだ眠気の醒めやらぬ表情で、しきりに身を揉んだ。しばらくすると、愛子も檻の中もすっかり綺麗になったので、池田フジはシャワーを止めドライヤーにスイッチを切替えた。そうしておいて、皿にミルクを入れて人造くちばしで愛子に飲ませ、愛子の体の乾くのを待って、バラの芳香に似た香水を体中に振りかけた。これで、すっかり用意が整ったのだ。
「どう、少しは居心地がよくなった？これからね、副院長先生が貴女の叔母さんを案内して来られるんだって。叔母さんにはね、この部屋に入って頂くわけにいかないので、あの覗目鏡から覗いて貰う。副院長先生にはこの中に入って貰って、貴女が彼の云う通りに憐れなダンスをして貰う。そこにある台車につないで、この檻の回りを存分走らせてあげてもよいわ。判った。じや、それまでお休み今朝の化粧は、私のせい一杯の好意よ。判って、じや、あばよ」
池田フジは、木村愛子の表情には委細かまわず外に消えた。すると今度は、小野茂夫が現われた。木村愛子は思わず丸く蹲った。愛子は、相手に男性を意識しないわけにはいかなかったのだ。処が、女がそんな態度を見せると、男は余計に残虐的気持をそそられるものである。
「愛子さん、愛子さん」
小野は、わざと優しい作り声で云った。
「愛子さん、どうです。僕と結婚しませんか。僕と結婚しないと、この写真を都内にバラ撒きますよ」
小野は意地悪そうな微笑を浮べていた。愛子は小野に好意を抱いているだけに腹が立った。「バカ、イヤ、イヤラシイ」と云ってやりたかった。が、拘束されている現在では、逆にそれが羞恥心とな



って跳返り、体を益々固くした。

「アハハハハ、石のようになっている。お悧巧さんね、この娘は」

小野は嘲笑した。そして

「愛子さん、いいもの見せてあげようか」

そう云って、小型のテレビのスイッチを入れると、そのテレビに愛子の叔母の姿が写った。それは、ある女優に愛子の叔母に似た姿をさせて写したものだった。しかし、気の動顚している愛子には大きなショックであった。

「よくいらっしやいました。もう、お嬢さんがすっかりお待ちかねで」

と云う河野の声が、そのテレビのマイクを通じて聞えて来た。よく見ると、当病院の玄関であることが判った。愛子は、それ等の出来事にギヨッとした。

小野茂夫の冗談まがいに云ったことは、本当なのだ。

どうしよう。美容病院内だけの、ひめごとではなくなったのだ。あの優しい叔母が、母代りに愛子をいつくしんでくれた叔母が、どんなに驚くだろう。

そう思うと、思わず目先が暗くなり愛子はふらふらとその場に倒れかかった。

その途端、愛子は左肩に「ガン」と一発強い衝撃を受けた。それは、小野が振った電気ムチによるショックだったが、愛子はそれを痛いとは感じない位だった。だが、小野が軽く二撃、三撃を加

え、さらに手にしていた小びんからノミカエキスを振りかけるに及んで、体は非常な苦痛を感じ精神状態は完全に乱れ、床に這いつくばって呻いた。恥しさも悲しさも痛みも、人間的な苦悩が遙か遠い雲の彼方の存在のように思われ、それと同時に、狂い回りたいような内部の衝動が体中を駈けめぐり、外部からの刺戟に耐えようとしているのを感じた。

その愛子の耳に、叔母の悲鳴が聞えて来た。

「ああ、愛子が……ああ、あんな苦しみに」

その声は勿論、エコウマシン（声の再生機）で自由に作り出したものだが、真に迫っていた。そしてテレビに写った女優の演技も、最高なものであった。それだけに愛子は、いたたまれない苦悩に苛まれるのだ。

こうして、その日は過ぎた。木村愛子の耐痛調教に対する反応はこの日から新に一つの段階を進んだとみてよい。小桜美智子との激しい耐痛競走や自虐的なアクロバットの練習に、愛子は積極的な動きをみせ始めた。耐痛競走と云うのは、二台の自転車に乗って車輪を回す訳だが、回転速度の遅い方の尻を、絶えずムチが見舞う仕組みになっているのだ。だから、これに乗った以上は必ず勝つことを要求される競技である。愛子は、この競技でもアクロバットでも、凄じい成績を示した。そうこうするうちに今一つの転機が訪れた。すなわち、今までのように美容としての苦痛訓練に耐えるのではなく、むしろ、この苦痛を愛する心から更に一歩進んで、人生の中の苦痛を生活に結びつけて愛する心、生活と結びついたマゾヒズムの完成へ一歩づつ近ずいていったのだ。

それには、次のような事件が起った。

或る日の事である。愛子は荒い麻の細引で後手に縛られ、口には例のプラスチックの緘口具の上から黒い皮の猿ぐつわを嵌められ、一つの箱に押し込められて自動車に乗せられて、美容病院から運び出された。その車は、美容病院の宣伝車だった。

愛子の入れられた箱は、天井の床が自動車に固定され、天井にマイクが取付けてあった。そして、その宣伝車の最後尾に据えられ、愛子の前はマジックミラーになり、外部からみれば鏡、内部から見れば外が見すかされる仕組み。更に左右は鏡で、愛子のみじめな姿が写るようになっており、後は換気装置がとりつけてあった。そのような場所に積み込まれ、銀座に宣伝に出ると云われた時、全く大きなショックを受けた。しかし愛子は、十文字に縛られたまま換気装置のパイプに括られていたので、逃げるわけにもいかなかった。最初、河野と小野から銀座行の意図を聞いた時、震え上っておののいたが、しかも見も知らずの人に恥しい姿を晒すとは……河野達は「誰が真物と思うものか、そこが見つけものだ」と云ったが、人形にされる愛子は、完全に河野等の思う壺に落ちていたのだ。

だが勿論、そんなことは出来る筈はない。外部から見れば一見、平凡な箱に過ぎない。その上に一台の大きなテレビが載せてあるのだ。宣伝車は愛子を乗せて、ゆっくりとビラを撒き乍ら進み、約三時間程、繁華街をグルグル回って宮城前広場に行き、テレビで巨人――阪神戦の実況を中継した。プロ野球のペナントレースは夏の山場にさしかかって居り、このゲームも最大の好カードだったので忽ち黒山の様な人だかりになった。人々は手に汗を握って画面を見詰めた。しかし、その熱狂的な目は、愛子には全く自分を見物しているように思えたのだ。外部の雑音は、完全に遮断され、それとは別に愛子を嘲笑う声が録音盤で再生されて流れ始めた。

『なんという素晴しい人形だ。まるで本当の人間のようだ。しかし無惨だなあ。ああまでしなくても、いいだろうに……。いくら人形でも、可哀想だなあ』

愛子は、そんな話声を聞くと耳を被いたくなったが、それも出来なかった。そして、蛇に睨まれた蛙のように体がすくんだ。「駄目

だ。もう駄目。私は救いのない境遇におとされてしまったのだ」愛子は心の中で、自暴自棄の絶望の声が高まって来た。

しかし、その悲しみもある程度落着いて、自分を見詰める人々の顔が……顔の差別が判るようになった途端、彼女は「アッ」と思わず目を見開き、体中の血が逆流するような発作に襲われた。

それは全く、偶然の事であった。河野も小野も予想しない出来事であった。テレビを見詰める観衆の中に、愛子の恋人ともいうべき丸石デパートの企画部の田山隆行と彼女の恋敵である好村光枝の顔が見えたのだ。しかも二人が至極むつまじそうに語り合い乍らテレビを指差して笑っているのを、愛子には、二人が自分の姿を見て嘲笑っているように見えるのだ。何という運命のいたずら、愛子は体中の血が抜けていくのを感じ、ぐったりとそのまま意識を失ってしまった。

○

愛子が気がついたのは、それから丸三日間経ってからである。卵色の壁の明るい部屋でベッドの上に寝かされ、愛子は安らかに息をしていた。枕元には真白なテーブル・クロスをかけたテーブルがあり、その上にマルテイ・グラスの花瓶が置いてあって、ピンクのバラが活けてあった。愛子は目が醒めると、先ずそれが目についた。それから手足を動かして見ると、自由に動いた。それが不思議な、何かしら新鮮な感覚に見えた。それからグルリと四方を眺め回して、小野茂夫の顔が見えた時、愛子は急に過去を思い出した。そして慌て両手をこすってみたが、そこには何んの拘束具もなく、エレガントなパジヤマの袖口があるだけだった。愛子は思わず体を半身起した。

「おや、お目覚めですね。もう、すっかり御気分はいいのですか」

「ええ」

頷きながら愛子は、自分の口から微かな言葉が洩れるのを発見して、全く驚いたと云うような表情をした。全く愛子は、収拾出来ない気持だった。

「あの私……一体、どうしたんでしょうかしら」

愛子は、思わず尋ねて見た。どうせまともな答は聞かれないと諦めながらも、哀願するような気持であった。

「どうもしません。美しくなるため、少しばかり夢を見て貰いました」

「夢を……でも、私、駄目な女じや……」

「何を云うのです。立派な純真なお嬢さんですよ。ただ、ドラマの主人公をつとめて貰っただけでした。しかし、そのドラマも終りました。木村さん、いや愛子さん、すっかり終りましたよ。これからゆっくり静養して下さい。ドラマの種明しは全部、地下二階のあの部屋にしまってあります。ここは、美容病院の四階の個室ですから……ほら、窓ごしに青空が見えるでしょう」

「あら、ほんと」

そう云われてみれば、窓から青い空が見えた。地下二階に入って特別訓練を始めてから一度も見たことのない空だった。愛子は、うっとりとその空を見た。見とれていると、小野が小さなコップにレモン・スカッシュを入れて持って来た。愛子は貪るように飲んだ。

あれが、あの苦しみが……美しくなるための夢だって！

何でもよい。人生の大きな夢になるなればと、愛子の胸にふっとそんな気持が浮んだ。

これから一生、ここで暮そうかしら——

愛子は、そう思って見た。そして小野の顔を見ると、小野の顔は一段と輝きを増しているように見えた。小野の目を見ると、黒い硝子のような瞳の中に、何かしら心に通うようなものがあるのを発見した。それは一体、なんであったであろうか。もし、時間に余裕があれば、それを確かめてもよいと愛子は思った。——

それだけで、愛子に対する美容訓練は、達成されたと見てよかろう。

―美容病院―
（木村愛子の経験）　おわり

〈あとがき〉

当初五回ぐらいで完結するつもりだったのが、書いているうちに次第に長くなり、プライベイトな問題で執筆に手間どって調査がゆきとどかなくなったりして困った。途中になって、この分でいけば三十回を越えるようになるかもしれないと考え心配した。それを、このように縮めたのは、タレそうに思ったからではなく、結局は体力の不足と本職の方が忙しくなって、執筆時間がなくなったためである。熱心に読んで下さった読者の方々には心から感謝している次第である。

久留木　栄

再びビーチボールの魅力について

佐田　春雄

この前、ビーチボールの魅力とさまざまな利用法について一文を発表しましたが、こんどは、いわゆる「抱き枕」としての利用法を説明したいと思います。南方諸国では「ダッチワイフ」と称して、等身大の空気枕を抱いて寝る習慣があるそうです。単に暑さを紛らわすという理由ばかりではないようです。（ダッチワイフを抱いて寝ると寝冷えをしないという利点がある）

産業陳列館でこれの実物を見たことがありますが、太い棒型の枕で長さは一米半以上もあったでしょうか。構造は普通の空気枕と同じ薄いゴムのチューブで作られ、その上に布のカバーをしてあります。メーカーは空気枕の製作所で、問合せたところ、注文で輸出品として製作した品で残品はないとのことでした。単に暑さを紛らわすという理由ばかりではないようです。（ダッチワイフを抱いて寝ると寝冷えをしないという利点がある）

この前、ビーチボールの魅力とさまざまな利用法について一文を発表しましたが、こんどは、いわゆる「抱き枕」としての利用法を説明したいと思います。南方諸国では「ダッチワイフ」と称して、等身大の空気枕を抱いて寝る習慣があるそうです。単に暑さを紛らわすという理由ばかりではないようです。（ダッチワイフを抱いて寝ると寝冷えをしないという利点がある）

産業陳列館でこれの実物を見たことがありますが、太い棒型の枕で長さは一米半以上もあったでしょうか。構造は普通の空気枕と同じ薄いゴムのチューブで作られ、その上に布のカバーをしてあります。メーカーは空気枕の製作所で、問合せたところ、注文で輸出品として製作した品で残品はないとのことでした

しかし、タイヤのチューブの口金は特殊な構造で、口でふくらますことができないので、求める際、口金の中のピンを抜いてもらいます。そうして口金の外側に数十センチのゴム管をつけ、更にその管の端に空気枕用の口金をはめておけば便利です。

病人用の「円座」（えんざ）と称するものは、スクーターのチューブと同じようなものですが、内径が小さ過ぎるのと、全体にわたって唐草模様のようなギザギザがあって感触の点でよくありません。

南極観測隊が携行したといわれる空気入りゴム人形は、原理的にはこれらと同じだと云えます。

前稿で述べましたように、ビーチボールの魅力の一つは、恋人の息が袋の中に充満していることにあります。従って、これを恋人にふくらましてもらうことができれば最上です。然し、抱き枕として使用することと自体は、必ずしも人間の息でなくともかまいません。その上、ビーチボールや空気枕は割合、楽に口でふくらませることができますが、タイヤのチューブや円座などは口だけでは一ぱいにふくらませることは困難です。一般に、使用してあるゴムの厚さが厚いものほど、また形が大きいものほど口で息を入れて完全に高圧状態にすることは困難となります。ビーチボールの大きいものや、浮袋などを口でふくらまして完全に張りきらせるのは、非常に苦しく且つ疲れる仕事であることは、どなたでも経験がおありでしょう。もっとも、毎日これをすると肺活量が大きくなって健康にいいといううので、十何年間か毎夜、大きなゴムの浮袋をふくらましている俳優の夫婦が写真入りで「ライフ」誌に紹介されたことがあります。（健康上の理由というのは口実だろうと私は思っていますが――）

一方、スクーター用のチューブやゴム円座は、厚肉なので、やはり口でふくらますのは困難です。この場合は、道具を用いて空気を入れる他はありません。空気送入の道具としては、いろいろありますが、デパートの海水用品売場では「ふいご」を用いています。車体を足で踏むと、ゴム管からどんどん空気が送られます。ゴム製の大型ボートには附属品になっていますが、これだけ別に求めると五百円くらいです。

他にバレーボール用のハンドポンプ（自転車の空気入れに似ている）は割合小型なので前記のふいごよりも簡便といえましょう。自転車の携帯用の空気入れも利用できるでしょう。これらの道具を用いれば、どんなに大きなゴム製品でも、いくらでも高圧にできます。もっと簡単なものとしては二連球かエネマシリンジを利用するとよろしい。この場合は口で大体ふくらましておき、最後の苦しくなる手前でやめて、あとを道具に切換えると時間が節約できます。二連球というのは送気球ともいい、二個のゴム球を連結して、その先に長いゴム管をつけたもので、病院ではナースが円座をふくらますのにはこれを使用します。

エネマシリンジは御承知のように、浣腸や洗滌などに用いるものですが、單なる空気入れとしても利用できます。余談ですがゴム球を握る毎に浮袋やビーチボール、チューブなどが、ぐんぐんふくらみ大きさを増してゆくのを見るのは、なかなか官能的です。ビーチボールのように管から空気を入れる製品の場合は、エネマシリンジの嘴管をボールのゴム管に挿入し、空気枕や浮袋のように金属製の口金の場合は、シリンジの嘴管をはずして、シリンジのゴム管を口金にぴったりはめ込んで用います。大抵うまくはまるようです。一ぱいにふくらんだら、シリンジを取りつけたまま口金を回して空気を出ないようにしてから、シリンジをはずせば空気は絶対に洩れません。

○　○

緊縛映画速報とその雑感

藤木仙治

変幻胡蝶の雨・月の輪族の逆襲

（東映映画）**黒白・ワイド**

前後篇である。後篇のほうがおもしろい。月の輪族の娘、弓（**桜町弘子**）が検非違使に捕って拷問を受ける。後ろ手。胸に三巻き四巻き。竹棒の鞭で叩かれる。カメラがはっきり背中を撮るのがよろし。手首は背中にかなり高く縛られている。時々人差指を動かしているのが可愛らしい。ウソでない緊縛感がある。鞭で叩くのも力がこもって、この監督少々残虐趣味あり。

桜町弘子も熱演。愛らしい顔だちながら、お色気もあり、将来有望。同型の丘さとみよりも伸びるかも知れない。丘さとみは最近肥ってきて、ますますお多福面になってきた。色気がないのがこの女優の最大の欠点だろう。だから縛られても痛々しくない。千原しのぶがあんまり痩せてギスギスしていて、縛られてもちっともお色気がでないのと、共通点がある。デブと痩せの違いはあるが。

とにかく、この「月の輪族の逆襲」は、マニヤなら見てソンはない。緊縛シーンは時間的にもかなり長く、近頃珍らしく充実した場面であった。前篇の「変幻胡蝶の雨」も、金と、ヒマのある方はごらんになるといい。月の輪族が検非違使の役人に弾圧されるシーンが、重複してでてくる。男女が後ろ手に縛られて追いたてられるシーン。ハリツケになるシーン。この監督どうもマニヤの匂いがする。

映画そのものは、完全なジャリ映画。ごくくだらない。

阿部秀さん、桜町弘子が背中をむけているシーン、うまく撮って奇クに掲載して下さい。横むきのアップも、なかなかにいただけます。

○女体桟橋

（新東宝映画）**白黒・普通**

筑紫あけみが、旗照夫に椅子へ縛りつけられる。猿ぐつわ。ひじかけ椅子のひじに腕をのせたまま縛りつけられるわけ。胸に縄はなし。したがって緊縛感足らず。ただ猿ぐつわの表情がちょっとよいだけ。

マニヤは見ないほうがいい位なもの。ガッカリします。よほどヒマのある方だけにおすすめします。主演の宇津井健は相も変らずの大根ぶり。この俳優ぐらい何時までたってもうまくならない人は珍らしい。演出、シナリオともに新鮮味なし。ありきたりのギャング映画に堕した。しかも、スリルもサスペンスも、まるで感じられないのだからお粗末なものだ。

筑紫あけみは、フアッション・モデルになってギャング団の実体を探り、婦人記者である正体を見破られて捕わるのだが、この辺の

趣向に、もっとくふうが欲しかった。

○熱砂の女盗賊（洋画）

カラー・ワイド

ペルシヤの市場で店をひらく床屋。そこの見習職人であるハジ・ババという若者が、立身出世を夢みて旅に出て、数々の冒険にであって、最後は一国の姫と結ばれるという、明るい物語。いかにもアメリカ映画らしい御都合主義の、くったくのない、楽しい映画である。

これは、マニヤにとって、まず一見の価値があります。わがままで残忍な王姫が城を脱け出して、いろいろ苦労するというありきたりのストーリイだが、これに、淫虐非道な悪王、その悪王から逃亡した女ドレイたちの組織する女盗賊がからむ。

旅に出て、やがてこの女盗賊の一団に捕ったハジ・ババと姫が、むざんにも空中に吊りさげられる。横棒に、手をバンザイ型に縛られ、トリックなしで長時間、空中に吊られている。姫の胸が大きくはだける。バンザイ型に吊られているので腋の下が露出する。そのあたりが、妙になまめかしい。

苦痛、やがて、あきらめの表情。棒に皮バンド？　で縛りつけた手首の感じ、よろし。はじめ、足のつま先がわずかに岩の上に触れているのが、女盗賊が意地悪をして、そのさえの岩を蹴とばして、宙ぶらりんにしてしまう。一度は助けられて、ヤレヤレと思うがすぐにまた捕わって吊られてしまう。だから時間的にもかなり長い。

女ドレイたちが木製のオリに入れられているフアースト・シーンから、この映画は、ラストまで、サド・マゾ好みの雰囲気が、各所にでてくる。しかも、陰惨でないのだから救われる。

わがまま王姫の残忍さが、この種の映画には珍らしく克明に表現されている。男の家来の衣服をはぎ取って、縛り転がすシーンなんかがある。また女盗賊の頭目の残忍さは、前記の刑罰の方法でもわかるが、捕えた男どもを、さんざん慰さみものにして、ツカイモノにならなくなると、空中に吊して**鷹**の餌食にする。そのヘンのセリフに妙味があった。

足にクサリをつけられて、じゆずつなぎにされている女ドレイの群れ。太腿をさらけだして、馬を駆使する女盗賊たち。このシーンには、サド性の強い筆者も、〝馬〟になりたくなりました。

あいにく、今、手もとに資料がないので、主演女優名、製作会社名を添記できないのが残念です。一般公開は、六月初旬の予定。

○サタン城の魔王（新東宝映画）

黒白・普通版

北沢典子のお姫さまが、縛られて牢獄に入れられる。

映画は、ひどいものです。最低という言葉がぴったり。第一、シナリオがひどい。メチヤクチヤ。脚本・川内康範、とあったが、まったくお粗末。したがって監督、山田達郎も全然気がはいっていない。金と暇と忍耐力のあるマニヤは、ラスト近く北沢典子嬢の縛られシーンだけをみるべし。

サタン城という九州の阿蘇あたりの山にたてこもる反逆者の一団に捕えられて、土牢の中に閉じこめられる。牢の中に入っても縛られたまま。ただし、城主のお姫さまなので高帯、したがって背中に手がまわらず、うしろの腰のあたりに手をやってゴマカしている。グロテスクな子供だましのマスクをつけた首領が、姫に迫るところ、やや面白し。それと緊縛シーンが長く、ちよいちよいでるのが取り得か。

この映画では、むしろ、前半に、キリシタン宗徒弾圧シーンとして、男女のハリツケ、縛られてひかれていく無名の人間たちの雰囲気に、みるべきものがあるようだ。それと、男が一人後ろ手に吊り下げられて、燃える石油の火の上で苦しむシーンのあることを、一筆つけ加えておこう。

魔教圏（マキョウケン）

ナンバー・エイト
NO・8

（その五）

土路草一

(一) 路子の煩悶

麗らかな日射しである。

やわらかい微風が開きかけた桃の花弁を揺すっている。日溜りになっている自宅の縁側で、比奈地路子は青絹を拡げたように、雲一つない空の隅へ虚ろな視線を投げていた。

この春霞のたなびいた春風駘蕩たる風景とはうって変って、彼女の心は木枯荒ぶ闇路を旅していた。

昨夜遅く、電話が悪魔の声を彼女に取り継いだのだ。

燃料分析表の窃取を確かめ、既に彼女のカメラに写し撮られてあることを聴くと、明日、差図に従って家を捨てて出れるように身辺を整理して、自宅で待期せよと命じたのだ。

路子は一瞬、立ちくらんだように頭芯が吹き荒れた。受話器を持つ手が震え、声が嗄れて咽喉だけが鳴った。

電話の声はお構いなく自己の指令を繰越して押しつけた。

彼女は受話器を置くと全身の力が一時に萎えて、思わず、よろよろと廊下の柱にとりすがった。

顔面は蒼白となり血が冷えて、膝ががくついた。遂に来たるべき時が来た。彼女の才気ある聰明な頭脳も真空になって、宙を踏むような足取りで自室へ戻って来た。

成すべきこともなく終って了った数日。まさかとは思わないでもなかった事が現実になって現われると友人達を感じ入らせた思慮も分別も所詮、女のものでしかなかった。

只、闇雲に救いを求める心がはやった。

警察へ駈けこもうか？　父母に事実を打明けようか？　弟の正哉に相談しようか？

頭を抱えて判断に迷っている時、丁度黒山谷子が訪ねて来たのだ。

路子は前後の考えもなく、電話の内容を打明け綴った。

分析表は現物を盗まず、フイルムに撮ることを教えてくれたのも、秘密探偵社員勝谷に命じて見え隠れの護衛をつけてくれたのも、谷子の差金だった。

美加子や津田と逢えない路子にとって、てきぱきと処置してくれる谷子は、今では唯一の心頼みであった。

その黒山谷子の言に依れば、おとなしく指示された場所へ行き、先方の命ずる儘に行動して、奴等の本拠へ赴くことだ。危ぶまれない為にも、分析表のフイルムは持参せねばならないし、家を捨てたことを示す着替や多少の金は持たなければいけない。私達は極秘に貴女の跡を尾行する。そして貴女を連れ去る車の型や相手の人数や服装をパトロール・カーに通知して捜査網を張る。貴女が連れこまれる処、即ち、敵の本拠を突きとめ、一網打尽にして悪の根源を絶つ。貴女だけを隠せば貴女の父母は危険に曝される。それに貴女だって隠れ通せるものではなし、日夜、襲撃される危惧に戦き、父母が蒙るかもしれない危難に対する焦燥に悩まされ続けることだろう。この際、思いきって敵の手に乗って行動したほうが事を一挙に解決するには最上だと思う。手術と同じで病巣を取り除かない限り再発は脳裡を去らず、常時悩み、怖れる苦しみを繰返さねばならないと云う意見であった。

路子は、その意見には不安があった。もしも、尾行がうまく成功しなかったら、私は一体どうなるのだろうか？　敵が手配の前に覚って了ったら、そして谷子達が襲う前に相手が根城を抜け出して了ったら、その原因である私に懲罰が加えられないだろうか？

だが、谷子は自信たっぷり勝谷の過去の実績を云って胸を叩いた。父母の危険もある、虎穴に入らずんばの譬えもある。

智恵もあり、しっかり者と云われている近代娘にしても、このような場を踏んだことのない素直な路子は、やはり波風を知らないお嬢さんであった。領くより仕方がなかった。

路子は流石に、その夜は眠れなかった。考えれば考える程、明日が気になって、転々と寝返った。そして、万一を考え、二十一年の成長が走馬灯のように脳裡を去来した。

路子は虫が知らせたと云うのだろう、冴えた顔を起すとスタンドを灯して、便箋を開けた。そして今迄の経過を余さず書き綴った。

封筒に入れ津田経介様と宛名を書き終った時、白々と夜明けが訪れた。

彼女は簡単に家出を知らせる書置を、電話の差図通り父母宛に記した。そして当座の着替をボストンバッグに詰めた。

女中が朝食を知らせて来た。

併し路子は到底、胃の腑へ通りそうもなかったので風邪気味だからと顔を覆った。

父と弟が出掛ける気配、母も九時過ぎに親戚へ出掛けていった。路子は床の中で蒲団を噛みしめていた。取残されてしまうと急に寂寥がこみあげてきた。無事に帰れますように、心の底で念じたが、彼女は一人でいるのが、いたたまれなくなって臥床を出た。

縁の日溜りは暖かかった。

眠気を誘うやんわりした陽当りだった。垣根の樹立が緑に息吹き、もの憂く隣家の洋館からピアノが聴えていた。

路子は女学生時代を想い出す。ピアノをぶっけるように弾いたり、この庭で友達と跳ね廻ったことが、たまらなく懐しまれた。

「お嬢様、お昼で御座いますけど、パンでもお焼き致しましょうか？」

女中の綾子だった。越後から昨年出て来たばかりだが、本来のなどけなさと雪のような肌が都会の水で磨かれて、最近、とみに美しくなった十七才の少女である。

「そうね？」

路子は相変らず食慾が無かった。

その時、裏から愛犬のピーマが駈けて来た。コリー種で、美加子から譲って貰ってから二ケ月にしかならないのだが、よく馴ついて路子の姿を見ると駈けてくる。

「此処へ持って来て頂戴、ピーマにやるんだからビスケットも頼むわ」

路子は愛犬と一緒だと食べられそうな気が

同じに扱われる運命になるとは知らずに……

綾子がビスケットを持って来た。

「そら！　おあがり」

ふくりと開いた美しい掌を、コリーは長い舌で舐めた。

「そら！　とっておいで！」

ビスケットが飛ぶ。手入れされた毛並を陽に映えさせて、ピーマは駈けて行った。

路子は幾分気が晴れて来た。自分もパンを嚙り、ミルクを飲みながら愛犬と共々、庭を走り廻った。

「姉さん、風邪は癒ったのかい？」

不意に柴折戸で声がした。

「なあんだ、正ちゃんか？　学校はもう終ったの？」

弟の正哉だった。が、隣に学生服の青年が立っている。

「あら、お客様？」

「あゝ演劇サークルの友達なんだ」

青年は異常な眼を光らせて挨拶した。蔑すむような変に笑った瞳だった。

路子は気色の悪い感じが胸を走った。

誰あろう、その青年こそは谷子と並んで、

「今、あげるわ、ちやんとお坐りしてるの」

ピーマは頷かなかった。鼻面でブルーのカーデガンに覆われた主人の丸い胸を擦った。

「いやね。おとなしくするのよ」

路子は愛犬の頭を撫でる。聽て、この犬とした。

ピーマは主人の形よい脚にじやれついた。そしてフレヤースカートの上に前足を載せ、ふくよかな膝の上で鼻を鳴らして、食物をねだった。

黒塔会の主要メンバーである誘拐魔、南城だったのだ。そして彼は何を意図して彼女の弟に近付いたのであろうか？

(二) 畜道教唆

美加子達十数人の裸女はそれぞれ美しい肉体を後手に錠されて、一列に膝を折って並ばされていた。

正面に赤い絨氈を敷いた祭壇が設けてあり例の異様な魔神が金色に輝いていた。

黒い四ツの随神、蛇の燭台、三本足の供物台、彼等の廟なのである。

じりじりと得も云われぬ臭気をたてて燃える油灯が一様に裸女達の吐気を誘っていた。だが、奇妙な威圧を孕んだ雰囲気、妖雲芬芬たる魔気に、美加子とても圧し伏されそうになっていたことは否めなかった。

と、突如として、ドラのような濁った鐘の音が聴えた。最初は低く、次第にだろだろと強く高く鳴りだし、テンポが速まって、最後は耳を聾さんばかりにぐわんぐわんと響き渡った。

すうと、吸いこまれるように牛酪の灯が消えた。

真の闇である。一切の光線が消滅し去り、そのかわり女達は耳も聾せんばかりの強烈な鐘の音に胸芯がぐらぐらと揺すられていた。

ぴたっと鐘がやむ。砑のような金属の喚きが消えると反射的に訪れた静寂は深い闇を殊更に濃くした。

美加子の鼓膜に隣の女の吐く息音が幽かに伝ってきた。

視界と音響から隔絶されてしまうと、美加子は今迄抱いていた羞恥心が消え去り、束縛もそれ程気にならなくなっていた。が、しかし、それでいて、何かしら、叢雲のような不安が胸許をせり上って来た。

無気味なまでの壮厳、身を包む魔可不思議な妖気、見えない筈の金色の怪像が眼先に浮び上ってくる。

ふと、地の底から聴えるように笙、篳篥の音色に似た奏楽が厳かに流れて来た。単調な、それでいて妙に癇高い調子を持つその旋律は美加子の胸の帳を更に深めていった。

天井からぱっと一条のスポットライトの細い線が黄金像に注ぐ。

白い光りが、くるくると五彩に変ったかと思うと真紅の輪が緑のガウンを纏った壮年の男を照し出した。

「女達よ！」

重々しく唇が動いて底響きのする声が群女の頭上を渡った。

後手に括られて、自然俯向きがちになった姿勢を更に倒して、美女達は体を緊めた。

何かしら神々しい圧迫を覚えたのだ。

「我は黒天使様の使徒である。お前達にこれから黒天使様の御声を伝える」

光はいつとはなく薄桃色に変って、徐々に裸女達のほうへ移ってくる。

「黒天使様は五千有余年の昔、我等信徒にこう云いきかされた。」

男は、じろっと眼をぎよろつかせて、白く並んだ背肌の列を眺めて云った。

「我はこの世を創り給うた全能の神より、一一万年間の間、地上支配を命ぜられた。我が支配にあるものは総て我を尊崇せよ。しからば、地界に臨むを許し、生活に豊饒を与え、生の繁栄を齎らさん。我これを宣してより五千年を閲したる時、地上に福音表われるであろう。我が使徒がそれを伝え、我を敬し祭るもののみが、それを受くる。我を尊崇せざるものは禍を蒙り業苦に責まれるであろう。而してこの信徒来福を期に、永久に我が信徒の飼畜となり宗徒繁栄の裨益とならん」

桃色の照明は次第に薄れ、緑の光がだんだん、輪を拡げていった。

女達は豊頬を固張らせ、後へ廻った白い腕を凝こらせていた。

「黒天使様の御予言の如く、引続く世界大戦で異教徒は業苦を蒙りつつある。特にお前達の国日本は死の光、即ち原爆を受け一挙に多数の命を失った。我らが教えを信じなかった当然の酬いなのだ。そして、お前達のその姿、裸で手足を拘束され、我らが前に伏せている

その姿が総て黒天使様を尊崇しなかった輩の姿なのだ」

光は愈々拡大されて部屋全体が緑の洪水になった。

「今聴かせた御予言の中にあるように〝永久に信徒の飼畜となり宗徒繁栄の裨益となる〟その為にお前達は生れ成長して来たのだ。お前達は人間ではない、我々が使役するため生存させといた家畜なのだ。姿形が同じ、と自惚れるな、生れついての業があるのだ。黒天使様は厳しいお方じや、総てを捨てて御尊像の前にひれ伏し、己が姿の有り様が儘、即ち畜類としての幸せを願い、慈悲にお縋りするのがお前達の道じや！」

裸女達は更に床へ額を擦りつける。

何の術か？　その声は妖しく反撥を許さない。邪道の納得を群裸に強いるのだ。四、五日の拘禁から受くるものではない。胸を塞がれたように声一つ発てられないのだ。

きらきら光る像、ゆらめいている緑のガウン、耳朶を漂っている雅楽。職業的にもトップクラスに属する美加子にしても、何やら夢を見ている感じだった。男の云っていることが当然のように聴えてくる。

彼女達は視神経を色の変化に依って誘導され、視神経からくる安堵感、又は精神弛緩の隙に乗じて集団暗示にかけられているのだ。

男は緑の袖を飜して、真直ぐに腕を前方に伸ばす。

「我らが長老は仰言っている。異教徒は水爆や人工衛星に於ける邪しまな争いに依って遠からず終熄するであろう。残された僅かな異教徒が家畜となり、黒天使様の慈愛を蒙むるとな。お前達は幸福なのだ。早く畜道を悟らせて貰った上に我らの庇護に置かれる。有難いと思え！　いゝか、身を粉にして、黒天使様と我らが利益の為に励むのだぞ！」

男は一段と大声で喝破して、しずしずと壇を降りる。

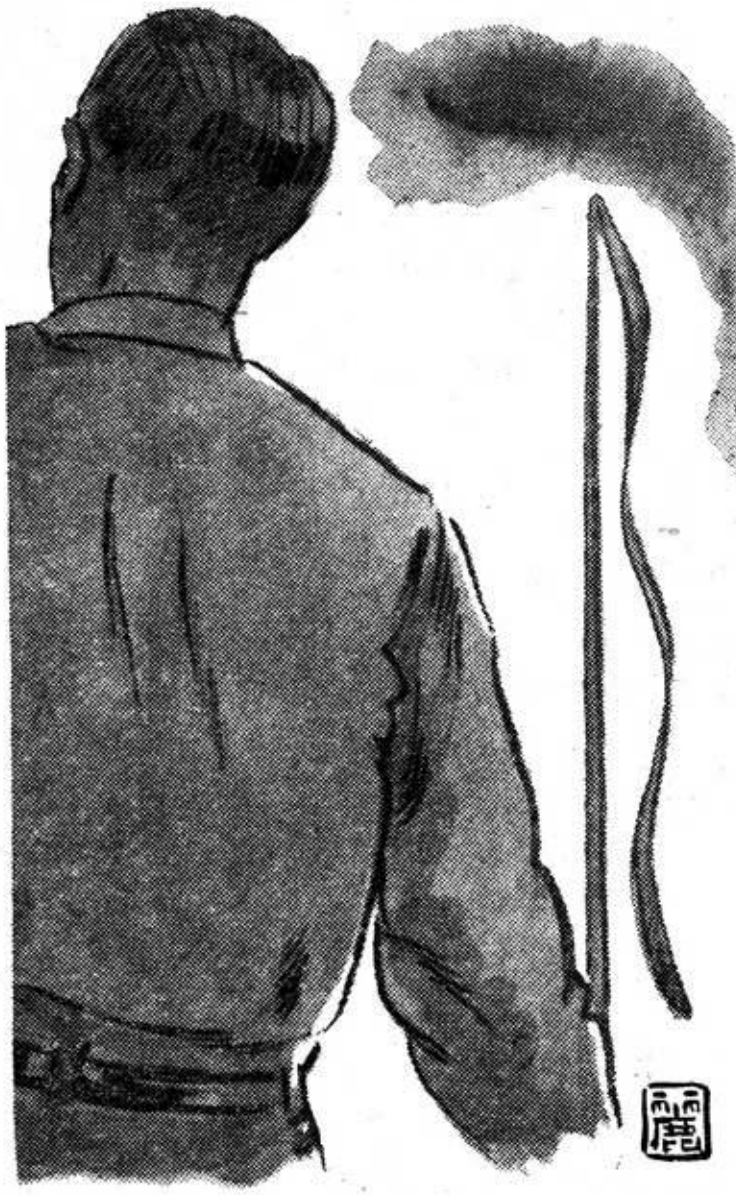
長い裾を引き摺りながら、畏って項垂れている裸身達の前へ歩み寄り、端の女を指示すると

「顔をあげい！」

ぎらっと凄ましい凝視を、美しく怯えている黒い瞳に叩きこんだ。その眼の光は、何とも形容しようのない物凄さを帯びていた。

各個人の脳細胞が、その所属する人格と全く別個の行動と意志をもち、自由に且つ何ら制約せられずに活動する一現象を〝脳波〟とも、脳の自己活動とも謂う、と某権威が定義している。即ち、殺人、淫行、その他の犯罪行為の一切は、総て脳細胞の指令に依って行われている。それが証拠には殺人に当って、その個人が躊躇し、逡巡する。これはその犯罪者がまだ完全に脳細胞の造った妄想の虜になっていないからで、虜になった時に犯罪は実施される。云いかえれば妄想を生み、堕落へ導くのは脳波の仕業である、と説明している。

男が可憐な女の瞳を睨み、強圧を以って征服し



洗脳しようとしてるのは、彼女の脳波を己れが意の下に屈伏させようとする催眠の術に他ならないのだ。

女は胸酔したような幕のかかった眼色になって行く。

それに又、日本文化の底には神霊や祖霊などの信仰（アニミズム）や、それらの霊が人に憑くという神がかりの信仰（シャマニズム）が根を張っている。家族制度や君主制度に固く結びついた旧意識が民衆の間に燻ぶり続け、原始的な奇跡や慣習をたやすく受入させる為の豊かな温床になっているのだ。

都会に生れ、民主的な環境の中に育った筈の美女達でも、そういうものは人間の幻影に過ぎないと思いながらも幽霊を怖がり、物の怪を恐れる。

某銀行の美人行員は鋭眼に代って、突き出された男の掌を見ている内に、網膜が霞にかかったようにぼやけてきた。

掌が真黒になって、瞳一杯に蔽い被さってくると、激しい震えが全身を突き抜けた。

呼吸が苦しくなり、咽喉が乾からびて、舌から水気が去っていった。

ぽっかり、眼前に戦死した兄の顔が現われる。頬のこけた、蒼白い相貌である。古びた兵隊帽の下で弱々しく瞼をしばたたいた。

〝もっと元気のある兄さんだったのに、でも兵隊で苦労したからに違いないわ〟と彼女は思う。眉の皺も口許も独特な歪みも兄のものに相違なかったからだ。

「志津子！　僕は今、十大地獄をさ迷っている、いつ果てるともしれぬ苦しみだ！」

兄はぼろぼろと涙を零して云った。

「えっ！」と口走ったつもりだったが声にはならず、兄の苦しみが伝わったように激しい苦しみが心にのしかかってきた。

「黒天使様の御教えは絶対だ、僕は帰依しなかったばかりに、この永却の苦難を受けねばならない」

兄は咳こんで、呻き声をあげて悶えた。

「お前は幸せ者だ、使徒様の御導きに依って道が開けた。お前は黒天使様に衆畜として仕えるのだ。それがお前を現世、来世ともに幸せにしてくれる。いゝか、家畜になるのだ。教徒様方の飼畜となるのだぞ」

斫のように繰返し繰返し、その言葉はオフィスガールの鼓膜に反響した。

映像が消えると嘘のように乙女の心の重みも取り去られていた。

「お前は我ら教徒に飼育される動物じや、主人の意の儘に従い、意を計って奉仕せよ」

女は木偶のように、こっくりと肯定した。

「黒天使様にお加護を願え！」

ガウンの差し示す尊像にふら〳〵と夢遊病者のように向き直り女は盛り上った双乳を膝につけ、髪を頬に垂らして深く頭を下げた。

そしてルージュを塗った唇が造作物のような生硬さで

「家畜、志津子をお導き下さいませ」
と動いていた。

(三)　美女の人間固執

美加子は流石に強い反撥を持っていた。
女達が次々、男の命令に諾々と従って魔像を伏し拝むのを奇異な現象でも見るように呆然と眺めていたのだが、自分の番が近づくにつれ、彼等の演出には並の力では抗しきれない妖気が含まれていると解ってきた。
他のことを考え、気を散らすのだ。男の眼を正視してはならない、あらぬほうを見るのだ。
男が美加子の前へ立った。
美貌は息を詰め、負けるものかと唇を固く締めた。併し、うら若い身を一糸纏わず曝している羞恥と、その裸身を後手に縛されている不抵抗な姿勢では、いかに強い理性の所有者であったとしても、立合う前に於いて数段のハンデキヤップを見込まねばならぬであろう。
鋭い眼光が射込まれると黒水晶の瞳は辟易(たじろ)いで、慌てて、外らそうとした。が、一度交叉した双眸は磁力に吸い寄せられるように、金縛りに動かなくなってしまう。
いけない！　美加子は必死になって腹に力を籠めた。併し、嵌め玉のように眼球は自分のものでなかった。美女の瞳孔は動きを停め、次第に弛緩し、澱んでいった。
気分がふわりと浮き上り、眼前に七彩の雲が漂った。
お前の前世は犬だ！　そんな教唆が脳髄で鳴り自分が顔貌を持つ四ツ足の獣身が視界に拡がった。
違う！　違う！　かすれた意識の底で叫ぼうとした。祖母の顔を持った犬が現われる。言葉巧みにうべないを迫る。欺されてはいけない。美加子は心で幾度も幾度も反芻した。併し、それが実際なのだ。本当なのだと云う合点が片隅に生れ、急速に膨らんでゆく。あゝ、身体の中の総ての力が抜け去って痺れたような陶酔が訪れた。あゝ、胸底の溜り息を吐くと美加子は間遠い呼気に移っていった。私は犬だった。私は家畜だった。
乙女は男の言葉を夢心地で聴いた。その言葉は無上の音楽のようにこころよかった。
安らぎが薫風のように身を包んだ。その時突如、足指に鋭い痛みを感じて、はっと半意識に己れを取戻した。偶然ではあったが、美加子が正座している床にパイプを立てる為の小さな穴が明いていた。その穴に身悶えた足指が嵌ったのだ。ぎりぎりとつき指みたいに反った関節の痛みは脳髄を突き抜けた。
美加ちゃん、しっかりするんだ！　幻聴が鳴っている耳に、恋しい津田の声が押し被ってきた。乙女は一挙に理性を呼び戻していた。
男が何か云った。併し、美加子はうわずった声で
「私は人間です、家畜ではありません！」
と逆しるように叫んでいた。
ぎらっと男の眼が変る。自分の術が破れたことと、囚女の気魄の強さに、かっと怒りが火焔になって燃え上ったのだ。
形相は険悪に変じ、手の鞭が唸りを生じて白い肌に絡みついた。
「あっ！」
痛みは背を燃えたたせたが、お蔭で美加子は一層はっきりと己れに返っていた。
「馬鹿牝！　黒天使様の怒りを示してやる」
絢爛たる肉体は弟子達に髪を摑まれ、ずるずると尊像の足下へ引摺られる。
一段と高い、犠壇なのだろう、毒々しい装飾のある一角に追立てられた。
美加子は観念していた。責められることは仕方がない。……が、飽く迄も人間としての誇りは失ってはならないのだ。
併し、なんと哀れな姿であることか？　男を男とも思わぬ活潑さで、颯爽とラジオ帝都に君臨していた城美加子が、これなのか？　数多の男を尻目に素養ある采配を振るっていた綺羅美やかな美貌社員は何処へ行ってしまったのか？　今、知性を截断したジャケットや配色の品位を仕立てあげたスカートを強奪され、玉の肌を余す処なく嘲眼に曝し、悄然

と後手で床に蹋っているのが、つい先日まで、溢れる才気、見事な肢体と自他共に認められ、属望されていた城美加子なのだろうか？

美貌は伏眼になって、黒眸を自分の胸に落す。豊かに張っている双房、紅い弁に囲われている乳首、いつか女癖の悪いプロデユサーがすれ違いざま、故意に彼女の乳房に触れたことがあった。美加子はぱしっと振り払い、激しい非難の眼を向けて、鋭い皮肉を浴せたことがあった。

異性はおろか、同性の眼も嫌がって、入浴は家庭で一人密かに入るぐらい気づかい護って来た乳房である。そして腰であり、腿であった。

それが今、衆目、それも夷狄の蔑視が注がれ、而も束縛され、覆うことも逃げ去ることも出来ないのだ。美加子は胸を吹き過ぎる、羞恥を通り越した悲哀を、並び揃った皓歯で嚙み耐えていた。

脇腹を蹴って坐らされると凹型になった木枠に顔を突こまれた。

両頬がやっと挟まる程度の狭さで、ラジオ帝都のクインは、ぐいぐいと後髪をこじって押込まれた。

笑窪の浮ぶ魅惑の頬は堅木で擦れ、芳息を吐く唇はとんがって皺った。

ほんのりと色づいた柔かい両耳が左右に引張られ、木目のある枠面にぎゆっと押し拡げられた。と、思った途端、痛烈な痛みが耳朶を襲って、美加子は嵌った頬を振り動かし、

「あゝっ！」

と激しい絶叫を迸らせた。

ああ、何ということだろうか？　男達は、若く健やかに美を高めている、彼女の可愛らしい耳朶に、無残にも鉄の楔を打ちこんで木枠に留めたのだ。

耳の釘づけ。彼女は、まるで虫ピンで留められた標本の昆虫のように、魔像の前で歪めた臀部を展覧し、哀れげに足をばたつかせていた。

教徒から見たら、彼女の肉体や生命は一匹の虫けらにも等しいのだ。その虫けらの耳を釘づけすることには何の痛痒も呵責も感じてはいない。

併し、美加子にとっては青天の霹靂であった。家畜と云っても、一種の脅しであり、売春の手段ぐらいにしか考えていなかったのだ。それが、いきなり、自分の肉体の一部が、事も無げに、獣並に損壊されてみると、魂が拉しぎ、身の毛もよだつような戦慄が全身を走った。これでは生命すら、無造作に豚や鶏を屠るように仕末されてしまいかねない。

美加子は心底から怖気が湧き上り、羞恥などは遠く飛び散らせて、がたがたと丸く肉付いた肩を打ち震わした。

男はそんな彼女の有様を気持よさそうに眺める。そして、鞭を頭上に恭々しく捧げて額づき、祈りの言葉を悪魔の本尊に誦唱すると飜って、すっくと立ちはだかる。

虚空を鋭い音が斬り裂き、黒鞭は床で刺し留められている蝶のような白い肉体に振り落ちた。

ぴしっ！

「ああっ！」

可憐な蝶はぴくっと背を反らした。併し、その筋肉の張りが禁固されている顔に来て、耳が、ぎゆっと引き捩った。

「ああ！」

再び鳴いて、掌を握り締め、膝を深く抱えこんで、幾分でも痛みの軽い受難の態勢を整えようとする充ち充ちている麗体に、

ぴしっ！　と間を与えず、続いて、振り下される鞭の鋭さ。

「あっ！」

折角の態勢が崩れて、女は脇腹をよじって跪いた。

間髪を与えず、黒皮は斜めから乳上へ絡みつく。ぴしっ！　ぴしっ！

続いて、腹へ、腰へ、腿の裏へ、執念深い蛇のように、くるくるッとまつわりついてゆく。若やかな香りを含む女体は、嵐にそよぐ木の葉のように、首から下で、揺れ、うねり、悶えた。

爪先だった足指が床を抉べり、滑っこい膝

頭が赤く塗装された木台を蹴った。

繊細な掌が折りこまれて、ぶるると震え、ふっくりした臀部は厳しい肉にぶち当る鞭の音を残して、条痕を印していった。

やがて、悲鳴が呻きに変る。足掻きが収縮して、ぐったりと僅かな律動しか伝えなくなった。肩にも、胸にも、胴にも、苦悶の水滴が噴出し、若鹿を思わせる脚線は力を失って緩慢な伸びを描いてきた。

そして、呼吸だけが荒々しく脇腹を懸命に絞っていた。

(四) 不従の刑罰

「はんぱ牝！　見るんだ、黒天使様の御指示に背いた奴等の哀れな姿を！」

美加子はかすんでいた眼を開けた。

凹型の底面が、するっと開いて、眩しい光線が朦朧としていた瞳孔を射た。

それは、祭壇の下の部屋を鳥瞰出来るように設らえてある覗き穴であった。

がらんとした上塗りのしてないコンクリート壁に囲まれた殺風景な部屋であったが、美囚の視線が其処に展開されている光景に接すると、

「きあっ！」

と驚愕の声言をあげた。

あゝ、何たること、この世ならぬ悲惨さとでも例えようか？　そこで苦しみ、蹲いている犠女達の姿は、果して、この人間世界の出来ごとなのであろうか？

愛らしい鼻に鉄輪を嵌められ、低く床に固定され、器具で口を開け放しにされている裸女に、肌も見えぬ程の青蛇が絡みついているのだ。ぬめぬめとくぬっている鱗に蔽れた爬虫は、胸の丘に巻きつき、立てている腰や踏張っている腿を十重、二十重に締めつけている。それだけではない。ちろちろと舌を出しながら、あどけない美貌の口に向って這っている。いや、入るところではない。口から出て来たのだ、それが鼻孔を越え、睫毛を舐め始める。

あゝ、何としたことだ。美女は失神寸前なのか、動こうともしていないようだ、併し、時々、大きく息吐き、ばたっと腰を倒し、力なく断末魔を蹲くところを見ると締めつけられる苦しみとぬめつく怯えに気力を使い果してしまったのだろう。固く瞑った瞼、顛倒する度に響れる鼻丘、咀嚼を失った口からは鱗の味を賞味した涎がだらっと糸を引いている。

この女にしても街にあった時は、颯爽とペーブメントを踏み、青春を謳歌していたことであろうに——。

一方では、後手と足首を連結され、立つことを許さず、膝で蹙ざるだけで動きを封じられた美女を二匹の狼犬が調教している。

猛々しく、熊ぐらいの図体の犬は、牙そのものの尖った鋭い歯を剝き出して、凄い咆哮を浴せながら女に迫る。女は恐怖で麗貌を引き攣らせながら、懸命に膝頭でコンクリートをいざって逃げようとする。併し、到底、その動きは犬の比ではない。忽ち、押し倒されて仰向けにのけぞる。無様に曝した身体の上に一匹の犬はかけあがって、鋭い足爪で胸乳へ踏みのぼる。吠声を発てながら牙をまるまつちい頬に当て、筋の通った鼻梁に突き刺す。貴貌を背け、必死になって逃れようとする乙女を片方の犬に追立てるように獰猛な鼻面で押し転がし、脚に嚙りつく。端麗な身体は蒼白く、粟粒を撒いて転倒し、這いずり、牙を躱そうとする。二匹の犬は馴れたもので、互にチームワークをとりながら、女を立たせ、蹙らせ、転がす。乙女は悲叫を壁に反響させてのたうち、夢中で蹲きながら哀しい恐怖と牙の劇痛を眼もあやな曲線で描いてゆく。

結婚迄はと恋人にも触らせなかった白磁の肌は犬の牙のために傷だらけになった。

更に一方では、ボリュームのある素晴しく発達した四肢を持つグラマーが、五十瓲以上もある巨大な猿に馬乗りになられて這い廻っていた。手首と膝に動くだけの余裕をみた鎖が嵌まり、口から伸びた手綱は、しっかりと跨った猿の毛むじゃらな手に握られている。慧しい獣は片手にした鞭を容赦なく美馬の麗

しく充ちた尻に振り当て、鋭い爪の拍車を豊満な乳房に蹴上げる。白い艶を帯びた肌は悲しい嘶きを挙げ、汗で全身を濡らしながら、ぜいぜいと床を四ツ足で駈けている。

懇望されて、ファッション界に登場し、つい先頃、服装雑誌で新鮮な花を添えたと評された麗姿で……

「あの牝馬は足筋を吊って、立てないようにしてあるんだ」

男が云った。美加子はぞくぞくと狂いたつような寒気に襲われた。

人間を獣に支配させる。健康な、それも選りすぐられた美しい肢体を不具に加工してまで……。

束縛され抵抗を許されず、恐怖に責まれながら、獣の奴隷として翻弄されている女達の心はどんなであろうか？

「お前達には口で云っても解らない。こうやって獣達に調教して貰うのが一番いいのだ。家畜としちあ、犬や猿はお前達の良い先生だぜ、よく見ておけ！」

ぴしっ！

又、鞭が美加子の柔く透けた背に鳴った。新たになった痛みが肌を廻る。

奇矯な魔神の妖気、荘重な祭壇の魔気。それだけでも狂いそうだった頭脳に鞭の肉体加虐が通算され、茫とした瞳に獣の調教を見せつけられて、判断のつかない靄と痺れが、ぐるぐると脳髄を舞った。

けもの？　動物？　私は家畜なのか？　家畜の性を持って生れついたのか？

ぴしっ！　肌の痛みが駈け上り、美加子の脳神経がかっと照てり、くるめくように錦が乱舞した。

狼犬に追いまくられていた女が、精魂を費やしてしまったのか、動物的な呼吸で這いつくばり、四足の調教師に向って昏れた眼で哀願を始めた。

馬の女は差出された調教畜の針のような獣毛で蔽われた爪先を贅食しか知らなかった舌で、ぺろぺろと舐めている。

あゝ、あの女達は、否、あの白い獣達は自分の先輩である獣達に許しを請い、愛嬌をふり撒いているのか？

私は、私はいったい、どうすればいいのだろう。私の進む道はどうなのだ？

ぴしっ！　ぴしっ！　情容赦もなく鞭の連打が磨かれた肌で鳴った。

白桃の肉塊は苦痛の限界の足掻きを激しく痙攣させると、がくっと弛緩し、筋肉の動きを止めた。

(五)　美姫収納情況

その頃、この廟堂の上の部屋、黒塔会管理部受入課に、稀代の美女、比奈地路子の収納情況が届き、一時間後の入荷が連絡された。

課長サインの検査依頼通知に添えて、黒山谷子名儀の納品伝票が発行される。

そして、当の令嬢は人気のない屋敷町をとぼとぼと瞳を伏せて歩いていた。

西陽が、濃い翳をアスファルトに落している。彼女は坂の途中でもう一度顧った。

見ることが出来なくなるかもしれぬ我家、玄関脇の松の緑が眼に痛い程、染みついた。

不意に門からピーマが躍り出て来た。路子を追って一散に駈けてくる。

美女は跼んで、両手を開げて迎えた。愛犬は主人に跳びついて鼻を鵜らして甘えた。

彼女は感傷にいたぶられて、首輪を抱えこんで頬摺りした。

「ピーマ、さようなら」

いつもなら、そう云えば戻るのだ。それが今日に限って犬は帰ろうともしない。畜生ながら、何かを感じ取っていたのだろうか。

「駄目よ、お帰り！」

路子は殊更声を荒げて、すたすたと坂を降りる。だが、ピーマはコートの裾にまつわりついて主人を追った。

午後の道筋は眠ったように静かで、人影一つにも出会わず、教会の通りに出た。

悪魔の指示通り、黒い自家用車が一台、ぽつんと停っている。

あれだわ、路子は脚が固張って、俯向き勝ちに歩を運んだ。

「比奈地路子で御座いまず」

流石に声が嗄すれて、胸元をタックしたブラウスがおずおずと傾しいだ。

男は黙って扉を開ける。

比奈地路子は六十六ゲージ、ナイロンフルファッションに包まれた典雅な脚をステップにかける。人間が剝奪され、社会通念と隔絶される魔道の国へ一歩踏み入れたのだ。

だが、彼女はまだ何も知らない。只、ハレムで生活し、アラビアの王侯に召し使われるのだ、と単純に考えているに過ぎない。それも、まかり間違ってのことだ。うまく事が運べば、程なく帰って来れると思っている。そして、実際のハレムそのものの内状も知っていないし、仮に知っていたとしても、これから待っている生活は、そんな生やさしい暮しではないことを、この春の陽射しが沈んだ頃に悟らなければならないであろう。

シートに納まった路子の膝に、ピーマが跳び乗った。

男は驚いて眼を怒らせたが、追尾されるかもしれない犬の嗅覚を恐れたのか、何も云わず、運転手に発車を命じた。

（未完）

＜訂　正＞

○六月号口絵六頁目の「**緊縛映画名場面集**」の提供者阿部秀とありますが、これは編集部の手違いにより誤りましたので左記の通り訂正いたします。提供者は**楓月太郎**です。

○六月号本文六五頁「**縛られた女優達**」（**大河原珠樹**）の中で、中段二行目の山本昭子は山東昭子、同じく中段四行目のおアヤは、おマアの誤植でしたので、ここに訂正いたします。

マゾヒズム百景

馬場好男

◇序景

いろ〳〵な理屈もあるけれど大体に於て、婦天下の家庭の方が平和的である。即ち女性が男性を苛める光景は、男性が逆になる場合とすると見た目も大きく違う。之を書く私も当然、マゾヒストを自称するが（他人は私をそうみるかどうか知らない。何故なら、此処以外で私がマゾだと云った事も又、大衆の前で行動をとった事もないからだ。フエミニスト程度と云う処だ。それを越えるとヘンタイと白眼視される様で、どうもそれほどの位置でもないが、社会的の立場を先に考える、不自由なものである。）自分の見た事、聞いた事、そして体験した事をいろ〳〵取りまぜて、題名通り百景まで書いてみたいと思う、但し余り流麗な文章は書けないが、同好の士を得れば幸である。

第一景　或る夫婦

三郎君と春子さんは、結婚してもう五年の月日が流れている。世の平凡な夫婦と違って、未だ子供がないので共稼ぎをやっているが、不思議に此の二人には倦怠期が訪れて来ない。何時も若々しく、恋人同志の様な二人で、今年三十一歳の青年（…には一寸古いかな）で、明朗温和な性格。春子さんは三郎君より四歳年が下で、同じく丸ビルの或る会社で働いているが、美人で健康的な近代女性。朝は一緒に出かけ、夕刻は大てい何処かで待ち合わせて、やはり一緒に帰ってくる。そして此の夫婦の家からは、何時もキヤア〳〵と笑いさざめく声が聞えて、子供の居る様な賑やかさである。今、その彼と彼女が何をしているのか、一駒〳〵覗いてみよう。

◉レスリング遊び

一時、日本中を力道山のプロ・レスが風靡したが、之は夫婦でも遊び得る楽しい遊戯であり又、運動である。それに美容上にも最適で、春子さんが若々しく、はち切れそうな肉体の持主であるのも、此の故かも知れない様

だ。部屋の中央に、畳二畳敷位の真四角な、いわゆる夫婦レスリング専用の布団がちやんと出来ていて、之を敷き試合場をつくる。そして、此の上で二人は組合って、相手を身動き出来ない様に抑えつけ、降参と云うまでドタンバタンと格斗をやるのである。男女の力の相違もあるが、此のせまい処での勝負は、三郎君の温和しいのに比べて、おてんばな春子さんとでは、それほどの差もないらしい。三郎君が見事に春子さんを抑えつけてしまうかと思えば、逆に赤とか緑色の派手な水着姿の春子さんが、三郎君の胸の上に堂々と馬乗りに跨って、その大きなお尻でぎゆう〳〵抑えつけ、真白な美しい大腿で、赫い顔をしてはね返そうとふんばる三郎君の顔を、ぴったり挟んで降参させたりしていて、どうも春子さんの方が勝利が多い様である。

◉王様、女王様遊び

時折りは此のレスリングで優勝を争い、勝った者が半日なり一日を王様、或は女王様になる。そして、負けた者をドレイにしてこき使ったり、いろ〳〵な用事を云いつける。今日の日曜も三郎君の負けで、四ツ這いの馬にされて部屋中を這い廻らされたり、椅子の代りにさせられたり、三度の食事も洗濯も（これは洗濯機だから大した事はない）一手引受けの始末となってしまった。三郎君は、始めは春子さんにかんたんに力ずくでは勝てると思っていたが、自分の負ける方が多くなった今は、もう一生けんめいでやっている。笑いさざめき乍らの此の運動は、明日への力ともなって居り、楽しいひとゝきこそ、お金よりも尊いものなのである。

◉捕虜苛め

之も又、子供の様な遊びである。之は部屋中が戦場で、二人は矢張り組打で相手を降参させる。始めは男の方が強いと云うので、三郎君の片手を使えない様にしたり、両足を縛ったりしたが、今では春子さんの方が手かげんをする程である。勝った方は、負けた方を捕虜として後手に縛りあげて部屋中を引き廻したり、ムチで打つ真似をしたり、或は此の間の様に、本当に三郎君の背中にミミズ脹れのあとが残るほど打ちつけたりして拷問するが、捕虜は絶対に抵抗を許されない、と云うより、自由を失っているのだ。尤も之等の遊びは、二人だけのルールが決めてあって、たとえば、我慢の出来ない程、痛い目に遭わせたり、病気になる様な拷問は勿論しない。云うまでもなく愛情の一種の遊戯だから、周囲の心配は全然いらないものらしい。

一度こんな事があった。それは三郎君が一寸酒に酔って、その勢で春子さんの両手を縛って抑えつけ、春子さんの胸の上に跨って、両ひざを立て乍ら春子さんの口の中へ足の指をおしこんでしまったのだ。酔った勢だから加減も何もなく、春子さんは三郎君のために身動きも出来ず、危くチッソクしそうになってしまった。春子さんは愛情があるからこそ噛みきらなかったと、暫らくシク〳〵泣いていたが、謝る三郎君を今度は仰向けに寝かせて、その顔の上にどっしりとお尻をすえて跨ってしまった。三郎君は、眼も口も鼻も春子さんに踏み敷かれて呼吸も出来ず、それにぎゆう〳〵仇とばかりこづき廻されて、之も又半殺しの目にあわされてしまった。それ以来いろ〳〵規則を作ったが、二人は之が魅力になったのか時々はフウ〳〵云わされる程の事をして楽しく遊んでいる。

夫婦が、平凡に、ぬかみそくさくなるのは正常かも知れないが、愛情に或る程度の危機が訪れるわけで、之はお互が新鮮な気持を失わない様にする事に依って避けられるものだ。此の二人の様に童心に帰って、刺激を満喫して居れば、少くとも平凡なありきたりの夫婦より、むしろ健全なのかもしれない。彼と彼女は子供が出来ても、之を続けてゆく事だろう。それでいて一歩社会に出れば、普通の夫婦として尤もらしく、それこそ気取ってすましているのである。お互いが人権を尊重し助けあい各自の務めを果す、よい夫婦なのである。

第二景　我が倒錯

私が勤めている会社に二年程度前、その頃で十六歳の少女が入社した。家庭の事情で高校を中退したとかで、普通の会社だと給仕位にしか採用しないが、当社の社長は小学校しか出ない立志伝中の人物で、学歴には重きをおかないと云う今時、稀にみる進歩的な考えの人だから、此の女の子を私のアシスタント的立場のものとして事務の見習にし、帳簿の事など段々と教えてゆく事にしたのである。此の子の名は美津江と云うが、二年程前はおさげ髪の色の黒い少女としか思わなかったのが最近、めきめきと色が白くなり、化粧こそしてないが、その方が却って自然の美しい肌に魅力があり、ピチ〳〵と若鮎の様な身体となって、改めて私も、ホホウと見直す程になってしまった。女性も可成り多い此の会社で、私は灯台下暗しの感がぴったりくる程、今まで此の彼女が余りに身近かにいたので、自分の食指を動かさなかったらしい存在に気ずいたのだ。と云って、此の少女期をぬけ切らない彼女を自分のものとして、あたら花を散らそうとは全然思っていないのである。只、自分のそばに置いて眺める花一輪と云う次第のつもりでいたが、頻々とお茶だ、映画だと誘っている裡、私は此の若々しい肉体の魅力にすっかりトリコとなってしまった。会社に行っても「お早う御座います」とコートを脱ぐのを手伝ってくれるときに、プーンと匂う少女と女性の中間の何とも云えぬ香を感じる様になり、よく気をつけてみると脚の線の美しい事も私には驚異の一つとなったのだ。いや、その美しいのに驚いて、脚そのものにも魅惑を感じてしまったと云うのが本当だ。そして何時か、此の美津江の足許にひれ伏して、その美しい脚にキスする自分の姿を空想し始めたのである。此の頃から私は年甲斐もなく彼女が他の男性と喋る事にも、淡いシットの気持を持つ様になってしまった。私の助手的な立場、云いかえれば秘書役みたいな事と、私の仕事は特殊なので、広い事務室の一隅に他の事務員とは隔離して、ガラス張りだが個室をもって彼女と二人だけと云う事が、私にとって非常に有利な事で、それに彼女は芯は強いが、どちらかと云えば無口な方なので、私の気持通りに導いてゆける事が楽しいと云えば楽しく、嬉しいと云えば嬉しい事であった。或る夜、私は彼女を連れて始めてホテルに行ったのだ。理由は簡単だ。ダンスが習いたいと云う彼女を、じゃ僕が教えようと、誰もいない処がと云う意味で連れて来てしまったのだ。勿論、彼女の気持も考えて、洋間の豪勢な部屋で食事をすると云うのを一つの理由のようにして、女中達にもふるまったのである。此の夜、私は始めて彼女の唇を奪い、その新鮮さに古人の、女房と畳は新しいのに限るとは指導的な私に信頼して、何の考えもなしに従いて来たものらしかったが、キスだけは驚いた様であった。私は断っておくが、此のキスだけで第一線は越えなかった。之は性分かもしれぬが、可哀想と云う事と女性尊重と云う念からかどうか判らないが、私には出来ない事で――もう一度断るがキスだけである。（御判りかと思うが）そして私と彼女は、或る仲になったのである。段々つきあっているうちに、彼女に見せた本では「痴人の愛」が尤も興味を覚えたらしく、潤一郎のものは大ていが好きと云う事に、私の食指はます〳〵動いたのだ。

そんな或る日、彼女が背中に何かシッシンが出来たのか、とてもかゆいと云い出したのだ。四、五日前からだったが余り痒くて我慢が出来ず、医者に行ったら神経の作用でしょうと云って注射をしてくれましたと云う彼女に、私はふっと或る事を思いついたのだ。それは糖尿病の検査をするためによく尿をとるが、その事なのである。私は彼女の脚を胸に抱いてくちづけする事を得た現在、若々しく健全な彼女のネクタールにホコ先を向けていたのである。会社では素知らぬ顔の二人で、その裏はと云っても、まさか君のそれを飲ましてくれとは云えないから、間接乍らの作戦に出たのだ。糖定量試薬のアンプルをみせて、健康診断のつもりでやったらどうだと、いろいろ病気の話をしてすゝめてみると、彼

女にすれば私の方が医者に見せるより気が楽なのか、即刻うなずいて、会社の退け際にトイレへ行くと、私の出した小瓶に入れて、うすいビニールの袋に包んで「こんなものをすみません」と云い乍ら私に渡したのである。私は手にうけてその暖さを感じると、何とも云えない気持が感じられ、気ずかぬ様にポケットに入れると、社員専用の更衣室に入ったのである。三畳の畳の間には誰も居ない。私はカーテンの蔭でその瓶を取り出すと、真白い瓶にうく色のついた液体を眺めた。芳醇な香りが身体中を駆け廻る様な気持で全然、汚いとは思わなかった。

私は以前にもこんな経験が一度あったが、此の時は初恋の女で、やはり調べると云う事が理由だった。此の女性はいわゆる八方美人で、男友達は私だけでなく他にもなも多々あったらしい。或る意味だけにフエミニスト精神を発揮する私に、最後のあがき?で飛込んで来たと云うわけでの仕儀だったが、此の時は冷えていた故もあったのか、私は含んだだけで吐き出してしまい、ガラガラうがいをして臭気をとる始末だった。これから推して私は冷えた時と温い時のとは違うものなのかどうかを、その道のベテランに教えを乞いたいと思っている。それとも、その時の気分の持ち様かどうかも……。

尚、此の彼女との話は別の景に改めて書く事にしよう。

（未完）

（映画通信）

今月の縛られ女優達

大河原珠樹

▽龍虎捕物陣二番手柄　千舟しづか
疾風白狐党（東映作品）　五条　恵子

すでに紹介済みの古い作品だが、様子が違うので——山の一族白狐党をだまして彼等から奪った黄金で出世した大橋に島原両旗本の娘美代と勝代が、白狐党の復讐のために拐かされる。二人の娘の父達は白狐党を討つために山に乗り込むが、白狐党は迎撃の前の血祭に二人の娘を殺そうと磔柱に縛りつける。振袖衣裳の二人の娘は丸太組みの十字架に両手首と足首を縛られ、恐怖におののきながら弓の的にされる。おどかしの矢が数本、娘達の頭上をおびやかした後最後の一矢が放たれる寸前に救いが現われる。二人とも傍役だから

紹介しておくと、切れ長の眼をした年上の娘が千舟しづかで、最初の一矢が頭上に刺った時に身をよじらせたり大きな動作の演技をみせる。五条恵子の方は眼を見開いて放心したように縛られていた。

▽毒婦高橋お伝（新東宝作品）**若杉嘉津子**

窃盗、殺人、婦女誘拐、数々の悪事を働いた高橋お伝が何度目かの罪をおかした時に、警邏である愛人の並河和馬に捕縛され連行される。ガス灯の煙る人通りのない夜の陸橋の上を、しょんぼりと首うなだれた艶な姿のお伝が前手首をくくり合わされ、長い紐つきでひかれ行くシーンは絵のように美しい。しかし、この場はうまく逃れて、さらに悪事を重ねた末、横浜で捕われついに年貢を収めるがこの時にも護送の列車の中で前手首を縛られている。比較的近写しているので手首をギッチリ縛っているのがよくわかった。年期の入った若杉嘉津子の演技は上手いの一言。

▽螢　火（松竹配給・歌舞伎座作品）　**女優名不詳**

幕末の時世、尊王派志士達が次々と捕縛される。一緒に後手に縛られた女が出る。ホツレ髪にしどけた着衣（長襦袢姿）で捕吏にこづかれてよろめきながらひかれて行く。縛り方も緊迫感あり、情景もまたよし。

▽旅笠道中（東映作品）　**千原しのぶ**

草間の半次郎をしたう鳥追い女のおもんが峠のお堂でやっと半次郎に巡り合う。だが半次郎にしてみれば理由あっておもんと道づれにはなれない体。そこで一策、おもんに別の注意を払わせて、後から白手ぬぐいで猿轡、細縄でぐるぐると胸を巻いて後手に縛り、おもんの眼をみはって驚く顔を写して空色の手甲をつけた両手が手ぬぐいをとろうとするのを、両方からグイと後手に廻して、今度はカメラは斜前方に移し、両手首を後合掌にして両膝の間にはさみ、悠々と縛りあげる。千原が縛られる間にあまり悶えないのが心残りだった。

▽変化胡蝶の雨（東映作品）　**女優名不詳**

冒頭のシーンで迫害を受ける月の輪一族が縛られて引きたてられたり、磔にされたりする。後手グル〳〵巻きに縛られ、追ったてられる老若男女、ありきたりのシーン。磔も凄愴味に乏しい。

▽月の輪族の復讐（東映作品）　**桜町弘子**

「変化胡蝶の雨」の後編。恋しい小法師丸の危機を身を投げ出して救った月の輪の娘弓が役人に捕わり白州で〝小法師丸の隠れ家をいえ〟と拷問。肌にぐっと食い込むほど胸をグル〳〵と四巻して後手縛り。まず背中から写しているので手首を締上げ加減にギッチリ縛っているのも明瞭にわかる。役人が青竹でビシリ〳〵と肩さきを七、八回打ちつけ、悶えるが白状しないので〝もっと痛い目をみせようか〟という。そこに救いが現われる。紹介にあった焼ゴテを肌に近づけて……という場面は宣伝文句であって、映画には実際に現われない。桜町弘子の顔が明る過ぎて、責めの場面に向かないのが欠点。

毎月資料を送っているとどうしても不足勝ちになるのが気がかりだ。今月もやっと数本の作品を紹介することが出来た始末。決してなまけているわけではないが、何分にも田舎街に住む関係で封切りが遅かったり、六館もある劇場（各社系統一館づつ）が、最近景気でも悪いのか一カ月二週分は再映ものをやるのでついどうにもならぬため。それと縛りの無い映画が多くって、今月の分にも「かんざし小判」「風と女と旅鴉」‖東映「楠公二代誠忠録」「阿波狸変化騒動」‖新東宝「忠臣蔵」‖大映などに出くわした。但し「天龍しぶき笠」「愉快な仲間」‖大映‖は見落しているから、どなたか紹介していただきたい。

沼正三だより

(一)（乗杉貴代子様に）　「障碍への道」は素晴らしい文章でした。既に昨年十一月号の「沼だより」で貴方の再登場を拍手して迎えた時にも申した通り、「乗馬を愛する女性の心理の明細」こそ私共が貴女に最も期待したところでしたが、今度の敍述はその渇望を正面から満して下さったものです。読み進みながら思わず知らず貴女の愛馬と同一化して行くのをどうすることもできませんでした。どちらかと言えば「犬党」の私にさえ、その様な効果を持ったのですから、「馬党」の麻生氏が「溺読」（六月号通信）と言われるのも無理ありません。「文章が下手」など謙遜されてますが、とんでもない。馬化心理を味わされた私として無技巧ではあるが恐るべき名文であると断言するに躊躇しません。アクテオンを鹿に化したあのダイアナの魔力を思わせます。——安田由美子嬢（二月号通信）なども、結局貴女の文章の魔力の犠牲者の一人だろうと解されます。

安田嬢といえば、申し上げたいことがあります。貴女の文章の内容もさることながら、むしろそれ以外の点で窺われる貴女のポーズにこそ私は魅せられるのです。彼女に対する貴女の返答（四月号通信）は何と素ッ気なかったことでしょう。然も私は駒よりも、貴女の邪慳さにこそ女主人の適格性を見たのでした。——又、「障碍への道」の冒頭に、貴女は麻生氏のことを「割合熱心な読者」と書いておられます。氏の直接の呼びかけ（三月号通信。「乗杉様。お願い！障碍とびのことを書いて頂けませんか？云々」）もそれ以前の諸文（例えば三二年三月号通信）も、恐らく氏が最も狂熱的な貴女の崇拝者であることを語っていると思えますが、貴女はそれを「割合熱心な」という程度にしか評価なさらない。これは支配することに慣れた人々に特有な他人の精神的肉体的精力消費の軽視に或いは崇拝せられることに慣れた美女の男の愛情の軽視に、通じるもので、これまた女主人の適格性です。意識的な文章の内容以上に、こういった無意識的表現が貴女をよく語っている様に思います。貴女の文章から私が馬に化せられる昂奮を味ったのも、或いは、こういう貴女の驕慢を行間に看取してその影響を受けたのかも知れません。

色々書きましたが、貴女が鞭と拍車と人参との効用を麻生氏に説きながら、「他の読者の方はどんな感じでしょうか」と問うておられるのに対して、「熱心な」読者の一人として感想を申し上げる義務を感じたからです。あの文章に対する反響が、麻生氏の謝辞（六月号通信）だけというのではマゾヒストとして面目ないし、又貴女の自尊心を傷けることになるのを虞れました。

もっともらしいことを弁じましたが、実は、貴女に呼びかけて見事一文をせしめた麻生氏が羨ましく、「私にも人参を！」と言いたい気持なのです。私の願いを容れて何か書いて戴けませんか。麻生氏の顰に倣ってテーマを指摘する不遜を敢てすれば、「裸馬」騎乗についての感想を承りたいと思います。月玲子という日活新人女優（八海事件の藤崎裁判長のお嬢さんの由。昭一二生）の紹介記事（週刊読売）に「趣味は？　ハダカウマに乗ること」とあるのを見て、何故「乗馬」と答えないんだろう？どう違うのだろう？と疑問を懐いたことがありました。その後「障碍への道」の末尾に「裸馬の味は格別云々」とあるのを読み、唸ったことですが、この女優さんの心理は未だ充分了解できません。貴女は鞍を使った時の乗り心地良さを度々説かれましたが、裸背と比べてどうでしょう？　又馬の身としては、乗られ心地の点でどちらを喜ぶでしょう？　黙殺される不安に脅えつつも、伏してお願いします。（今迄の文と

の重複は少しも気になさることはないと思います。）

・㈡（**とやま・かづひこ氏に**）　自己分析の結果自分はマゾヒストでなくフェチシストだとされる由。然し、その理由として、液体固体の獲得に積極的即ちサド的だから……と書いておられるところを見ますと、少々議論が歪んだ様です。あなたのサディズムといわれるのは、アップフエルバッハが性格分析に用いた性格学上の概念としてのサディズムに近いですが、これがあることはあなたのコプロラグニーの性心理的意味の決定には無関係です。私なども、論争好きなのでお分りの様に随分、攻撃的な性格面がありますが、私生活のマゾヒズムと両立します。マゾヒストは必ずしも日常生活の敗者ではないのです。（よく「マゾヒストの見分け方」など言って、一生従属的地位に甘んずるタイプの男にはマゾが多いと説かれますが誤りです。鉄血宰相ビスマルクが例とされる様に、高級官吏には権力行使の補償としてのマゾヒズムが屢々あるのです）。――あなたはもう少し限定して、女性に対する態度の能働受働として論じておられるのかも知れません。がそれでも、問題は残ります。六月号の「いざない」で黒田氏は、女性をサド的にする為の働き掛けの必要を語っておられます。この場合その

マゾヒズムの深さと働き掛けの程度とは正比例するでしょう。マゾヒズムとは決して単なる受働性ではないのです。マゾ的関心が汚物に結晶している場合、その入手の過程における能働性はむしろそのマゾ的情熱の激しさを示しているのだといえます。――百歩譲ってそれが性的サディズムだとしても、だからあなたのコプロラグニーがマゾヒズムでないとは言えません。判断はどこまでも、あなたが汚物に対して取られる反応――想念と行動とを含めて――の実態に即すべきです。あなたや、あなたと同一人とさえ思える高木伸夫氏（「魔の味い」）の筆者）においては、通常のマゾヒストよりも汚物への反応が敏感になっていることは確かですが、これがあることはあなたのコプロラグニーの本質はマゾヒズムにありませんか。「クラフト・エビングは、コプロラグニーの事例は数多い。そして大抵の場合はこのグループに属するのである。然し、中には、不潔な行為において凌辱を求めんとする願望を根源とせず、マゾ的想念が單に副次的にのみ生ずる様な場合もある。この場合はむしろフエチシズムに数えた方が良い」（モル）。要するに汚物の為の汚物（何等マゾ的想念を伴わずに、汚物の臭で発情する人もあるのです）か、凌辱の手段としての汚物か、どちらを主とするかということです。私など、汚物観念への反応の鋭敏さではあなたに負けぬつもりですが、はっきり手段的性格を意識します。で、「コップに抱く空想」や「眼科医院にて」などであなたの抱かれるマゾ的空想に親近感を覚えて、同類よ！　と呼びかけたつもりだったのです。あなたが汚物の為の汚物を事とする味気ないフエチシストであるに甘んじ、自分はマゾヒストでないと強弁せられても、あなたの文章に漂うロマンチック・マゾヒズムは私を魅了し続けるでしょう。

　議論ばかりが能ではありません。あなたが見逃されたらしいシャーナリズムの一記事を――一つには、私があなたと同じ感度を持っていることの証明に――紹介しておきましょう。号数がはっきりしませんが、今年春頃の週刊サンケイ誌お耳拝借欄にあったものです。――「都立衛生試験所の柳沢博士が、月経停止を妊娠の故かどうか調べる方法を最近ある書物に書いている。それによれば、妊娠二ケ月くらいまでは婦人科医でも確答は出ないが、ここに一匹の雄のガマ（蟇）を登場させれば万事解決という。すなわち彼女の朝の尿を少量ガマの腹に注射し、しばらくして取り出す。顕微鏡で見ればあら不思議、妊娠している場合は

なんとガマの精虫がくっついているし、そうでない時は精虫が出てこない。妊婦の尿にはゴナドトロピンというホルモンがあってこれがガマ（雄ですからナ）を刺激し、ガマは発情して精虫を出すという具合云々。」

これは「雑報」には、採択基準には達しないので、取り上げず、「ヤブー」の方で使う（ガマの代りに矮人（ピグミー）を使ってポーリーンの妊娠の検知する）予定でしたが、休載で先のことになりそうなので、あなたべのこの便りのついでに書いて見ました。

手帖雑報欄

一九七　獅子文六『夫婦百景』

一九八　映画「夫婦百景」

一九九　KRテレビ「夫婦百景」第二話「失格女房と夫」

一九七は、主婦の友に連載中一部紹介したことがある（雑報**一五二**号）。單行本になった。この中「失格夫婦」が面白い。**一九九**のテレビ（北原文枝と安部徹と夫婦で共演）もそれだが、**一九八**の映画でも、数組の夫婦を扱いながら、話の中心はやはりこの失格夫婦人編集長大川みはる（月丘夢路）と童話作家大川蒼馬（大坂志郎）に置いている。妻はよろめくが夫はそう思われた丈で実は勤めに出ていた点マゾ的だし、結末で妻が反省して凡庸な恐妻物に堕しかかったが、翌朝やはり寝坊した妻が家事一切を夫にさせて出勤する相変らずの場面を出しが更に徹底したので救われた。失格

二〇〇　三橋一夫『サカサマ天国』（ユーモア名作文庫）である。ここでは重役並の高給を喰む美貌有能の女秘書が夫を完全に奴隷化している。作者はマゾヒストでないし、ユーモア小説なので深刻味もないが、妻への奉仕ぶりはツボを心得た書き振りで楽しい。手帖新稿にこの種恐妻物を扱った項を加えたがこの作品からも一節を附記するつもりなのでこの位にしておく。

二〇一　服部みちを漫画「デラックスのみの夫婦」（漫画読本四月号）　小人の夫を妻がねずみとりに監禁してしまう一齣がある。矮人思想の味えるものには面白い。

二〇二　ガブリエル・ベルトラン著、安藤昌一訳『女性支配の未知の国』　これはアッサム・ベルガル地方の秘境の探訪記録だが、マゾ的には大して価値なし。羊頭狗肉。

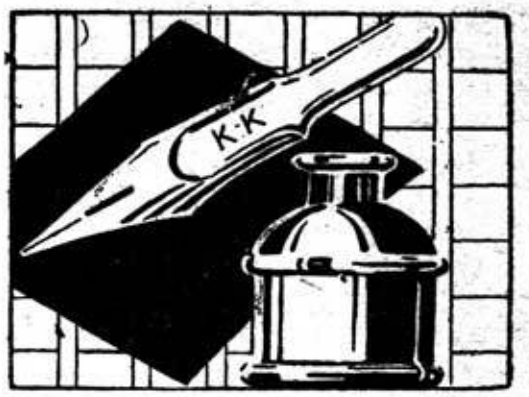
二〇三「アメリカ女性は男性を支配する」（週刊女性三三・四・二七号）　第二次大戦後のアメリカ女性の社会的進出や男性軽視を説く。これについては、手帖新稿二十一・二項参照。

二〇四　ヴルフ・エンと性』（世界性学全集）　タドタドしい直訳だが、クラフト・エビングの平野訳（雑報**一四一**）の様な非良心的なものではなく、マゾヒズムの部分も比較的多く紹介されている（**全体としてはひどい抄訳**）から、お勧めできる。しかし、クニリングスやコプロラグニーの部分は略されているし、又パリ娼家の硝子便器設備をタキシルを引いて敍した部分で、娼婦を意味するプエラ（原義はラテン語の少女）の語をわざわざ女の名前と訳註を附してあるのには一読しつつ吹き出した。その程度の訳文である。

二〇五　小島政二郎「乞食の娘」（別冊小説新潮十二巻六号）　貴婦人への転身のテーマにマゾを感じ得るならば、面白い。

二〇六「斉藤わたしの足をお拭き」（実話六月号）　銀座レインボーのマダム坂内ミノブ一家の豪奢ぶりを伝えた記事。信憑性はとにかくとして、秘書に汚れた足を拭かせたとかズロースまでクリーニングに出しているとかボルゾイなどの高級犬を数頭飼っているとか、マゾヒストの夢想する「富豪の夫人」らしい生活ぶりが書かれている。この種富豪女性と、

二〇七「清宮様への十六の質問」（週刊読売三三・四・二〇号）　の「高貴の令嬢」とのいずれを選ぶかは、その人のマゾヒストとしての好みによるであろう。私自身はといえば、勿論後者である。身長一六四糎の八頭身で学習院大学英文科専攻のこのお姫様が皇位につく可能性のない皇室典範を残念に思っている一人である。色々な週刊誌が美しい御写真を載せている。当分は私共貴婦人崇拝者の眼を楽しませて下さるであろう。



読者通信

口絵、本文の記事、挿画等に女相撲、女レスリング等、女同志の格斗をもっと載せて欲しいと思います。縛りは、もう沢山ですから女と女が死力をつくして争う処なんか、本当にいいですよ。女レスリングを見に行く人の多いのも、こんな気持からでしょう。又「変ないたずら」という題の記事が、私は一番面白かったです。奇クはたしかに面白い。恐らく全国探しても、こんな雑誌は少いと思う。否、外にはないだろう。益々、御発展を祈る。（島根　山原良夫）

○

小生は一年程前からの愛読者です。毎月、豊富な責画や記事を載せて頂き満足に思っております。しかし多少、マンネリズムの感がしないこともありません。この辺で、空想時代にマッチしたグロテスクなものを取上げては如何でしょうか。例えば、河童に責められる女という様なアイデアのもの、三十三年五月号の女友達（杉原虹児）の縛る女を、極悪の風貌をした河童に変えて、周囲を海底の様子にし、海水浴に来た女性が河童連中に責められ弄ばされる様にしたら、フレッシュなものになると思います。女性の着物は勿論、水着に変え、乳房のあたりは破れて露わになっているという風に…。

（H　生）

○

小生は熱心な愛読者ですが、ただし浣腸に関する限りのつながりです。最近は浣腸の記事が少くて失望しています。他のサド、マゾ、切腹等に関する記事だったら、他の新聞、雑誌、映画等で十分にリアルなものを楽しめます。しかし浣腸マニアにとっては奇クリ以外にその楽しみは皆無です。小生は全国に相当数の浣腸マニアの人々が居られるものと思います。もっとどしどしと活躍して欲しいと思います。久利須様、お元気ですか。何か、連絡の方法はないものでしょうか。誌上の御活躍を期待して止みません。小生が常に空想していることは大体、左のようなものです。

(一)修学旅行で食中毒をした女学生が、収容され病院で浣腸される。(二)海水浴場で日射病で倒れた姉と弟が、はせつけた医者と看護婦に浣腸される。(三)女子大の寄宿舎に赤痢が発生して、同室者も皆、浣腸される。(四)その他、責めの一種で、色々の浣腸場面。

（東京　Q生）

○

私は熱烈な女性切腹愛好者です発表された女性切腹に関する創作手記などは残らずスクラップにして、独り楽しんでおります。又、映画、演劇からストリップに到るまであらゆる表現形式の中に自己の想像力を働かせて、可能な限りの切腹探求（悲愴美）に打込んでいるものです。私は、この願望を永年はずかしいものと思い他人や自分の家内にまで知れることを恐れ、そのために激しいコンプレックスに悩んで来ました。しかし最近、全国的にかなり多数の同好者のあることを知り、ようやく孤立感と劣等感を克服できる自信が湧いて来ました。私は、自分のささやかな体験を生かし、同好者の方々と互に胸襟を開き合いたいと思います。

（名古屋　大島）

○

四月号の四馬孝画集の、長く引き伸ばされた脚線は、とても感心しました。つきましては、私は左点から狙いをつけた作品を提供いたします。

花坂道子嬢　優美姿態緊縛選

純黒調大中判印画紙焼付（タテ十八糎　ヨコ十三糎）

花坂道子嬢全裸緊縛集（はな1）花坂道子嬢股間縛り集（はな2）の大好評により更に素晴しい作品の発表を強く要望されていましたので、ここに前二作とは変った新しい観

★ヌード縛り（略号はな3）
二枚一組　三百円

★股間縛り（略号はな4）
二枚一組　三百円

のような画を希望します。○虐待される黒人奴隷女で、脚線が長く美しいもの。身体には真麻のパンテイだけ許され、首には首輪、手足には手枷、足枷が嵌められ、他は有色の肌が汗を吹いている。実例、奴隷市場で立派な服を着た白人紳士から虐られている黒人女達首に鎖を嵌められて犬のように白人に従って行く黒人女。太陽がきびしく照る農場で馬上の白人から鞭を当てられ、汗と涙を流す黒人奴隷女。白人の部屋で、ありとあらゆる私刑を受け、黒人に生れたことを泣く足の長い黒人少女。太い尻と長い美しい足にきびしい鞭打を受けて涙を流す黒人少女。動物園のライオンやオオカミの餌として放り込まれる黒人女。以上。

（A 生）

○

私は、自分ではS、Mの程度が判りませんが、いくらかSの傾向があるかもしれません。皆さんの文通を御待ちしています。

（札幌 赤松）

○

最近、褌美フアンが増えて来て大いに我が意を得ていた処、五月号に於て絢爛と咲き揃った観でした。何しろ約三分の一が褌美関係の記事で占めていたのですからね「ヤプー」の休載で少々淋しいでしたが、通信欄の充実と、青葉氏の「病者の獄」とで、何とか満足した次第です。これに内田氏の「一褌亭」があれば申分なかったのですが、菅氏の「映画の男性責シーン」も、縛られた女優オンリーだった近頃での好記事でした。あの映画の二分の一は私も観ておりますが、矢張り今でも強く印象に残って居ります。別に東映作品「振袖太鼓」で、無名俳優が後手で枝に吊られた姿が、上下から二分間程写るシーンがありました。これが六尺褌一本だったら、うま過ぎる話で、そうは問屋がおろさず着衣のままでした。若し私が監督だったら、容赦なく裸に剝いて世の男性ヌード・フアンの心臓を高鳴らして見せるのにと思ったものでした。責シーンの紹介も結構ですが、我々、褌美愛好者には矢張り裸体シーンの紹介の方が、より有難いです。たとえば、数年前の大映作品「風雲講道館」で、明日の師の勝利を祈って、これも無名の俳優でしたが、若者二人が六尺褌一つで水を浴びるシーンが二カット程あり、今でも其の褌の白さが目に残って居ります。又「サヨナラ」で、歌舞伎役者に扮したリカルド・モンタリバンが、衣裳着けのため楽屋着をパッと脱いだ時思い掛けず褌一本だったのには一寸、驚きでした。しかし外国人の身体は筋骨隆々過ぎて、どうも実感が伴なわないのは私だけでしょうか。雑誌「ボデイ・ビル」に見る数々のフオトも又、然り。そこで貴誌へのお願いです。是非是非男性ヌード・フオトの掲載を！。緊縛なんて面倒なことはいりません。均整のとれた美青年に、褌（六尺かモッコ）をキリッと締めさせて極く自然の姿を正面からパチリとシャッターを切るだけでよいのですから——。随分、勝手なことを書きましたが、復刊以来、一度も掲載されぬとあれば、益々欲求も募ろうと云うものです。読売新聞、三月二日の夕刊の「よみうり寸評」に、切抜きのような記事があり、興味があるかと思いますので御紹介致します。『マルセル・プルーストの名作「失われた時を求めて」に「ソドム」と「ゴモラ」という古い伝説の国が出てくる。男性同志、女性同志の同性愛で滅亡してしまう国の名だ。▼それで「ソドミイ」というと同性愛または鶏（けい）姦の意味に使われる。日本でも武家時代には同性愛が流行したようだが、いまはフランスなどの西欧に多いこの種の風俗はあまり見られなくなった。あちらには半ば公然たる同性愛市場がある。▼しかし、日本にも美男子だけのボーイのいる酒場、ゲイ・ボーイなどといわれて女装で女性的肢体をくねらせてうたう歌手あるいは古くからの歌舞伎の女形少女歌劇や女剣劇の男装の麗人や〝男形〟は相当いる▼戦後強くなったのは〝クツ下と女〟だそうで両性風俗の接近、あるいは女性の男性化ということがいわれる。女のスラック姿に対して男のスカート姿は芸人以外にまだ見えないが

女体浣腸風景十二態
（9×13センチ）印画紙焼付
十二枚一組 九百円
モデル 大塚啓子嬢 略号（ちふ）
さきに発表した浣腸連続フオト（ちよ）の好評に刺戟され更に変った趣向をとり入れ、新しいモデル嬢によって新作を試みました。

女体切腹風景十二態（9×13センチ）印画紙焼付　十二枚一組　九百円

モデル　大塚啓子嬢　略号（せふ）

従来の女体切腹写真の分譲打切りに伴い、マニアの要望により、新しいモデル嬢を煩して新しい感覚によって作成した十二態です。

に敬服するものがあります。旧号の山田美智子さんの「夫婦の倒錯遊戯」真木不二夫氏の「魔性の姉妹」短文ではありましたが、出久信男氏の「捕虜の洗礼」作者は忘れましたが「ヴィーナスの重石」乗杉貴代子さんの「サジスチン女性の告白」等、全く嬉しい読物でした。マゾ傾向のものは、貴誌に於てのみ期待出来るものでありまして、御無理でしようが出来る限り、多くの男性マゾのものをドシドシのせて下さい。又、巻頭口絵は、どうも女性の緊縛写真が多く感心しません。もう少しマゾ的の写真を載せて頂きたいものです。

（K・E生）

○

小生は昭和二十九年八月号よりずっと奇譚クラブを愛読し、現在までの誌上より気にいった記事や写真や絵の類をスクラップして保存しております。スクラップにすると、分類できるから便利であります。例えばサジ関係のものはそればかり、マゾ傾向のものはマゾ傾向の絵や作品という具合にすると、かさばらず保有にも好都合であります。さて、小生は本誌九月号と十月号に掲載になりました告白と題する「女性志願者の夢」の作者真崎伸一であります。誌上に載る程価値のある作品とは、そのストリーから思って夢にも考えておりませんでした。女性化した男性の完全なる女性化の夢は分析してみたら奇妙な倒錯でしようね。しかし案外世間にこうした傾向を持つ男性がいるのには驚かされますが、やはり数からいえば少数でしようね。シスター・ボーイ流行すれども、男性的でない男性なんて恐らく無意味な存在ですね。文化的価値や稀小価値があるかもしれませんが。

（滋賀　真崎伸一）

○

六月号は久振りに充実していた表紙は猶、低調気味ではあるが、挿画がバラエテイに富む様になって来て嬉しい。本文も読みごたえ十分あるものばかりで、興味をそそるものばかりだ。夢原狂介氏の「十三人目の奴隷」は、完結篇に入って俄然、佳境となり面白く読んだ。本月号での、圧巻だった。更に女学生ものが二つ組まれた。女学生マニアにとっては貴重なものばかりだった。浦田紀夫氏の「嵐の中の花」は、純然たる女学生シリーズものではないにせよ、七十六頁の挿画もよく、物語も面白かった。水沢雅美氏の「天城山心中異聞」これは実に女学生物としては珠玉的なもの。ただ残念なことは挿画が物足りない。せめて三枚ぐらい挿入して、如何にも女学生が傷みつけられているといった感じのものを取り入れて欲しかった。とにかく、これは近来にない佳作であった。柴崎黎子さんの「羞恥を求めて」いつになく、これも夢中で読んでしまいました。旧号での活躍されていた頃の方が何かなつかしく、あの挿画が素晴しかった故かも知れませんが、たしか畔亭数久氏の挿画になるものでしよう。電車内での「羞恥」の姿が妙に印象に残っております。御病気中だそうですが、あせらず療養されることを望みます。猶、宮崎、K・Y生様、拙文をお読み下さいましてありがとうございます何卒、今後共よろしく。

（東京　東一郎）

○

北斗生様、六月号にて私達に対

する貴方のお呼びかけを拝見して早速これを書いています。私は生来、相手の方からお便りを頂いて放任することが出来ない性分ですので、あの呼びかけにも直ぐ応じる気になりましたの。貴方が、どこの何という方か存じませんが、若し近くの方でしたらお逢いしたいとさえ思っています。実際にはそうも参りませんけれども、私の傾向は随分広いのですが全部受身の方なのに、そして特にそれ等のことについて熱狂はしませんのに私の告白文に書きましたようなことには我を忘れてしまいますし、又同じ傾向の読物を見ましたなら一行の記事のためにも一冊の本を手に入れようと努力するのです。それについて今だにおしいことをしたと思うものに、二、三年前に探偵実話でしたか、その中に奇術師一座の一寸法師が、その片想の美人の首を切り取り、月の光にその死顔を眺めるという状景が、文も画も素晴しいタッチで書かれていたのですが、とうとう買いそこねね、今だに見つけたらと思っていますの。（大阪　杉江美津子）

○

菅雅子様、私がK誌を読みはじめた頃は、世の中には変った人もいるものだと、きわめて客観的な態度で読んでいましたが、六月号のあなたの通信文を読んで、私は完全にサディズムのとりこになってしまいました。今や、あなたを思い存分いじめてみたい欲望にかられています。あなたは、国文学を専攻された相当なインテリ女性でいらっしゃるようですね。私も京都の或る国立大学の四年生で二十二才です。私は、あなたとの体験を通じて、サディズムとかマゾヒズムの研究をしてみたいと思っております。私でよかったら交際して頂けないでしょうか。

（京都　サド生）

○

群馬の峰岸一美君へ、君の今の淋しい気持は、私には充分理解出来ます。何年前かの自分を見る様で私まで切なくなって来ます。衣料店の折込みチラシにすら細やかな満足を覚えるとは僻地に住む君が全くお気の毒です。私など現在夏冬通して、ワイシャツの下は刺繍のあるナイロンのパンテイとスリップだけで暮していますが、君に比べて何倍も幸福な境地にいる様ですから、一つ先輩としていい事を教えましょう。それは少し位体裁が悪くとも「日本婦人新聞」をとる事です。一週二回（日、木曜）発行で月極九十円ですから、君でも大した負担になるまいと思います。私も毎週大いなる期待を持って待っているのですが、裏切られる事が多く下らない記事ばかりの様な気がしますが、時折九十円位には代えられない程素晴しいヒットを放つ事があるのです。凡べて婦人を対象とした記事で埋っていますから、角度を変えれば相当興味のある事なのでしょうが……。主なファッション・ショーや下着などの流行の紹介は必ずやっているし、売っているデパートの名も出る事もあります。私も君と同じく強度の下着マニヤですが、その蒐集品はマニヤに一驚を喫せしめる自信があります。拙文を羞じて今迄秘めていたのを、今度初めて「私の下着コレクション」として投稿してみましたが、採用になるかどうか。唯々やみくもにデパートへ行っても、下着をいちいち手に取って吟味する事は流石の私にも出来ませんから、この新聞によって大体の狙いをつけて行く事は確かなのです。全国何処の新

最新作
女体緊縛写真
花坂道子嬢全裸緊縛集
大中判印画紙焼付
十枚一組　八百円

可憐な容貌と優美な姿態で好評のモデル花坂道子嬢を特に煩して全裸の緊縛を敢行しマニアの皆様の熱烈な要望に応えました。今まで一度も衣服を脱いだことのない花坂嬢の姿態を印画紙焼付の鮮明な写真にてごらん下さい。（略号はな1）

◎花坂道子嬢
股間縛り集
大中判印画紙焼付
十枚一組　八百円

数々の傑作を過去に於て作成した写真部が、ここに美貌のモデル花坂道子嬢の協力を得てマニア垂涎の強烈な縛り写真の撮影に成功し、ここにその一部を発表することになりました。是非コレクションの一端へお加え下さい。（略号はな2）

◎以上二集二十枚にて
千五百円

閑販売店でも取次いでくれる筈です。一度試して見給え。私の経験では、近所の洋品店などでは流行に遅れ品数も少く問題になりません。それにデパートの方がどれ程買いやすいかわからない。紙に書いて頼まれたのだといえばいいではないですか。一つ元気を出し給え。君の御多幸を遙かなる地より祈上げています。（東京　小野猛）

◎新人モデル嬢新作緊縛姿態集

光沢純黒調印画紙（9センチ×13センチ）焼付

新人モデル嬢の中、三人の得意のポーズを選んでここに提供いたします。

愛川悦子嬢の巻

★ベッド変型縛り（略号しん1）
四枚一組　三〇〇円
ベッド上に繰りひろげられる悦子嬢のアクロバチックな全裸のポーズは輝くライトに映えて豊かなアクションをふりまいてゆく。

★全裸強烈縛り（略号しん2）
四枚一組　三〇〇円
山里離れた温泉宿の一室、硝子窓から洩れる夕陽に照らし出されて縛られた裸身は妖しくゆらめく。

大塚啓子嬢の巻

★股間縛り（略号しん3）
六枚一組　四〇〇円
その美を誇る啓子嬢の肌にひしひしと喰い込む縄目、緊縛マニアの方々に捧げる垂涎万丈の作品。

★全裸縛り（略号しん4）
五枚一組　三五〇円
豊満な柔肌の全身に喰い入る麻縄の醸し出す妖しい美しさ

田中芳代嬢の巻

★セーラー服縛り（略号しん5）
五枚一組　三五〇円
可憐な表情、巧みなポーズ、セーラー服をまとって縄目に悶える田中芳代嬢の清純なまざなし

★股間しばり（略号しん6）
四枚一組　三〇〇円
ここに又、新しいモデル嬢の股間しばりをアルバムにお加え下さい。

○

小生は女装愛好者の一人です。最近の御誌には、これ等の記事が少く、がっかりしております。女装記事は犯罪にでもなるのでしょうか。扱い方によっては、普通の演劇雑誌と変らぬ程度に、我々の希望を満しうるのではないでしょうか。歌舞伎の女形を使って（無名の役者でも結構です）男から女へと転身してゆく有様を、グラビアにて御願いしたいものです。その折に、化粧の方法を細かく説明して、出来得れば女装用の品々の値段を書いて頂ければ幸いです。本文は、その女形の責場を沢山、盛り込んで貰いたいと思います。三十一年四月号の〝ああこの恍惚境〟（小村三郎）の続篇でもないでしょうか。「演劇評論」とかいう雑誌は、女装専門誌とか聞いておりますが、未だ見たこともありません。一般には出廻っていないのです。だから我々が、こう云った傾向の雑誌をよみたくば、必然的に御誌に依頼して出版して貰うより他に方法がありません。特集号として女装写真、小説を満載したものを発行して下さい。尚、演劇評論なる雑誌は実際にあるのでしょうか。あるとすれば、如何なる地方にて発行しておりますか。又、女装クラブは実際にあるのでしょうか。お伺い致します。

（新井かおる）

○

菅雅子氏へ、貴女の言われる古今の文献については、小生も極力探して居りますが、御承知の様に戦前、戦後を通じてこの方面に対する取締りが災してか、仲々見出すことが出来ません。しかし完全な文献でなくても、実際に行って来た人、又は行われて来た女性が相当にあります。この様な人々から、その当時の実況を聞き、自分の智識を蓄積していくことも楽しい一つの方法だと考えます。又、現在、人々の知られない処で実際に行われていることもあります。あらゆる機会を得て小生も今迄、このような方法で知ることが出来たものも相当あり、又自身が現実にそのような組織の中に暮したこともあります。貴女も恐らく、何かの折に聞かれたことがあったのではないでしょうか。自分の希望を生かした資料を蓄積するためには、途を求め文通によっても、智識の交換を計ることが必要ではないでしょうか。久保利子氏へ、貴女のイメージは、まだまだ飛躍す

ることと思います。そうして御希望の様に、同好の人々で会合を持つことが出来れば、全く楽しいことと思いますが、現状では仲々難しいことではないかと思います。遠く離れた同好の者達が、文通によってそのイメージを育て形造って行くのも、希望実現の一方策かと考えます。長門睦氏へ、貴君のいわれる様に実際に行うことは大変難しいことです。小生も同様な希望を持ち乍ら苦心しております。そこであらゆる機会を利用して調査し、資料を集めております。女性の中には、自己の意志でなく強要されて身につけて居る人も多く色々聞き及び且つ実際に見たこともあります。意外に身近に、これ等の女性が居るものです。出来れば智識の交換を致したいと思います。以上、三氏へ、全国には相当の同好の人々が居られ、その実現に苦心して居られることと思います、仲々発表されず、従って自己の周辺に於て友を探し出すことは至難なことです。（しかし案外身近かに多く居られると思います）其処で小生は皆様に、誌上で知り合った者達の間だけでも、文通によって智識の交流、研究することをお進めします。地理の距りはこれによって乗越え、お互の希望の一端でも遂げて行くべきだと思います。如何でしょうか。

（福岡　K・S生）

○

北斗生様、同好の方が又、一人増えたことを大変嬉しく思って居ります。実は「大奥裸女血斗」を投稿した時、果して誌上に出して頂けるかどうかを心配していたのですが、掲載して頂いた上、貴方のような同好の士を得ましたことは思いがけぬ嬉びを与えてくれました。私が無惨絵に対して憧れを与えてくれたのは、貴方の仰せ通り萬年の作品でした。その他に私は、女斗美、女性の褌美に対しては異常に近い憧れを抱いていますそれに私の好みは、日本物に限られていますので、サロメを日本風に変化させ、且、これ等の私の趣味のミックスした産物が「大奥裸女血斗」の無惨絵のアイデアとなったものであります。そして、先月号で一寸予告しました「真剣裸女試合」なる構想を抱いているのですが、未だにまとまらず、御目にかけることが出来ないのが残念です。しかし、私は絵が描けませんので、これらの案を自分で実現出来ないことを切歯扼腕していますす。若しどなたか、挿画程度で結構ですから、私のアイデアを五―十枚程度にまとめて描いて頂ける方がございましたら、誌上にて御返事願います。京都、K・N生様の通信にもありましたように、最近、女斗美の記事が少いことも大変残念に思います。女性の褌美の中でも、日本髪の女性の褌姿の美に対しては、全く異常といってもよい位私は憧れています。これ等の記事、写真の出現を期待して止みません。北斗生様始め全国ファン各位からのお便りをお待ちしています。

（京都　京洛生）

○

六月号拝見しました。美少女マニヤの私にとって、今月号は復刊以来の最高のものです。口絵で、久振りの杉原虹児氏の絵、三角の木の上へ縛り上げられた美女の体へ迫る大石、露わな胸の烈しい喘ぎ、固い猿ぐつわの下から洩れる悲鳴が聞えてくるようです。忍頂寺氏の吊り責、あどけない優雅な美少女が、どんな無惨な姿に責められるかと、胸躍るようです。「三味線」は、これ又、最高のものと思います。モデルが誰か分りませんが、諦めたような淋しい伏目ふくよかな胸も露わに、美しい長襦袢も乱れ、太縄でギリギリ括り上げられ、ぐったりとなっている無残な美しさ、鏡に写る後手首の

◎女体切腹フオト◎

（略号こし）

「腰元自刃」　村井知可子嬢

大中判印画紙焼付
六枚一組　八百円

お家の重宝を扮失した美貌の腰元が激しい責折檻の末、遂に敵方から忍び込んだ間諜であることを白状する。そして今は、せめて武士の娘らしく潔く切腹して果てることを願う。彼女に秘かな好意を寄せていた御側の若侍は彼女の介錯を願って出て許される。今迄の折檻の場は忽ち凄惨な美女切腹の場と変る。という構想のもとに六枚連続の切腹フオト（全場面切腹）六枚の中、二枚は若侍介錯の場面。女体切腹マニアの方は是非一度ごらん下さい。日本髪をふり乱して苦悶するさまは、必ずや皆様を魅了せずにはおかないでしょう。（女性モデルの外、美男男性モデル登場）

◎浣腸連続フオト◎

（9×13センチ）印画紙焼付　十二枚一組　九百円　略号（ちよ）

長らく浣腸フオトの作成を中止しておりましたが、同好者有志の御希望により、ここに久方ぶりに十二枚連続フオトを完成分譲することになりました。マニア垂涎の硝子製浣腸器、エネマシリンジ、イルリガートル、いちじく浣腸等を駆使して女体浣腸の雰囲気を十二分に醸し出しました。何卒絶版にならぬうち御申込のほどを。

モデル…愛川悦子嬢

女体褌美の緊縛

（9×13センチ）印画紙焼付　五枚一組　四百円　略号（こん1）

女体の褌美フオト

（9×13センチ）印画紙焼付　二枚一組　二百円　略号（こん2）

ースまで加わっての豪華な責めに満悦していますが、今回は少々はしよりすぎて前回程、刻明な描写が少いのと挿画が少いのが残念。服装、髪形など詳しい説明があるのですから、これに忠実に描いて欲しかったと思います。「天城心中異聞」も、同じく美少女への責めが素晴しい。時には、拷問の写真を写して美少女にサインさす等心憎い見事な責めです。これも絵がないのが残念。「海原にありて歌える」、何ともいえない憐れさで、胸がしめつけられるような気がします。何とか助けてやれないかと気をもむのも、美少マニヤのマニヤたる所以か。この三つの作品は、四馬孝氏か、滝れい氏あたりにでもお願いして、絵物語風のものにするか、又は数枚一組のシリーズ物としてて分譲して頂きたいと思います。美少女マニヤで、これを切望しない人はあるまいと思います。その他、五月号の口絵きびしい縄も痛々しい。カラーだったら、どんな素晴しいでしょう膝の三味線が青竹でもあれば文句ありません。「腰元折檻」も、よりやく調子が出て来て、刀で押えつけられる姿も、乱れ髪も美しいが、未だ一寸ぎこちないのが、残念ですが、村井モデル嬢の奮斗に感謝する次第です。「双丘」は久しぶりの大ヒット。モデルも姿体も印刷も共に上。真白なプクプクした柔肌へ喰い入る固い縄目の間から盛り上る美事な乳房。猿ぐつわを噛まされて苦しげに見上げる瞳。見つめる彼方には責具をとり出す男か。乱れた髪も、ひそめた眉も、恐怖におびえる瞳も満点です。こういうのを、どしどし発表して下さい。本文で「やくざしがらみ草紙」等、やくざものは好きでありませんが、三条氏のスッキリした筆致は見事で、縛られた美女の匂うような感じを出して傑作です。「十三人目の奴隷」は、よりやく助け出され安心しました。如何に美女の緊縛、折檻が好きとはいえ、余り悲惨な最後は後味が悪くて嫌ですね。「結婚の条件」は楽しいですね。M・Kのマークのある可愛いい囚衣姿で、正座して括られてゆく姿や、女学生のような可憐な顔など、いじらしい程可愛いいですね。「嵐の中の花」は続きを待望していたもの。男への責めもあるが、何よりも美少女達への飽くなき責苦、ニュ＝フェ「女友達」の乳房責の迫力、田中嬢の「屏風の前にて」の少女らしい、あどけない姿体を純白のシュミーズに包んで、縛られる可憐な姿はいいですね。分譲品の「股間縛り」と共に絶品です。又、四、五月号の「力斗空手打ち」の園ゆき子、悪漢どもに可憐なワンピース姿をギリギリ後手に縛り上げられ、いたぶられる姿、白い猿ぐつわを噛まされ、パッチリ見開いた目など、本当に可哀そうな姿ですね。最近は美少女への責めが多くなり喜んでおります。美少女の責めは、余り残虐なものや、汚いもの、血なまぐさいもの、救いのない悲惨なものは、どうも可哀想すぎていけません。「魔教圏」のような余りあくどいのは、イライラして来て嫌ですね。

（名古屋　M・M生）

○

僕は六尺褌マニヤの青年です。最近、この欄で褌マニヤの投書が

次号（八月号）の本誌は六月下旬発売です

ふえているので、心強く思っています。僕は学校から水泳に行く時に六尺褌を締てから、その締心持の良さを認めていましたが昨年夏海水浴場でギリシヤの彫刻のような逞しい青年が、真白な六尺褌を締ているのを見て、六尺褌に憑かれてしまいました。それ以来、たとえそれが越中褌であっても、人が締ているのを見るとドキッとするし、フンドシと聞くだけで胸にこたえます。僕は、こんな夢を持っています。褌マニヤの者、四、五人でグループを作る。時々一緒に人気のない山や海へハイキングに行く。そして褌一つになって木に登ったり岩によじり登ったり、色々なことをするのです。こんなのは如何でしょうか。

（褌マニヤ生）

○

四月号の読者通信欄に、私の読後感が載っていましたが、ページ数の制約も甚しい折柄、感謝します。五月号には残余の分が掲載して頂けるかも知れないと心待ちにしておりました処、全く思いもかけず最高のページ数を頂いて〝結婚の条件〟のタイトルのもとに拙作が発表されていたことは、感激を超えたショックですら、あったのです。あれやこれやKKに関する感懐に浸り乍ら、今回は、四、五月両号の感想を綴って行きたいと思います。先ず四月号についてグラビア中では『早春賦』の右頁上のものが最も気に入りました。縛りについては出来るだけ緊縛された手首を写して頂きたいと思いますし、すねた表情に怒り、悲しみ、羞い、喜び、諦め等が適当にミックスされていることが大切だと思いますので、その点でこの一葉を推す訳です。ただ、モデル嬢が坂口利子さんのようで、他の三葉には猿轡が必要ではありませんか。十七頁の女体、胴の長すぎるのが唯一の難点で肩、手首、指の表情など見事なものです。夢原狂介氏「十三人目の奴隷」久留木栄氏「美容病院」土路草一氏「魔教圏No・8」泉かよ子氏「悦虐クラブ定例会報告」等は、今回は取り立てて云う処もありません。水沢雅美氏、牧高志氏の文が恰好の読物でした。奈加多須磨尾氏、久留木栄氏のアイディアは、いずれも素晴しく出来ればフォトで拝見したいものです。読者通信で種々感じる処がありました。安田さんに宛てた乗杉さんの御便り、一見冷いようですが、やはり同性の先輩として情のある本当の温い応答だと思います。八潮さん宛の通信では、各氏それぞれに特色があるものの、余りにも鼻責めのみを強調しすぎるのではないでしょうか私としては過去の実績？からみて真鍋氏の御活躍を期待したいのですが……。四馬氏礼讃者の方、静岡の平林氏の御希望も実現を望まれますし、東京A・R生氏と共にM・M・Hさんの御希望を叶えたいと思います。次に五月号について。グラビアは好調。四馬氏の「美人調教馬」は、鞭を振り下す烈しさが果して車を進めるでしょうか。杉原氏「女友達」は素適ですが被縛者の裸身の線の柔かさが一つの物語を表現しています。田中嬢の明朗なあどけなさも綺麗に写っていますし、花坂嬢もマニアの喜びそうな姿態を見せています。読物の中では、藤山秀緒氏「夕陽に散る華」に近来、稀なほど烈しい感慨を覚えました。雪がれぬ汚名を甘受し、惨刑に服す若き美女の悲壮な死、生への執着を断つための自虐の数々、自ら望んだ凄絶な鞭打の刑など、幾度読み返しても激しい生々しい印象を受けるのです。「赤いペチコート」「魔教圏」「紅山彦」「十三人目の奴隷」等は本当に面白く拝読しました。次号が頼りに待たれる出来栄えでした。三隅千恵子さんの文に、三隅さんのマゾヒズムを感じとったと申し上げたら失礼でしょうか。牧高志氏の文も娯しく読ませて頂きましたし、奈加多須磨尾氏のアイデアも、大いに共鳴させられました。私の作品の挿画は三葉とも、よく判らなかったのですが、杉原氏、牧氏、北原さんの画風が好きだといったら我儘でしょうか。静岡の斎藤氏のおっしゃっておられることは誠に同感です。実現の日が待たれます。八潮三枝子さんの

甲斐仁参案
四馬孝画
『涙のダイヤモンド』略号（なみ）
大中判印画紙焼付　二枚一組　三百円
○胃の洗滌　○ヒマシ油責

通信を拝見しましたが、どうも良い相手が現われそうにもありませんね。純粋に鼻孔を痛めつけられたいというなら良い相手も多いでしょうが、鼻孔を責められたいのではなく、愛玩して欲しいというのでは、内心の悦びを求めていらっしゃるので、なかなかむずかしい尋ね人となりそうです。寄稿家や愛読者の方々の御健康と御活躍を祈りつつ、良い時候に向って私も大いに溜つたアイデアを書きまくってみることを、お誓い致します。

（近藤　一）

○

菅雅子様。国文学専攻の御由、御存知とは存じますが、継子説話は落窪物語、お伽草紙各種、浄瑠璃などに表現されています。明治文学まで降ると面白いと思います

女体緊縛フォト

G組　大中判印紙画焼付

各組1枚一組　一枚　一三〇円
五枚　六〇〇円
十枚　一〇〇〇円
（送共）

G1　鉄鎖と柔肌（高瀬　忍）
G2　股間縛正面（高瀬　忍）
G3　海老晒し（萩千恵子）
G4　羞紅の椅子（菅登紀子）
G5　量感の帯（伊吹真佐子）
G6　アイデア（萩千恵子）
G7　叫喚の森（伊吹真佐子）
G8　全裸目隠し（村田那美子）
G9　優すがた（花坂道子）
G10　開股一番（萩千恵子）

E組（9×13cm印画紙焼付）

ES1　ヌード緊縛集（佐賀）　三枚一組　二〇〇円
ES2　全裸悦虐集（須川）　四枚一組　二五〇円
ES3　臀　羞（佐賀）　三枚一組　二〇〇円
ES4　酒宴の弄者（佐賀）　二枚一組　一五〇円
ES5　脱がされる娘（須川）　五枚一組　三〇〇円
ES6　あわや寸前（佐賀）　二組一枚　一五〇円
ES7　剝れたズロース（佐賀）　五枚一組　三〇〇円
ES8　乙女のすべて（花坂）　七枚一組　四〇〇円
ES9　女学生の縛り（須川）　二枚一組　一五〇円
ES10　緊縛のベッド・シーン（佐賀美智子）　六枚一組　三五〇円

甲斐仁参案
四馬孝画
『涙のダイヤモンド』略号（かん）

大中判印画紙焼付　三枚一組　四百円

○伸し責　○浣腸責　○苦悶のコルセット

一般に気付きにくいものは平出鏗二郎氏の「室町時代小説集」、群書類従、物語部に収録されて居り何れも岡崎の府立図書館にあります。

（中康弘通）

○

最近、奇クの誌上におしめに関する記事や又通信欄における読者の声が少いのを非常に寂しく想っている、一おしめマニヤでございます。毎号奇クを手による毎に期待を持って頁を開き、隅々までおしめに関する記事を、探し求めるのでございますが、この二・三号と言うものは、まつたくおしめに関する読物に接することが出来ず、非常に悲しく想っております。月岡様、岩村様、原様、新井様等の作品を始め、その他おしめマニヤの方々の誌上での御活躍を期待致しております。また出来ましたら同好のマニヤの方々との文通をも——。私の勤めている会社の取引先の私書函を御利用下さってそこ宛へお手紙を下されば有難く存じます。住所は東京・杉並萩窪局私書函九十号T・H宛でございます。最近、大人用のおむつカバーを入手致しました。御希望の方には発売元をお知らせ致します。ぴったりとして使用した感じは非常によく、あてたおしめがずれたり落ちたりすることがなくそれに使用していることが外観からでは少しも分りません。私はそれを夜は勿論のこと、お休みの日などは一日中使っております。

（T・H生）

○

久し振りにお便り致します。その後私は一号も欠かさず愛読しております。新緑の訪れと共にビジネスガールのショートスカートやタイトスカートが街に車中に公園のベンチに私達の眼を楽しませてくれます。最近のKKには連載読物が多く、それだけ次々とその先を読みたくて、毎月の発行が待ち遠しくてなりません。その中でも「美容病院」「紅山彦」「魔教圏」「赤いベチコート」の四作を殊の外愛読しております。ここ二、三

号には、期待していた「大阪屋花鳥」のないのが淋しい気持がします。早く続きが読みたくてたまりません。小坂多美枝さん、早く続きを書いて下さいお願いします。

（大阪　T・A生）

○

六月号拝見しました。今月号で一番よかったのは、緊縛映画名場集の中で霧立のぼるの縛られ姿と編集部特写写真の愛川悦子嬢の双丘でした。絵では「やくざしがらみ草紙」のお里がお仙を責めているところ、他に「嵐の中の花」「天城山心中異聞」、誘拐された女」などが大変私を満足させてくれました。欠点と申しますれば「霧立のぼる」の腰から下がないのが惜しい。でも、これほど観念している女の表情は全く素晴しい。しばりも相当しっかり縛ってあるのがいい、A級だと思いました。次に愛川悦子嬢の上半身しばりは、豊満な悦子嬢の肉体に細ナワがぎっしりと喰い込んでいるのは大いに満足、ただしサルグツワは鼻もかくしてほしかったし、そうすれば余計に面白い表情になると思います。しかし縛り方は満足でした。次に挿画でお里がお仙を縛り上げて顔を上向かせ無理にも苦しみを与えようとしているところ、お仙も苦しい表情をしているし、坐り方も面白い描き方でした。「天城山心中、誘拐された女」はズロース一枚はいいとしても、足の棒は少々変なものでした。小生ならあのナワで胸一ぱいにかけて乳房上下三重ぐらいにしたい、と思っています。表情はよかったです。小生にはどんな縛り方にもせよ、やはり乳房の上下に太ナワ細ナワでぐるぐる巻の方が一番興味があります。そういう意味で今後も、こういう女のしばり方を是非のせて頂きたいものです。それから大河原珠樹氏の「縛られた女優たち」の中で「少年猿飛佐助、牢獄の姫君」山本昭子は円山栄子だと思いますが、小生の思い違いでしょうか。小生この映画は二度見ましたが、女二人がおとなしく縛られているところが四回ほど見られました。白いサルグツワを噛まされた二人の女優が屋敷の中に捕われているシーン。目元がパッチリして気持のよい表情を見せてくれたのは、やはり東映らしいピカ一場面でした。今後共モデル嬢の素晴しい写真を沢山のせて下さるよう御願いします。シュミーズ又はズロース一枚、女は全裸よりズロース一枚や半裸の方がいいようです。すくなくとも小生には……。

（名古屋　岩谷生）

○

その後貴社益々御繁栄の御様子およろこびいたします。さてKK六月号は復刊以来初めての大ヒットで大いに満足感を覚えました。これまでは挿画がもう一つ平凡でしたが、今月号は休刊前にあった絵に劣らないすばらしいもので、これからもどしどし、いろんな人の色々な絵を多く入れて下さい。又、写真の少いのが残念ですが、今月号の「双丘」と「三味線」は今迄見た写真の中で最も美しいと思いました。又愛川悦子さんは容貌、肉体ともに美しく立派だと思いました。これからもどしどし、こういった美しいモデルさんの美しいポーズをおねがい致します。

（愛好生）

○

私は女性の歯並びのよい白い歯を見るのが大好きです。時々無理に女性の口をあけて白い歯を見てしまう時があります。しかし、犯罪になるようなことは出来ませんので、私のこの気持を満足させてくれるよう、奇譚クラブに次の絵のような写真を載せて下さい。又歯に関した記事もぜひ希望いたします。

（茨城　栗野正）

○

私は極く最近奇クの読者となった男です。先日いち早く六月号を手に入れました。いつもずばらしい内容で胸をわくわくおどらせながら手にしていますが、この六月号は近頃にない充実ぶりでうれしく思いました。同じ頁数ながら、なんだか、うんと増頁したような手にしたときの感じが、頬ずりしたいような愛著さを示すのです。まだ何冊もの奇クを拝見していないのですが、若く美しい女性の縛り美に殊の外強い関心を持っている私にとって、この六月号は得がたい物でした。分嬢写真にも、のどから手の出そうになる数々の品が揃っているので、ふところ具合と相談の上、だんだんと求めてゆきたいと思っておりますから、その節はよろしく御願いします。

（群馬　多野生）

○

〈編集部より〉　締切後沼正三氏の「沼正三だより」と「手帖速報欄」を組込みました為、予定しました読者通信を削りましたが、次号では出来るだけ多く掲載するように努めますから御諒承下さい。